

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 215

百間川原尾島遺跡7 百間川二の荒手遺跡

旭川放水路（百間川）改修
工事に伴う発掘調査 XVII

2008

国土交通省岡山河川事務所
岡山県教育委員会



百間川原尾島遺跡 遺跡周辺空撮(南上空から)

巻頭図版 2



1 百間川原尾島遺跡 竪穴住居5B遺物出土状況(南東から)



2 百間川原尾島遺跡 竪穴住居19(北西から)



135



767

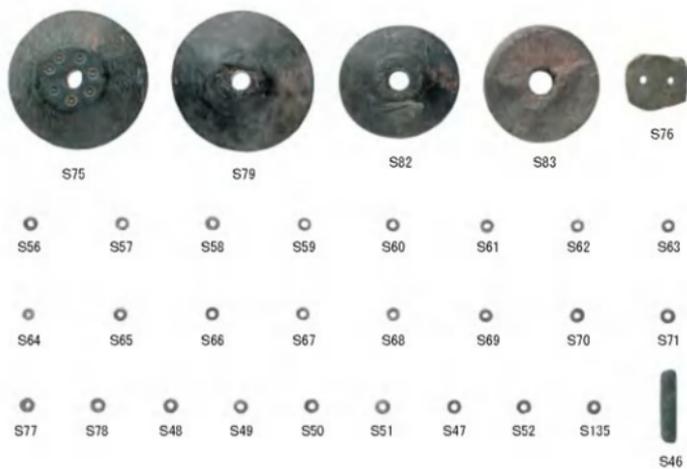


312



2種類の胎土を使った土器

巻頭図版 4



1 滑石製品



2 ガラス小玉・管玉

序

百間川（旭川放水路）は、承応3年（1654年）の大洪水を契機に、岡山城下を洪水から守るため、当時岡山藩の政治顧問であった熊沢蕃山が越流堤と放水路を組み合わせた「川除の法」を考案し、その治水技術論の積極面を踏襲するとともに上道郡の要害防衛と百間川下流の新田開発を目的として後の郡代津田永忠が設計・施工を行い、貞享3年（1686年）に完成したといわれ、その後、幾多の洪水から岡山のまちを守ってきました。

しかし、一方で百間川沿川では通水能力が小さく、また、堤防が弱いことから幾度となく氾濫に見舞われてきました。

このため、国土交通省（旧建設省）では地元の方々をはじめとする関係者のご理解とご協力を賜り、昭和49年から百間川の本格的改修に着手しました。これにより、堤防の嵩上げや低水路掘削、排水機場建設、橋梁の整備などにより百間川の景観が一新しました。また、支川の砂川の改修も平成17年度には完了し、改修事業により新たに生み出された河川敷は、スポーツ・レクリエーション・自然観察の場として憩いの場を創出し、市民の方々に広く利用されています。

今後は、放水路の主目的である旭川の洪水を確実、かつ安全に流下させるため、河口水門の増築、分流部の改修及び河道掘削を行うこととしています。

百間川の河川敷内には、上流から順に、百間川二の荒手遺跡、百間川原尾島遺跡、百間川沢田遺跡、百間川兼基・今谷遺跡、百間川米田遺跡の各遺跡が所在しています。

この百間川遺跡群の調査は、改修工事により改変する部分について、文化財保護法に基づき実施を行うこととしており、昭和52年から岡山県教育委員会に委託し、実施しているところです。

本書に係わる調査は、平成6年度と7年度および14年度と15年度に実施され、報告書作成作業は平成18年度に行われたものです。発掘された出土品は、縄文時代から近世までの幅広い時代にわたっており、この地が古代から営々と連なる人々の活動の場であり、人間活動に適した豊かな風土であったことを物語っています。

本書は、百間川遺跡群の報告書としては17冊目、百間川原尾島遺跡としては7冊目に当たり、百間川二の荒手遺跡としては初刊となります。本書が埋蔵文化財に対する理解の推進と、学術、文化等に資するため、広く活用されることを期待します。

最後に、発掘調査並びに本書の編集にあられた岡山県教育委員会をはじめとする関係各位に対し、謝意を表します。

平成20年3月

国土交通省 岡山河川事務所
所長 光 成 政 和

序

岡山県のほぼ中央部を南北に貫流して児島湾に注ぐ旭川は、その下流域に広大な沖積平野を形成し、肥沃な穀倉地帯を生み出した。この岡山平野と平野を望む周囲の各丘陵には、地域の歴史を物語る縄文時代から近世に至る数多くの遺跡が知られています。

また、江戸時代の初め頃に岡山城下を洪水から守るため、人工的に旭川の左岸から放水路を分岐させ、操山丘陵の北裾から東端を南下させて児島湾に注ぐように築造された百間川は、広く知られているところです。

この旭川放水路（百間川）の本格的な改修工事は、建設省（現国土交通省）によって昭和49年度から着手されています。岡山県教育委員会は河川敷内に所在する遺跡の取り扱いについて建設省岡山河川工事事務所（現国土交通省岡山河川事務所）と事前に保存協議を重ね、やむをえず破壊される部分については記録による保存措置を執ってまいりました。

発掘調査は、昭和51年度の確認調査に引き続いて翌年度から本調査に着手し、平成16年度まで29年間もの長期にわたって実施しました。この間の調査成果は、縄文時代から近世に至るまで、県内は言うに及ばず全国的にも非常に注目されています。これらの成果は順次報告書にまとめ、昭和55年から刊行をしております。

本書は、百間川遺跡群の報告書として17冊目、百間川原尾島遺跡では7冊目に当たり、百間川二の荒手遺跡については初刊となります。本書に収録した調査区では、百間川原尾島遺跡における弥生時代後期から古墳時代の堅穴住居などの遺構が密集した集落が特筆されます。

また、百間川二の荒手遺跡においては、荒手を越流した水を下流に導く導流堤の大規模な補修状況が明らかになったことが注目されます。

本報告書が文化財の保護・保存に活用されるとともに、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

発掘調査の実施及び報告書の作成にあたりましては、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の先生方から数々の御教授と御指導を賜り、また国土交通省岡山河川事務所をはじめ関係各位から多大な御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 高畑知功

例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が旭川放水路（百間川）改修工事に伴い、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）と岡山県の委託契約に基づき、平成6（1994）・7（1995）・14（2002）・15（2003）年度に発掘調査を実施した、百間川原尾島遺跡・同二の荒手遺跡の発掘調査報告書である。契約事項は文化課（現文化財課）が行い、発掘調査および報告書作成は岡山県古代古備文化財センターが実施した。
- 2 本書は、百間川原尾島遺跡の報告書としては7冊目に当たり、報告書名の「百間川原尾島遺跡」は、岡山市原尾島に所在する原尾島遺跡のうち、百間川の河川敷にかかる範囲の遺跡をさす。また、「百間川二の荒手遺跡」は、岡山市中島・竹田の百間川河川敷内に所在する。
- 3 発掘調査は、平成6・7年度に百間川二の荒手遺跡、平成14・15年度に百間川原尾島遺跡を実施した。本書に記載した発掘調査の地区・面積・期間・担当者等は、本文の表1に示すとおりである。
- 4 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、旭川放水路（百間川）改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、次の方々を委員を委嘱した。対策委員各位からは、終始有益な御指導と御助言を賜った。記して深く感謝の意を表す次第である。
油業須藤樹（元中学校校長）
亀田修（岡山理科大学）＜平成14年度から＞
近藤義郎（岡山大学名誉教授）
角田 茂（元中学校教諭）＜平成13年12月逝去＞
出宮徳尚（岡山市教育委員会）
松本直子（岡山大学）＜平成15年度から＞
水内昌雄（元岡山県文化財保護審議会委員）＜平成14年度まで＞
山本祝世（岡山大学）
- 5 報告書の作成は、平成18（2006）年度に岡山県古代古備文化財センター職員下澤公明・高田恭一郎が担当した。
- 6 本文の執筆は、第1～3・5章を高田、第4章を山崎康平が行い、全体編集は高田が担った。
- 7 本書に関係する遺物のうち、一部について鑑定・同定あるいは分析を次の諸氏に依頼し、有益な御教示を得るとともに、報文をいただいた。記して厚くお礼を申し上げる。
出土土器の産地同定 白石 純（岡山理科大学）
製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査 大澤正己（九州テクノリサーチ）
鈴木瑞穂（九州テクノリサーチ）
- 8 次の機関に同定を委託した。
樹種の同定 パリノ・サーヴェイ株式会社
- 9 遺物写真の撮影については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 10 本書に関連する出土遺物および図面・写真等は、岡山県古代古備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

1 百問川遺跡群の各報告書は、基本的に小学に準拠した調査区を節で扱ってきたが、本報告書の百問川原尾島遺跡の対象範囲は、三股々と丸田地区にまたがることから、細分と節立てを行わずに一調査区として扱っている。

2 本報告書の遺構全体図および各遺構図の北方位は基本的に磁北であり、遺跡付近の磁北は西偏7°6′を測る。

3 本報告書に使用した高度は、すべて海拔高度である。

4 本報告書の遺構ならびに遺物実測図の縮尺率は次のとおり統一しているが、例外については縮尺率を図示または明記している。

遺構 竪穴住居・建物・柱穴列：1/80 井戸・土塹・溝断面：1/30

遺物 土器：1/4 石器・石製品：1/2、1/3 金属製品・土製品：1/3 玉類：1/1

5 本書の遺構配置図に示す遺構名は、原則として下記に示すように略称を用いた。

竪穴住居：住 建物：建 井戸：井 土塹：土 土器溜まり：溜

6 遺構番号は、遺跡ごとに遺構の種類に分けて1から通し番号を付した。

7 遺物番号のうち土器以外のものについては、その材質を示すため番号の頭に次に示す略号を付した。なお、遺物番号についても遺跡ごとに各種類に分けて1から通し番号を付した。

石器・石製品：S 木器・木製品：W 金属製品：M 土製品：C ガラス製品：G

8 土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、小破片のため口径の推定が困難なものである。

9 遺構図における、焼土や炭の分布範囲、被熱（赤変）範囲については、下記のトーンで表現し、そのほかのものについては、個別に掲載している。



焼土範囲



炭化物範囲



被熱（赤変）範囲

10 土層断面図等に使用した土色は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）によるものもあるが、各調査者の記述に従った。

11 本報告書第2図に掲載した地図は、国土地理院発行1/25,000地形図の和気・西大寺・岡山北部・岡山南部を複製・縮小し、加筆したものである。

12 報告書の時代・時期区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。また、弥生時代から古墳時代前半期の時期区分は、『百問川原尾島遺跡1』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39で採用した土器編年に基づき、百・後・Ⅱなどの略称も使用している。

各遺構は基本的に時代の古い順に取り上げ、時代ごとに説明を加えた。各遺構は、調査区ごとに時代の古い順に取り上げ、時代ごとに説明を加えてある。

編年対比表

			百 間 川	雄 町	上 東 ・ 川 入	
弥 生 時 代	前 期	津 島 門 田	百間川前期Ⅰ			
			百間川前期Ⅱ	雄 町 1		
			百間川前期Ⅲ	雄 町 2 船 山 3		
	中 期	南 方	百間川中期Ⅰ	高 田		
				雄 町 3		
		菰 池 前 山 Ⅱ	百間川中期Ⅱ	船 山 5		
				菰 池		
				雄 町 4		
		仁 佐	百間川中期Ⅲ	前 山 東		
	雄 町 5					
	雄 町 6				上東・鬼川市 0	
	後 期	上 東	百間川後期Ⅰ	雄 町 7		上東・鬼川市Ⅰ
				雄 町 8		
		グラント上層	百間川後期Ⅱ	雄 町 9		上東 鬼川市Ⅱ
				雄 町 10		
酒 津		百間川後期Ⅲ	+		上東・鬼川市Ⅲ	
占 墳 時 代		王 泊 六 層	百間川古墳時代Ⅰ	雄 町 11		才 の 町 Ⅰ
	百間川古墳時代Ⅱ		雄 町 12		才 の 町 Ⅱ	
	百間川古墳時代Ⅲ		雄 町 13		下 田 所	
			雄 町 14		-	
			雄 町 15		川入・大溝上層	

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過	5
第1節 調査の契機と経緯	5
第2節 調査の経過	7
第3節 調査の体制	9
第4節 日誌抄	11
第5節 報告書作成の体制と経過	12
第3章 百間川原尾島遺跡	15
第1節 遺跡の概要と調査区	15
第2節 遺構・遺物の概要	18
1 弥生時代中期以前の遺構・遺物	18
2 弥生時代後期の遺構・遺物	26
3 古墳時代の遺構・遺物	94
4 古代以降の遺構・遺物	142
5 包含層等出土遺物	147
第4章 百間川二の荒手遺跡	157
第1節 遺跡の概要と調査の経過	157
1 遺跡の概要	157
2 調査の経過	158
第2節 遺構・遺物の概要	160
1 右岸導流堤	160
2 右岸袖部（四の樋付近）・二の荒手（右岸端部）	161
3 出土遺物	162
第5章 まとめ	163
第1節 遺構・遺物の概要	163
第2節 弥生時代の百間川原尾島遺跡	166
第3節 古墳時代の百間川原尾島遺跡	168
第4節 百間川原尾島遺跡出土の外束系土器	170

付載 自然科学分野における分析・鑑定	173
付載 1 百間川原尾高遺跡出土土器の胎土分析	173
付載 2 百間川原尾高遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査	178
付載 3 樹種同定	185

1 遺構一覧表

2 遺物観察表

3 新旧遺構名称対照表

図版

報告書抄録

奥付

目次

第1図 遺跡位置	1	第29図 竪穴住居2 出土遺物① (1/4)	32
第2図 百間川河川遺跡分布 (1/50,000)	2	第30図 竪穴住居2 出土遺物② (1/4)	33
第3図 百間川 の 瓦手遺跡と		第31図 竪穴住居2 出土遺物③ (1/4)	34
百間川原尾高遺跡の位置 (1/10,000)	8	第32図 竪穴住居2 出土遺物④ (1/4・1/3・1/2)	35
第4図 設定グリッドと調査区位置 (1/4,000)	16	第33図 竪穴住居3 (1/80)・出土遺物①(1/4・1/3・1/2)	36
第5図 調査区棟壁(土)・河床底部トレンチ (1/100)	17	第34図 竪穴住居4 (1/80)・出土遺物 (1/4)	37
第6図 百間川原尾高遺跡		第35図 竪穴住居5 (1/80)	38
弥生時代中期以前遺構全体図 (1/2,500)	18	第36図 竪穴住居5 A (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)	39
第7図 弥生時代中期以前遺構全体図 (1/500)	19	第37図 竪穴住居5 B (1/80)・出土遺物① (1/4)	40
第8図 土層1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	19	第38図 竪穴住居5 B (1/80)・出土遺物②(1/4・1/3・1/1)	
第9図 土層2 (1/30)	19		41
第10図 土層3 (1/30)・出土遺物 (1/2)	20	第39図 竪穴住居6 (1/80)	42
第11図 土層4 (1/30)	20	第40図 竪穴住居6 A (1/80)・出土遺物(1/4・1/2・1/2・1/1)	
第12図 土層5 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)	21		43
第13図 土層6 (1/30)	21	第41図 竪穴住居6 B (1/80)・出土遺物① (1/4)	44
第14図 土層7 (1/30)	22	第42図 竪穴住居6 B (1/80)・出土遺物②(1/3・1/2・1/1) - 45	
第15図 土層8 (1/60)	22	第43図 竪穴住居7 (1/80)・出土遺物 (1/1・1/3)	45
第16図 溝1 (1/60)・出土遺物 (1/2)	22	第44図 掘立柱建物1 (1/80)	46
第17図 溝2 (1/30)・出土遺物 (1/2)	23	第45図 掘立柱建物2 (1/80)・出土遺物 (1/4)	46
第18図 溝3・4・20 (1/60)・溝3 出土遺物①(1/4・1/2)	23	第46図 掘立柱建物3 (1/80)	47
第19図 溝3 出土遺物②(1/4・1/2)・溝4 出土遺物(1/2)	24	第47図 掘立柱建物4 (1/80)	47
第20図 溝6-11 (1/30)・溝7 出土遺物 (1/2)	24	第48図 掘立柱建物5 (1/80)	48
第21図 溝12 (1/30)・出土遺物 (1/2)	25	第49図 柱穴列1・2 (1/80)	49
第22図 溝13 (1/60)・出土遺物 (1/2)	25	第50図 井戸1 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)	49
第23図 溝14-17 (1/30)	25	第51図 井戸2 (1/30)・出土遺物 (1/4)	50
第24図 百間川原尾高遺跡		第52図 井戸3 (1/30)	51
弥生時代後期遺構全体図 (1/2,500)	26	第53図 井戸4 (1/30)	51
第25図 弥生時代後期遺構全体図 (1/250)	27・28	第54図 井戸4 (1/30)・出土遺物① (1/4)	52
第26図 竪穴住居1 (1/80)	29	第55図 井戸4 (1/30)・出土遺物② (1/4・1/3)	53
第27図 竪穴住居1 出土遺物 (1/4)	30	第56図 井戸5 (1/30)・出土遺物① (1/4・1/3)	54
第28図 竪穴住居2 (1/80)	31	第57図 井戸5 出土遺物② (1/4)	55

第58回	井戸5出土遺物③ (1/4)	56	第103回	土塚51 (1/30)・出土遺物 (1/4)	82
第59回	井戸5出土遺物④ (1/4)	57	第104回	土塚52・53 (1/30)	82
第60回	井戸5出土遺物⑤ (1/4)	58	第105回	土塚54 (1/30)	83
第61回	井戸5出土遺物⑥ (1/4)	59	第106回	土塚55 (1/30)	83
第62回	井戸6 (1/30)	60	第107回	土塚56 (1/30)・出土遺物 (1/4)	84
第63回	井戸7 (1/30)・出土遺物① (1/2)	60	第108回	土塚57 (1/30)・出土遺物 (1/4)	84
第64回	井戸7出土遺物② (1/4)	61	第109回	土塚58 (1/30)	84
第65回	井戸7出土遺物③ (1/4)	62	第110回	土塚59 (1/30)	85
第66回	井戸7出土遺物④ (1/4)	63	第111回	土塚60~62 (1/30)・土塚62出土遺物 (1/4)	85
第67回	土塚9 (1/30)	63	第112回	土塚63 (1/30)・出土遺物 (1/4)	86
第68回	土塚10・11 (1/30)	64	第113回	土塚64 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)	86
第69回	土塚12 (1/30)・出土遺物 (1/4)	64	第114回	土塚65・66 (1/30)	87
第70回	土塚13・14 (1/30)・土塚14出土遺物 (1/4)	65	第115回	土塚67 (1/30)・出土遺物 (1/4)	87
第71回	土塚15 (1/30)・出土遺物 (1/4)	65	第116回	土塚68 (1/30)	88
第72回	土塚16 (1/30)・出土遺物 (1/4)	66	第117回	土塚69 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)	88
第73回	土塚17 (1/30)	66	第118回	土塚70 (1/30)・出土遺物 (1/4)	89
第74回	土塚18 (1/30)・出土遺物 (1/4)	66	第119回	土塚71 (1/30)・出土遺物 (1/4)	89
第75回	土塚19 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)	67	第120回	溝18 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)	90
第76回	土塚20 (1/30)・出土遺物 (1/4)	68	第121回	溝5・19・20 (1/60)・出土遺物 (1/4・1/2)	91
第77回	土塚21 (1/30)・出土遺物 (1/4)	68	第122回	溝21~24 (1/30)	91
第78回	土塚22~24 (1/30)	69	第123回	溝25 (1/30)・出土遺物 (1/4)	92
第79回	土塚25 (1/30)・出土遺物 (1/4)	69	第124回	溝26~28 (1/30)	92
第80回	土塚26 (1/30)・出土遺物 (1/4)	70	第125回	水口2出土遺物 (1/4)	92
第81回	土塚27 (1/30)	71	第126回	土器器まり1出土遺物① (1/4)	93
第82回	土塚28 (1/30)・出土遺物 (1/4)	71	第127回	土器器まり1出土遺物② (1/3・1/2)	94
第83回	土塚29・30 (1/30)・土塚30出土遺物 (1/4)	71	第128回	古岡川原尾島遺跡	
第84回	土塚31 (1/30)	72		古墳時代遺構全体図 (1/2, 500)	94
第85回	土塚32・33 (1/30)	72	第129回	古墳時代遺構全体図 (1/250)	95・96
第86回	土塚34 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)	73	第130回	堅穴住居8 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)	97
第87回	土塚35 (1/30)	74	第131回	堅穴住居9 (1/80)	98
第88回	土塚36 (1/30)・出土遺物 (1/4)	74	第132回	堅穴住居9出土遺物 (1/4・1/3・1/1)	99
第89回	土塚37・出土遺物 (1/4)	74	第133回	堅穴住居10 (1/80)	100
第90回	土塚38 (1/30)	75	第134回	堅穴住居10出土遺物 (1/4・1/3・1/1)	101
第91回	土塚39~41 (1/30)	75	第135回	堅穴住居11 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)	102
第92回	土塚42 (1/30)・出土遺物① (1/4)	76	第136回	堅穴住居12 (1/80)・出土遺物① (1/4)	103
第93回	土塚42出土遺物② (1/4)	77	第137回	堅穴住居12出土遺物② (1/3)	104
第94回	土塚43 (1/30)・出土遺物 (1/4)	77	第138回	堅穴住居13 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)	105
第95回	土塚44 (1/30)・出土遺物 (1/4)	78	第139回	堅穴住居14 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3・1/1)	106
第96回	土塚45 (1/30)・出土遺物 (1/4)	78	第140回	堅穴住居15 (1/80)・出土遺物 (1/4)	107
第97回	土塚46 (1/30)	79	第141回	堅穴住居16 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)	108
第98回	土塚46出土遺物 (1/4・1/2)	80	第142回	堅穴住居17・18 (1/80)・堅穴住居17出土遺物 (1/4)	
第99回	土塚47 (1/30)	81			109
第100回	土塚48 (1/30)・出土遺物 (1/4)	81	第143回	堅穴住居18出土遺物 (1/4・1/3・1/2)	110
第101回	土塚49 (1/30)	81	第144回	堅穴住居19炭化材検出状況 (1/80)・出土遺物 (1/3・1/2・1/1)	111
第102回	土塚50 (1/30)	82			

第145回	聖穴住居19 (1/80)	112	第181回	清34出土遺物① (1/4)	138
第146回	聖穴住居19出土遺物 (1/4)	113	第182回	清34出土遺物② (1/4)	139
第147回	聖穴住居20 (1/80)	114	第183回	清34出土遺物③ (1/4)	140
第148回	聖穴住居21 (1/80)	115	第184回	清34出土遺物④ (1/4・1/3)	141
第149回	聖穴住居22 (1/80)	116	第185回	百阿川原尾島遺跡 古代以降遺構全体図 (上:1/2,500)・古代以降遺構全体図(下:1/300)	142
第150回	掘立柱建物 6 (1/80)	117	第186回	掘立柱建物10 (1/80)	143
第151回	掘立柱建物 7 (1/80)	117	第187回	土壘89~91 (1/30)	144
第152回	掘立柱建物 8 (1/80)	118	第188回	土壘1 (1/30)	145
第153回	掘立柱建物 9 (1/80)	119	第189回	清35~37 (1/60・1/30)	145
第154回	柱穴列 3 (1/80)	120	第190回	百阿川原尾島遺跡 近世遺構全体図(1/1,000)	146
第155回	柱穴列 4 (1/80)	120	第191回	土取り遺構1 (1/80)	146
第156回	井・8 (1/30)	120	第192回	土取り遺構出土遺物 (1/4・1/3)	147
第157回	井戸 8 出土遺物 (1/4・1/3)	121	第193回	包含層等出土遺物① (1/4)	148
第158回	井戸 9 (1/30)	121	第194回	包含層等出土遺物② (1/4)	149
第159回	井・10 (1/30)	122	第195回	包含層等出土遺物③ (1/4)	150
第160回	井戸11 (1/30)	123	第196回	包含層等出土遺物④ (1/4)	151
第161回	井戸11出土遺物② (1/4)	124	第197回	包含層等出土遺物⑤ (1/4)	152
第162回	井・12 (1/30)	125	第198回	包含層等出土遺物⑥ (1/4)	153
第163回	井戸13 (1/30)	126	第199回	包含層等出土遺物⑦ (1/2)	154
第164回	井戸14 (1/30)	127	第200回	包含層等出土遺物⑧ (1/3)	155
第165回	土壘72 (1/30)	128	第201回	包含層等出土遺物⑨ (1/4・1/3・1/2・1/1)	156
第166回	土壘73 (1/30)	128	第202回	百阿川 ①の長手遺構位置図 (1/10,000)	157
第167回	土壘74 (1/30)	128	第203回	トレンチ設定図 (1/1,000)	158
第168回	土壘75 (1/30)	129	第204回	②の瓦手溝は同 (1/2,000)	158
第169回	土壘76 (1/30)	129	第205回	右岸寄流堤断面図1 (1/50)	159
第170回	土壘77 (1/30)	129	第206回	右岸寄流堤断面1 (1/80)	160
第171回	土壘78~81 (1/30)	130	第207回	右岸寄流堤断面② (1/80)	161
第172回	土壘82~84 (1/30)	131	第208回	①の瓦手(T6)・右岸袖部(T1) ・断面 (1/120・1/180)	162
第173回	土壘85~88 (1/30)	132	第209回	出土遺物 (1/4)	163
第174回	焼成土壘1 (1/30)	133	第210回	百阿川原尾島遺跡の最高地位図 (弥生時代後期末洪水砂粒堆積層)	164
第175回	溝29~31 (1/30)	133	第211回	弥生時代後期の集落 (1/1,500)	167
第176回	溝32 (1/30)	134	第212回	古墳時代の集落 (1/1,500)	169
第177回	溝33 (1/30)	134	第213回	百阿川原尾島遺跡出土の外家系土器 (1/8)	171
第178回	溝34 (1/60)	135			
第179回	清34出土遺物⑤ (1/4)	136			
第180回	清34出土遺物⑥ (1/4)	137			

表 目 次

表1 百阿川原尾尾遺跡・百阿川二の炭子遺跡調査一覧 …… 7	表4 弥生時代の遺構数の変化 …… 166
表2 文化財保護法に基づき提出書類一覧 …… 11・12	表5 古墳時代の遺構数の変化 …… 168
表3 旭川放水路（百阿川）改修工事に伴う 発掘調査報告書一覧 …… 13・14	表6 百阿川原尾尾遺跡出土の外案系土器類 …… 170

図 版 目 次

巻頭図版1 百阿川原尾尾遺跡 遺跡周辺空撮 （南上空から）	2 土楕34 遺物出土状況（西から）
巻頭図版2 1 百阿川原尾尾遺跡 竪穴住居5の遺物出土 状況（南東から）	3 土楕34（西から）
2 百阿川原尾尾遺跡 竪穴住居19（北西から）	図版10 1 土楕45遺物出土状況（西から）
巻頭図版3 2 種類の土器を使った土器	2 土楕46（西から）
巻頭図版4 1 滑石製品	3 土楕47（西から）
2 ガラス小工・管玉	図版11 1 土楕56遺物出土状況（北から）
図版1 1 弥生時代遺構全景（東から）	2 土楕64（北西から）
2 弥生時代遺構全景（南から）	3 水田2（北から）
3 溝3・4（南から）	図版12 1 竪穴住居9（北から）
図版2 1 竪穴住居1（北から）	2 竪穴住居10（南から）
2 竪穴住居2 遺物出土状況（南西から）	3 竪穴住居11（南から）
3 竪穴住居2 遺物出土状況（北から）	図版13 1 竪穴住居13（南から）
4 竪穴住居2 炭化材出土状況（南から）	2 竪穴住居14（東から）
図版3 1 竪穴住居2（南西から）	3 竪穴住居16（北東から）
2 竪穴住居3（南西から）	図版14 1 竪穴住居19炭化材出土状況（北東から）
3 竪穴住居4（北西から）	2 竪穴住居19住居西隣炭化材出土状況（南西から）
図版4 1 竪穴住居5（東から）	3 竪穴住居19（北東から）
2 竪穴住居5の遺物出土状況（南東から）	図版15 1 竪穴住居20（北西から）
3 竪穴住居5 A P 3 断面（東から）	2 竪穴住居22（北から）
図版5 1 竪穴住居5 A P 5 断面（北東から）	3 竪穴住居22カマド（南東から）
2 竪穴住居6の炭化材出土状況（南西から）	図版16 1 掘立柱建物6（南から）
3 竪穴住居6 A（北西から）	2 掘立柱建物8（西から）
図版6 1 竪穴住居7（北東から）	3 掘立柱建物9（内から）
2 掘立柱建物1（南西から）	図版17 1 井戸8（北から）
3 掘立柱建物2（西から）	2 井戸11中層遺物出土状況（南から）
図版7 1 掘立柱建物3（西から）	3 井戸11下層遺物出土状況（南から）
2 掘立柱建物4（北から）	図版18 1 井戸12（東から）
3 掘立柱建物5（北から）	2 井戸15（北から）
図版8 1 井戸1断面（南西から）	3 土楕74遺物出土状況（東から）
2 井戸2遺物出土状況（南から）	図版19 1 土楕75遺物出土状況（南から）
3 井戸7最下層遺物出土状況（南から）	2 焼成土塊1（東から）
図版9 1 土楕19（南から）	3 溝3（東から）
	図版20 1 掘立柱建物10（北から）
	2 土楕墓1（北から）

	3	土取り遺構（北から）
図版21	1	右岸導流堤調査前全景（東から）
	2	右岸導流堤調査状況（東から）
	3	右岸導流堤旧石積み（東から）
図版22	1	右岸導流堤旧石積み（南から）
	2	右岸導流堤旧石積み（北から）
	3	右岸導流堤T3断面（北西から）
図版23	1	右岸導流堤T3断面（南東から）
	2	右岸導流堤T2断面（北から）
	3	右岸袖部T1断面（北東から）
図版24	1	右岸袖部T6断面（南西から）
	2	一の発手（南西から）
	3	左岸導流堤（東から）
図版25		竪穴住居1・2・4出土遺物
図版26		竪穴住居2・5B出土遺物
図版27		竪穴住居5B・井戸5出土遺物
図版28		井戸5出土遺物
図版29		井戸5出土遺物
図版30		井戸5出土遺物
図版31		井戸5出土遺物
図版32		井戸5出土遺物

図版33		井戸2・4・7出土遺物
図版34		井戸7出土遺物
図版35		井戸7出土遺物
図版36		土坑34出土遺物
図版37		土坑19・28・27・42・45・56出土遺物
図版38		土坑46・51・67・溝18・25出土遺物
図版39		竪穴住居9～14・16出土遺物
図版40		竪穴住居19～22・井戸8・9出土遺物
図版41		井戸11出土遺物
図版42		井戸11出土遺物
図版43		井戸12～14・土坑74・75・88・溝32出土遺物
図版44		溝34出土遺物
図版45		溝34出土遺物
図版46		包含層等出土遺物
図版47	1	包含層等出土遺物
	2	百間川二の発手遺跡出土遺物
図版48		石製品①
図版49		石製品②
図版50		金属製品
図版51		土製品

第1章 地理的・歴史的環境

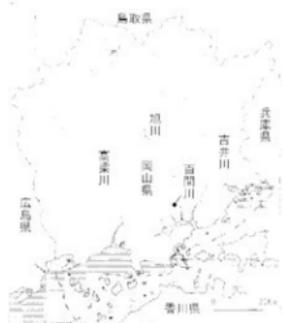
百間川は、岡山城下を洪水から守るため、江戸時代初めの寛文9（1669）年から貞享4（1687）年にかけて旭川の放水路として造られた人工の河川である。その流程は約7～8km（現在は13km）に及び、旭川東岸に形成された沖積平野である旭東平野の南端に位置する。百間川遺跡群は、この百間川の河床下に位置する縄文時代から近世にかけての複合遺跡群であり、上流から百間川二の荒手遺跡、百間川原尾島遺跡、百間川沢田遺跡、百間川兼基・今谷遺跡、百間川米田遺跡の6遺跡からなる。

中国山地に源を発し瀬戸内海に注ぐ旭川は、県北・中部を深く削りながら南流し、その運んだ土砂により河口付近に沖積平野を形成した。現在においてもいくつかの旧河道の痕跡が認められ、かつての旭川が大小に枝分かれしていたことをうかがわせる。旭東平野においては大きく二つの痕跡がみられる。ひとつは祇園から南東方向の賞田・雄町・乙多見・長利への流れであり、もうひとつは中原から新屋敷へ南下し、さらに藤原で南東方向に転じる兼基・長利への流れである。これら旧河道の長年の堆積作用により形成された旭東平野は、西を旭川、北を竜の口山丘陵、東を芥子山および山王山丘陵、さらに南を採山丘陵によって区画され、地理的なまとまりが看取される地域である。百間川の河川敷内のボーリングデータによると、地下9m以下に円礫が認められ、更新世には河原であったことを裏付ける。その後この円礫上には土砂が堆積しているが、百間川原尾島遺跡や同沢田遺跡の微高地下に認められる砂層上面の海拔50cm前後には、約6,000年前とされる腐食物層が広がり^①、微高地の基盤が形成されつつあったことを示す。その後は洪水など河川の堆積作用によって微高地がさらに高くなり、微高地間の小河川や低地部も埋没し、時代を経るにつれ生活の場が広がっていくのである。

旧石器時代 旭東平野における旧石器時代の遺物はほとんど知られていないが、採山丘陵の旗振台古墳北部遺跡でナイフ形石器が採集されている^②。

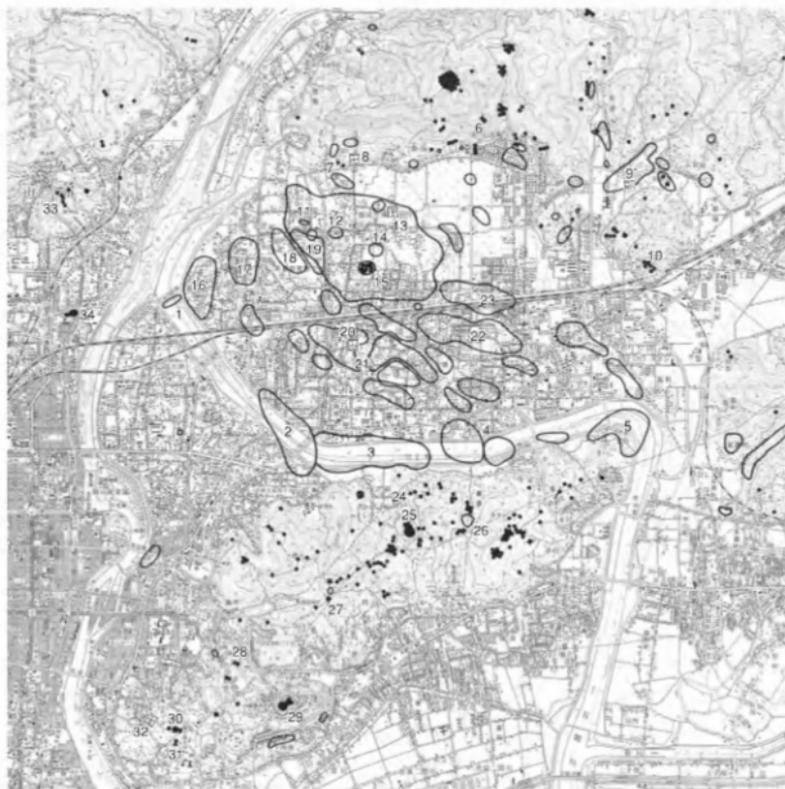
縄文時代 縄文時代に入っても前半期までは前代同様に、丘陵上に小規模な遺跡が点在するような様相であったと考えられる。遺構・遺物が増加するのは後期になってからで、新たに形成されつつあった微高地への人々の進出を物語るような資料が見つかった。百間川原尾島遺跡では、微高地上で後期後葉の焼土面と土器溜まりが見つかり、百間川沢田遺跡の採山北麓の丘陵裾やそれに続く微高地上でも、後期後半の多くの土器や石器とともに貯蔵穴や舟床・貝塚が見つかった。晩期になるとさらに遺跡数が増加し、百間川遺跡群全体と雄町遺跡^③で遺物が出土している。中でも百間川沢田遺跡では晩期後半の土器とともに石楯や太形蛤刃石斧・石盾丁状石器が見つかり、農耕の可能性が指摘されている。

弥生時代 弥生時代前期の遺構は、百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡・百間川米田遺跡などで確認されている。これらは基本的に縄文時代晩期から継続する遺跡である。このうち百間川沢田遺跡の微高地上では、南北約95m、東西90mの楕円形と推定される前期中頃の環濠集落が見つかり、その内部



第1図 遺跡位置

で竪穴住居6軒、円形周溝墓2基等を確認している。また、環濠集落と旧河道を挟む東側には、土壇墓と木棺墓で構成される前期末の墓城があり、同様の墓城が百間川沢田(市道)遺跡でも確認されている⁽⁴⁾。前期の水田は、百間川原尾高遺跡と百間川沢田遺跡で検出している。いずれも微高地上の凹部が縁辺部に立地し、畦畔による水田区画が等高線に平行な長方形を呈するなど、地形に規制された様子がうかがえる。



- | | | | |
|--------------|---------------|--------------|------------|
| 1 百間川二の荒手遺跡 | 10 穴目口止山古墳 | 19 天神河原・中井遺跡 | 28 換山103号墳 |
| 2 百間川原尾高遺跡 | 11 備前国庁跡(県史跡) | 20 桶多楽寺 | 29 淡茶臼山古墳 |
| 3 百間川沢田遺跡 | 12 南古市遺跡 | 21 赤日遺跡 | 30 観音茶臼山古墳 |
| 4 百間川兼基・今谷遺跡 | 13 成光院寺 | 22 乙多見遺跡 | 31 換山109号墳 |
| 5 百間川米田遺跡 | 14 ハダ廣跡 | 23 堤町遺跡 | 32 本松古墳 |
| 6 備前中塚古墳 | 15 中井・西二反山遺跡 | 24 沢口大塚古墳 | 33 神宮寺山古墳 |
| 7 唐入塚古墳 | 16 中島城跡 | 25 金鏡山古墳 | |
| 8 菅正原寺 | 17 宮有遺跡 | 26 兼基島坂遺跡 | |
| 9 古樫原寺 | 18 互反池・同長遺跡 | 27 旗振台古墳 | |

第2図 百間川周辺遺跡分布 (1/50,000)

中期の遺跡は、百間川遺跡群に加え、藤町遺跡、赤田遺跡⁶⁵⁾、乙多見遺跡⁶⁶⁾などが知られる。中でも百間川兼基・今谷遺跡は、200×400mの微高地上を集落が移り変わったと考えられ、中期中葉の大形の掘立柱建物群を中心とする集落や、中期末の高い集住性を示す集落が特筆される。また、同遺跡南側の操山丘陵の谷部に位置する兼基鳥坂遺跡からは3個の銅鐸が出土している⁶⁷⁾。中期の水田は、百間川原尾鳥遺跡、百間川沢田遺跡、百間川兼基・今谷遺跡で検出しており、前期の水田上で検出した例も多い。

後期の遺跡数は、それまでに比べると飛躍的に増加しており、加えて集落規模の拡大化が顕著となる。百間川遺跡群では、百間川原尾鳥遺跡が拠点的な集落と考えられ、直径10m前後の大形竪穴住居とそれを幾重にも取り巻く周溝や排水溝が見つかる。また、百間川原尾鳥遺跡と百間川兼基遺跡では、後期末の洪水によって埋没した集落も確認されており、竪穴住居の構造を復元する好資料である。後期の水田は、微高地高所の居住域を除く遺跡群のほぼ全面に広がっている。この景観は先述した後期末の洪水砂によって埋没したことで良好に保存され、水田と水路との有機的関係を顕著に復元することができる。また、水田の広がりや百間川遺跡群のみならず、旭東平野全域に及んでいた可能性があり、広大な可耕地と複雑な水利を統制するシステムの存在が推定される。

古墳時代 古墳時代の集落は、百間川遺跡群をはじめ藤町遺跡、赤田東遺跡⁶⁸⁾、原尾鳥遺跡⁶⁹⁾など多数の遺跡があり、その立地は弥生時代の集落と基本的に一致する。百間川原尾鳥遺跡では、6世紀代の布掘り溝を有する竪柱建物があり、特殊な上部構造と性格が推定される。また7世紀代においては、それまでの竪穴住居から掘立柱建物主体へと集落構造の変化が認められ、同様の変化は赤田東遺跡でもみられる⁷⁰⁾。百間川原尾鳥遺跡の北900mに位置する原尾鳥遺跡では、中期末の白玉生産と7世紀前半の製鉄関連作業などの手工業生産が行われている。百間川原尾鳥遺跡と原尾鳥遺跡ではほぼ同時期の大溝がみつかり、両遺跡間を結ぶ水路・運河という大規模な土木開発が推定され、これら手工業生産品の流通にも利用された可能性がある⁷¹⁾。一方、百間川兼基・今谷遺跡では、他の遺跡で遺構・遺物の希薄な5世紀前半代に、竪穴住居とそれを上回る数の総柱建物で構成される集落が見つかる。この集落を貫く幅12m、深さ1.5mを超える大溝は、集落と清長をほぼ同じくするもので、遺跡南側の丘陵上に位置する金蔵山古墳¹⁴⁰⁾の造営との関連が推定される。さらに集落については、古墳造営のキャンプの機能を部分的に担っていたとする指摘もある¹⁴¹⁾。

この平野をとりまく丘陵上には数多くの古墳が築造されている。平野の北側の竜の口丘陵には、前期前半の前方後方墳である橋前車塚古墳¹⁴²⁾、続いて東側の山王山丘陵に穴甘山山王古墳¹⁴³⁾が築かれている。また、平野の南側の操山丘陵には、操山109号墳¹⁴⁴⁾、網浜茶白山古墳¹⁴⁵⁾、淡茶白山古墳¹⁴⁶⁾、金蔵山古墳という大形の前方後方墳が継続的に築かれている。一方、後期古墳としては竜の口古墳群や操山古墳群があり、いずれも小規模な円墳に横穴式石室を有する丘陵上の群集墳である。また平野部の中井・南三反田遺跡¹⁴⁹⁾において、墳丘が削平されて周溝のみとなった群集墳が検出されている。

古代 旭東平野の古代寺院としては、賞田庵寺¹⁴⁷⁾、成光庵寺、古都庵寺、藤多庵寺¹⁴⁸⁾、網浜庵寺が知られている。このうち賞田・藤多両庵寺については発掘調査が行われ、いずれも盛期の奈良時代に壇上積基壇を採用し、賞田庵寺は二塔式伽藍であることなど、中央寺院に匹敵する内容が判明している。これら二寺と古都庵寺は、上道郡を本貫地とする上道氏の氏寺と考えられ、出土瓦の検討などからその造営・修復の相関が指摘される¹⁴⁹⁾。これら三寺を結ぶ内部には備前国府が推定されおり、上道氏の中央政界への進出と関連し、政治的な遷地が想定される。この国府に関連する遺跡には、推定国

府城に南古市場遺跡⁽¹⁸⁾と関連官衙と考えられるハガ遺跡⁽¹⁹⁾、周辺に百間川遺跡群がある。このうち、百間川米田遺跡では、遺構として掘立柱建物群や「船曳」を目的とした道路があり、遺物として「土三宅」墨書須恵器、「市」墨書十師器、「宮」逆字押印須恵器、鈴帯、埴仏などの公的性格をもつものがある。以上から百間川米田遺跡は、国府の外港に付属する倉庫群や、官営の市場の可能性が考えられている。一方、百間川原尾鳥遺跡では、平安時代初頭の大溝から墨書十師器とともに人形や車轡などの木製模造品が出土し、律令的祭祀である大観の品々の一部と考えられる。大観の祭場である祓所は、都や国府に通じる路上に設けられたことから、同遺跡周辺に備前国府の祓所が存在したと推定される。中世～近世 中世の集落は、百間川原尾鳥遺跡や百間川米田遺跡がある。百間川原尾鳥遺跡では、鎌倉時代の屋敷地内の土壌墓に輸入陶磁器や鏡を副葬するものがあり、被葬者の階層差を示す。また、室町時代の屋敷地は溝や堀、道路で区画されていて、桑里制地割による規制と考えられる。百間川米田遺跡では、中世を通しての集落とその南側に掘割（運河）が検出された。さらに、遺跡の北側に推定される河川には、長さ約1km内の3か所に中世の橋梁3本と近世の橋梁1本が架けられていた。このうち最大となる中世の橋梁は全長40m、幅3m前後を測る。これらは再三の補修・改修の痕跡が認められ、長期間にわたる橋の維持・管理がなされていた。以上の百間川米田遺跡の遺構群のあり方は、水上交通と陸上交通の接する要衝の地として栄えた港町の景観を想起させるものである。

その他の近世遺構としては、百間川築造に関連する遺構がある。百間川二の荒手遺跡では、洪水調整の要として設けられた越流堤とその内側の導流堤が見つまっている。一方、百間川原尾鳥遺跡では、大規模な土取り跡が見つかり、築堤に伴うものと推定されている。

以上、本章は百間川遺跡の既刊各報告書の「地理的・歴史的環境」を参考として執筆した。

註

- (1) 藤原龍哉・白神宏「岡山平野中部の沖積層と海水準変化」『瀬戸内海地域における新石器海水準変動と地形変化』1986
- (2) 鎌木義昌「岡山市域の無土器時代遺跡と遺物」『岡山市史・古代編』岡山市 1962
- (3) 「藤町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972
- (4) 「百間川沢田（市道）遺跡発掘調査報告」岡山市教育委員会 1992
- (5) 「船多庵寺発掘調査報告」岡山市教育委員会 1975
- (6) 正岡野夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土石器」『岡山県埋蔵文化財報告』3 1973
- (7) 鎌木義昌「岡山県築基遺跡」『日本農耕文化の生成』1961
- (8) 「赤田東遺跡」岡山市教育委員会 2005
- (9) 「原尾鳥遺跡（藤原光町3丁目地区）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139 岡山県教育委員会 1999
- (10) 西谷眞治・鎌木義昌「金藏山古墳」倉敷考古館 1959
- (11) 高田浩司「吉備南部における古墳社会形成期の様子」『環瀬戸内海の考古学』下巻 2002
- (12) 近藤義郎・鎌木義昌「備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻 1986
- (13) 宇垣匡雅「吉備の前期古墳—Ⅱ 穴山山土山古墳の測量調査—」『古代吉備』第10集 1988
- (14) 宇垣匡雅「竪穴式石室の研究—使用石材の分析を中心に—」『考古学研究』第34巻第1号・第2号 考古学研究会 1987
- (15) 近藤義郎「湊茶臼山古墳」岡山県史、第18巻 1986
- (16) 「中井・南二反田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』92 岡山県教育委員会 1994
- (17) 「史跡貫田庵寺跡」岡山市教育委員会 2005
- (18) 「南古市場（高島公）遺跡現地説明会資料」岡山市教育委員会 1992
- (19) 「ハガ遺跡」岡山市教育委員会 2004

なお、百間川遺跡群の報告書については、第2章第5節の表に掲げる報告書一覧を参照されたい。

第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

第1節 調査の契機と経緯

岡山平野を南北に貫流する旭川の東岸には多くの遺跡が存在する。百間川の河床下にも「百間川遺跡」が存在することは、昭和25（1950）年頃から周知され、昭和40（1965）年度に岡山県教育委員会が発行した『岡山県遺跡地図』には、百間川A遺跡と同B遺跡として記載されている。前者は旧国道付近から上流側の砥園用水付近まで、後者は国道250号線の百間川橋付近の範囲が示されている。

昭和43（1968）年、岡山県教育庁文化課は、建設省（現国土交通省、以下同）が旭川放水路（百間川）の改修工事を計画していることを知り、建設省岡山河川工事事務所に対し、以下の説明と要望を行った。その内容は、改修工事計画予定地には文化財保護法に基づく周知の遺跡である「百間川遺跡」が存在すること。事業者である建設省は、文化財保護法に基づく措置、特に昭和32（1957）年6月11日閣議了解になった「文化財保護に関する関係官庁間の連絡強化について」の趣旨にそって、事前に文化財の保護に遺漏のないように計らうこと。以上大略3点である。これに対して建設省は、当時河川内の土地買収交渉及び工事施工の調査計画を進めている段階であるとの回答であった。

その後建設省は、計画にそって地元耕作者と土地買収交渉に入り、昭和49（1974）年に決着をみたことから、昭和50（1975）年10月には河川敷に工事用道路を施工するなどして、本格的工事に入る姿勢を示した。岡山県教育委員会は、このような百間川改修事業の状況をふまえ、直ちに協議を申し入れ、実情の聴取と改修事業に伴う百間川遺跡の取り扱いについて協議した。その結果、基本的には埋蔵文化財包蔵地の範囲が確定したならば、当該地は発掘調査が終了した後に改修工事を施工することで合意した。また、建設省に対しては文化財保護法第57条の3（現第94条）に先立つ事前協議の文書の提出を求める一方、この協議の基礎資料となる百間川遺跡（関連遺跡を含む）の範囲確認調査計画概要を建設省に提出した。やがて昭和51（1976）年4月になって、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）岡山河川工事事務所長名で、事前協議の文書が岡山県教育委員会に提出され、これに基づいて協議を重ねた。そして同年9月1日付けで同局長から確認調査の依頼文書が提出され、同年11月1日から確認調査を実施するに至った。

確認調査（第1次調査）は、低水路部分の遺跡の確認と古地形の復元を主に、一部新田サイフォン部分の全面調査で、翌年3月31日まで実施した。その結果、岡山市原尾島（第1微高地）、同沢田（第2微高地）、同兼基・今谷（第3微高地）の3か所に大規模な微高地が広がり、そこに遺跡が存在することが判明した。

昭和52（1977）年度からは、確認調査の成果を基に建設省の工事計画にそって発掘調査を進め、平成16（2004）年度までの28年間という長期にわたって実施してきたが、現在は休止している。この間、調査の進展とともに各微高地間にも弥生時代後期の水田が存在することや、新たに岡山市米田一帯にも遺跡が広がること判明した。さらに、弥生時代の生活面から深い位置で縄文時代の遺構・遺物が発見され、発掘調査の対象範囲や調査深度は当初よりも著しく増すこととなった。

次に本書の掲載対象となった調査の経緯について述べる。百間川原尾高遺跡は、浄化施設建設に伴い調査を行った。この浄化施設建設は、平成13（2001）年度の中途に初めて計画が示されたもので、それによれば百間川に流入する水路樋門に隣接して計5か所に浄化施設を建設するというものであった。協議の結果、平成13年度の荒木樋門浄化施設の調査に続き、翌年度以降、藤原・鑓田、新田、兎、五反田の各樋門浄化施設についての調査を行うこととなった。このうち、新田樋門浄化施設は、低水路左岸法線の北側の高水敷に建設計画されたが、施設から低水路に向かう流出管が低水路未調査区を貫くことと、隣接する南側の低水路部分は、施設建設後の調査が困難であることから、合わせて調査を行うこととなった。

百間川二の荒手遺跡は、百間川遺跡群の中でも最上流部に位置する百間川の築堤関連の遺跡である。旭川の洪水調整のために放水路として江戸時代の寛文9（1669）年に着工された百間川は、貞享3（1686）年からの大改修により三段構えの荒手（越流堤）が整備された。このうちの二の荒手は、旭川の分岐点から約300m下流に設けられた石積みの越流堤である。調査の対象は、荒手本体の右岸袖部と右岸導流堤である。

第2節 調査の経過

岡山市原尾島の百間川原尾島遺跡の調査は、昭和52（1977）年度に開始し、以後断続的に平成15（2003）年度まで実施した。調査の対象は、低水路部分をはじめ左岸用水路・樋門及び導入水路・橋脚橋梁・浄化施設等で、その調査総面積は30,000㎡を超える。これらの調査成果については、「百間川原尾島遺跡」全6冊の報告書として刊行しているほか、本書が第7冊目となる（表3参照）。

本書に掲載する調査区は、百間川原尾島遺跡の上流部にあたり、新田樋門・サイフォンと原尾島橋の間に位置する。調査は、百間川沢田遺跡の藤原・鎧田樋門浄化施設に伴う調査の終了後、平成14年10月から翌年10月までの12か月間を調査員3名で行った。遺構密度の高い範囲と予想されたことから、平成14年度は調査区の東半、翌年度は西半と分割して調査を実施した。この間、特に調査区中央から東半分にかけて、予想外の現代擾乱が弥生時代の遺構まで及んでおり、その片付けに時間を費やし、またその後の遺構検出等にも支障を来した。

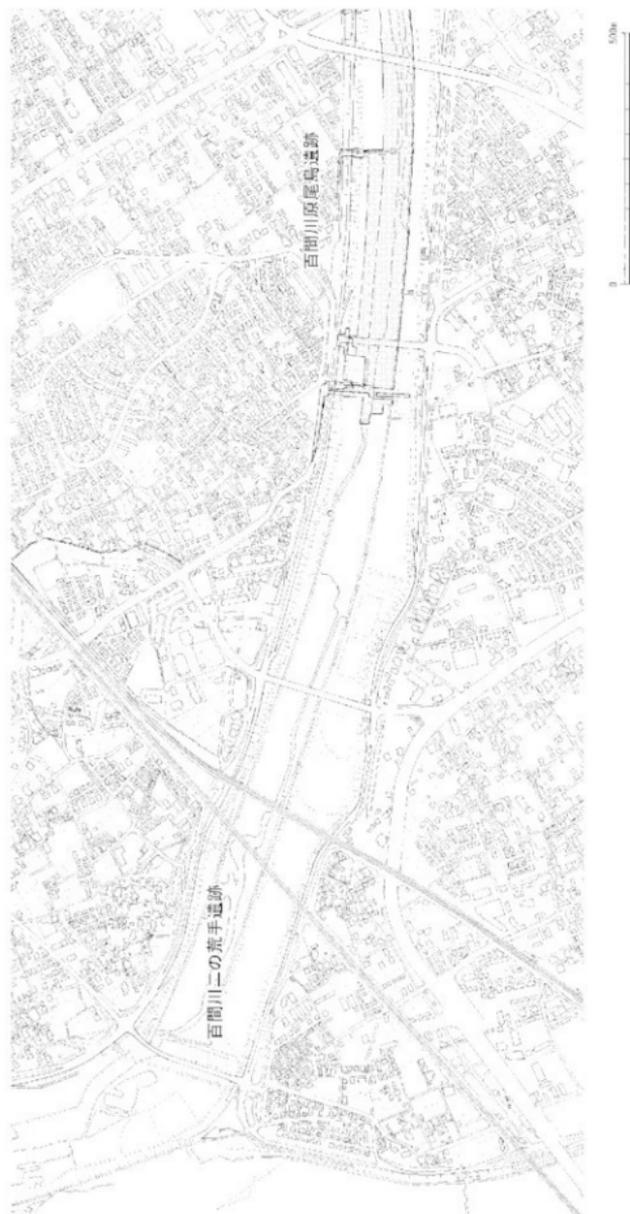
平成14年度の調査は、全面が微高地上であり、前述の現代擾乱の片付け後、近世の用水路の掘り下げから開始した。中世と古墳時代の遺構は同一面で検出し、遺構埋土等で時代を判別した。弥生時代後期の遺構の中には、洪水砂で埋没したものがあり、かなり上位で検出できた遺構もあるが、多くは数度の包含層掘り下げを繰り返した後に検出可能となっている。また、弥生時代中期以前の遺構は、その多くが基盤層上面での検出である。

平成15年度の微高地上の調査は、基本的に前年度と同様の経過をたどっている。また、調査区西半の低位部の調査は、微高地上の遺構の時期と並行しながら行っている。

岡山市竹田の百間川二の荒手遺跡の調査は、平成6（1994）年度末に確認調査を実施した。その結果、袖部から導流堤の北半については、昭和9（1934）年の大洪水により決壊し、その後改修が行われている状況が判明した。しかし、導流堤の南半については、内部に旧石積みの下段部を確認したため、引き続き翌年度の4、5月に全面調査を行った。

表1 百間川原尾島遺跡・百間川二の荒手遺跡 調査一覧

番号	遺跡	調査区	調査担当者	調査期間	調査面積	遺構数	遺物数
1	の荒手		山根康平・根本智宏・小畑良治・中務和彦	H 7. 5. 22 ~ 3. 31 H 7. 4. 1 ~ 6. 9	385	1	3
2	原尾島	三敷×調査区 左岸低水路・浄化施設 7・8-A-C	高田恭一郎・大野美穂・藤田裕文	H 14. 10. 15 ~ H 15. 5. 31	1,195	110	108
3	原尾島	三敷×調査区 左岸低水路・浄化施設 5-7-A-C	二宮浩夫・高田恭一郎・藤田裕文	H 15. 4. 1 ~ 10. 29	1,307	110	107
				計	2,887㎡	241	218種



第3図 百間川二の荒手遺跡と百間川原尾島遺跡の位置 (1/10,000)

第3節 調査の体制

発掘調査は、岡山県教育委員会が建設省中国地方建設局(現国土交通省中国地方整備局)から委託を受け、昭和52(1977)年度から平成16(2004)年度まで実施している。

本報告書に記載した百間川原尾高遺跡は、平成14(2002)・15(2003)年度に発掘調査を実施した範囲を対象としている。また百間川二の荒手遺跡は、平成6(1994)・7(1995)年度に発掘調査を実施した範囲を対象としたものである。平成7年度の調査が調査員2名の1班体制で組織されたほかは、調査員3名の1班で組織されている。

岡山県教育委員会は、発掘調査と報告書の作成事業の遂行にあたり、遺跡の保護・保存ならびに調査・報告書作成の専門的な指導および助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「旭川放水路(百間川)改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱している。

旭川放水路(百間川)改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会委員

池葉須藤樹	(元中学校校長)
亀田修一	(岡山理科大学) <平成14年度から>
近藤義郎	(岡山大学名誉教授)
角田 茂	(元中学校教諭) <平成13年12月逝去>
出宮徳尚	(岡山市教育委員会)
松本直子	(岡山大学) <平成15年度から>
水内昌康	(元岡山県文化財保護審議会委員) <平成14年度まで>
山本悦世	(岡山大学)

平成6年度		課長補佐(総務係長)	杉田 卓美
岡山県教育委員会		主 査	石井 善晴
教 育 長	森崎岩之助	主 任	三宅 秀吉
岡山県教育庁		<調査第三課>	
教育次長	岸本 憲二	課 長	禰瀬 昭彦
文化課		課長補佐(第一係長)(調査担当)	山磨 康平
課 長	大場 淳	文化財保護主任 (調査担当)	小畑 良治
課長代理	松井 新一	主 事 (調査担当)	根木 智宏
課長補佐(埋蔵文化財係長)	高畑 知功		
主 任	若林 一憲	平成7年度	
岡山県古代吉備文化財センター		岡山県教育委員会	
所 長	河本 清	教 育 長	森崎岩之助
次 長	葛原 克人	岡山県教育庁	
<総務課>		教育次長	黒瀬 定生
課 長	丸尾 洋幸	文化課	

課長	大場 淳
課長代理	樋本 俊二
参事	島原 克人
課長補佐(埋蔵文化財係長)	高畑 知功
主任	若林 一志

岡山県古代吉備文化財センター

所長	河本 清
次長	高塚 恵明
次長(文化課本務)	葛原 克人

<総務課>

課長	丸尾 洋幸
課長補佐(総務係長)	井戸 丈二
総務主幹	守安 邦彦
上査	石井 善晴
主任	木山 伸一

<調査第三課>

課長	柳瀬 昭彦
課長補佐(第二係長)	岡本 寛久
文化財保護主幹(調査担当)	山磨 康平
文化財保護主査(調査担当)	中務 和彦

平成14年度

岡山県教育委員会

教育長	宮野 正司
-----	-------

岡山県教育庁

教育次長	三浦 一男
------	-------

文化課

課長	西山 猛
課長代理(埋蔵文化財係長)	松本 和男
課長代理	宮田 正彦
文化財保護主任	尾上 元規
主事	浜原 浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所長	正岡 睦夫
次長	藤川 洋二

<総務課>

課長	安西 正則
課長補佐(総務係長)	田中 秀樹

主任	小坂 文男
----	-------

<調査第三課>

課長	柳瀬 昭彦
課長補佐(第一係長)	下澤 公明
文化財保護主査(調査担当)	藤田 裕文
文化財保護主査(調査担当)	高田恭一郎
文化財保護主事(調査担当)	大熊 美穂

平成15年度

岡山県教育委員会

教育長	宮野 正司
-----	-------

岡山県教育庁

教育次長	三浦 一男
------	-------

文化財課

課長	西山 猛
課長代理	田村 啓介
課長補佐(埋蔵文化財係長)	平井 泰男
文化財保護主任	尾上 元規
主事	浜原 浩司

岡山県古代吉備文化財センター

所長	正岡 睦夫
次長	藤川 洋二
文化財保護参事	松本 和男

<総務課>

課長	中田 哲雄
課長補佐(総務係長)	笈本 弘忠
主任	小坂 文男

<調査第三課>

課長	柳瀬 昭彦
課長補佐(第一係長)	山磨 康平
文化財保護主幹(調査担当)	二宮 治夫
文化財保護主査(調査担当)	藤田 裕文
文化財保護主査(調査担当)	高田恭一郎

第4節 日誌抄

平成6年度

平成7年3月22日(水)	百間川二の荒手遺跡	右岸導流堤第一次調査開始
3月31日(金)	百間川二の荒手遺跡	右岸導流堤第一次調査終了

平成7年度

平成7年4月1日(土)	百間川二の荒手遺跡	右岸導流堤発掘調査開始
4月17日(月)	百間川二の荒手遺跡	右岸袖部の立会調査
5月16日(火)	旭川放水路(百間川)	改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会開催
6月9日(金)	百間川二の荒手遺跡	右岸導流堤発掘調査終了

平成14年度

平成14年7月12日(金)	旭川放水路(百間川)	改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会開催
10月1日(火)	旭川放水路(百間川)	改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会開催
10月15日(火)	百間川原尾島遺跡	三股ヶ調査区発掘調査開始
平成15年2月19日(水)	旭川放水路(百間川)	改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会開催
3月31日(月)	百間川原尾島遺跡	二股ヶ調査区発掘調査終了

平成15年度

平成15年4月1日(火)	百間川原尾島遺跡	三股ヶ調査区発掘調査開始
7月22日(火)	旭川放水路(百間川)	改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会開催
10月20日(月)	百間川原尾島遺跡	二股ヶ調査区発掘調査終了
平成16年2月26日(木)	旭川放水路(百間川)	改修工事に伴う埋蔵文化財保護対策委員会開催

表2 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘調査の通知(旧法第98条の2)

文書番号 日付	情報及び名称	所在地	面積(m ²)	目的	上体名	担当者	期間	文化庁文書 番号 日付
総文庫 第180号 第7.4.2	三股ヶ 百間川原尾島遺跡 三股ヶの発掘	岡山県米田・ 竹田	6,000	旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査	岡山県教育委員会 教育長 森崎若夫	山内徹平 中野和志	117.4.3~ 118.3.31	7-委収記 第95-2912号 7.10.6

埋蔵文化財の鑑査(旧法第98条の3条)

文書番号 日付	物件名	所在地	高学年月日	発見者	土地所有者	埋蔵場所
総文庫 第21号 118.4.2	古戦場一の発掘遺跡 土器 コシナナ1期 百間川原尾島遺跡 土器コシナナ153期 本館、本館店コシナナ21期 石仏、石製コシナナ1期 金銅製品コシナナ1期 土器、灰土、貝製コシナナ1期 百間川原尾島遺跡 土器コシナナ1期	岡山県竹田、米田、 原尾島 百間川二の荒手遺跡 百間川原尾島遺跡 百間川原尾島遺跡	117.4.1~ 118.3.31	岡山県教育委員会 教育長 森崎若夫		岡山県古代文化財 センター

埋蔵文化財発掘調査の報告（旧法第58条の2）

発掘番号 日付	発掘及び名称	所在地	面積(m ²)	期間	報告者	担当者	期間
岡古遺 第236号 H14.10.17	土製品、 石製土器・土器類	岡山市地蔵島	1,495	河川	岡山県古代吉備文化財 センター南長	藤田西文 高橋恭一郎 大関矢張	H14.10.15～ H15.2.31
岡古遺 第16号 H15.4.1	土製品・木製 土器類・土器類	岡山市地蔵島	1,260	河川	岡山県古代吉備文化財 センター南長	二宮治夫 藤田西文 高橋恭一郎	H15.4.1～ H15.9.30

遺物発見通知（旧法第59条）

発掘番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	発見地名称
救文埋 第10号 H15.4.1	土器、陶器類、玉類、金属製品、 土製品、木製品、漆器 184箱	岡山市今宮 石岡町今宮遺跡 岡山市武田 岡野町武田遺跡 岡山市地蔵島 石岡町地蔵島遺跡	H14.4.1～ H15.2.26	岡山県教育委員会 教育長 宮野洋司	岡上交通省	岡山県古代吉備文化財 センター
救文埋 第107号 H15.5.19	土器、陶器類、玉類、石製品、 金属製品、土製品、木製品、漆器 169箱	岡山市地蔵島 石岡町地蔵島遺跡 岡山市武田 岡野町武田遺跡 岡山市地蔵島 石岡町地蔵島遺跡	H15.4.1～ H16.2.15	岡山県教育委員会 教育長 宮野洋司	岡上交通省	岡山県古代吉備文化財 センター

第5節 報告書作成の体制と経過

遺物の整理・報告書の作成は、平成18（2006）年度に調査員2名で行った。

平成18年度

岡山県教育委員会

教育長

門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長

神田 益徳

文化財課

課長

高畑 知功

参事

田村 啓介

総括副参事（埋蔵文化財班長）

光永 真一

主任

小林 利晴

主事

金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所長

松本 和男

次長（総務課長）

安西 正則

参事

岡田 博

副参事

中島 謙次

<総務課>

総括副参事（総務班長）

若林 一憲

主任

小川 紀久

<調査第二課>

課長

島崎 東

総括副参事（第二班長）

二宮 治夫

副参事（報告書担当）

下澤 公明

主幹（報告書担当）

高田恭一郎

報告書作成の対象となる調査地区は、表1及び第3図に示すとおりである。整理対象面積は、百間川原尾島遺跡が2,502m²、百間川二の荒手遺跡が385m²である。整理対象遺物は、百間川原尾島遺跡の土器が整理箱で221箱、木製品・金属製品・土製品・玉類・石製品が約800点である。また百間川二の荒手遺跡が土器1箱、金属製品が6点である。

整理は、遺構数と遺物数の大半を占める百間川原尾鳥遺跡から開始した。遺物の復元と実測については、遺構に伴うものから順次行い、同時に土器以外の遺物の台帳作成と選別抽出を進めた。遺構図面については、個々の遺構の整理・検討に加え、既報告の「百間川原尾鳥遺跡1～3」につながる遺構の検討を行い、全体図に反映させた。百間川二の荒手遺跡の整理は、百間川原尾鳥遺跡の整理と並行して実施した。担当者間の主な分担は、百間川原尾鳥遺跡の遺物の選別と遺構の整理を高田が行い、遺構と遺物の浄写を下澤が行った。また、百間川二の荒手遺跡については、下澤が整理した。

実測点数は、土器が841点、石器その他の遺物が280点である。

報告書全体の構成と、百間川原尾鳥遺跡の割り付けは主に高田が担った。また、百間川二の荒手遺跡の割り付けは、下澤と山磨が行った。原稿の執筆については、調査担当者が行ったが、整理工程の全般的な遅れから執筆に十分な時間を割けなかった。

平成19(2007)年3月2日(金)に開催した埋蔵文化財保護対策委員会では、報告書作成状況の報告を行い、各委員から御指導・御助言を賜った。

遺物の整理・報告書の作成に関しては、次の諸氏の協力を得た。記して感謝いたします。

梅木謙一(搬入土器の鑑定)・大橋康二(輸入陶磁器の鑑定)・鈴木茂之(石材同定)・田崎博之(搬入土器の鑑定)・坪根伸也(搬入土器の鑑定)・富岡直人(動物遺存体の同定)・藤本啓二(搬入土器の鑑定)(50音順・敬称略)

なお、本報告書は、旭川放水路(百間川)河川改修工事に伴う発掘調査の報告書としては17冊目である。次に1～16冊までの報告書名を掲載する。

表3 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査報告書一覧(1)

番号	編 著 者 名	書 名	シリーズ名・番号	発行年月
I	江見正己・伊藤 晃・浅倉秀昭 柳瀬昭彦・中野雅美・内藤善史 他	百間川原尾鳥遺跡1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告39	1980 11
II	井上 弘・下澤公明・松本和男 岡田 博・浅倉秀昭・福田正継 江見正己・中野雅美・内藤善史 平井泰男・島崎 東 他	百間川沢田遺跡1 百間川長谷遺跡 百間川岩間遺跡 百間川当麻遺跡1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告46	1981 11
III	高畑知功・正岡睦夫・井上 弘 下澤公明・渡辺 光・山磨康平 浅倉秀昭・岡本寛久・江見正己 中野雅美・内藤善史・平井泰男 島崎 東・光永真一・平井典子 他	百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告51	1982 11
IV	井上 弘・松本和男・岡田 博 二宮治夫・平井泰男・光永真一	百間川当麻遺跡2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告52	1982 11
V	正岡睦夫・高畑知功・平井泰男 島崎 東・光永真一・井上 弘 下澤公明・渡辺 光・岡田 博 二宮治夫・岡本寛久・中野雅美	百間川原尾鳥遺跡2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告56	1984 3

表3 旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査報告書一覧(2)

番号	編 著 者 名	書 名	シリーズ名・番号	発行年月
VI	二宮治夫・正岡睦夫・井上 弘 下澤公明・柳瀬昭彦・山崎康平 岡田 博・高畑知功・浅倉秀昭 岡本寛久・江見正己・中野雅美 平井泰男・島崎 東・光永良一 他	百間川沢田遺跡 2 百間川長谷遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告59	1985 3
VII	岡本寛久・平井 勝・柳瀬昭彦 井上 弘・宇垣匡雅・平井泰男 江見正己	百間川米田遺跡 3 (旧当麻遺跡)	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告74	1989 9
VIII	平井 勝・井上 弘・柳瀬昭彦 浅倉秀昭・古谷秀郎・岡本寛久 江見正己・宇垣匡雅・阿部泰久 高田恭一郎	百間川沢田遺跡 3	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告84	1993 3
IX	宇垣匡雅・平井 勝・江見正己 柳瀬昭彦	百間川原尾島遺跡 3	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告88	1994 3
X	平井 勝・岡本寛久・高田恭一郎	百間川原尾島遺跡 4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告97	1995 3
XI	柳瀬昭彦・高田恭一郎・岡本寛久 平井泰男・井上 弘	百間川原尾島遺跡 5	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告106	1996 3
XII	平井 勝・柳瀬昭彦・岡本寛久 宇垣匡雅・浅倉秀昭・江見正己	百間川兼基遺跡 2 百間川今谷遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告114	1996 3
XIII	柳瀬昭彦・弘田和司・平井 勝 高田恭一郎・山崎康平・根本智宏 澤山孝之	百間川兼基遺跡 3 百間川今谷遺跡 3 百間川沢田遺跡 4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告119	1997 3
XIV	物部茂樹・山崎康平・井上 弘 宇垣匡雅・中野雅美・根本智宏 柳瀬昭彦・松尾佳子	百間川米田遺跡 4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告164	2002 3
XV	小嶋善邦・宇垣匡雅・高田恭一郎 柴田英樹・物部茂樹・松尾佳子 柳瀬昭彦・稲谷知子	百間川原尾島遺跡 6	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告179	2004 2
XVI	高田恭一郎・和田 翔・物部茂樹 浅倉秀昭・澤山孝之・稲谷知子	百間川兼基遺跡 4 百間川沢田遺跡 5	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告208	2007 3
XVII	高田恭一郎・下澤公明・山崎康平	百間川原尾島遺跡 7 百間川二の荒手遺跡	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告215	2008 3

第3章 百間川原尾島遺跡

第1節 遺跡の概要と調査区

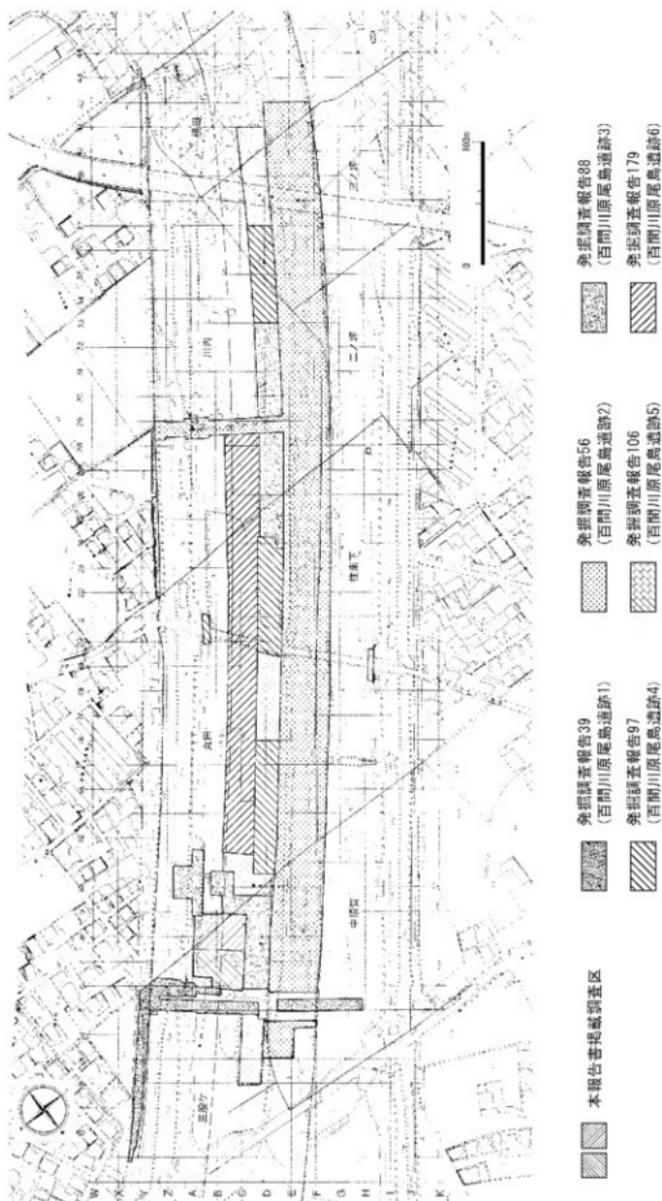
百間川原尾島遺跡は、岡山市原尾島の百間川にかかる遺跡部分をさす。遺跡の範囲は、原尾島橋の上流約230mの発掘門付近から、国道250号線の百間川橋の下流約70mまでの延長約900mに及ぶ。この間には、3つの微高地とその周辺の低部位が存在し、微高地上では縄文時代晩期から中世の遺構を検出している。また、微高地縁辺から低部位の広い範囲で弥生時代後期の水田を検出し、その下層の一部では弥生時代前・中期の水田を検出している。

百間川原尾島遺跡の調査成果は、「百間川原尾島遺跡」全6冊の報告書としてまとめられ、本書が7分冊目となる。既報告では小字により三股ヶ、丸田、中須賀、往來下、川内、三の坪の各調査区に細別され、それによれば本書で報告する調査区は三股ヶ・丸田両調査区にまたがっている。

次に本書で報告対象とする調査区の概要を述べる。調査区は、新田樋門と原尾島橋間の左岸側に位置する約63×43mの範囲である。百間川原尾島遺跡の北西端付近にあたり、調査区の西側は、「百間川原尾島遺跡1」報告の「新田樋門調査区」、東側は「百間川原尾島遺跡3」報告の「低水路調査区」、南側は「同3」報告の「橋梁および橋梁渡岸調査区」である。

調査区の4/5を占める微高地は、6～8A～C区部分である。調査区内では西側の低部位部が高く、その東側の7・8A区付近が若干低くなっている。微高地の南東壁断面を示した第5図によると、この低い部分には第9層で示す薄い砂層が見られる。この砂層は、弥生時代後期末の洪水砂層と考えられ、遺構の中には同砂で埋没したものが見られる。この地区の古墳時代以降の遺構は、基本的に洪水砂層上層で検出しているが、古墳時代初期の遺構には、酷似した砂で埋没したものが、一部は洪水砂下層で検出している。基盤層は南東壁断面の第12層以下であり、この付近での海拔高は365cm前後を測る。低部位部の高い部分では、洪水砂は見られず、現代耕作土直下で古墳時代以降の遺構や、一部弥生時代後期の遺構を検出した。この付近での基盤層の海拔高は375cm前後を測る。縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構は、溝群を中心にこの微高地上の低部位部に集中する。弥生時代後期前半の遺構は、前代までの溝群を踏襲した溝と、東側の居住域で構成される。その後、弥生時代後半からは微高地全域に居住域が広がり、古墳時代以降も同様となる。

一方、調査区の1/5を占める5・6BC区の低部位では、幅14～15mの旧河道が南北方向にやや弧を描いて存在する。この旧河道は、弥生時代前～中期までに埋没し、その後この埋没旧河道上を中心に溝や水田が拓かれる。下層の水田は検出層位から弥生時代前～中期と考えられるが、遺存状態が悪く、一部の畦畔を検出したのみである。田面の海拔高は265cm前後を測る。その後、拓かれた弥生時代後期の水田は、最終的に洪水砂で埋没するもので、「田」字状の畦畔で区画され、典型的な低部位水田の様相を呈する。第5図の低部位トレンチに示した第1層がこの耕作土であり、田面の海拔高は300cm前後を測る。この低部位は、古墳時代以降も居住域として利用されず、主に溝が掘削されるのみであるが、近世においては第191図に示すように大規模な土取りが行われている。

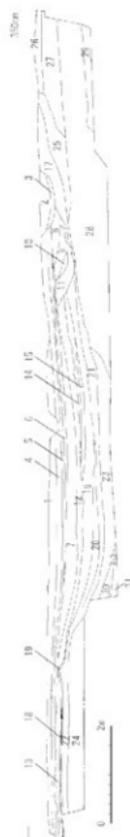


第4図 設定グリッドと調査区位置 (1/4,000)



- 1 阿波リレーフ色 (S.S.G.) 砂
- 2 砂色 (S.S.G.) 粘質砂
- 3 リレーフ色 (S.S.G.) 粘質土
- 4 阿波リレーフ色 (S.S.G.) 粘質土
- 5 灰土 (S.S.G.) 粘質砂
- 6 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 7 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土 (粘質砂)
- 8 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土 (粘質砂)
- 9 阿波リレーフ色 (S.S.G.) 砂

- 10 阿波色 (阿波粘質砂)
- 11 阿波リレーフ色 (S.S.G.) 粘質土
- 12 粘質砂 (粘質砂)
- 13 粘質砂 (粘質砂)
- 14 粘質砂 (粘質砂)
- 15 粘質砂 (粘質砂)
- 16 粘質砂 (粘質砂)
- 17 粘質砂 (粘質砂)
- 18 粘質砂 (粘質砂)



- 1 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 2 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 3 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 4 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 5 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 6 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 7 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 8 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 9 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 10 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 11 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 12 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 13 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 14 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 15 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 16 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土

- 17 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 18 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 19 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 20 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 21 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 22 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 23 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 24 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 25 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 26 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 27 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 28 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 29 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 30 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土
- 31 赤褐色 (S.S.G.) 粘質土

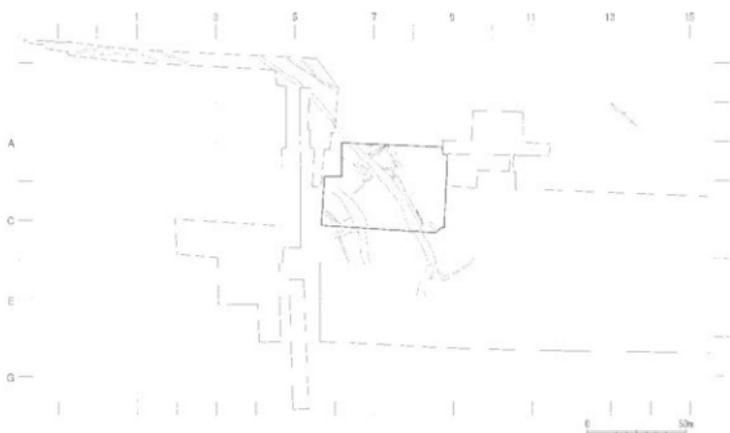
第5図 三股ヶ調査区東壁(上)・同低部トレンチ (1/100)

第2節 遺構・遺物の概要

1 弥生時代中期以前の遺構・遺物

(1) 弥生時代中期以前の概要

弥生時代中期以前の遺構は、土壁8基、溝17条、水田1面を掲載する。溝1条と水田1面を低位部に位置するほかは、微高地上の低位部際に位置する。土壁の時期は、弥生時代前～中期と考えられるものが多いが、中には縄文時代晩期の可能性が高いものがある。溝は後世の遺構に切られることから、その展開の不明なものが多いが、主要な2条は微高地際の高位部を北から南に流走する弥生時代前～中期の用水路と考えられる。この用水路は、掘削を繰り返しながら長期に亘って維持され、最終的には弥生時代後期初頭まで踏襲されている。



第6図 百間川原尾島遺跡 弥生時代中期以前遺構全体図 (1/2,500)

(2) 土壁

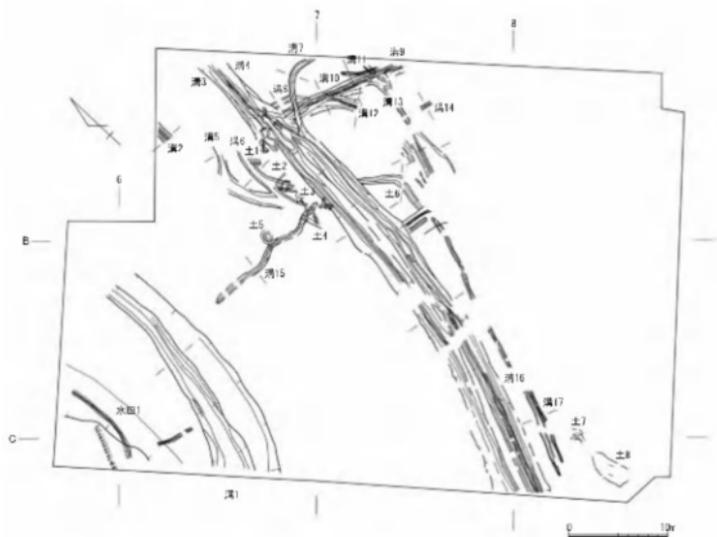
土壁1 (第7・8図)

6A区に位置する土壁である。溝6と一部重なり、上部を弥生時代後期の溝で大きく削平される。平面形は不整形円形を呈し、検出時の規模は長軸116cm、短軸68cm、深さ33cmを測る。底はほぼ平坦で、壁は段を持ちながら急斜に立ち上がる。土壁の時期は弥生時代前期と考えられる。

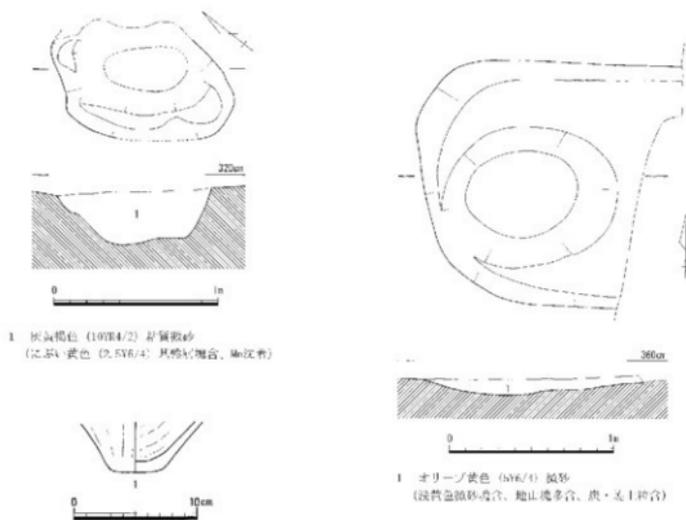
土壁2 (第7・9図)

6A区に位置する土壁である。溝6と重なり、東側を近世の溝に切られる。平面形は不整形であったと考えられ、検出時の規模は東西164cm、南北149cm、深さ9cmを測る。底は中央が浅く窪む。

出土遺物はないものの、土壁の時期は、検出状況から弥生時代前期と考えられる。



第7図 弥生時代中期以前遺構全体図 (1/500)



第8図 土壌1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第9図 土壌2 (1/30)

土壌3 (第7・10図)

6A区南側に位置する土壌で、溝5と一部重なり、東側を近世の溝に切られる。平面形は円形であったと考えられ、検出時の規模は南北140cm、東西72cm、深さ28cmを測り、底に小穴を穿つ。出土遺物は図示したサヌカイト製の楔形石器のほか、少量の縄文時代晩期土器片がある。

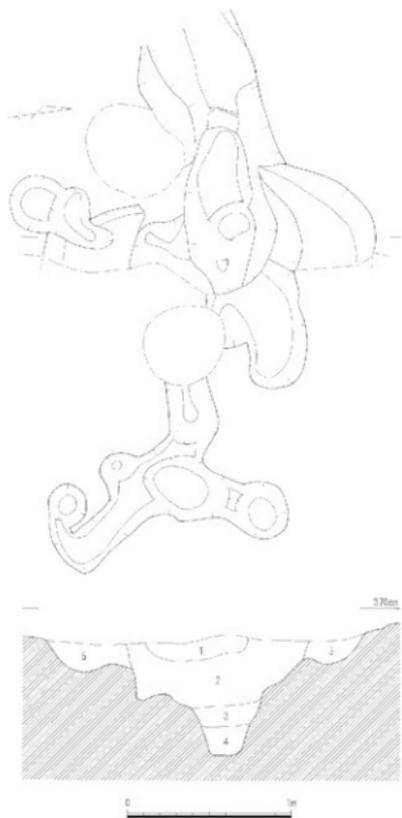
土壌4 (第7・11図)

6・7A区に位置し、上部を溝5、東端を近世の溝に切られる。西端は後述する溝15につながっており、一連の遺構の可能性が高い。平面形はアムバー状を呈し、検出時の規模は深さ74cm測る。

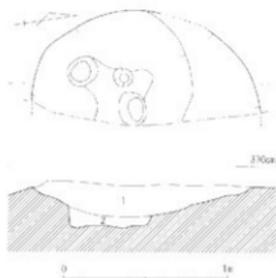
出土遺物には、縄文時代晩期土器片のほか、弥生時代前～中期土器片がある。

土壌5 (第7・12図)

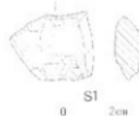
6区のBライン上に位置し、東半を弥生時代後期の土壌19に切られる。平面形は長楕円形であったと考えられ、検出時の規模は、南北140cm、東西107cm、深さ55cmを測る。壁は急斜で二段に落ち込み、底はほぼ平坦となる。図示した出土遺物は、縄文時代晩期の浅鉢2・3、深鉢4～9と砥石S2がある。す



第11図 土壌4 (1/30)



- 1 黄褐色 (2.575/2) 草管硝砂 (砂質強、粘土質)
- 2 灰褐色 (109/24/2) 粘質土砂 (灰・炭土粒多含)

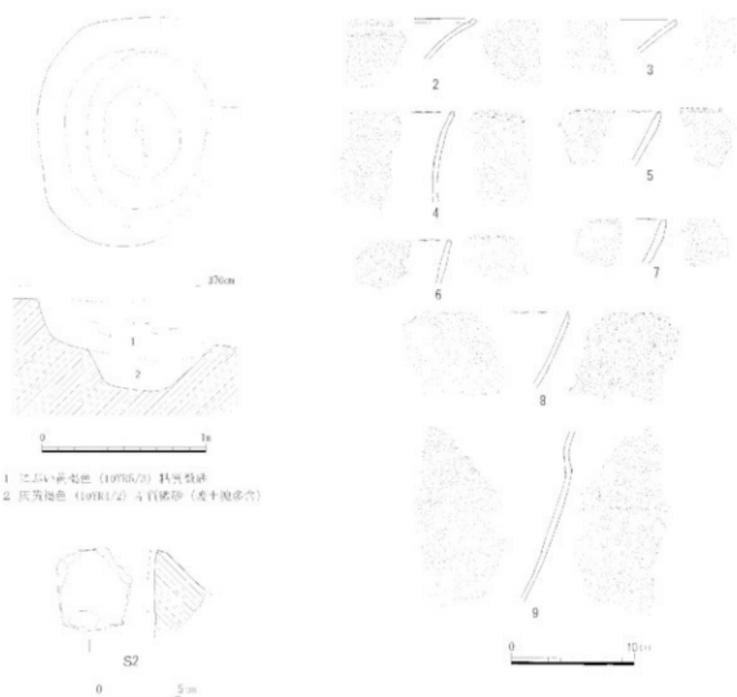


第10図 土壌3 (1/30)・出土遺物 (1/2)

- 1 黄褐色 (2.575/3) 草管硝砂 (砂質強、粘土質)
- 2 灰褐色 (2.574/1) 草管硝砂 (粘質強)
- 3 灰褐色 (2.574/1) 粘質土 (灰・炭・スラブ土多含)
- 4 灰色 (GY1/1) 粘質土 (粘質強)

べて上層から出土し、下層となる第2層は無遺物であったが、焼土塊を多量に含んでいる。

土壌の時期は、検出状況から縄文時代晩期と考えられる。



第12図 土壌 5 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

土壌 6 (第7・13図)

7 A区に位置し、溝 6 に切られる土壌である。平面形は円形と考えられ、長軸100cm、短軸53cm、深さ16cmを測る。

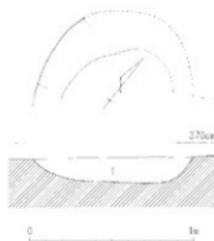
時期は、検出状況から弥生時代前期以前の可能性がある。

土壌 7 (第7・14図)

8区のCライン上に位置し、基盤層上面で検出した土壌である。新しい遺構に切られるため、全体の形状は不明だが、深さ37cmを測る。埋土に焼土塊を多量に含む。

土壌 8 (第7・15図)

8 C区に位置する土壌である。基盤層上面を精査し、炭と焼土塊の顕著な分布範囲を土壌と捉えた。平面形は不整形楕円形



1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質粉砂 (炭・焼土塊多量)

第13図 土壌 6 (1/30)

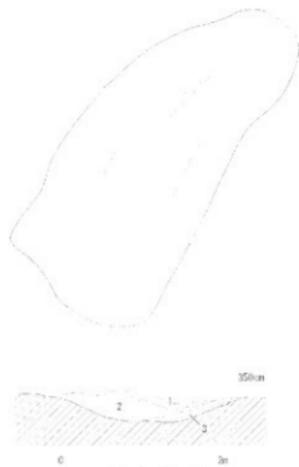
を呈し、検出時の規模は、南北138cm、東西190cm、深さ10cmを測る。出土土器がなく、焼土塊を多量に含む点が近接する土壌7と類似する。

土壌の時期は、検出状況から弥生時代前期以前の可能性がある。



- 1 灰黄色・黄褐色 (10Y5/6) 粘質微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂 (炭・焼土多含)

第14図 土壌7 (1/30)



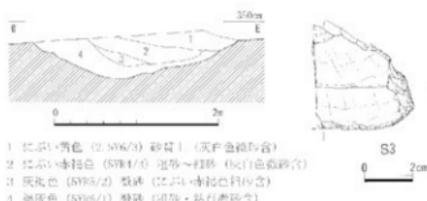
- 1 灰イリーブ色 (5Y5/2) 粘質微砂 (炭・焼土多含)
- 2 黄褐色 (5Y7/3) 粘質微砂 (黒粒・粘質土は多含、炭・焼土多含、灰粒多含)
- 3 黄褐色 (5Y7/3) 粘質微砂 (炭・焼土多含)

第15図 土壌8 (1/60)

(3) 溝

溝1 (第5・7・16図)

微高地端部に沿って南流する溝で、5・6 B・C区に位置する。南側は「百間川原尾島遺跡3」の「溝2」に続くと考えられる。東側を溝18に切られ、検出時の上幅は253cm、深さ60cmを測り、断面形は楕形を呈する。埋土に粗砂を含む。溝の時期は、検出状況から弥生時代前～中期と考えられる。



- 1 灰黄色 (5Y6/3) 砂質土 (灰黄色微砂多含)
- 2 灰黄色 (5Y6/3) 粘質微砂 (灰黄色微砂多含)
- 3 灰褐色 (5Y5/2) 粘土 (灰黄色微砂多含)
- 4 黄褐色 (5Y5/1) 粘土 (炭・粘質微砂多含)

第16図 溝1 (1/60)・出土物 (1/2)

溝2 (第7・17図)

6 A区に位置する溝で、北端は調査区外に延び、南側は溝3に合流する可能性がある。検出時の上幅は100cm、深さ16cmを測る。断面形は中央が一段落ち込む楕形を呈する。出土遺物はサヌカイト製の板形石器S4がある。

溝の時期は、検出状況から弥生時代前～中期と考えられる。

溝3 (第7・18図、図版1-3)

6~8 A~C区を南流する溝で、北側は「百岡川原尾島遺跡1」の「D7」、南側は「百岡川原尾島遺跡3」の「溝3」に続くと考えられる。上流側の北端で溝4とほぼ重なり、以下は並流する。溝の上部に弥生時代後期の溝20がある。検出時の上幅は300cm、深さ70cmを測る。

溝の時期は、弥生時代中期後半と考えられる。溝20出上の高杯355・356も本溝からの混入か。

溝4 (第7・18・19図、図版1-3)

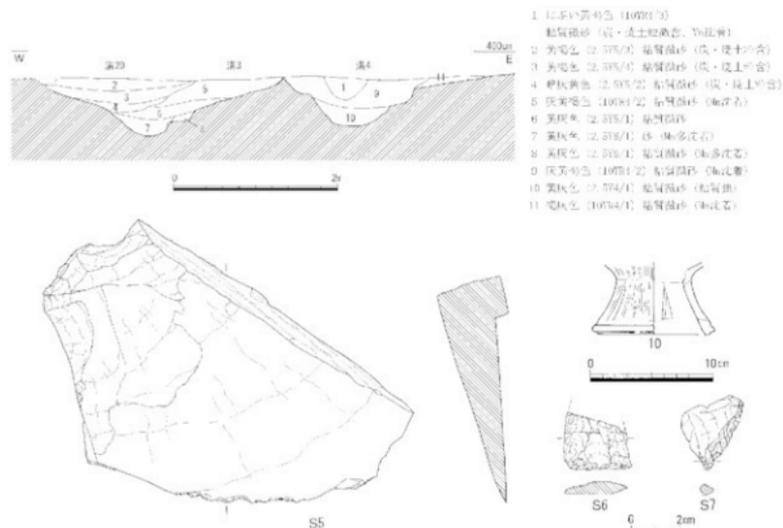
溝3の掘り直しと考えられる溝で、北側は「百岡川原尾島遺跡1」の「D7」、南側は「百岡川原尾島遺跡3」の「溝5」に続くと考えられる。検出時の上幅は183cm、深さ60cmを測り、断面形は壁が数段に落ち込む椀形を呈する。溝の時期は、先述の溝3との関係から百・中・Ⅲ以降と考えられる。

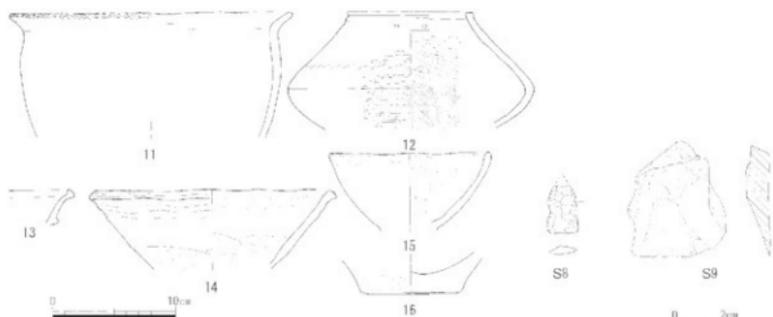
溝5 (第7・121図)

6 A区に位置する溝で、溝2・6と合流する可能性がある。検出時の上幅は100cm以上、深さ23cmを測り、断面形は椀形を呈する。出土遺物は、縄文時代晩期と弥生時代前期土器細片がある。

溝6 (第7・20図)

6・7 A区に位置し、6区の南隅で分岐する溝である。東流するものは、溝3・4の東側で南流して溝16に接続する可能性がある。上幅は94cm、深さ15cmを測り、断面形は逆台形を呈する。





第19図 溝3出土遺物②(1/4・1/2)・溝4出土遺物(1/2)

溝7 (第7・20図)

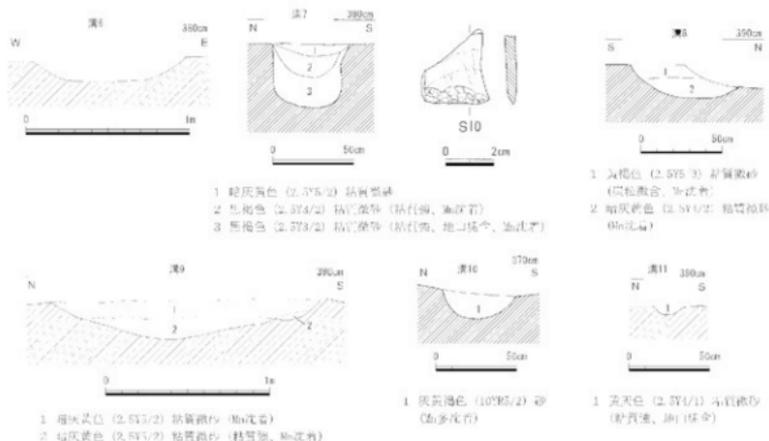
6 A区に位置し、南側が溝4に接続する溝である。上幅は48cm、深さ46cmを測り、断面形は「U」字形を呈する。断面形は弥生時代後期によく見られるが、検出状況から弥生時代中期後半と考えた。

溝8 (第7・20図)

6 A区に位置する東西溝で、両端を溝4と7に切られる。上幅は66cm、深さ38cmを測り、断面形は桶形を呈する。出土遺物は、縄文時代晩期と弥生時代前期土器細片がある。

溝9 (第7・20図)

6・7 A区に位置する東西溝である。西端を溝4に切れ、東端は調査区外に延びる。上幅は165cm、深さ23cmを測り、断面形は皿形を呈する。出土遺物は、弥生時代前～中期土器細片がある。



- 1 軽灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質粉砂
2 黒褐色 (2.5Y4/2) 粘質粉砂 (粘質砂、油状石)
3 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質粉砂 (粘質砂、粘土質砂、油状石)

- 1 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質粉砂
(灰化融合、油状石)
2 軽灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質粉砂
(粘質砂、油状石)

- 1 軽灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質粉砂 (油状石)
2 軽灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質粉砂 (粘質砂、油状石)

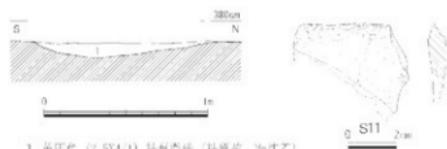
- 1 灰黄褐色 (10Y5/2) 砂
(粘土質石)

- 1 灰白色 (2.5Y1/1) 粘質粉砂
(粘質砂、油状石)

第20図 溝6～11 (1/30)・溝7出土遺物 (1/2)

溝10 (第7・20図)

溝9の下部に重なる溝で、上幅は45cm、深さ18cmを測り、断面形は碗形を呈する。出土遺物に縄文時代晩期土器細片があるが、溝の時期は検出状況から弥生時代前～中期と考えたい。



1 黄褐色 (2.574/1) 粘質砂 (粘質土、M12)

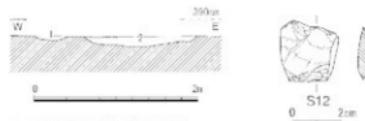
溝11 (第7・20図)

7A区に位置する東西溝で、溝10の北側に接する。上幅は18cm、深さ5cmを測り、断面形は碗形を呈する。弥生時代前～中期か。

溝12 (第7・21図)

6・7A区に位置する弧状の溝で、西端を溝10に切られる。出土遺物は、S11のほか、弥生時代前～中期土器片がある。

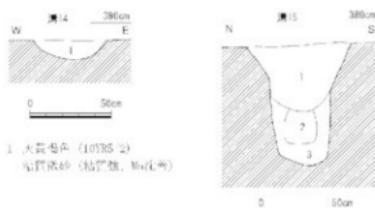
第21図 溝12 (1/30) ・出土遺物 (1/2)

1 灰黄色 (1.0784/2) 粘質砂
2 にぶい灰褐色 (1.0784/3) 粘質砂

溝13 (第7・22図)

流路が「コ」字状を呈する溝で、北端は溝10に、西端は溝4に切られる。出土遺物に縄文時代晩期と弥生時代前期土器細片がある。

第22図 溝13 (1/60) ・出土遺物 (1/2)



1 灰黄色 (1.0785/2) 粘質砂 (粘質土、M12)

溝14 (第7・23図)

7A区に位置する溝で、両端を後世の遺構に切られる。上幅は45cm、深さ11cmを測り、断面形は碗形を呈する。

溝15 (第7・23図)

6A・B区に位置する東西方向の蛇行溝で、東端が土坑4につながる。規模は一定せず、上幅は60cm前後、深さ50～80cmを測る。

溝16 (第7・23図)

7・8A～C区に位置し、溝4と並流する。北端は溝4に切れ、さらに溝6に接続する可能性がある。南端は浅くなり途切れる。

1 灰イロ褐色 (3.575/2) 粘砂 (北山須多寺、M12等)
2 黄褐色 (2.574/1) 粘質砂 (北山須多寺)
3 黄褐色 (2.574/2) 粘質砂 (北山須多寺)
4 にぶい黄色 (2.574/3) 粘砂 (北山須多寺)
5 黄褐色 (2.574/1) 粘砂

溝17 (第7・23図)

8B・C区に位置し、溝16の東側に並流する。上幅は20cm、深さ4cmを測り、断面形は碗形を呈する。弥生時代前～中期と考えられる。

第23図 溝14～17 (1/30)

(4) 水田

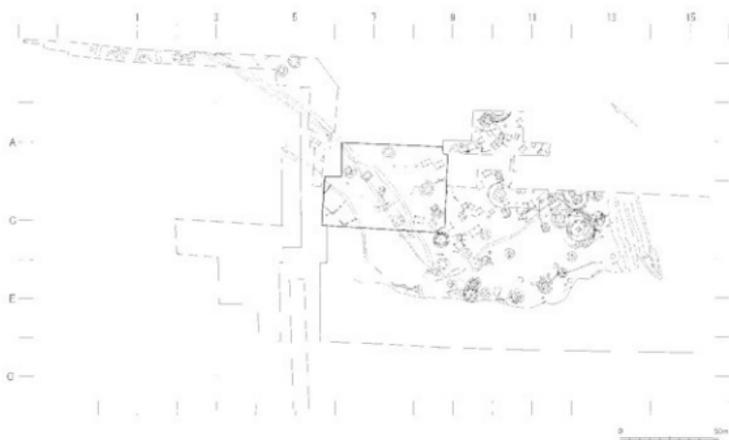
水田1 (第5・7図)

5・6B・C区の低位部に位置し、旧河道埋没後に開田された水田である。検出層位から弥生時代前～中期と考えられるが、遺存状態が悪く、旧河道西岸側を中心に畦畔の一部を検出した。その下幅は35～45cm、高さは2～3cmを測る。畦畔付近の田面海拔高は265cm前後である。

2 弥生時代後期の遺構・遺物

(1) 弥生時代後期の概要

弥生時代後期の遺構は、竪穴住居7軒、掘立柱建物5棟、柱穴列2基、井戸7基、土壇62基、溝11条、水田1面、土器溜まり1か所を掲載する。低位部で溝1条と水田を検出したほかは、すべて微高地上に位置する。弥生時代後期前半の遺構は、前代までの溝群を踏襲した溝と、東側の居住域で構成される。その後、弥生時代後半からは微高地全域に居住域が広がり、古墳時代以降も同様となる。



第24図 百間川原尾島遺跡 弥生時代後期遺構全体図 (1/2,500)

(2) 竪穴住居

竪穴住居1 (第25～27図、図版2-1・25)

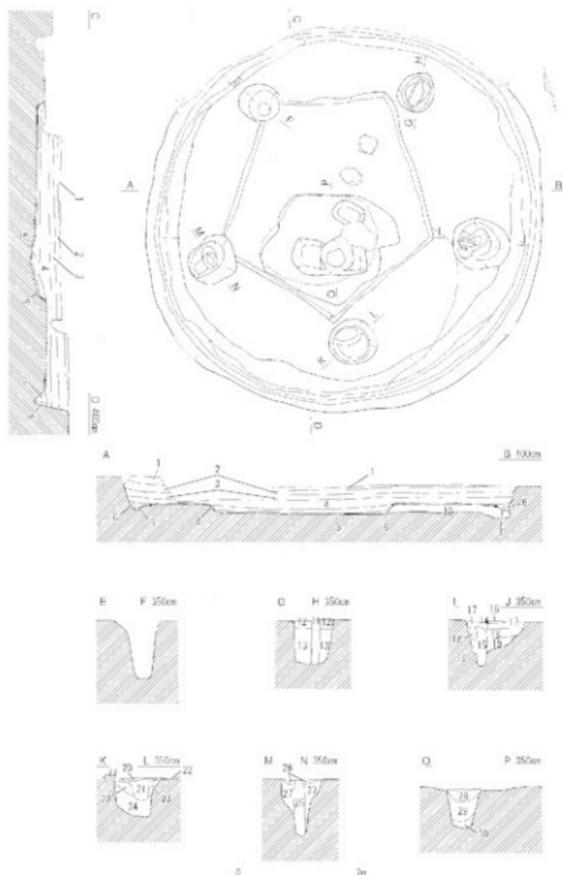
6A区に位置する竪穴住居である。後期の住居としては最も微高地端にあり、水田に面している。また、後述する古墳時代初頭の竪穴住居9とは、住居の北側1/5程度が重複する。

住居の検出は、円形の微砂の落ち込みを確認したことで、比較的容易であった。また、その微砂が弥生時代後期末の洪水砂と類似することから、洪水砂埋没住居と推定された。ただし、微高地端の高所に位置することから、住居周辺に後世の削平が及び、住居土堤の有無については確認できなかった。

住居の平面形は、ほぼ正円を呈する。検出時の規模は、径628～643cm、深さ62cm、床面の海拔高315cm、床面積は29.33㎡を測り、ほぼ床面まで微砂で埋没している。床面の施設としては、貼り床、ベッド状遺構、中央穴、土壇、柱穴、壁体溝を確認している。貼り床は、ベッド状遺構を含めた床面全体で確認した。その厚さは2～4cmを測る。ベッド状遺構は床面周囲に巡らされ、住居中央は平面五角形に切り取られる。P1・5付近が狭い。その高さは10～15cmで、基盤層の削り出しと盛り土による構築がある。また、P4・5間のベッド状遺構は細い溝状となり、間仕切りの存在が推定される。中央穴は50×40cmの隅丸長方形を呈し、深さは62cmを測る。中央穴から30cm南側の土壇平面形は、122×65cm、深さ10cmの長方形を呈し、その中央がさらに径50cmの円形に落ち込む。円形部分の断面

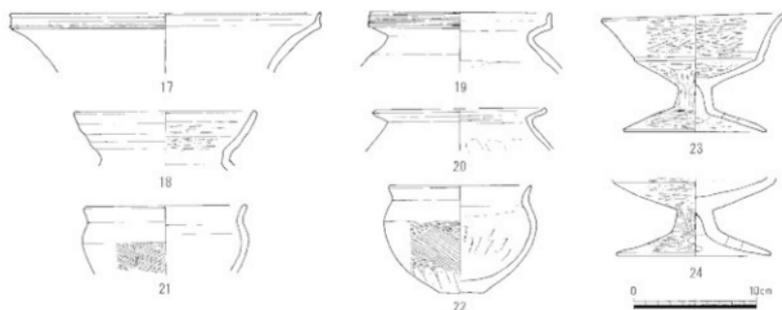


第25図 弥生時代後期遺構全体図 (1/250)



- | | |
|---|--|
| <p>1 穴倉壁戸 (0.008x2) 板壁 (穴倉戸は0.7x0.9板倉壁戸、1.0x1.0)</p> <p>2 穴倉壁色 (0.015x2) 赤砂・黒土</p> <p>3 黄灰色 (0.274/1) 赤土 (赤土層)</p> <p>4 黄灰色 (0.276/1) 赤砂</p> <p>5 黄灰色 (0.275/1) 赤砂 (赤土層)</p> <p>6 黄灰色 (0.274/1) 赤砂 (赤土層)</p> <p>7 黄灰色 (0.274/2) 板倉壁 (赤土層に赤砂多量、赤土層)</p> <p>8 黄灰色 (0.271/1) 赤砂 (赤土層)</p> <p>9 了取壁戸 (0.277/0) 板壁 (赤土層)</p> <p>10 穴倉壁戸 (0.276x2) 板壁 (赤土層)</p> <p>11 穴倉壁色 (0.274/2) 板壁 (赤土層)</p> <p>12 黄灰色 (0.275/1) 赤土 (赤土層)</p> <p>13 黄灰色 (0.276/1) 赤土 (赤土層)</p> <p>14 黄灰色 (0.275/1) 赤砂</p> <p>15 黄灰色 (0.274/2) 赤土</p> | <p>16 黄灰色 (0.276x1) 赤土 (赤土層)</p> <p>17 黄灰色 (0.274/1) 赤土 (赤土層)</p> <p>18 黄灰色 (0.274/1) 赤土 (赤土層)</p> <p>19 赤土 (0.276/1) 赤土</p> <p>20 赤土 (0.275/1) 赤土</p> <p>21 赤土 (0.274/1) 赤土</p> <p>22 赤土 (0.274/1) 赤土</p> <p>23 赤土 (0.274/1) 赤土</p> <p>24 赤土 (0.274/1) 赤土</p> <p>25 赤土 (0.274/1) 赤土</p> <p>26 赤土 (0.274/1) 赤土</p> <p>27 赤土 (0.274/1) 赤土</p> <p>28 赤土 (0.274/1) 赤土</p> <p>29 赤土 (0.274/1) 赤土</p> <p>30 赤土 (0.274/1) 赤土</p> |
|---|--|

第26図 竪穴住居1 (1/80)



第27図 竪穴住居1 出土遺物 (1/4)

形は逆台形を呈し、床面からの深さは62cmを測る。これら中央穴と土壇を含み 2×1.5 mの範囲に炭が広がる。主柱穴は5個で、掘り方はほぼ円形となる。規模は径60~90cm、深さ66~95cmを測り、径15cm前後の柱痕跡をもつ。底面が一段落ち込むものが多い。各柱穴の距離は245~255cmとなる。出土遺物と検出状況から、百・後・Ⅳと考えられる。

竪穴住居2 (第25・28~32図、図版2-2~4・25・26)

7A区に位置する竪穴住居である。南西部を古墳時代の竪穴住居で切られ、中央部を擾乱で大きく失っている。住居覆土は大量の炭化材、焼土、土器を含む。このうち、炭化材と焼土は床面に接し、基本的にその上部において土器を検出している。

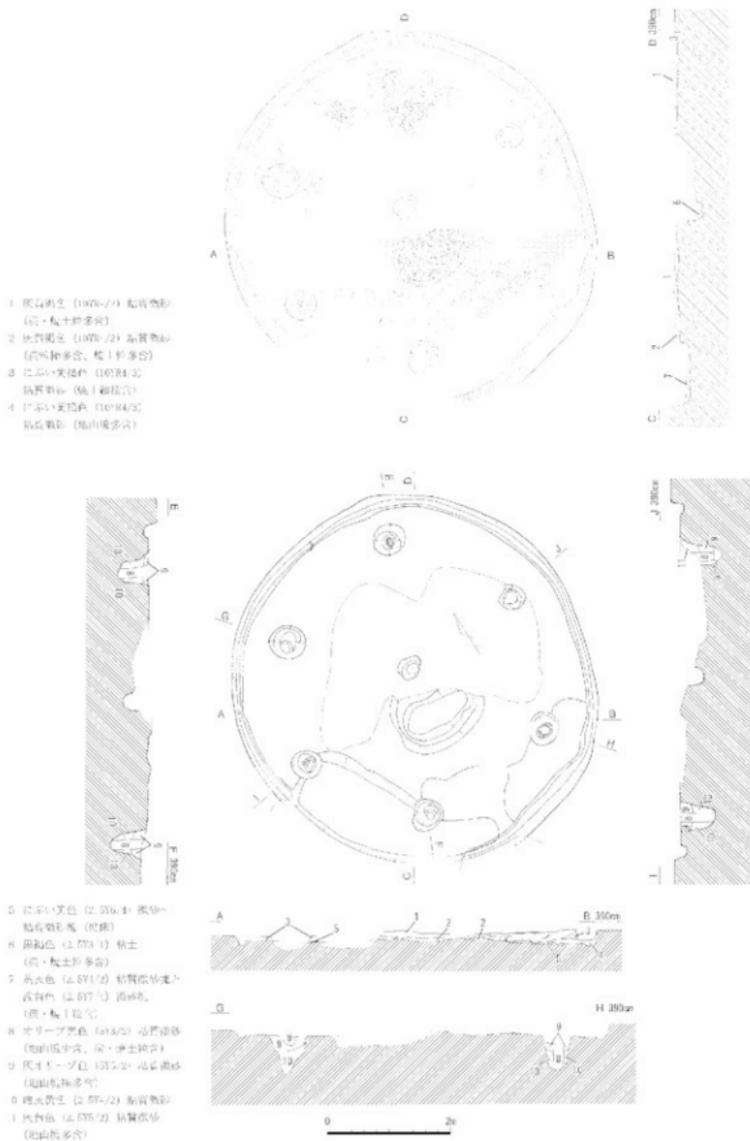
住居の平面形は、円形を呈する。検出時の規模は、長軸602cm、短軸583cm、深さ10cm、床面の海拔高360cmを測る。床面積は推定で25.72㎡に復元される。床面の施設としては、中央穴、土壇、柱穴、壁体溝を確認している。中央穴は上部を擾乱で失うが、平面形は楕円形を呈し、床面からの深さは50cmと推定される。この中央穴に接する南側にはドーナツ状の土堤による土壇を検出した。平面形は楕円形を呈し、検出規模は長軸165cm、短軸110cm、土壇幅40cm、同高4~5cmを測る。主柱穴は6個で、掘り方はほぼ円形となる。規模は径40~60cm、深さ50~65cmを測り、径18cm前後の柱痕跡をもつ。P2底面には自然石の礎石をもつ。各柱穴は190~240cmとなる。また、住居の南側は壁体に沿って一段落ち込む下部構造を埋め立てて床としている。出土遺物は、大量の土器と石器、鉄器、土製品がある。土器の器種構成では大小の鉢が目立つ。石器はいずれも粘板岩の打製で、石庖丁S13・14、石斧S15がある。鉄器では無頭鏃M2、斧M3がある。住居の時期は、百・後・Ⅱである。

竪穴住居3 (第25・33図、図版3-2)

7B区の北隅に位置する竪穴住居である。

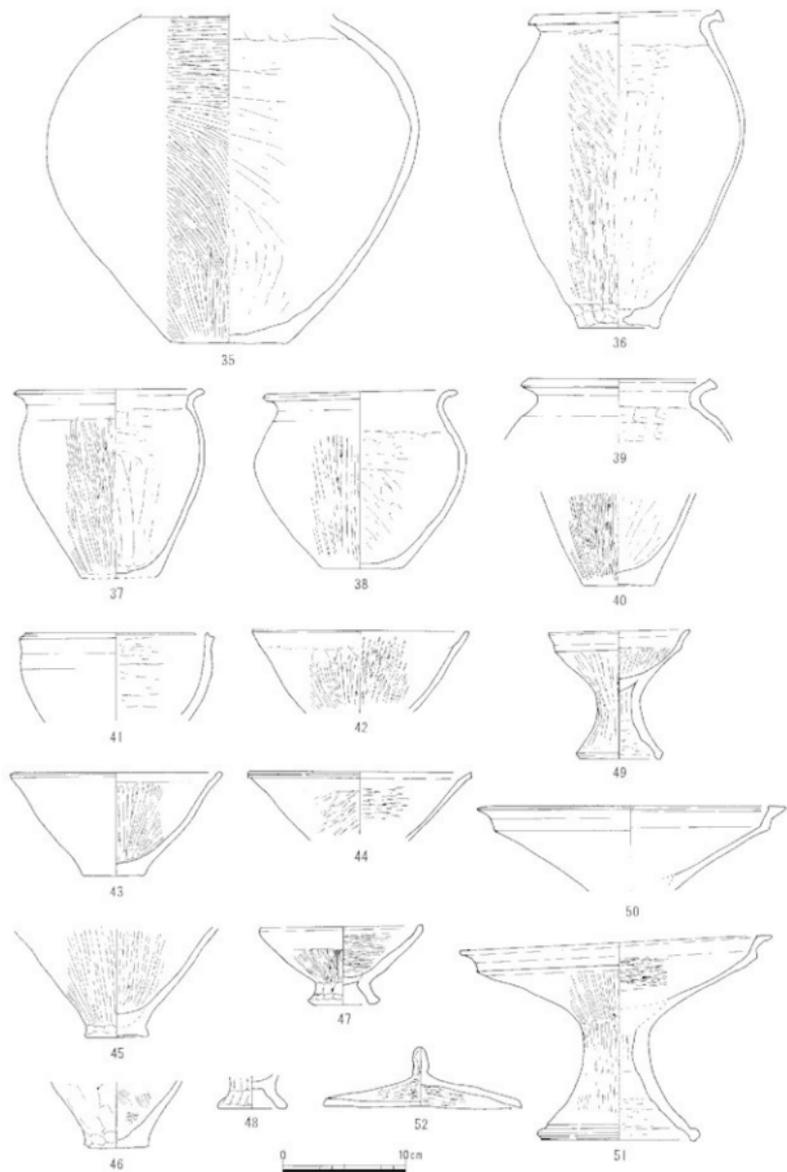
住居の平面形は、隅丸方形を呈する。検出時の規模は、長軸354cm、短軸352cm、深さ30cm、床面の海拔高329cm、床面積は9.43㎡を測る。主軸は $N-34^{\circ}-W$ となる。

床面の施設としては、中央穴、土壇、柱穴、壁体溝を確認している。中央穴の平面形は、 48×39 cmの楕円形を呈する。深さは30cmを測り、底面付近に炭を顕著に含む。この西側半分に接する部分はわずかな高まりとなり、さらにその西側に 48×26 cmの焼土面がある。また、これらを取り巻く 130×120 cmの範囲に炭の分布が見られた。主柱穴は4個で、掘り方は楕円形となる。規模は径70~90cm、深さ

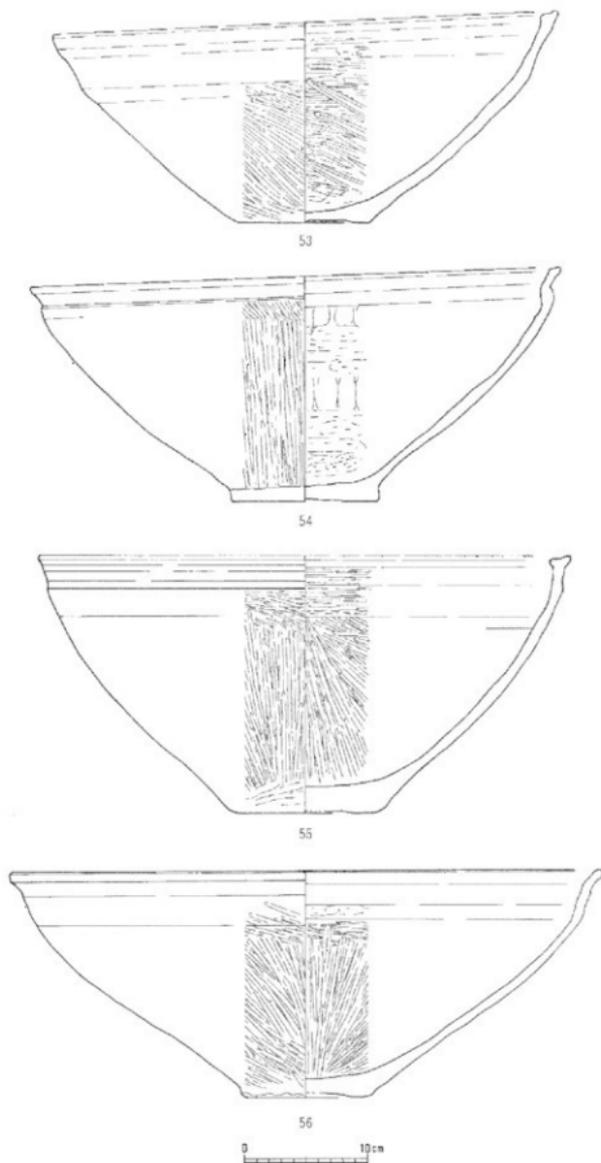




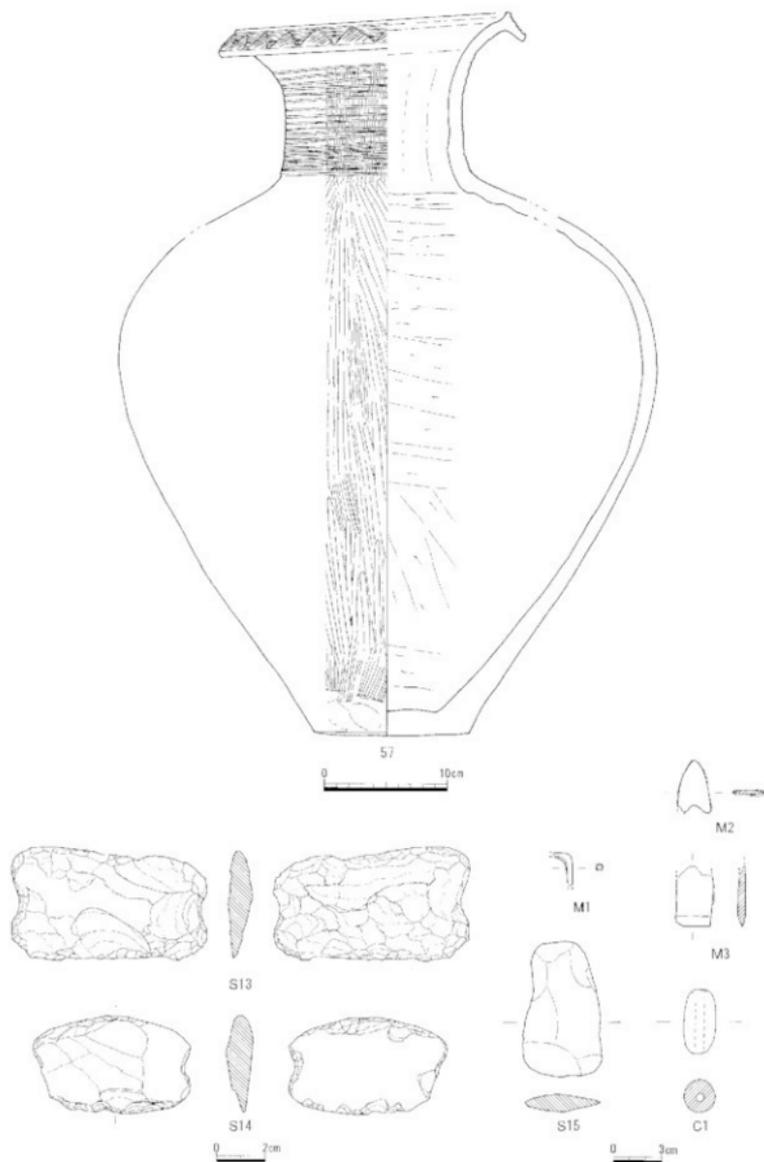
第29図 竪穴住居2出土遺物① (1/4)



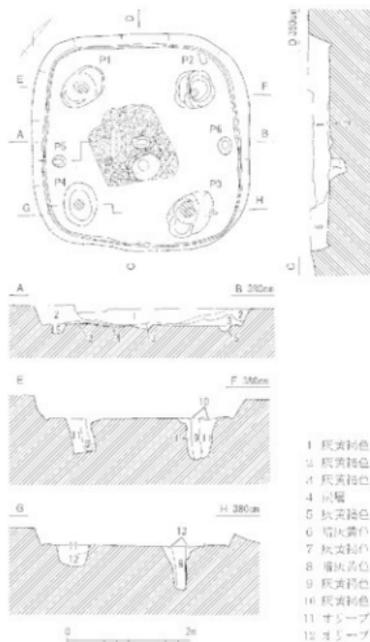
第30図 竪穴住居2出土遺物2 (1/4)



第31図 竪穴住居2出土遺物③ (1/4)



第32図 壺穴住居2出土遺物④ (1/4・1/3・1/2)



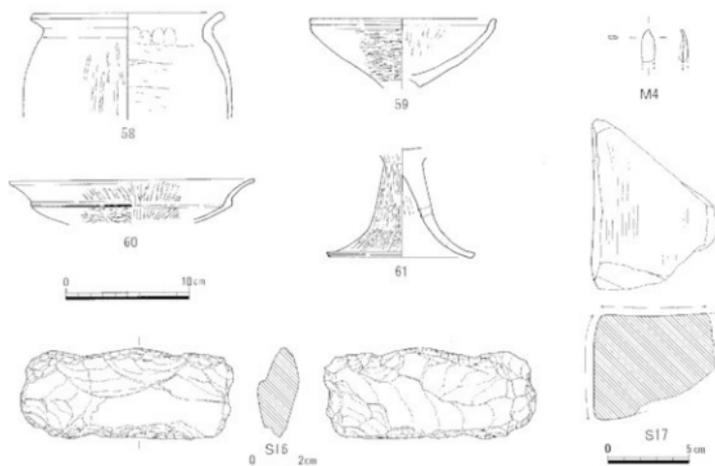
32~70cmを測り、P1~3については径12~17cm前後の柱痕跡をもつ。

また、P1~4間にP5、P2~3間にP6の小柱穴があり、規模は径20~30cm、深さ10~14cmを測る。いずれも主柱穴の芯々を結ぶ線上より外に位置する。

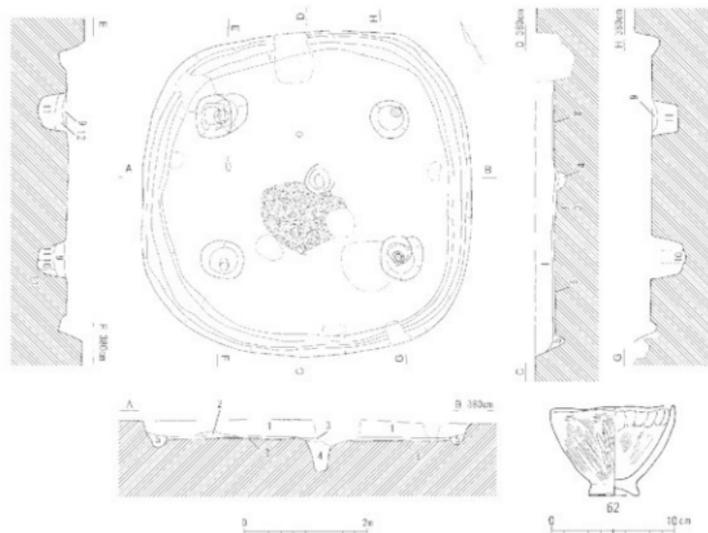
出土遺物は、土器と石器、鉄器である。土器は甕58、高杯59~61である。石器は粘板岩製の打製石庖丁S16と砥石S17である。M4はヤリガンナと考えられる。

住居の時期は、出土遺物から百・後・Ⅱと考えられる。

- 1 灰赤褐色 (1078b/2) 粘板岩片 (砕岩類、池山城倉、奥・土上組合、無坑倉)
- 2 灰赤褐色 (1078b/2) 粘板岩片 (砕岩類、池山城倉)
- 3 灰赤褐色 (1078c/2) 粘板岩片 (砕岩類、池山城倉、奥・土上組合、無坑倉)
- 4 同層
- 5 灰赤褐色 (1078d/2) 粘板岩片 (砕岩類、池山城倉) (M17)
- 6 暗灰褐色 (2.315/2) 粘板岩片 (砕岩類、池山城倉)
- 7 灰赤褐色 (1078e/2) 粘板岩片 (砕岩類、池山城倉) (中央穴)
- 8 暗灰褐色 (2.314/2) 粘板岩片 (砕岩類)
- 9 灰赤褐色 (1078f/2) 粘板岩片 (砕岩類)
- 10 灰赤褐色 (1078g/2) 粘板岩片 (砕岩類)
- 11 ナーレー布色 (2.374/2) 粘板岩片
- 12 ナーレー布色 (2.374/2) 粘板岩片
- 13 黄褐色 (2.873/3) 粘板岩片



第33図 竪穴住居3 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)



- | | |
|---------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 灰青褐色 (10YR4/2) 粘(微)砂 (地山塊多量、炭・焼土少含) | 7 淡黄色 (2.5Y7/5) 粘質微砂 (土まり良) |
| 2 明黄褐色 (10YR7/5) 地山塊 | 8 灰オリーブ色 (2.5G/2) 粘砂 (やや粘質) |
| 3 赤灰黄色 (2.5Y5/2) 粘砂 (炭・焼土少含) | 9 黄灰色 (2.5Y4/2) 粘質土 (地山塊多量、炭・焼土少含) |
| 4 暗灰青色 (2.3Y4/2) 粘質土 (炭・焼土多量含) | 10 灰黄褐色 (10YR7/2) 粘質土 (地山塊多量、炭・焼土少含) |
| 5 黒褐色 (2.3Y3/2) 粘質微砂 (地山塊多量、炭・焼土少含) | 11 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 (地山塊多量、炭・焼土少含) |
| 6 黄褐色 (2.5Y3/1) 粘質微砂 (地山塊多量、炭・焼土少含) | 12 オリーブ黄色 (3Y6/3) 粘質土 |

第34図 竪穴住居4 (1/80)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居4 (第25・34図、図版3-3・25)

7 B・C区に位置する竪穴住居で、住居東西の溝21・26を切っている。

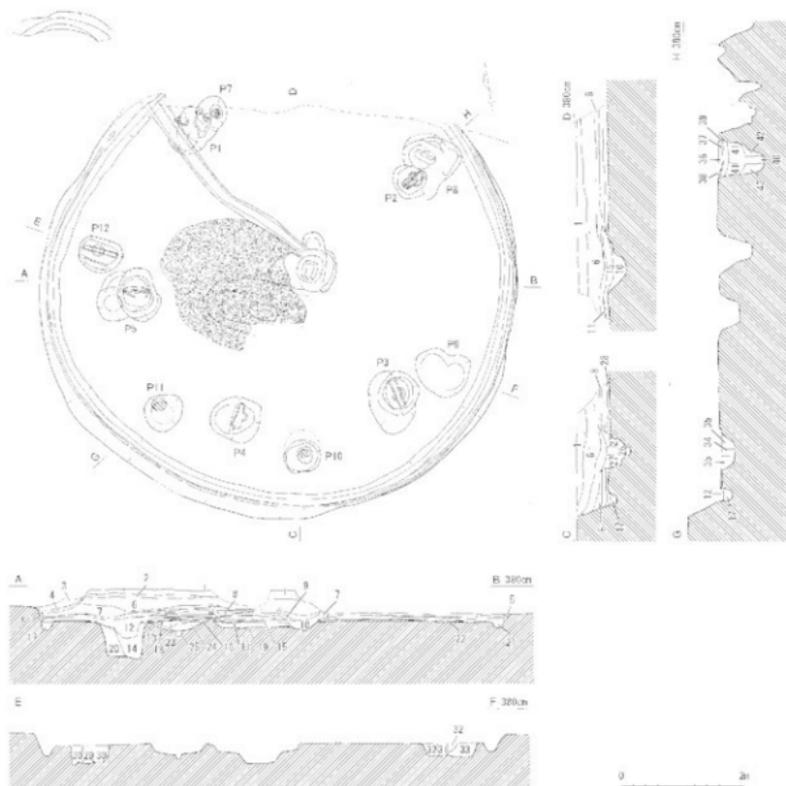
住居の平面形は、割の張った隅丸方形を呈する。検出時の規模は、長軸530cm、短軸528cm、深さ26cm、床面の海拔高338cm、床面積は20.78㎡を測る。主軸はN-27°-Eとなる。埋土は地山塊を顕著に含む単層である。床面の施設としては、貼り床、中央穴、柱穴、壁体溝を確認している。中央穴の平面形は、径45cmの円形を呈する。深さは56cmを測り、南西側に炭層の広がりが認められる。主柱穴は4個で、掘り方はP2・4が円形で、P1・3は掘り直されたと考えられ、雷である。規模は径60～92cm、深さ42～52cmを測り、P3に住居跡を認めたほかは検出していない。

住居の時期は、住居の形状と出土遺物から、百・後・IVと考えられる。

竪穴住居5 (第25・35図、図版4-1)

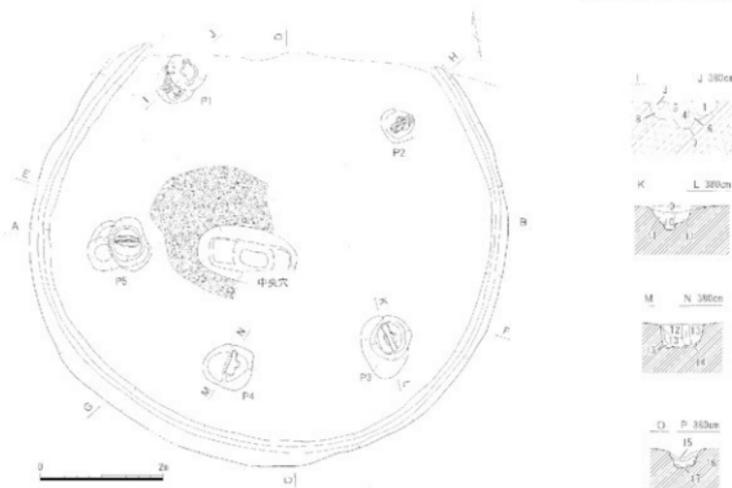
8 B区に位置する竪穴住居で、住居の北端を溝34に、住居東半を近世溝にそれぞれ切られる。

埋土最上層は、後期末の洪水砂と考えられ、住居5Bの廃絶後に一定期間をおいて洪水を受けたと考えられる。貼り床は上下二面を確認しており、それぞれ下面が住居5Aに、上面が住居5Bに対応し、5Aから5Bへの1回の建て替えが考えられる。ただし、中央付近では炭層を6～7面確認しており、各住居に3～4面の対応関係がある。



- | | |
|--|---|
| <p>1 オリーブ灰色 (1076/2) 粘質土(水内)</p> <p>2 灰褐色 (1078/2) 粘質土</p> <p>3 灰褐色 (1078/2) 粘質土(地山塊多量)</p> <p>4 灰褐色 (1078/2) 粘質土(刺山塊多量)</p> <p>5 黄褐色 (2,577/2) 粘質土(地山塊多量) (壺穴住居5副作遺)</p> <p>6 オリーブ色(1074/2) 粘質土(地山塊多量、炭・焼土多量)</p> <p>7 灰褐色 (1078/2) 粘質土(地山塊多量、炭・焼土多量)</p> <p>8 灰褐色 (1078/2) 粘質土(地山塊多量) (壺穴住居5副作遺)</p> <p>9 オリーブ色 (1076/3) 粘質土(地山塊多量)</p> <p>10 灰褐色 (1078/2) 粘質土(地山塊多量、炭・焼土多量)</p> <p>11 粘土</p> <p>12 赤褐色 (1078/2) 粘質土(地山塊多量) (P7)</p> <p>13 オリーブ色 (1076/3) 粘質土(壺穴住居5副作遺)</p> <p>14 オリーブ色 (2,576/4) 粘質土</p> <p>15 灰褐色 (1078/2) 粘質土(刺山塊多量)</p> <p>16 灰褐色 (1078/6) 粘質土(壺穴住居5副作遺)</p> <p>17 オリーブ色 (2,576/3) 粘土(刺山塊多量) (壺穴住居5副作遺)</p> <p>18 灰褐色 (1078/2) 粘質土(壺穴住居5副作遺)</p> <p>19 オリーブ色 (2,576/4) 粘質土(壺穴住居5副作遺)</p> <p>20 オリーブ色 (2,576/3) 粘質土</p> <p>21 灰褐色 (2,575/1) 粘質土(地山塊多量) (壺穴住居5副作遺)</p> | <p>22 オリーブ色 (576/3) 粘質土(壺穴住居5副作遺)</p> <p>23 オリーブ色 (575/2) 粘土</p> <p>24 オリーブ色 (2,576/1) 粘質土</p> <p>25 オリーブ色 (2,576/2) 粘土</p> <p>26 灰褐色 (2,577/2) 粘質土(地山塊多量) (P10)</p> <p>27 灰褐色 (2,574/2) 粘質土(地山塊多量) (P10)</p> <p>28 オリーブ色 (576/4) 粘質土(壺穴住居5副作遺)</p> <p>29 黄褐色 (1078/1) 粘質土(地山塊多量) (P12)</p> <p>30 灰褐色 (1078/1) 粘質土(地山塊多量) (P12)</p> <p>31 灰褐色 (574/1) 粘土(炭・焼土多量) (P9)</p> <p>32 赤褐色 (575/1) 粘土(壺穴住居5副作遺) (P9)</p> <p>33 灰褐色 (2,575/1) 粘土(地山塊多量) (P9)</p> <p>34 粘土 (1078/1) 粘質土(炭・焼土多量) (P11)</p> <p>35 灰褐色 (1078/1) 粘質土(地山塊多量) (P11)</p> <p>36 赤褐色 (2,576/1) 粘質土(地山塊多量)</p> <p>37 灰褐色 (2,577/2) 粘質土</p> <p>38 オリーブ色 (2,576/4) 粘質土</p> <p>39 黄褐色 (2,576/1) 粘質土</p> <p>40 灰褐色 (2,574/2) 粘質土(地山塊多量) (P2)</p> <p>41 灰褐色 (2,577/2) 粘質土(地山塊多量) (P2)</p> <p>42 灰褐色 (2,575/2) 粘土 (P2)</p> |
|--|---|

第35図 壺穴住居5 (1/80)



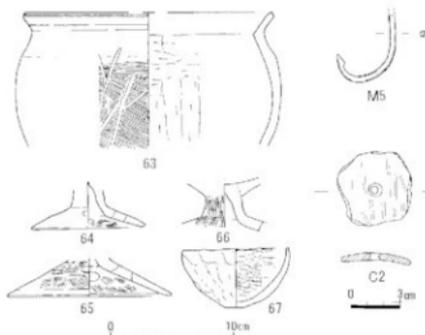
- 1 黒褐色 (10793/1) 粘質凝砂 (山由層多含、灰・焼土中多含)
- 2 黒褐色 (10795/1) 粘質凝砂塊と明褐色 (10796/6) 粘質凝砂塊で充填 (灰・焼土中少含)
- 3 黒褐色 (10793/2) 粘質凝砂 (山由層多含、灰・焼土中多含)
- 4 黒褐色 (10793/3) 粘質凝砂 (山由層多含、灰・焼土中少含)
- 5 明褐色 (10796/6) 粘質凝砂塊で充填 (灰・焼土中少含)
- 6 明褐色 (10796/6) 粘質凝砂塊で充填 (灰・焼土中少含)
- 7 灰色 (1075/1) 粘土 (焼土中の凝砂)
- 8 黄褐色 (2, 575/3) 粘質凝砂 (山由層多含、灰・焼土中少含)
- 9 灰黄褐色 (10784/1) 粘質凝砂 (山由層多含、灰・焼土中多含)
- 10 明褐色 (10796/6) 粘質凝砂塊で充填
- 11 凝砂中層
- 12 赤褐色 (575/1) 粘土 (灰・焼土中多含)
- 13 暗赤褐色 (574/2) 粘土 (山由層多含)
- 14 暗赤褐色 (574/2) 粘土 (山由層多含)
- 15 灰褐色 (2, 573/4/2) 粘質凝砂 (山由層多含、灰・焼土中多含)
- 16 明褐色 (10796/6) 粘質凝砂塊で充填 (灰・焼土中多含)
- 17 明褐色 (10796/6) 粘質凝砂

竪穴住居 5 A (第25・35・36図、図版4-3・26)

住居の平面形は円形を呈し、検出時の規模は、東西長770cm、深さ40cm、床面の海拔高334cm、残床面積は39.12㎡を測る。床面施設として、貼り床、中央穴、柱穴、軀体溝を確認している。中央穴の平面形は、162×90cmの長楕円形を呈する。深さは30cmを測り、焼土粒と炭塊を多量に含む。その西側には炭層が広がる。土柱穴は、形態や住居5Bの柱穴との切り合いから図示した5個と考

えた。掘り方は円形と楕円形で、P1・5は掘り直されたと考えられ、帯となる。規模は径56～106cm、深さ41～64cmを測る。すべての底面に木製の根がらみ痕跡を検出した。いずれも住居中央から放射状に置かれている。出土遺物は、土器片と鉄製品、土製品がある。釣針M5は、内鱗である。

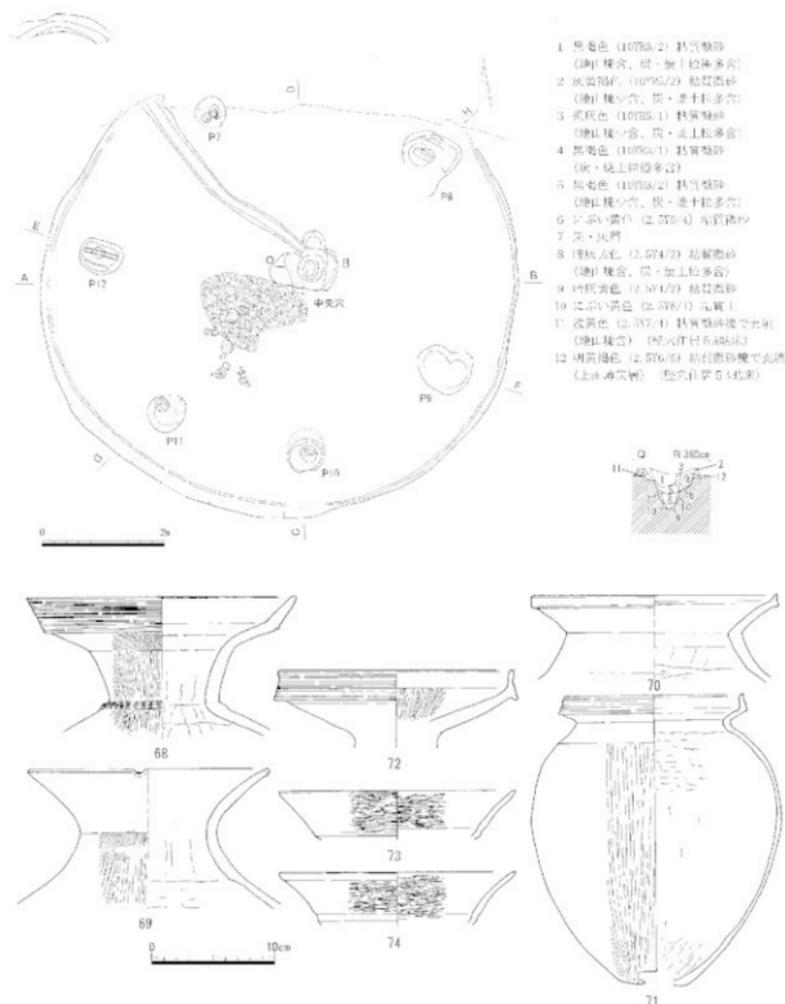
住居の時期は、百・後・Ⅳである。



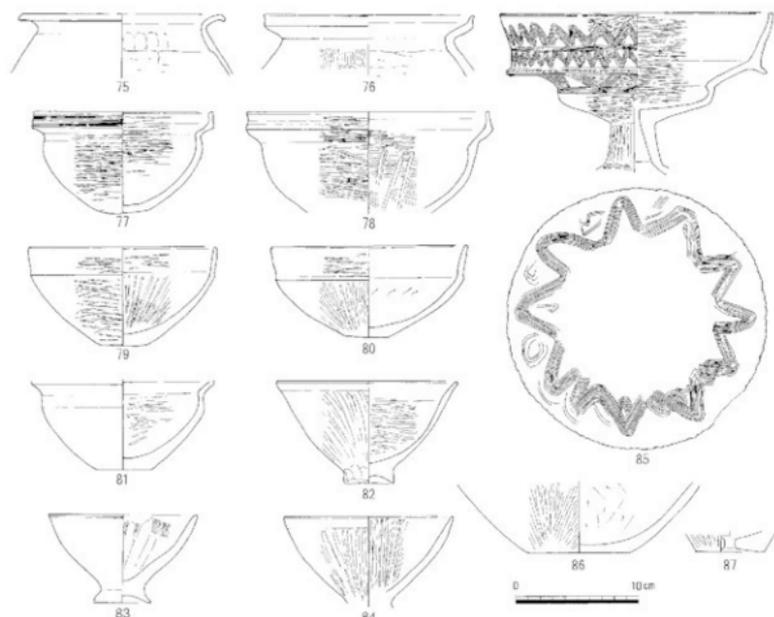
第36図 竪穴住居 5 A (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居5B (第25・35・37・38図、図版1-2・26・27)

住居の平面形とその規模は、住居5Aとはほぼ同一で、東西長772cm、深さ34cm、床面の海拔高340cm、残床面積は40.81㎡を測る。床面の施設としては、貼り床、中央穴、柱穴、整体痕跡、排水溝を確認している。中央穴の平面形は、68×68cmの隅丸方形を呈し、東西にやや浅く広がる部分をもつ。深さ



第37図 竪穴住居5B (1/80)・出土遺物① (1/4)



第38図 竪穴住居5B(1/80)・出土遺物②(1/4・1/3・1/1)

は65cmを測る。また、中央穴の南西側には炭層の広がりが見られる。

上柱穴は6個で、住居5Aよりもやや壁際に位置し、小振りとなる。掘り方は円形で、P8・12は底面に木製の根がらみ痕跡を検出した。規模は径50～90cm、深さはP8

が70cmと深いほかは30cm前後を測る。壁際の壁体痕跡は幅3～5cm、深さ10cm前後で、住居掘り方に密着している。排水溝は、中央穴から北西に延びるもので、住居床面では幅25cm、深さ12cmを測る。住居外の展開は後世の遺構で切られるものの、埋土上層に洪水砂をもつ溝25に接続し、低位部に流れるものと考えられる。

出土遺物は、土器片と鉄製品、土製品、ガラス製品がある。図示した土器のうち、帯68、鉢77・79・80、器台85は中央の炭層上とその周辺の床上に着いていた。C3は舟形土製品、C4はT具あたりあるいは線刻をもつ土製品である。

住居の時期は、百・後・Ⅳである。

竪穴住居 6 (第25・39図)

8 B区に位置する竪穴住居で、掘立柱建物4に切られ、西側1/6を現代掘削で失っている。この掘削中に大量の炭化物と焼土を確認し、焼失住居の存在等を想定して検出を行った。その結果、焼失住居の南側に壘体溝を確認し、2軒の住居が重複することが判明した。重複は住居の建て替えによるものと考えられ、各住居床面の比高差は約5cmを測り、住居6Aの床面が浅い。

竪穴住居 6 A (第25・39・40図、図版5-3)

住居の平面形は、長円形を呈する。検出時の規模は、南北645cm、残床面積は21.03㎡を測る。床面は、建て替え後の住居6Bの床面で切られる。施設としては、貼り床、中央穴、柱穴、壘体溝を確認している。中央穴の平面形は、53×45cmの長楕円形を呈する。深さは52cmを測る。

主柱穴は5個で、掘り方は楕円形を呈するものが多い。規模は径50～58cm、深さ42～58cmを測り、P2～5の底面が一段深くなる。

出土遺物は、土器と石製品、土製品、ガラス製小玉がある。

住居の時期は、百・後・Ⅱである。

竪穴住居 6 B (第25・39・41・42図、図版5-2)

住居6Aの建て替えて、焼失住居である。平面形は円形を呈し、検出時の規模は、南北570cm、残床面積は17.65㎡、底面海拔高355cmを測る。

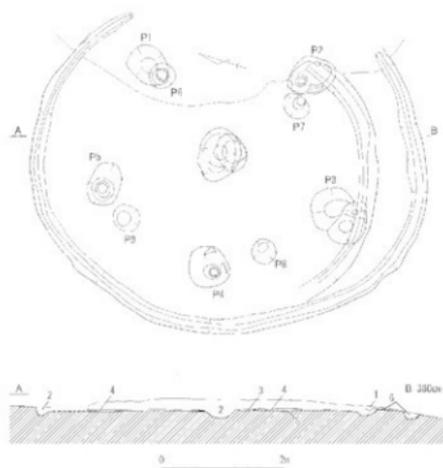
床面の施設としては、貼り床、中央穴、柱穴、壘体溝を確認している。中央穴の平面形は、87×56cmの長楕円形を呈する。深さは42cmを測る。

主柱穴は4個で、掘り方は円形を呈する。平面規模は住居5Aの柱穴よりも小さく、径40cm前後であるが、深さ62～78cmと深くなり、いずれも15～18cmの柱痕跡をもつ。

出土遺物は、土器と石製品、ガラス製小玉がある。

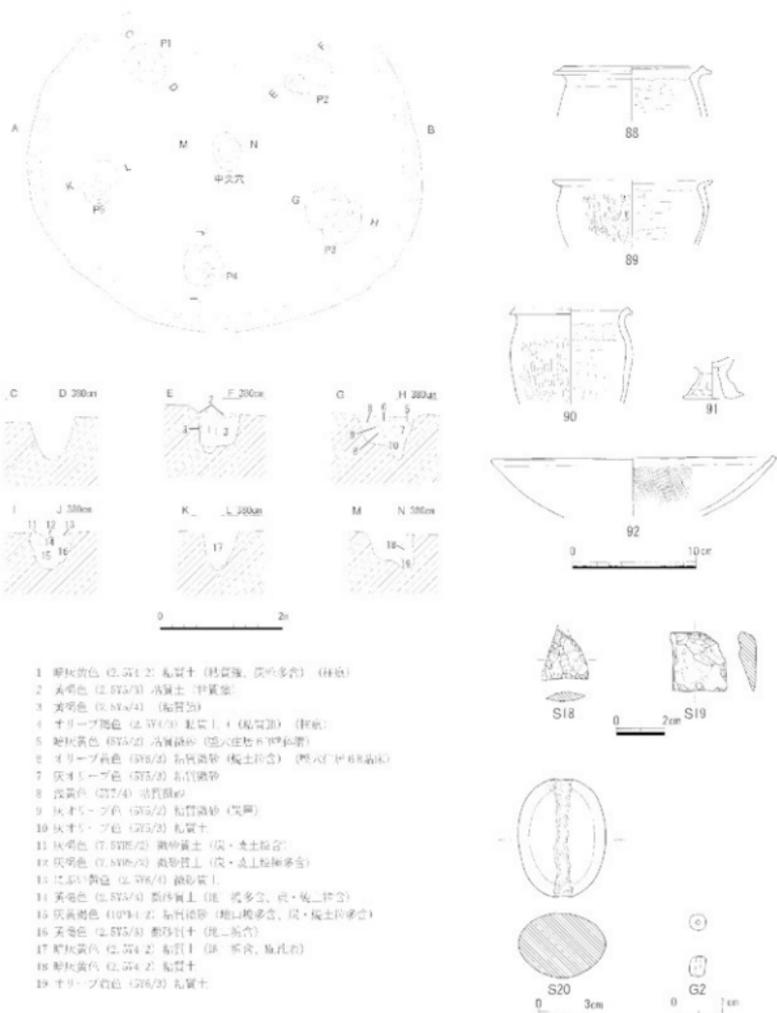
図示した土器は、表93～96、鉢97・98、製塩土器99～103である。石器は、サヌカイト製の鎌S21・22、根S23、UTS24と、細粒花崗岩製の砥石S25、使用擦痕のみられる粘板岩S26である。

住居の時期は、百・後・Ⅱである。



- 1 流石土 (P.518.3) 一次灰色 (P.517.2) (焼一柱跡多含)
- 2 内床裏土 (P.518.2) 粘質砂砂 (根・後十柱多含、器十壘多含)
- 3 粘土
- 4 流石土 (P.517.1) 粘砂質土 (中央生居6B埋床)
- 5 流石土 (P.517.4) 粘砂質土 (中央生居6B埋床)
- 6 オリーブ褐色 (P.517.5) 粘砂と灰色 (P.517.1) 粘砂埋床で生居 (埋穴) 用6壘体溝

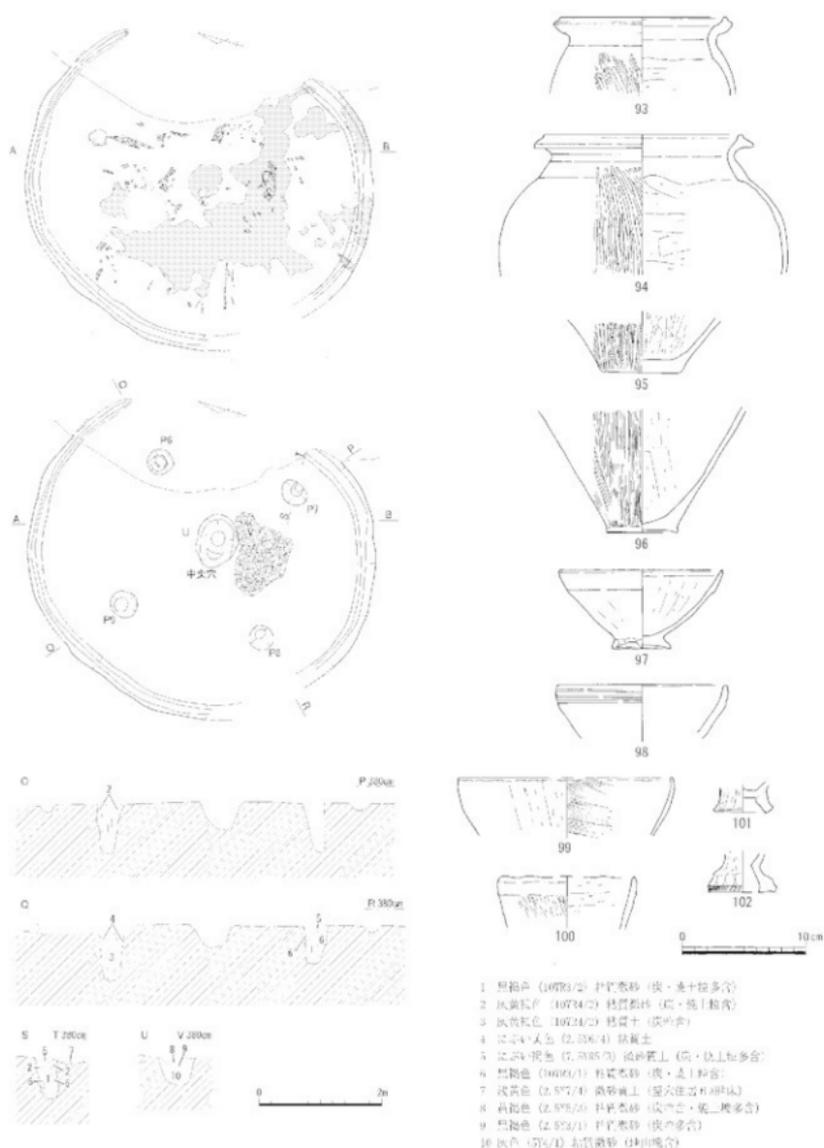
第39図 竪穴住居 6 (1/80)



第40図 竪穴住居 6 A (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2・1/1)

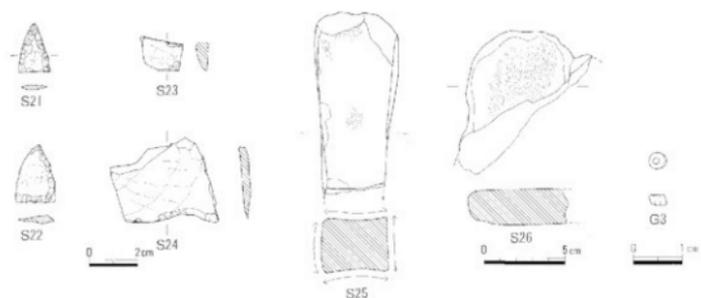
竪穴住居 7 (第25・43図、図版 6-1)

8 C区に位置する竪穴住居で、西半を現代掘削で失う。住居の平面形は、南側がやや弧状、北と東側が直線的となり、円形とも兩丸方形ともいえる。検出時の規模は、南北470cm、深さ30cm、床面の海拔高328cmを測る。床面の施設は、中央穴、柱穴、壁体溝を確認している。中央穴の平面形は、径32cmの円形を呈し、復元した深さは64cmで、南側に炭層が広がる。主柱穴は4個で、掘り方は円形を



第41圖 竪穴住居① 6B (1/80)・出土遺物① (1/4)

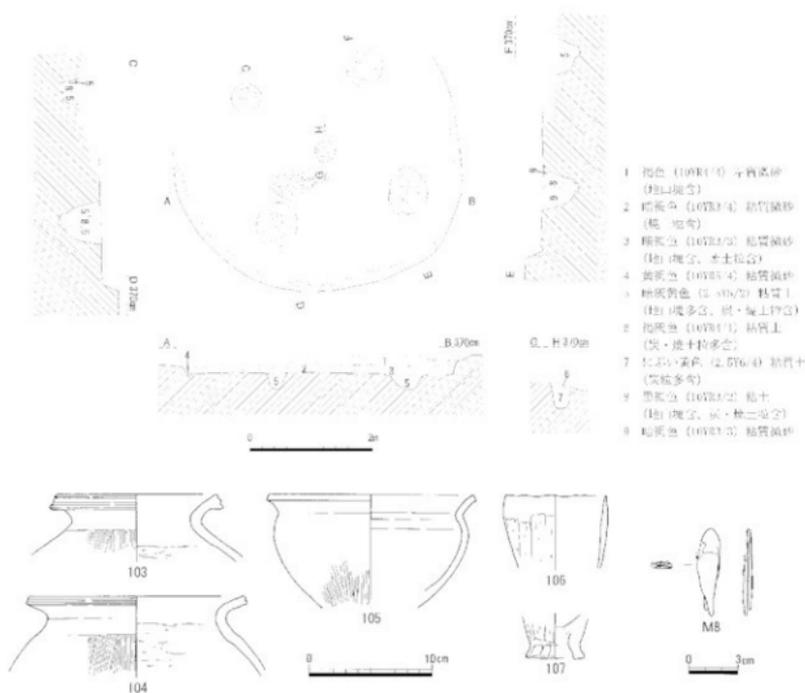
- 1 厚胎土 (10733/2) 片形素砂 (灰・透十粒多含)
- 2 灰黄瓦片 (10734/2) 柱形素砂 (灰・透十粒多含)
- 3 灰黄瓦片 (10734/2) 柱形素砂 (灰・透十粒多含)
- 4 灰黄瓦片 (10734/2) 柱形素砂 (灰・透十粒多含)
- 5 灰黄瓦片 (10734/2) 柱形素砂 (灰・透十粒多含)
- 6 厚胎土 (10003/1) 柱形素砂 (灰・透十粒多含)
- 7 厚胎土 (2.577/1) 柱形素砂 (灰・透十粒多含)
- 8 厚胎土 (2.578/1) 柱形素砂 (灰・透十粒多含)
- 9 厚胎土 (2.578/1) 柱形素砂 (灰・透十粒多含)
- 10 灰黄瓦片 (576/1) 柱形素砂 (灰・透十粒多含)



第42図 竪穴住居 6 B (1/80)・出土遺物② (1/3・1/2・1/1)

見する。規模は径74～80cm、深さ56～64cmを測り、P 2～4で径15～18cmの柱痕跡を確認した。

図示した遺物は土器と鉄器で、M 8は鉄鎌2点が重なる。住居の時期は、百・後・Ⅱである。

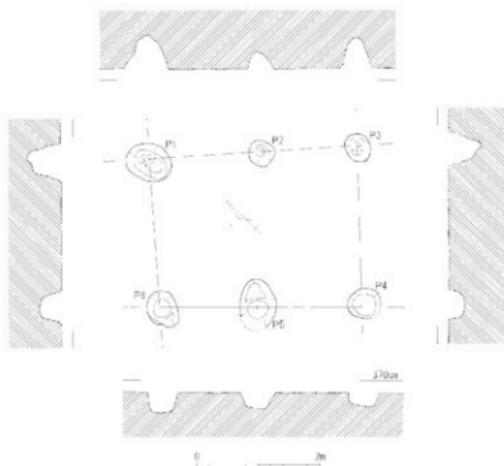


第43図 竪穴住居 7 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

(3) 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第25・44図、図版6-2)

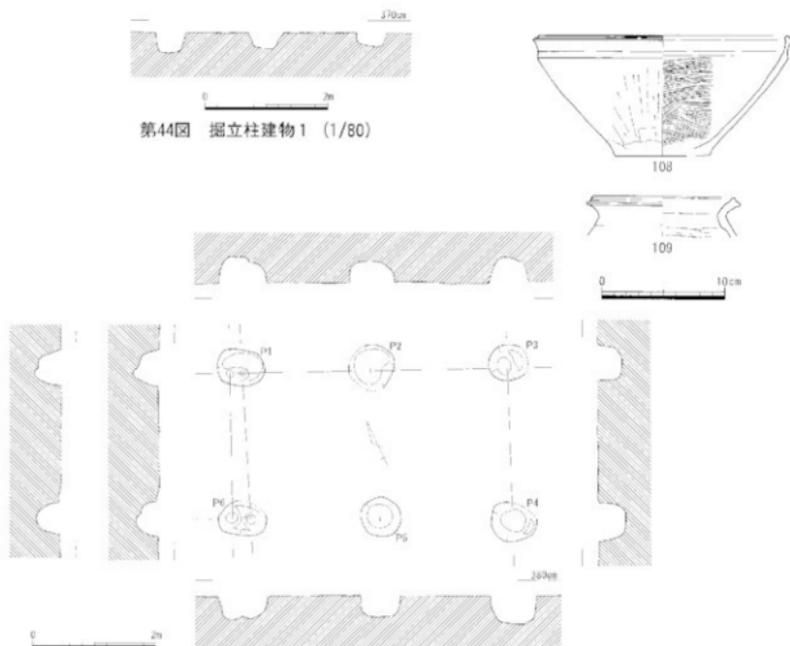
7 B区に位置する2×1間の掘立柱建物である。P2が土壌35を切り、P4が溝24に切られる。建物の規模は、桁行全長327～337cmで、柱間距離は157～180cmを測る。梁間243～263cmである。建坪は8.4㎡を測り、棟方向はN-46°-Wである。柱穴掘り方は円形と楕円形で、径44～74cm、検出面からの深さ23～53cmを測る。出土遺物は少なく、P1から縄文土器細片が出土したのみである。検出状況から後期と考えられる。



第44図 掘立柱建物1 (1/80)

掘立柱建物2 (第25・45図、図版6-3)

8 A区に位置する2×1間の掘立柱建物である。後述す



第45図 掘立柱建物2 (1/80)・出土遺物 (1/4)

る掘立柱建物3の北西に
 近接し、棟方向をほぼ揃
 える。P1・6の底面に
 各2個の落ち込みを検出
 し、建て替えが推定され
 る。建物の規模は、桁行
 全長450と429cmで、柱間
 距離は207～240cmを測
 る。梁間は238～246cmで
 ある。建坪は10.89㎡、
 棟方向はN-66.5°-Eと
 なる。柱穴掘り方は円形
 で、P2～5の径は64～
 70cm、検出面からの深さ
 35～45cmを測る。また、
 P1・6は長径78cmを測
 る。岡示した土器は、い
 ずれもP5からの出土。

検出状況から百・後・
 IIと考えられる。

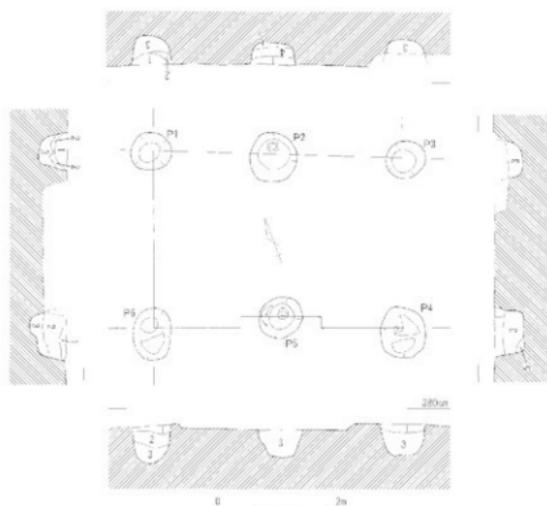
掘立柱建物3 (第25・46図、図版 7-1)

8A区に位置する2×1間の掘
 立柱建物である。P3が土壁49に、
 P4が土壁50にそれぞれ切られ
 る。

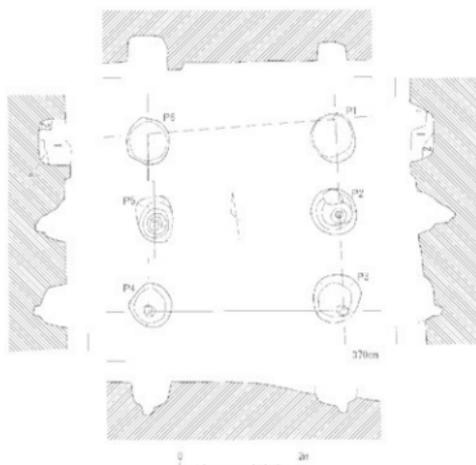
建物の規模は、桁行全長393～
 404cmで、柱間距離は183～210cm
 を測る。梁間277と290cmである。
 建坪は11.52㎡を測り、棟方向は
 N-69°-Wである。柱穴掘り方は
 円形と楕円形を呈し、径66～86cm、
 検出面からの深さ52～64cmを測
 る。

出土遺物は少なく、縄文土器片
 と後期土器片が出土している。

建物の時期は、検出状況から後
 期と考えられる。



第46図 掘立柱建物3 (1/80)



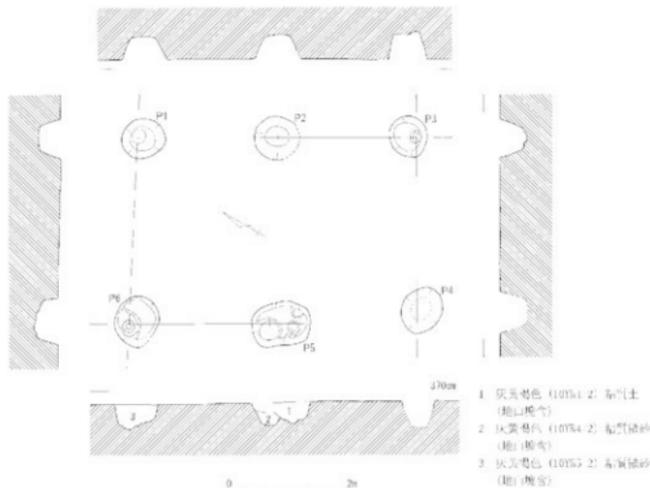
第47図 掘立柱建物4 (1/80)

掘立柱建物4 (第25・47図、図版7-2)

8 B区に位置する2×1間の掘立柱建物で、竪穴住居6を切る。建物の規模は、桁行全長290～313cmで、柱間距離は140～157cmを測る。梁間305と316cmであり、平面形は正方形に近い。建坪は9.35㎡で、棟方向はN-6°-Eである。柱穴掘り方は、ほぼ円形を呈し、径80cm前後、検出面からの深さ38～71cmを測る。出土遺物は少ないが、検出状況から後期後半と考えられる。

掘立柱建物5 (第25・48図、図版7-3)

8 B・C区に位置する2×1間の掘立柱建物である。建物の規模は、桁行全長453～467cmで、柱間距離は225～240cmを測る。梁間280と303cmを測る。建坪は13.90㎡で、棟方向はN-29°-Wである。柱穴掘り方は、P5がやや隅丸長方形を呈するほかは円形で、径80cm前後、深さ36～44cmを測る。P5は掘り方が楕円形を呈し、底面が数カ所あるなど建て替えが想定される。また、北東側の桁行上に同規模の柱穴が数個並ぶため、重複する建物を想定したが、対応する柱穴は検出できなかった。出土遺物は、P5・6から少量の後期土器片が出土している。検出状況から後期と考えられる。



第48図 掘立柱建物5 (1/80)

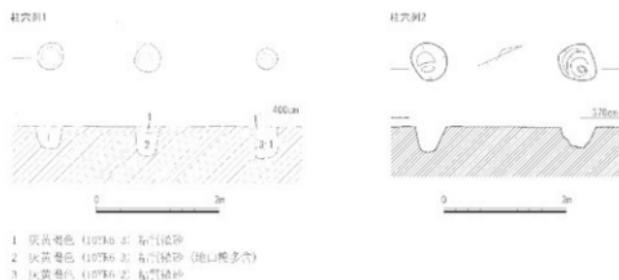
(4) 柱穴列

柱穴列1 (第25・49図)

6 A・B区に位置する柱間2間の柱穴列である。柱間距離は154と194cmを測り、軸方向はN-2°-Wである。掘り方平面形は径32～44cmの円形で、深さは36～51cmを測る。後期と考えられる。

柱穴列2 (第25・49図)

8 A区の掘立柱建物3の東側に位置する柱間1間の柱穴列である。柱間距離は250cmを測り、軸方向は掘立柱建物3の梁間に揃う。掘り方平面形は円形を呈し、長軸60と70cm、深さ34と41cmを測る。底面はいずれも柱のめり込みによる窪みが見られる。出土遺物はないが、後期と考えられる。



第49図 柱穴1・2 (1/80)

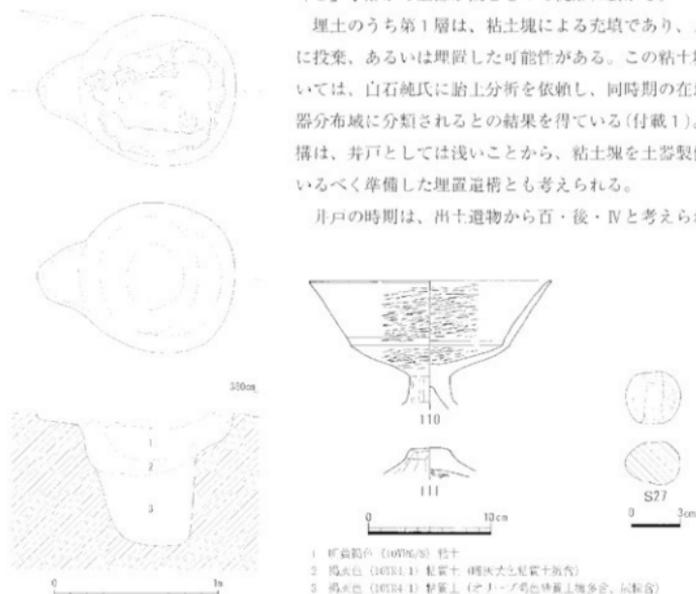
(5) 井戸

井戸1 (第25・50図、図版8-1)

7 A区に位置し、竪穴住居2と重複する井戸である。平面形は、円形の北側に浅い張り出しがつく形状を呈する。規模は東西長120cm、南北長92cm、検出面からの深さは72cmを測る。底面海拔高は286cmで、調査区中で最も浅い。断面は、中位以下底面までの「U」字形から上部が段をもって椀形に広がる。

埋土のうち第1層は、粘土塊による充填であり、人為的に投棄、あるいは埋置した可能性がある。この粘土塊については、白石純氏に胎土分析を依頼し、同時期の在地産土器分布域に分類されるとの結果を得ている(付載1)。本遺構は、井戸としては浅いことから、粘土塊を土器製作に用いるべく準備した埋置遺構とも考えられる。

井戸の時期は、出土遺物から百・後・IVと考えられる。



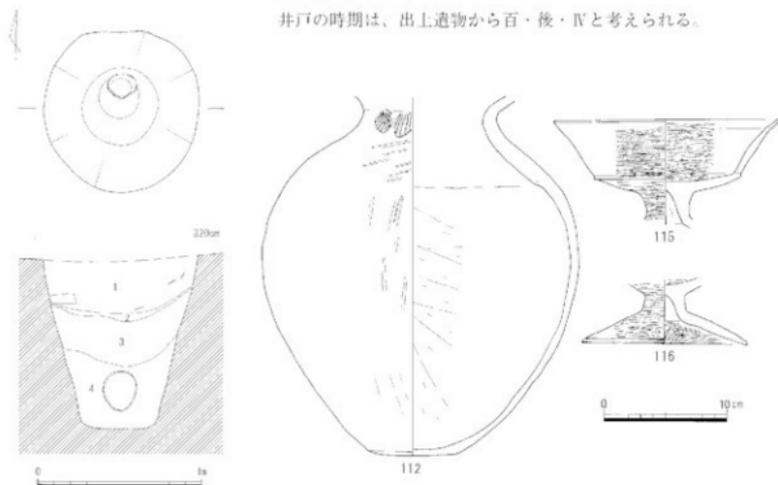
第50図 井戸1 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

井戸2 (第25・51図、図版8-2・33)

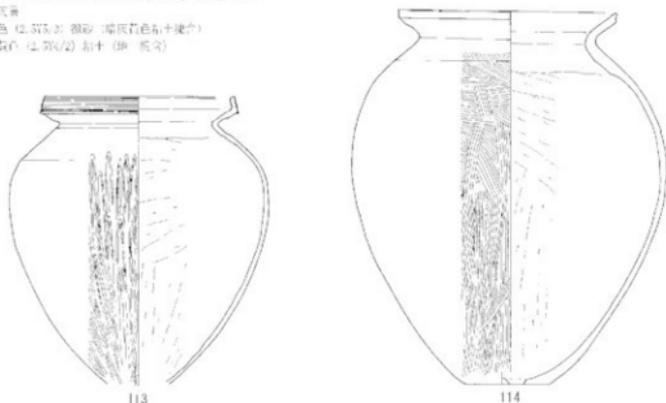
6 B区に位置する井戸で、竪穴住居1の南西2.5mにある。上部は近世の土取り遺構で大きく削平されているが、本来は微高地端部に掘削されたものである。検出時の平面形は、径95～98cmの円形を呈し、検出面からの深さは108cm、底面海拔高は202cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

埋土は4層に分層される。このうち、第2層は顕著な炭・灰層である。出土遺物は、その上層の第1層からがほとんどであり、図示した壺112、甕113、高杯115・116がある。また、最下層の第4層には、底部を焼成後穿孔された完形品の甕114のみが底面から10cm浮いた状態で置かれていた。

井戸の時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。



- 1 褐色 (100%) 磁器 (灰色粘質磁器焼成、灰質多量)
- 2 灰・灰質
- 3 黄褐色 (2.5%) 2: 磁器 (暗灰青色粘土焼成)
- 4 黄褐色 (2.5%) 2: 粘土 (赤・灰質)



第51図 井戸2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

井戸3 (第25・52図)

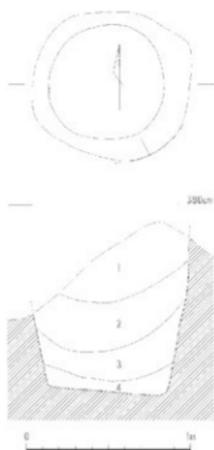
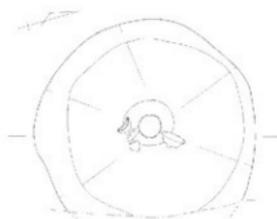
6 B区に位置し、井戸2と同様に微高地端部に掘削された井戸である。上部を近世の土取り遺構と用水路で大きく削平されている。平面形は、径99cmの円形に復元され、検出面からの深さは108cm、底面海拔高は262cmを測る。断面形は逆台形を呈する。出土遺物は、少量の弥生土器片があるのみで、図示し得るものはない。井戸の時期は、検出状況から後期と考えられる。

井戸4 (第25・53～55図)

7 B区に位置する井戸で、堅穴住居3の南西辺の一部を切る。上部の東側を近世の用水路で失うが、平面形は径135cm程度の円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは182cm、底面海拔高は199cmを測る。断面形は「V」字形を呈し、径30cm前後の小さな底をもつ。

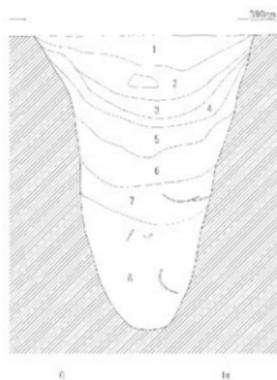
埋土はレンズ状堆積による8層で、第1層が後期末の洪水砂と考えられる。

遺物の出土状況は、下位の第7・8層からのものがほとんどで、図示した遺物のうち、壺117・118、甕122・123、鉢127・130・132、器台133、高杯135・137、舟形土製品C6は第7層からの出土である。また、平面図に示しているのは、甕124、鉢125・143、高杯134・136等の第8層の出土状況である。



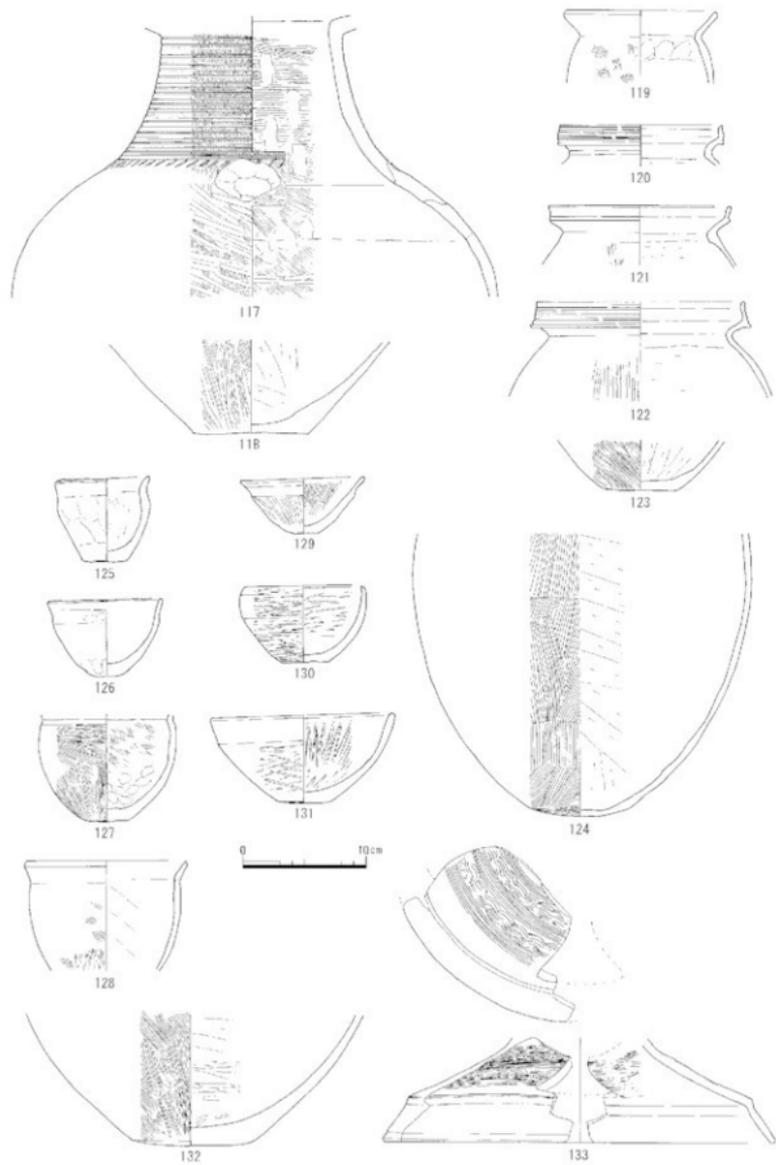
- 1 黒褐色 (10YR5/2) 粘質砂 (土壌少量)
- 2 灰黄褐色 (10YR1/2) 粘質砂 (土壌少量、炭・灰土粒含)
- 3 灰オリーブ色 (7.5Y1/2) 粘質砂 (粘土塊多量、炭・灰土粒含)
- 4 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 (粘土塊多)

第52図 井戸3 (1/30)

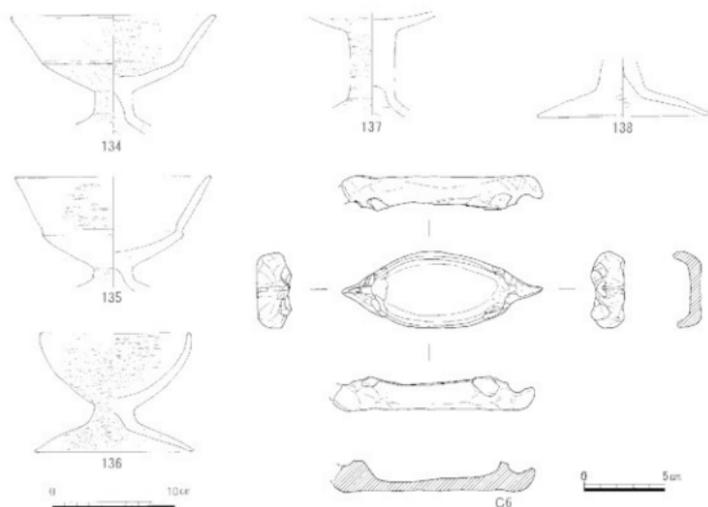


- 1 赤土・ブ黄色 (5Y6/3) 粘砂 (浮土後層へ込赤6)
- 2 赤オリーブ色 (5Y4/2) 粘砂 (赤土多量)
- 3 オリーブ黄色粘土塊含、粘土塊含、炭・灰土粒含
- 4 粘質黄土 (2.5Y4/2) 粘質砂 (粘土塊含、炭・灰土粒含)
- 5 粘質黄土 (2.5Y4/2) 粘質土 (粘土塊多量、炭・灰土粒多量)
- 6 赤い黄土 (2.5Y6/4) 粘質砂塊多量
- 7 オリーブ黄色 (6.5Y3/1) 粘土 (粘土塊多量、炭土粒多量)
- 8 黒い黄土 (2.5Y6/3) 粘土 (炭・灰土粒多)

第53図 井戸4 (1/30)



第54図 井戸4 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第55図 井戸4 (1/30)・出土遺物② (1/4・1/3)

117は、大形の長頸壺である。肩部に焼成後の穿孔をもつ。133は、器台の脚根部である。4方向に楕形の透かし穴を有すると考えられ、その透かし穴間に波状文と沈線文を施す。酷似する胎土と施文をもつ土城19から出土の口縁部240が同一個体となる可能性がある。

ほぼ完形の舟形土製品C6は、本書掲載の壑穴住居5BのC3と合わせて、百間川原尾島遺跡で4例目の舟形土製品である。

井戸の時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。

井戸5 (第25・56～61図、図版27～32)

7A区中央に位置する井戸で、壑穴住居2の南側4.5mにある。上部の北半を土城281に切られる。

平面形は円形と推定され、検出時の規模は径154～164cmを測る。検出面からの深さは192cm、底面海拔高は157cmを測る。断面形は上部がやや開く逆台形を呈し、底面はほぼ平坦となる。

埋土は5層で、最下層から大量の土器が出土した。図示した遺物は、そのほとんどがこの第5層からの出土であり、かつ完形に復元できたものが多い。器種別では、壺139～156、甕157～165、高杯166、鉢167～188であり、壺と鉢の比率が高く、高杯は観察した出土土器全体を通じても1点のみである。また、近接する住居2の出土土器と型式が酷似することから、住居2の「焼失」後の土器の廃棄と、井戸5への廃棄が同時期になされた可能性の高いことを指摘したい。第5層の遺物出土状況が東～北に偏ることも住居2との位置関係に符合する。

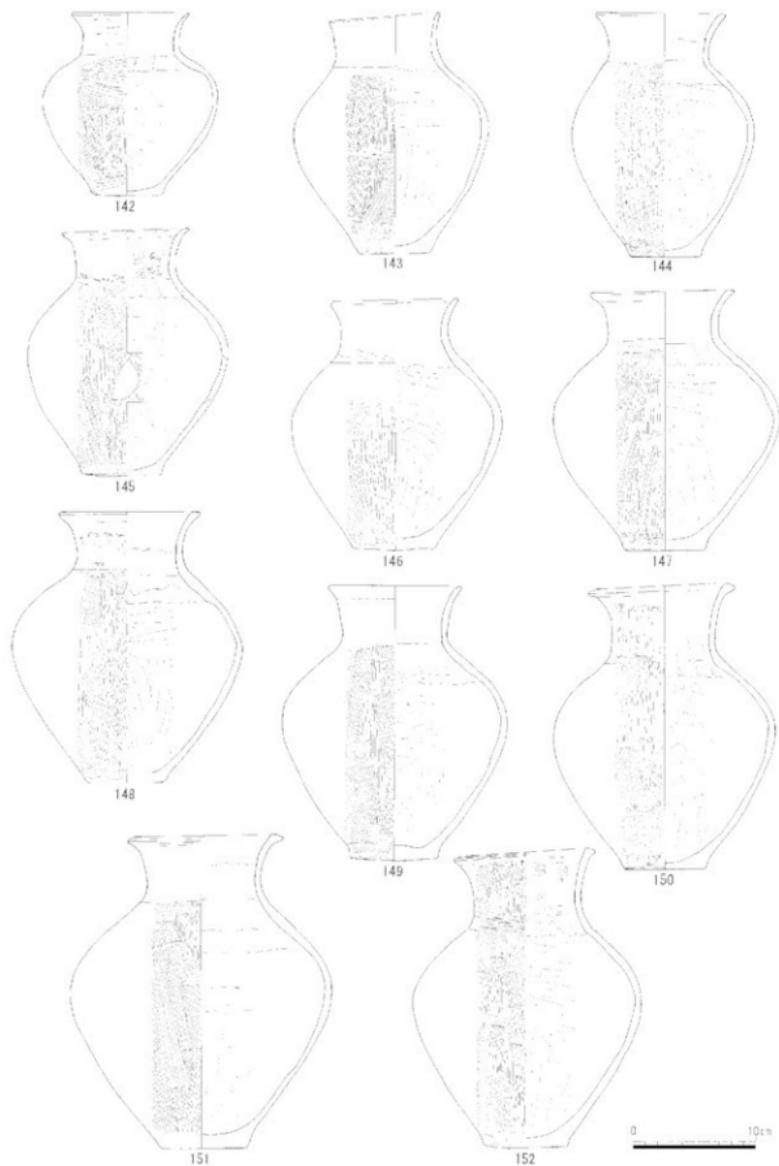
両者の関係を勘案し、再び土器について言及すると、井戸5では小～中形の壺が多いのに対し、住居2では中～大形の壺も見られる。また、共通点としては両者とも鉢の比率が高く、顕著な大形品で井戸5の3点と住居2の4点の口径が40～45cmと揃っていることが挙げられる。

井戸の時期は、出土遺物から百・後・Ⅱと考えられる。

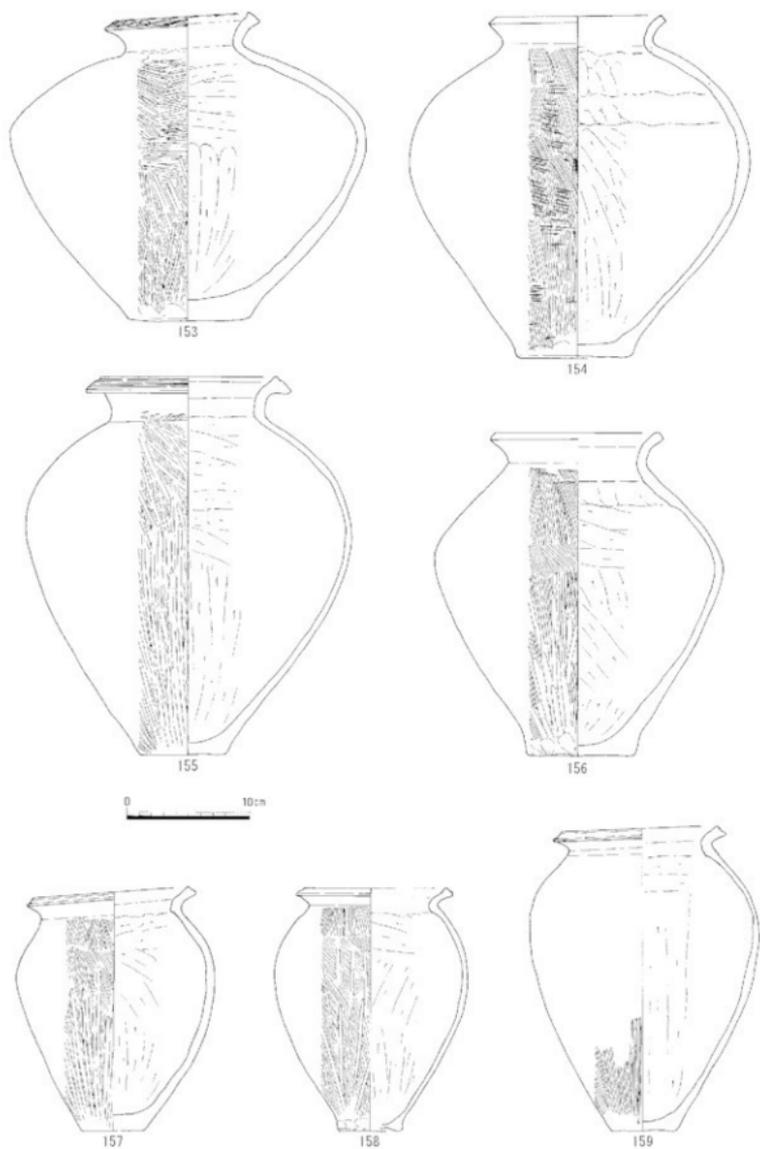


- 1 黄褐色 (7.5183-4) 粘質土
 2 黄褐色 (7.5183-3) 粘質土 (赤子土・物差土)
 3 灰オリーブ褐色 (7.5133-3) 粘土
 4 オリーブ褐色 (7.5113) 粘土
 5 オリーブ黒色 (592.1) 粘土

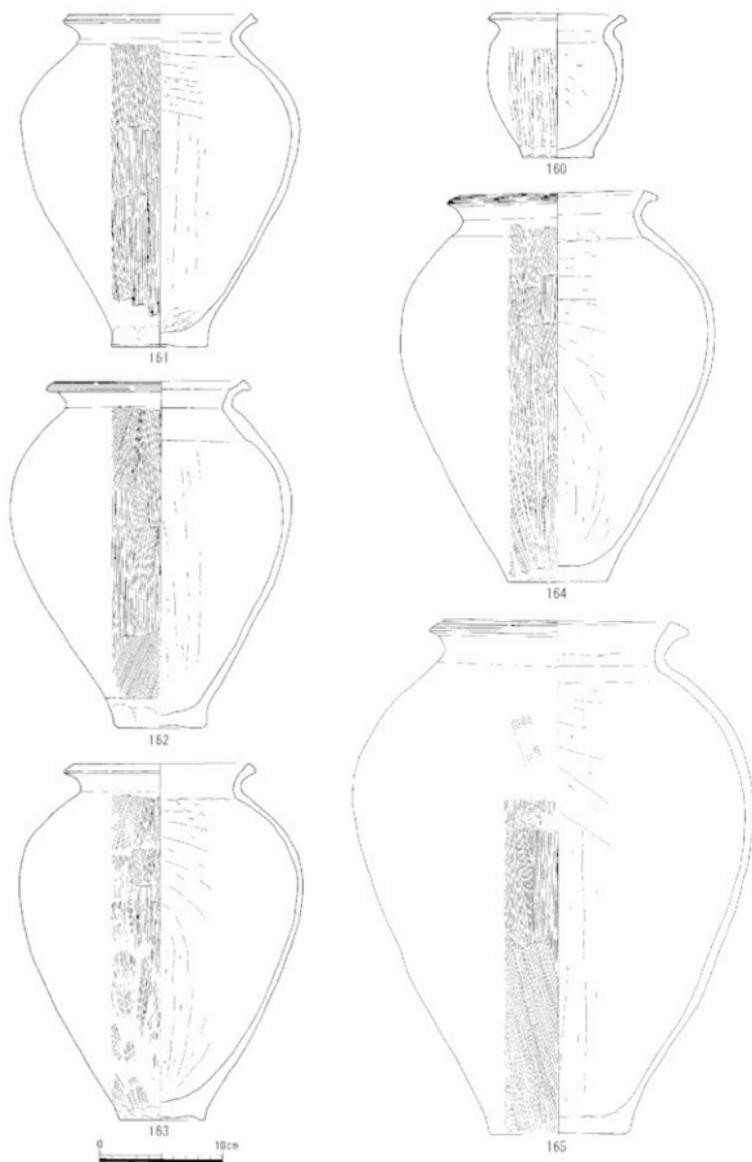
第56図 井戸5 (1/30)・出土遺物① (1/4・1/3)



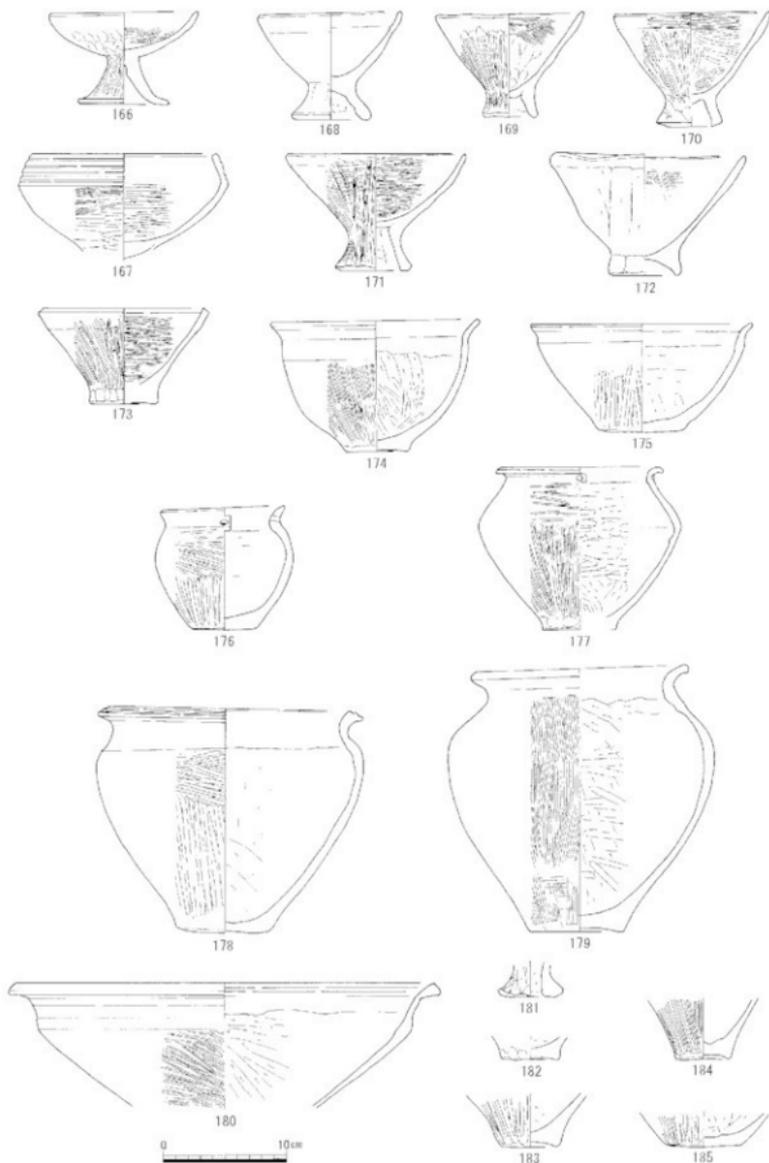
第57図 井戸5出土遺物② (1/4)



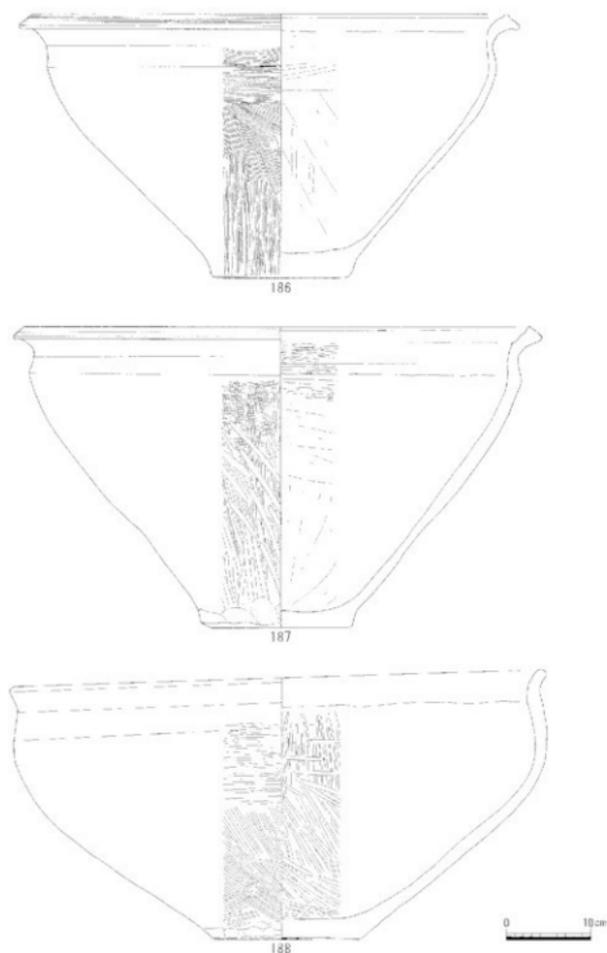
第58図 井戸5出土遺物③ (1/4)



第59図 井戸5出土遺物④ (1/4)



第60図 井戸5出土遺物⑤ (1/4)



第61図 井戸5出土遺物⑥ (1/4)

井戸6 (第25・62図)

7A区の南側に位置する井戸である。その北東側を古墳時代の井戸12に切られる。検出時の平面形は、径91cmの円形を呈する。検出向からの深さは106cmを測る。底面海拔高は、270cmで、本報告中では片戸2に次いで浅いものである。断面はやや丸みをもつ底面から急斜に壁が立ち上がる「U」字形である。埋上は、4層で、第1・2層は地山塊を含み、特に第2層は顕著である。人為的な埋め戻し

が想定される。

出土遺物は、少量の土器片のみで、図示し得るものはない。

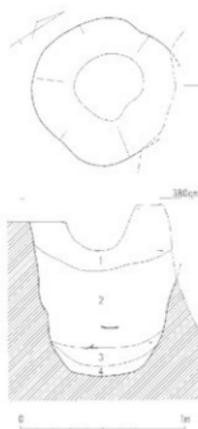
井戸の時期は、検出状況から後期後半と考えられる。

井戸7 (第25・63～66図、図版8-3・33～35)

8 A区に位置する井戸で、近現代用水路の底面で検出したものである。検出時の平面形は、径154～164cmのほぼ円形を呈する。検出面からの深さは192cm、底面海拔高は157cmを測る。断面形は平坦な底面から急斜に壁が立ち上がる逆台形である。

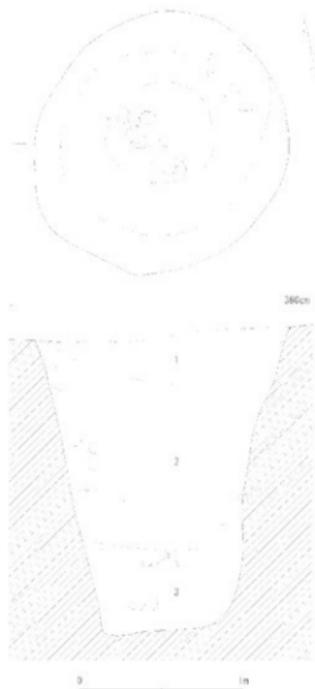
出土遺物は、大量の土器片と石器である。土器は各層から出土しているが、西側から流れ込んだ状況を示している。また、土器全体では鉢の割合が高いことが指摘できる。図示したものは、壺189～197、甕198～206、高杯207～209、鉢210～224である。

井戸の時期は、出土遺物から百・後・Ⅱと考えられる。



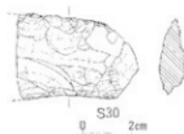
- 1 黒褐色 (L. 93/2) 粘質赤鉄 (1) 土山層合、灰・粘土多含)
- 2 黒褐色 (L. 93/2) 粘質土 (1) 土山層多含、灰・粘土多含)
- 3 黒褐色 (L. 93/2) 粘土 (1) 下黄鉄土粘質土層、粘質多含)
- 4 灰青緑色 (93/2) 粘土

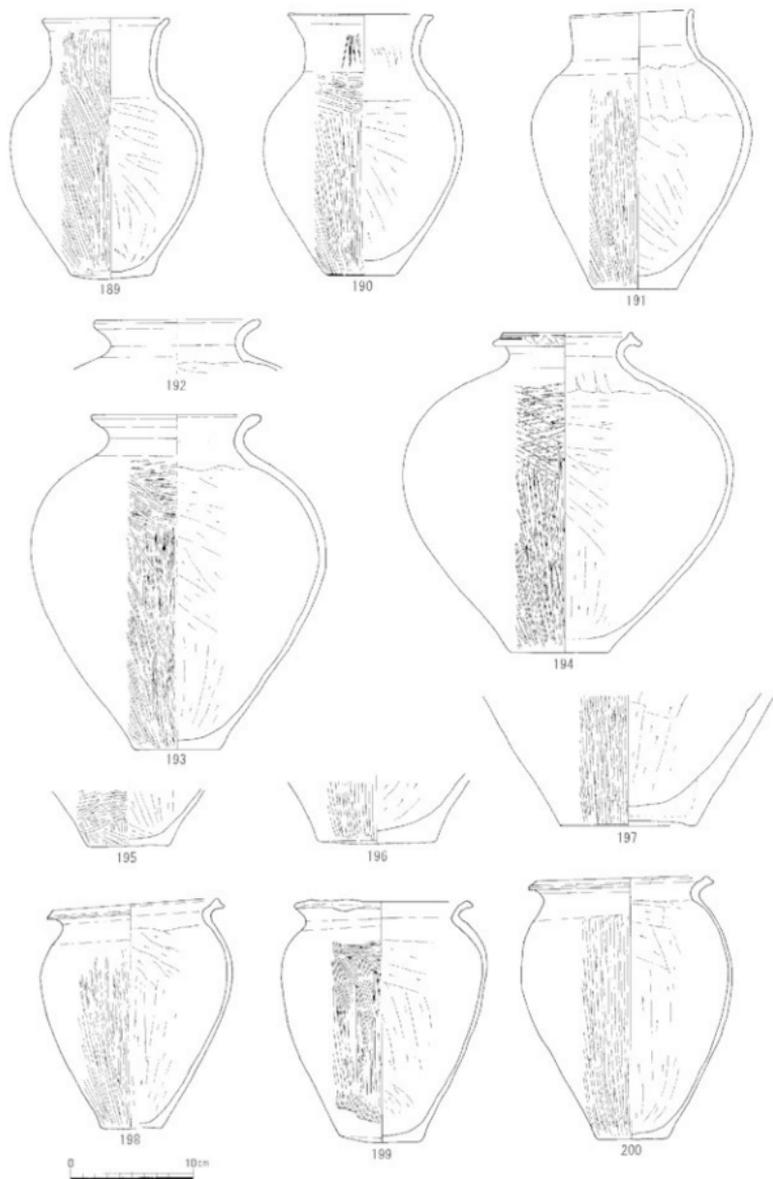
第62図 井戸6 (1/30)



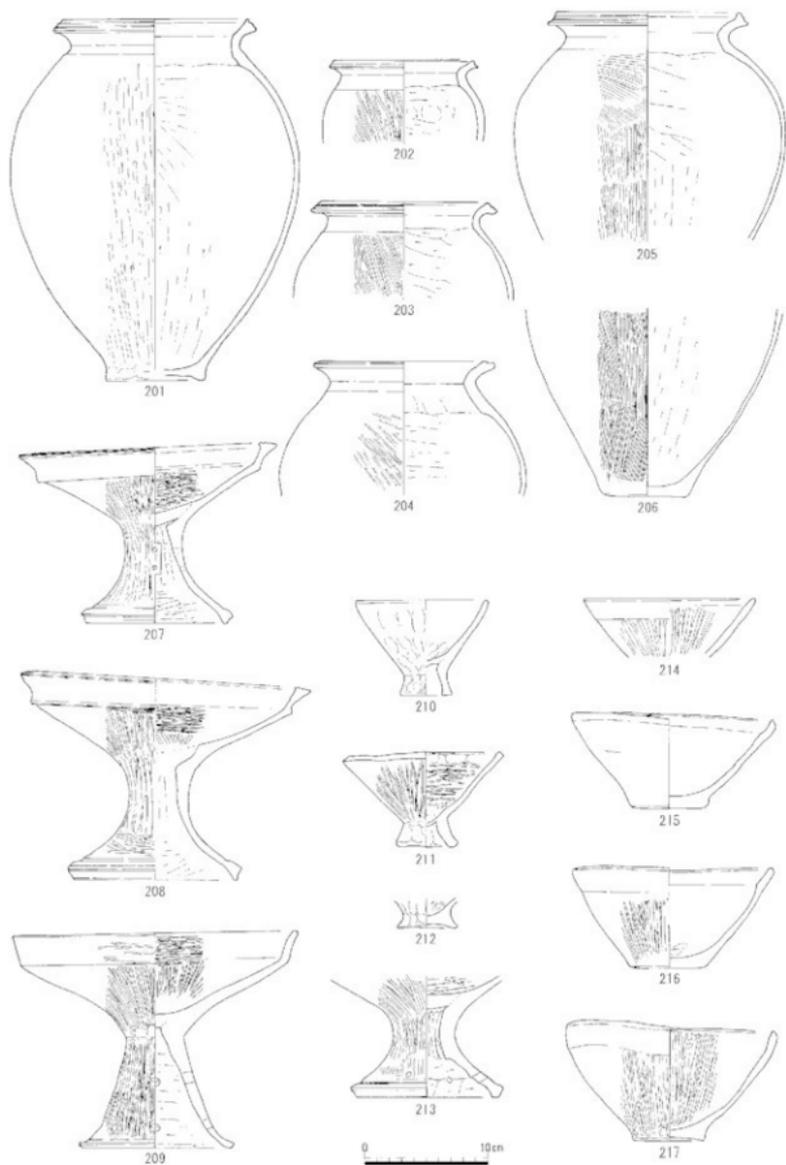
- 1 灰褐色 (L. 215/3) 粘質砂 (粘質強、灰多含)
- 2 暗灰黄色 (L. 214/2) 粘土 (1) 粘質強砂、粘土多含、灰多含)
- 3 暗灰黄色 (10954/1) 粘土 (1) 土山層合)

第63図 井戸7 (1/30)・出土遺物① (1/2)





第64図 井戸7出土遺物② (1/4)



第65図 井戸7出土遺物③ (1/4)



第66図 井戸7出土遺物⑤ (1/4)

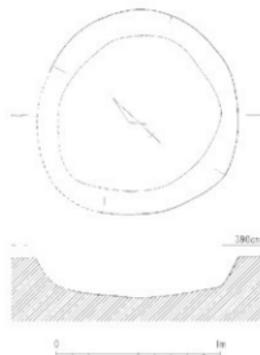
(6) 土壌

土壌9 (第25・67図)

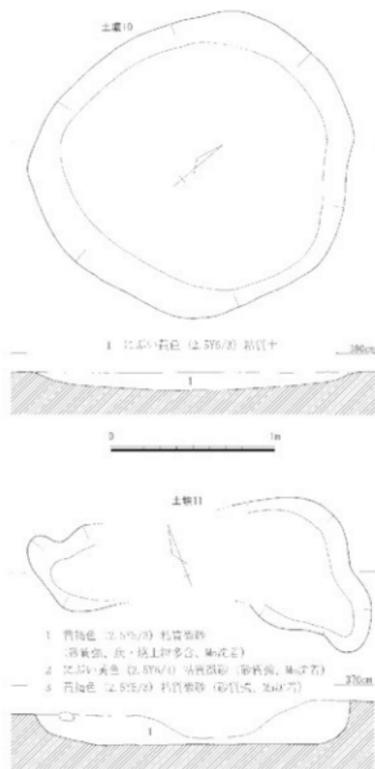
6 A区の調査区北端に位置する。溝20の埋没後に掘削され、古墳時代初頭の竪穴住居8に切られる。平面形は、径126cmの円形を呈し、丸みをもつ底面から壁が急斜に立ち上がる。深さ25cm、底面海拔高358cmを測る。埋土にはよい黄色粘質土であり、出土遺物はない。検出状況から後期と考えたい。

土壌10 (第25・68図)

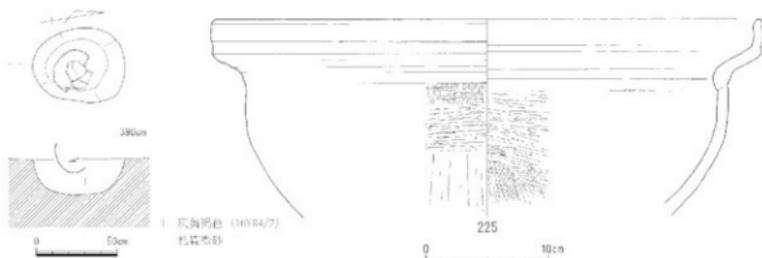
6 A区に位置する土壌で、溝19の埋没後に掘削され、後述の土壌11に切られる。平面形は、径183~191cmのやや歪な円形を呈し、断面形は浅い皿形となる。深さ11cm、底面海拔高367cmを測る。出土遺物は後期の土器細片が少量あるが、図示しうるものはない。検出状況から後期と考えられる。



第67図 土壌9 (1/30)



第68図 土壌10・11 (1/30)



第69図 土壌12 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

土壌11 (第25・68図)

6 A区の土壌10の東側に位置する。溝19・20の埋没後に掘削される。平面形は、東西に長い不定形を呈し、断面形は平坦な底から急斜に壁が立ち上がる。検出規模は、長軸215cm、短軸79cm、深さ26cm、底面海拔高331cmを測る。

出土遺物は、図示していないが、高杯の短脚片がある。土壌の時期は、検出状況から後期後半と考えられる。

土壌12 (第25・69図)

6 A区の溝20の西側に位置する土壌である。検出時の平面形は、56×46cmの楕円形を呈し、断面形は椀形で、深さ23cm、底面海拔高354cmを測る。出土遺物は、図示した大形の銚225のほか、少量の土器細片がある。土壌の時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。

土壌13 (第25・70図)

土壌12の東側に接する土壌で、溝20の埋没後に掘削される。検出時の平面形は隅丸長方を呈し、長軸126cm、短軸89cm、深さ17cm、底面海拔高365cmを測る。断面形は浅い椀形を呈し、底は平坦とはならない。出土遺物は土器細片が少量あるが、図示するものはない。

検出状況から後期と考えられる。

土壌14 (第25・70図)

6 A区の竪穴住居1の南に接して位置する土壌である。検出時の平面形は、径107×130cmの

やや長楕円形を呈し、深さ19cm、底面海拔高373cmを測る。

断面形は楕形となり、西側に段をもつ。

出土遺物は、図示した甕226・227のほか、外面にタタキを施す瓦片等、後期後半の時期を示す資料がある。

土壌の時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。

土壌15 (第25・71図)

土壌14の前に接して位置する土壌である。検出時の平面形は、径91～95cmの円形を呈し、断面形は浅い楕形となる。検出面からの深さ20cm、底面海拔高364cmを測る。埋上に粘土塊を含んでいる。

出土遺物は図示した鉢228のほか、後期後半と考えられる土器片がある。

土壌の時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。

土壌16 (第25・72図)

6 A区の南隅に位置する土壌で、後述する土壌19の北側にある。検出時の平面形は、径35cmの円形を呈し、断面形は楕形となり、深さ10cm、底面海拔高は372cmを測る。

遺物の出土状況は、土壌上位に集中するもので、その大半を図示している。

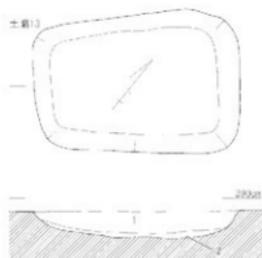
土壌の時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。

土壌17 (第25・73図)

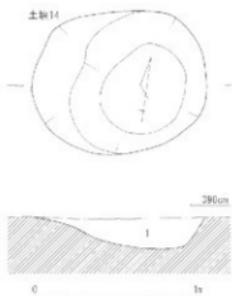
6 A区の南隅に位置する土壌である。土壌19の底面下にはば重なり、溝21よりも新しい。検出時の平面形は、175×100cmの不整長楕円形を呈する。断面形は浅い皿形となり、深さ15cm、底面海拔高322cmを測る。

出土遺物は、図示していないが、少量の土器細片がある。

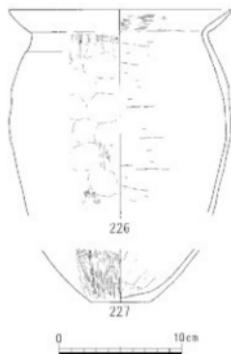
土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。



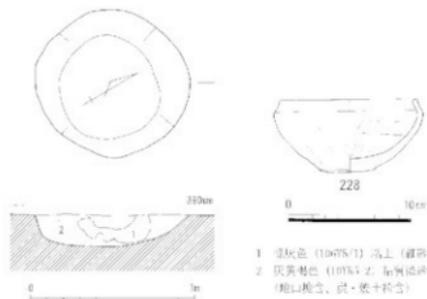
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質腐植 (地山埋立、灰・粘土質)
- 2 赤い・灰褐色 (10YR4/3) 粘質腐植 (地山埋立、灰・粘土質)



- 1 灰黄褐色 (10YR5/3) 粘質腐植 (地山埋立、灰・粘土質)

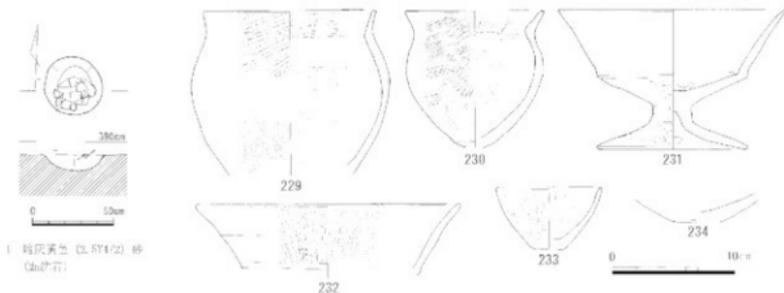


第70図 土壌13・14 (1/30)・土壌14出土遺物 (1/4)

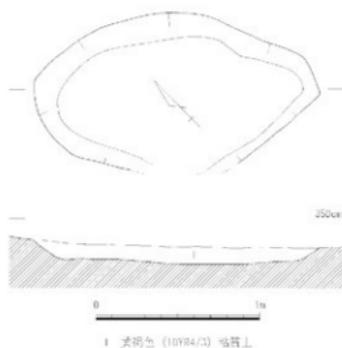


- 1 黄褐色 (10YR5/1) 以上 (腐植質)
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質腐植 (地山埋立、灰・粘土質)

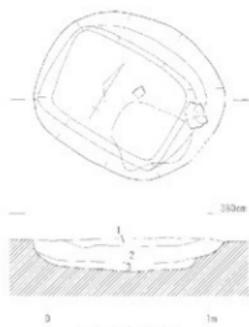
第71図 土壌15 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第72図 土壌16 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第73図 土壌17 (1/30)



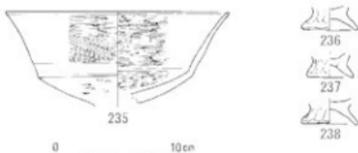
第74図 土壌18 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌18 (第25・74図)

6 B区の東側に位置する土壌である。竪穴住居1の南側5.5mにあり、微高地端部に掘削されたものである。検出時の平面形は胴の張る隅丸方形を呈し、長軸113cm、短軸96cm、深さ21cm、底面海拔高344cmを測る。内部はより端正な隅丸方形を呈して一段深くなる。埋土は3層で、第1層は多量の製塩土器細片と炭・焼土を含む。特に土壌南東部には炭・焼土のほかに灰と細礫の集中する範囲があるが、被熱の痕跡は認められない。また、第2層以下は地山塊を多含し、人為的に埋めた層と考えられる。

出土遺物は、図示した高杯235、製塩土器の脚236～238のほか、脚片で20個体を超える製塩土器細片がある。このことから、土器製塩後の廃棄土壌と考えられ、付近に製塩釜の存在した可能性が高い。

土壌の時期は、百・後・IVと考えられる。

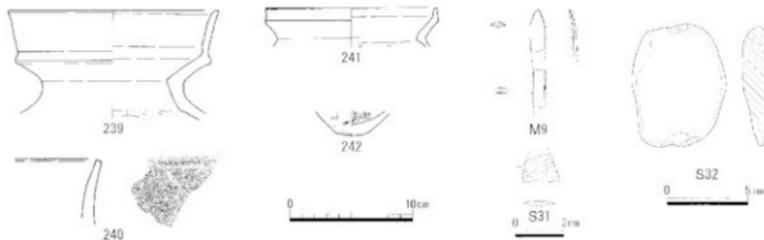
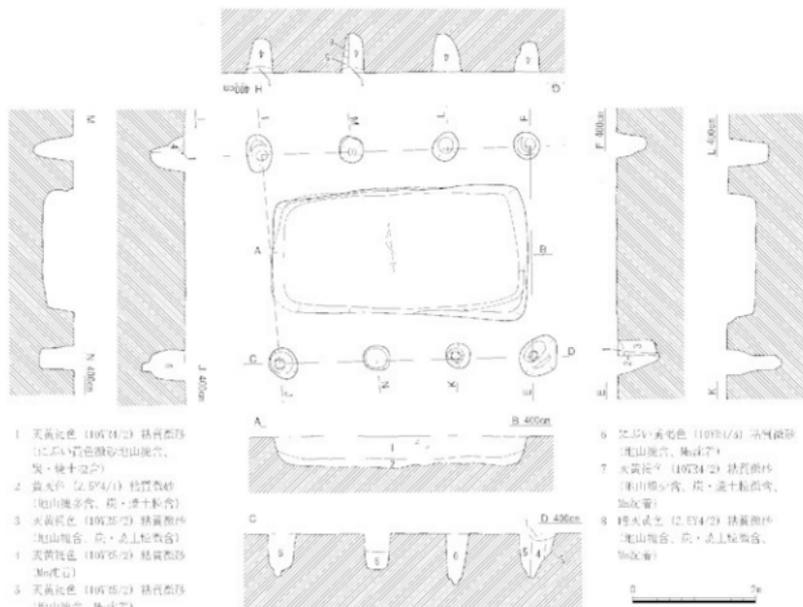


- 1 黄灰色土 (L27/2) 丸蓋磁砂 (厚胎多穴、炭・焼土多穴、赤土少量、赤土少量)
- 2 赤土・褐色土 (L274/3) 粘質赤砂 (地山塊多含、炭・焼土少量、炭・焼土)
- 3 粘質赤土 (L274/3) 粘質赤砂 (地山塊多含、炭・焼土少量)

土壌19 (第25・75図、図版9-1・37)

6 A・B区に位置する土壌で、竪穴住居1の南東側3mにある。検出当初は、西側がやや広がる隅丸長方形平面形を呈する土壌として認識した。その後の精査で土壌の周囲に柱穴列を確認し、両者の位置関係と埋上の検討を行い、一連の遺構と考えた。土壌の規模は、長軸413cm、短軸204cm、深き50cm、底面海拔高334cmを測る。底面は比較的平坦で、被熱面等は見られない。壁は急斜に立ち上がるが、北西部でややオーバーハングして袋状を呈し、南東部は段を持ちながら浅く広がる。

柱穴列は、土壌の主軸に平行するもので、3×1間の掘立柱を想定している。その桁行全長は436~412cmで、柱間距離は127~155cmを測る。梁間は290と295cmであり、建坪は15㎡、棟方向はN-84°-



第75図 土壌19 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

Wである。柱穴掘り方は、P1・5が楕円形を呈するほかは円形で、径40cm72cm、検出面からの深さ50～82cmを測る。土壌はこの建坪内にちょうど収まる。

図示した出土遺物は、土器と鉄器、石器で、壺口縁240がP8から出土したほかは、土壌出土品である。240は井戸4の器台脚部133と胎上や施文が類似することから、器台の口縁の可能性もある。

遺構の時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。

土壌20 (第25・76図)

6B区の東隅に位置する土壌である。土壌19の南西側に近接する。検出時の平面形は径77～82cmの円形を呈し、深さ18cm、底面海拔高372cmを測る。底は平坦で、断面形は逆台形となる。出土遺物は底面から浮いた状態で出土している。図示したものは、壺243と台付直口壺244である。

土壌の時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。

土壌21 (第25・77図)

6B区の東隅に位置する土壌である。土壌22の北側に近接し、溝21の埋没後に掘削される。検出時の平面形は楕円形を呈し、長径69cm、短径53cm、深さ20cm、底面海拔高359cmを測り、底は二段となる。出土遺物は土器で、図示したものは、壺245と壺246である。

土壌の時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。

土壌22 (第25・78図)

6B区の東隅に位置する土壌である。土壌23の南西側に近接し、南側を古墳時代の井戸8に切られる。検出時の平面形は、東西長191cmの隅丸方形を呈し、深さ37cm、底面海拔高342cmを測る。底はやや丸みをもち、壁は直線的に垂直か急斜に立ち上がり、断面形は逆台形となる。埋土は二層で、いずれも地山塊を多含する。

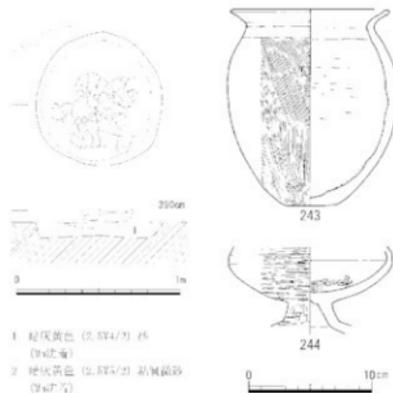
土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。

土壌23・24 (第25・78図)

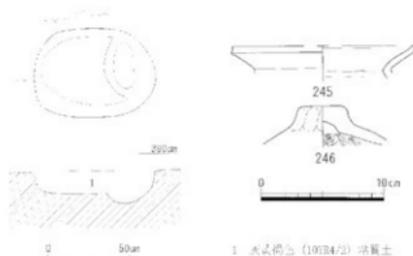
7A区の調査区端に位置する土壌である。2基が重複しており、平面形が長方形を呈する土壌23と、北側の円形を呈する土壌24である。

検出規模は、土壌23が長軸192cm、短軸87cm、深さ4cmを測り、土壌24が径80～86cm、深さ26cm、底面海拔高358cmを測る。

時期は、検出状況からいずれも後期と考えられる。



第76図 土壌20 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第77図 土壌21 (1/30)・出土遺物 (1/4)

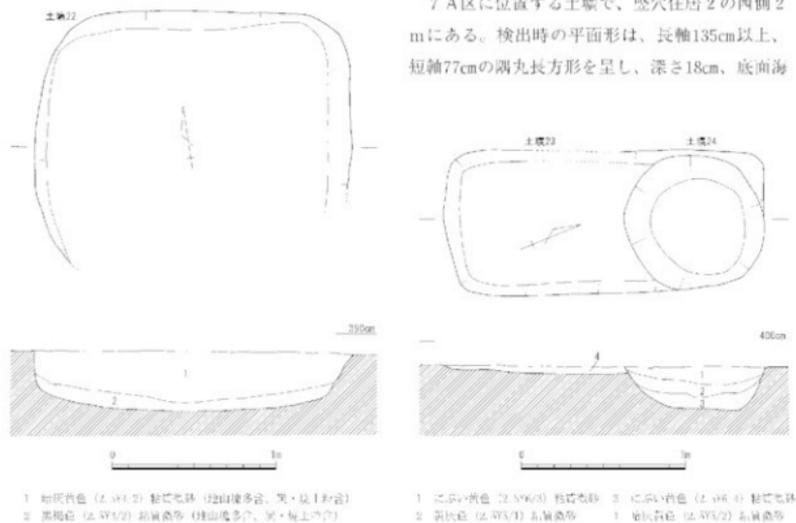
土壌25 (第25・79図)

7 B杭付近に位置する土壌である。土壌22の東側に近接し、南側を古墳時代の溝32に切られる。検出時の平面形は、長軸194cm以上、短軸98cmの隅丸方形を呈し、深さ22cm、底面海拔高356cmを測る。底は丸みをもち、壁は直線的に急斜に立ち上がる。断面形は逆台形となる。

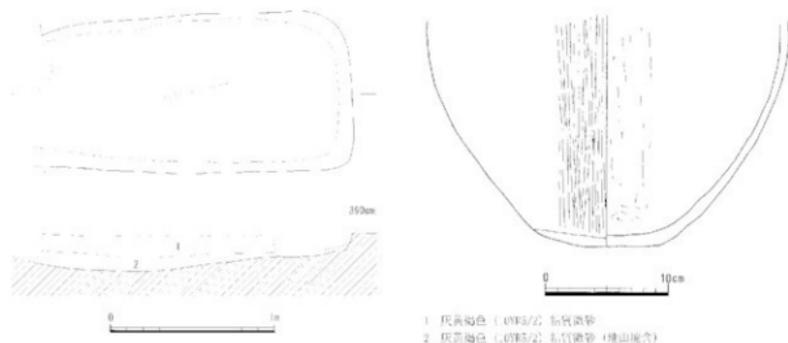
坑247は、不安定な底をもつものである。土壌の時期は、白・後・Ⅳと考えられる。

土壌26 (第25・80図)

7 A区に位置する土壌で、竪穴住居2の西側2mにある。検出時の平面形は、長軸135cm以上、短軸77cmの隅丸長方形を呈し、深さ18cm、底面海



第78図 土壌22～24 (1/30)



第79図 土壌25 (1/30)・出土遺物 (1/4)

抜高369cmを測る。底はほぼ平坦で、皿状の断面形を呈する。遺物の出土は東側に偏る。

土壌の時期は、出土遺物から百・後・Ⅰと考えられる。

土壌27 (第25・81回)

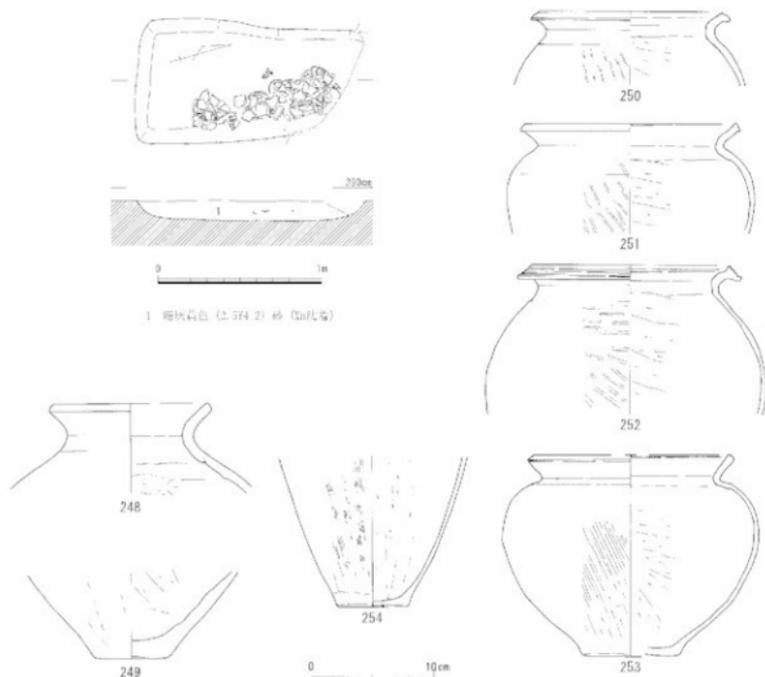
7 A区に位置する土壌で、竪穴住居2の東側1.5mにあり、東半分を近現代用水路で失う。検出時の規模は、長軸173cm以上、短軸110cm以上、深さ34cm、底面海拔高337cmを測る。平坦な底から壁が直線的に立ち上がる。埋土は地山塊を顕著に含み、出土遺物はない。時期は検出状況から後期か。

土壌28 (第25・82回、図版37)

7 A区の中央に位置する土壌で、井戸5の上部に重なる。検出時の平面形は長楕円形を呈し、長径180cm、短径104cm、深さ31cm、底面海拔高358cmを測る。平坦な底から壁がほぼ垂直に立ち上がる。埋土は砂層の一層で、洪水砂の可能性が高い。壺口縁部255~257はいずれも大形品の二重口縁で、256は土壌57の出土片と接合する。土壌の時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。

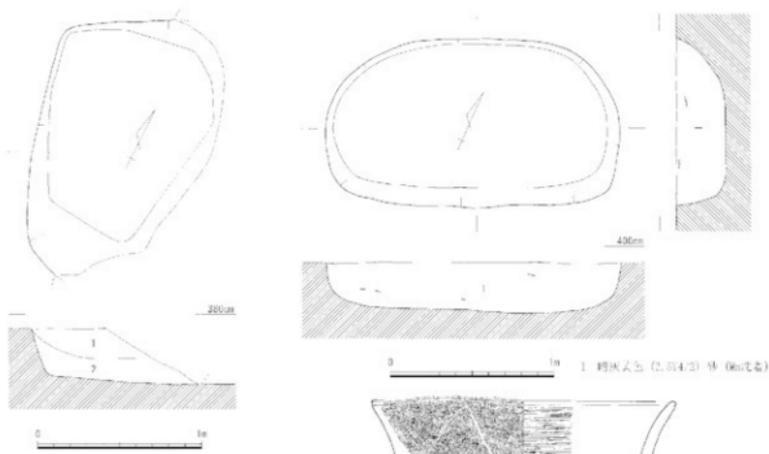
土壌29 (第25・83回)

7 A区に位置する土壌で、南半分を溝32に切られる。規模は、長径80cm以上、短径62cm以上、深さ17cm、底面海拔高352cmを測り、平面形は長円形と推定される。検出状況から後期と考えられる。



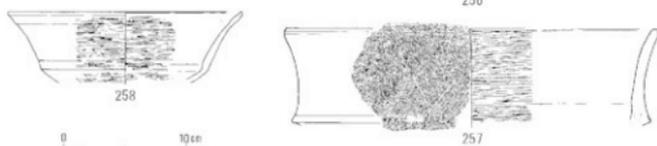
1 塚状高台 (2.374) 砂 (2m以上)

第30回 土壌26 (1/30)・出土遺物 (1/4)

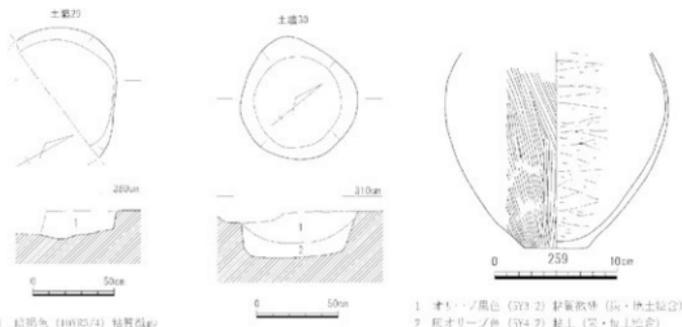


- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 高河土
 (地ニ陵多ク、泥・砂十約九、Mud石)
 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 高河土
 (砂・礫多ク)

第81図 土坑27 (1/30)



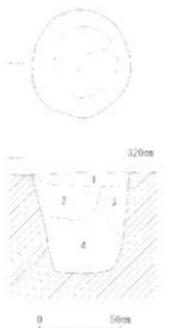
第82図 土坑28 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



- 1 粘褐色 (10YR5/4) 粘質砂土

- 1 赤・ブ黒色 (5Y3/2) 粘質軟土 (灰・粘土混じ)
 2 灰オリーブ色 (5Y4/7) 粘土 (灰・粘土混じ)

第83図 土坑29・30 (1/30) ・土坑30出土遺物 (1/4)



- 1 肥後赤色 (561/1) 粘土
 (粘土塊多量、灰・砂土少量)
 2 オリーブ褐色 (573/2) 粘質土
 (粘土塊多量、灰・砂土少量)
 3 オリーブ褐色 (573/2) 粘質土
 (粘土塊多量、灰・砂土少量)
 4 オリーブ褐色 (573/2) 粘土
 (粘土塊多量、灰・砂土少量)

第84図 土壌31 (1/30)

土壌30 (第25・83図)

6 B区の微高地端部に位置する土壌で、上部を近世の土取り遺構で大きく削平される。検出時の平面形は、径60～65cmの円形を呈し、底面海拔高は249cmを測る。その海拔高から井戸の底付近の残存した可能性がある。時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。

土壌31 (第25・84図)

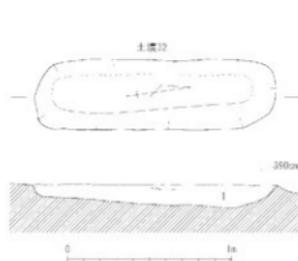
6 B区の微高地端部にあり、土壌30の南西側2.5mに位置する。上部を近世の土取り遺構で大きく削平される、底面海拔高は272cmを測る。出土遺物はなく、検出状況から後期と考えられる。

土壌32 (第25・85図)

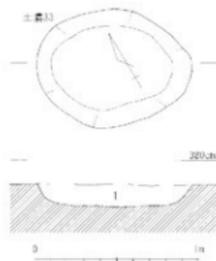
6 B区に位置する土壌で、上部を近世の土取り遺構で大きく削平される。底面海拔高は366cmを測る。出土遺物は少量の土器細片のみで、検出状況から後期と考えられる。

土壌33 (第25・85図)

6 B区に位置し、土壌32の西側に近接する土壌である。底面海拔高は351cmを測る。底はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈する。出土遺物はなく、検出状況から後期と考えられる。



- 1 灰黄褐色 (147/1) 粘質赤土 (灰黄土、36.2%灰)
 2 灰黄褐色 (147/2) 粘質赤土 (灰黄土、36.2%灰)



- 1 黄褐色 (147/2) 粘質赤土 (36.2%灰)

第85図 土壌32・33 (1/30)

土壌34 (第25・86図、図版9-2、3・36)

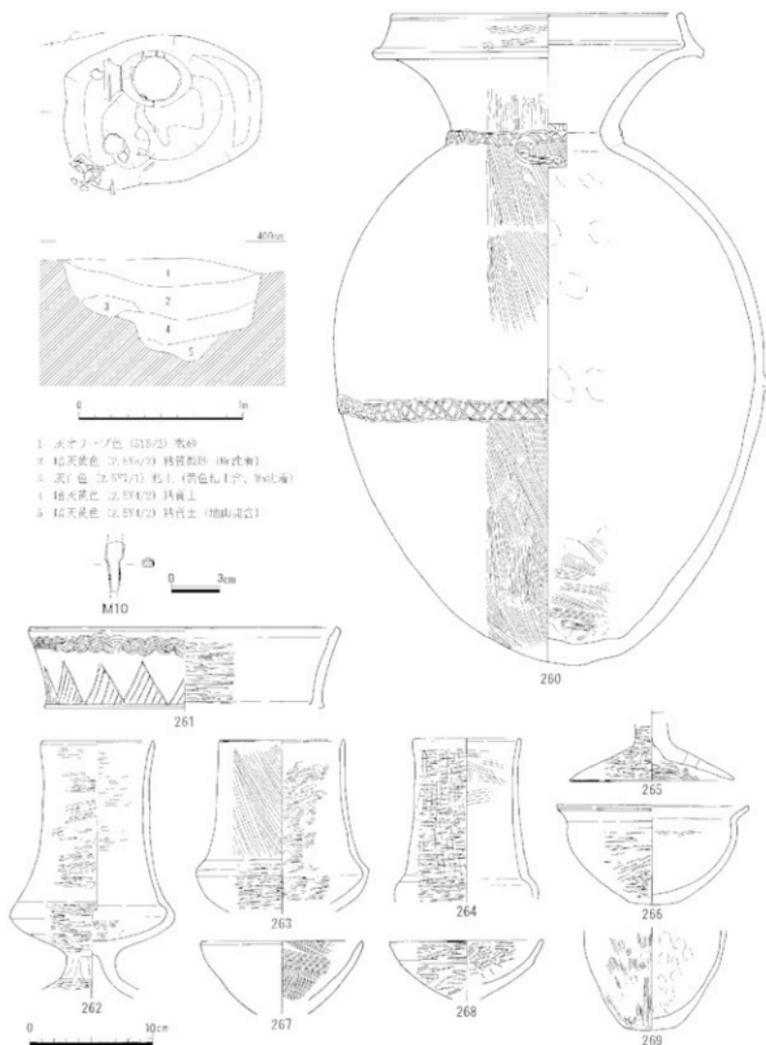
6・7 B区に位置する土壌で、溝21・22の埋没後に掘削される。検出時の平面形は、南北二辺が直線的で、東西二辺がやや弧状となる。規模は長軸120cm、短軸91cm、検出面からの深さは62cm、底面海拔高は327cmを測る。底は、南北向側の平坦面から中央が一段深くなるもので、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は5層である。第3層は粘土塊、最上層は後期末の洪水砂と考えられる。

遺物の出土状況は、上層に集中するもので、第4・5層からは少量の土器細片のみである。

図示した遺物は、壺260・261、台付直口壺262～264、甕269、高杯265、鉢266～268、鉄器M10である。壺260は、土壌内の西寄り、横向きに水平な状況で出土し、土壌検出時には胴部を後世の削平

で失った状態であった。その形態と胎土から大分県別府湾南岸からの搬入品と考えられる。その他の遺物は土壌内の南東部に偏って出土している。

土壌の時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。

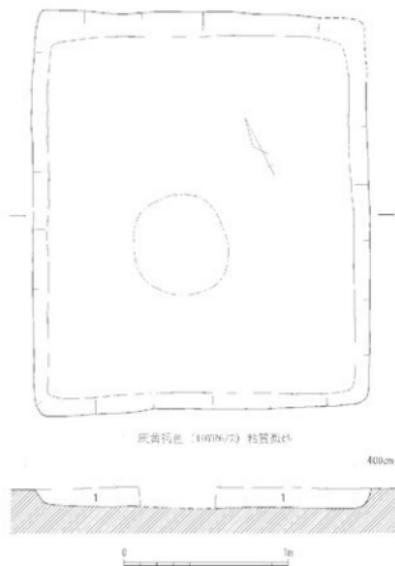


第86図 土壌34 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

土壌35 (第25・87図)

7B区に位置する土壌である。掘立柱建物1のP2に切れ、溝21よりも新しい。規模は長軸243cm、短軸203cm、深さ12cm、底面海拔高376cmを測る。底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。

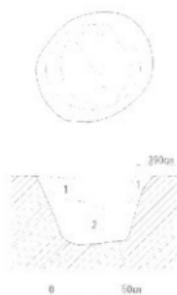
検出状況から後期と考えられる。



第87図 土壌35 (1/30)

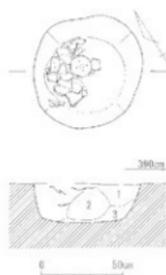
土壌36 (第25・88図)

7B区に位置する土壌である。土壌35の東に近接し、溝21・22埋没後に掘削される。第1層は、粘土塊で埋められた可能性が高い。出土遺物はないが後期と考えられる。

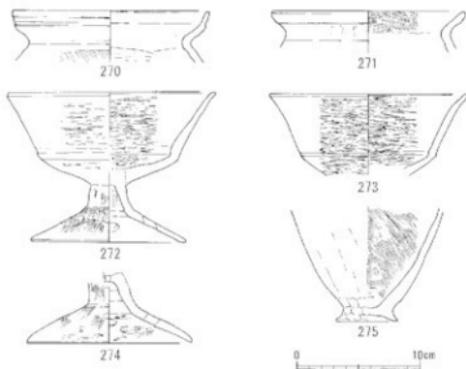


- 1 赤褐色土 (G. 37/2) 粘質砂 (埋没層で粘土塊・黄褐色粘土多量)
- 2 灰褐色土 (G. 37/2) 砂

第88図 土壌36 (1/30)



- 1 赤褐色土 (G. 37/2) 粘質砂 (埋没層で、黄褐色粘土多量)
- 2 黄褐色土 (G. 37/3) 粘土 (埋没層多量)
- 3 灰褐色土 (G. 37/2) 砂 (埋没層多量)



第89図 土壌37・出土遺物 (1/4)

土壌37 (第25・89図、図版37)

7 B区に位置する土壌である。土壌36の南東側1mにあり、溝23埋没後に掘削される。検出時の平面形は、65～73cmの円形を呈し、検出面からの深さは24cm、底面海拔高は357cmを測る。断面形は逆台形となる。第1・2層は、粘土塊で埋められた可能性が高く、土壌36と類似する。出土遺物は比較的多く、第1層に集中している。土壌の時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。

土壌38 (第25・90図)

7 A・B区に位置し、溝3・4・20の掘り下げ中に確認した土壌である。土壌東半部は近世用水路に切られる。このため平面形は不明で、南北310cm、東西117cm以上の規矩と考えられる。検出面からの深さは27cm、底面海拔高は332cmを測り、底に凹凸がある。出土遺物は少量の上器片のみである。

土壌39 (第25・91図)

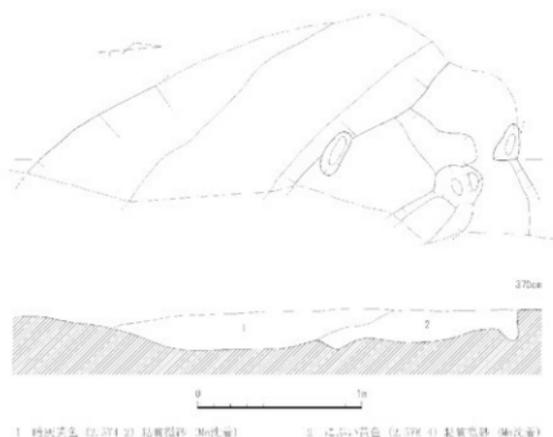
7 B区に位置し、溝3・4・20の掘り下げ中に確認した土壌で、後期と考えられる。

土壌40 (第25・91図)

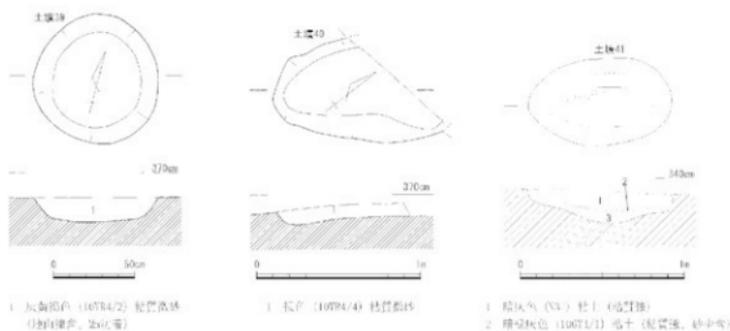
7 A区に位置し、古墳時代の溝33に土壌北半部を切られる。

土壌41 (第25・91図)

7 A区に位置し、近現代用水路の底面から検出した土壌である。時期は後期と考えられる。



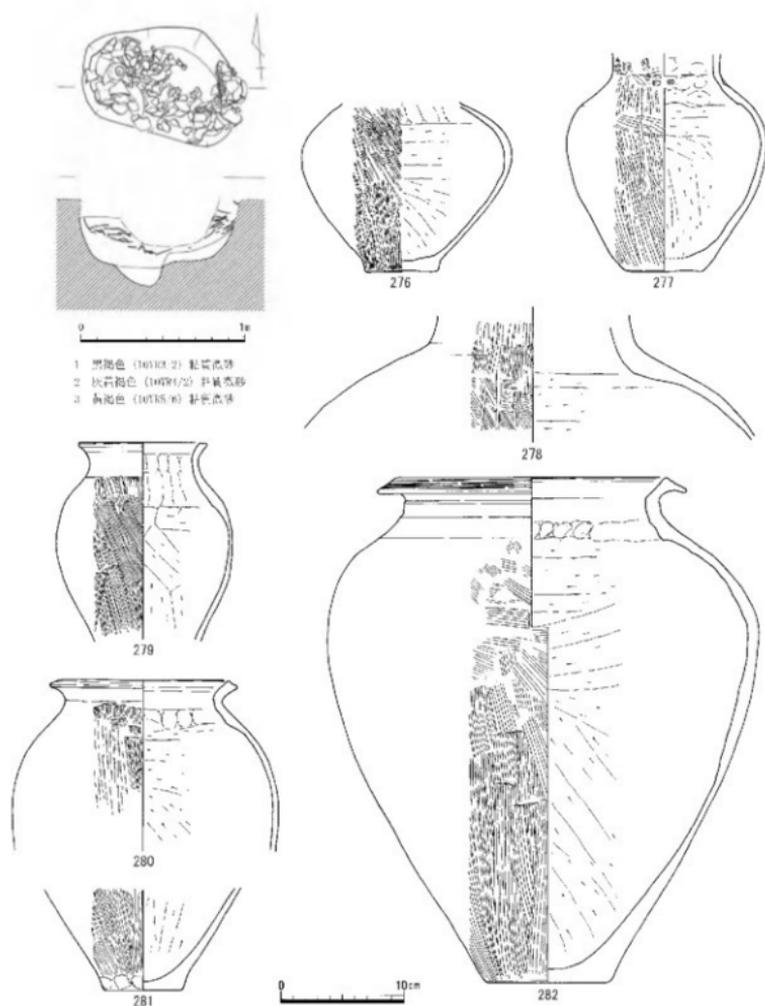
第90図 土壌38 (1/30)



第91図 土壌39～41 (1/30)

土壙42 (第25・92・93図、図版37)

8 A区の調査区端に位置する土壙で、近現代用水路底面で検出した。古墳時代後期の掘立柱建物6の柱穴に一部を切られる。検出時の平面形は、不整長楕円形を呈し、長径102cm、短径69cm、深さ54cm、底面海拔高は323cmを測る。底は中央が一段落ち込み、壁はほぼ垂直に立ち上がる。



第92図 土壙42 (1/30)・出土遺物① (1/4)

出土遺物は多量の土器が主に上層から出土した。図示したものは、壺276～279、甕280～282、高杯286、鉢283～285である。

土城の時期は、出土遺物から百・後・Iと考えられる。

土城43 (第25・94図)

8 A区の調査区端に位置する土城である。検出時の平面形は、長径89cm、短径58cmの長楕円形を呈し、深さ19cm、底面海拔高は352cmを測る。底は二段に落ち込み、西側に浅い平坦面を持つ。遺物は底面から浮いた状態で出土している。

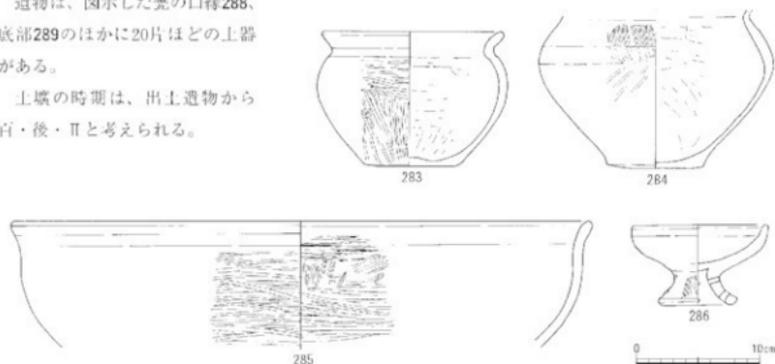
土城の時期は、出土遺物から百・後・IVと考えられる。

土城44 (第25・95図)

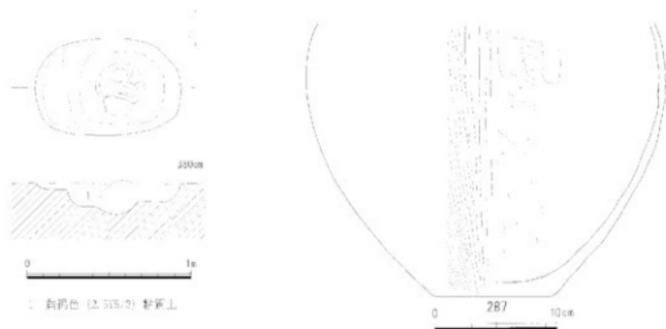
8 A区の調査区端に位置する土城で、土城43の南側に近接する。検出時の平面形は、長径112cm、短径48cmの不整形長楕円形を呈し、深さ26cm、底面海拔高は329cmを測る。底は二段に落ち込み、東側に平坦面を持つ。

遺物は、図示した壺の口縁288、底部289のほかには20片ほどの土器がある。

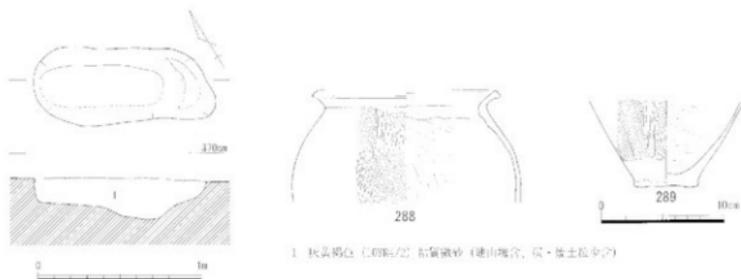
土城の時期は、出土遺物から百・後・IIと考えられる。



第93図 土城42出土遺物② (1/4)



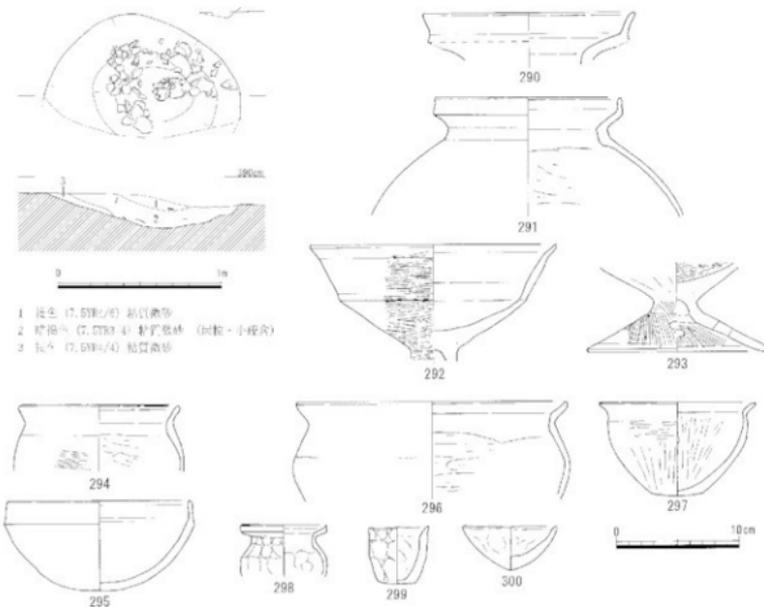
第94図 土城43 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第95図 土壙44 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壙45 (第25・96図、図版10-1・37)

8 A区の調査区に位置する土壙で、近現代用水路で西半部を失う。平面形は径120cm前後の円形を呈すると考えられ、検出面からの深さ21cm、底面海拔高は359cmを測る。底は二段に落ち込み、断面形は皿状を呈する。図示した遺物は、壺290、甕291、高杯292・293、鉢294～297、手捏ね土器298～300である。出土遺物は、百・後・IV～百・古・Iと考えられる。



第96図 土壙45 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌46 (第25・97・98図、図版10-2・38)

8 A区に位置する土壌で、掘立柱建物2の東側に近接する。南辺を近現代用水路で切られて失う。検出時の平面形は、長軸274cm、短軸213cmの隅丸方形を呈し、深さ42cm、底面海拔高は336cmを測る。底は平坦で、壁は垂直か急斜に立ち上がる。埋土は3層で、ほぼ水平に堆積するが、地山塊や炭・焼土粒が目立つ。

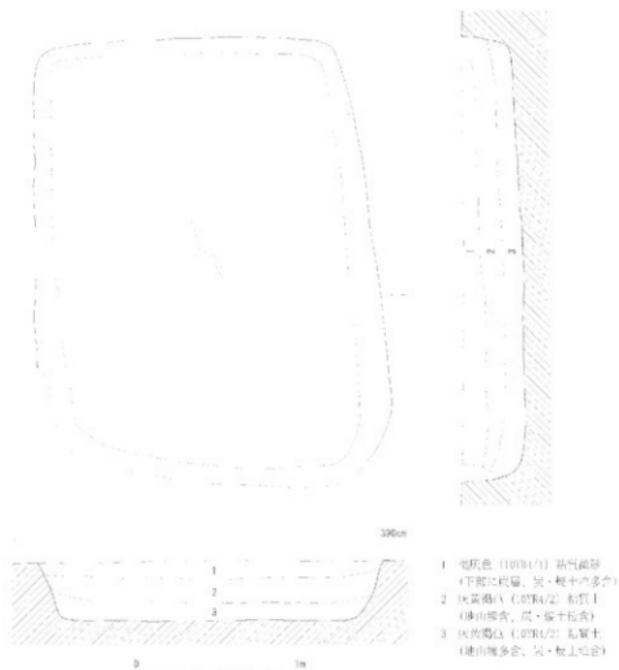
遺物は、整理箱1箱程度の土器と石器1点が出土している。図示した土器は、帯301、直口帯302、甕303～310、高杯311～314、鉢315～319、器台320である。また、S33はサヌカイト製の楔である。

土壌の時期は、出土遺物から百・後・Ⅳと考えられる。

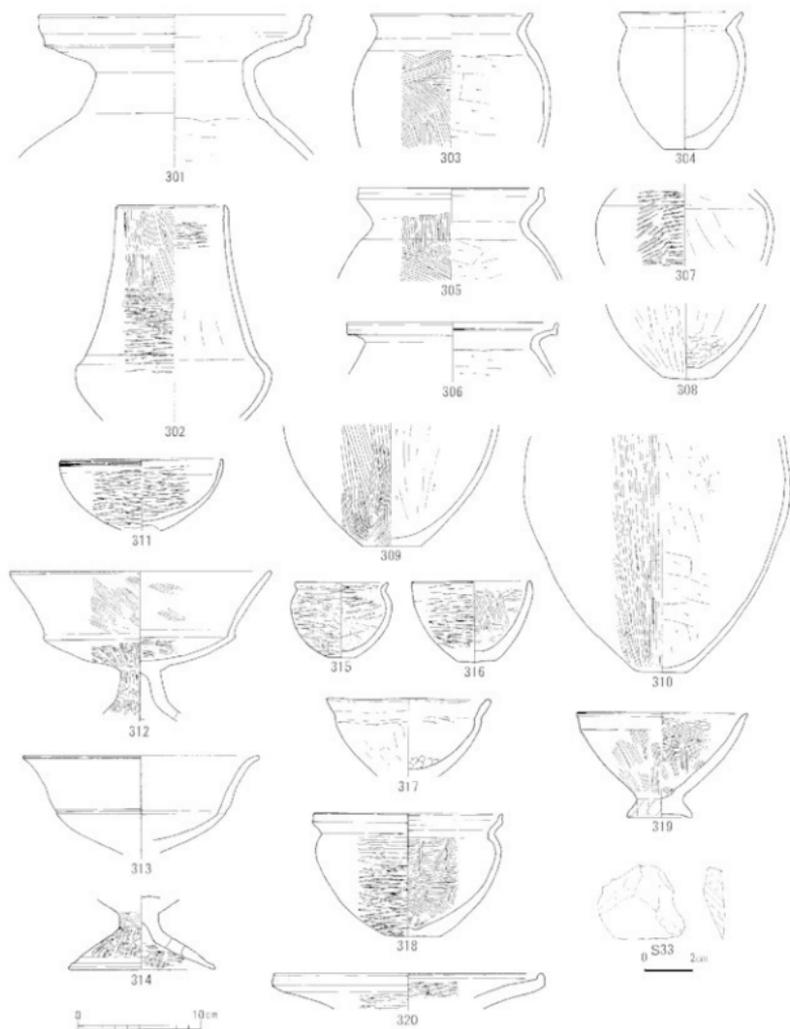
土壌47 (第25・99図、図版10-3)

8 A区の調査区端に位置する土壌で、土壌46の西側1.5mにあり、掘立柱建物2に重なる。また、東辺を近現代用水路で切られて失う。検出時の平面形は、長軸164cm、短軸147cmの隅丸方形を呈し、深さ46cm、底面海拔高は325cmを測る。底は一部が浅く落ち込むものの、ほぼ平坦である。壁は垂直か急斜に立ち上がる。埋土は1層で、地山塊を顕著に含む。

遺物は少量の上器のみで、図示しうるものはない。土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。



第97図 土壌46 (1/30)



第98図 土壇46出土遺物 (1/4・1/2)

土壇48 (第25・100図)

8 A区の調査区隅に位置する土壇で、土壇46の東側1.5mにあり、北辺を近現代用水路で切られる。検出時の平面形は、長軸169cm、短軸125cm以上の隅丸方形を呈し、深さ46cm、底面海拔高は332cmを

測る。底は平坦で、西側に段をもつ。壁は垂直か急斜に立ち上がる。埋土は、地山塊を顕著に含む。図示した遺物は、張321、鉢322である。土壌の時期は、出土遺物からⅢ・後・Ⅳと考えられる。

土壌49 (第25・101図)

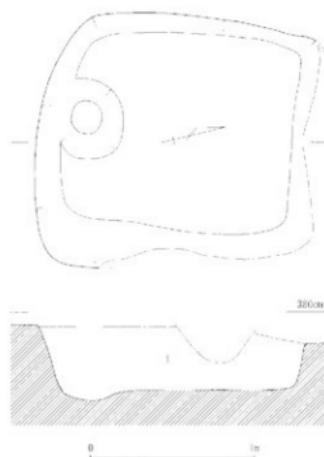
8 A区の調査区に位置する土壌で、掘立柱建物3の柱穴に切られる。検出時の平面形は、長軸152cm、短軸129cmの隅丸方形を呈し、深さ23cm、底面海拔高は333cmを測る。底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。埋土は、地山塊を顕著に含む。遺物は少量の土器のみである。

土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。

土壌50 (第25・102図)

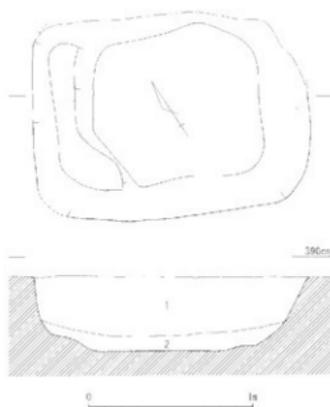
8 A区に位置する土壌で、土壌50よりも新しい。検出時の平面形は、径226cm前後の円形を呈し、深さ40cm、底面海拔高は302cmを測る。底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少量の土器のみである。

時期は、検出状況から後期と考えられる。

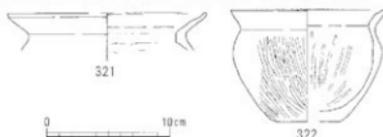


1 坑底褐色 (10978/2) 粘質土 (地・塊多含)

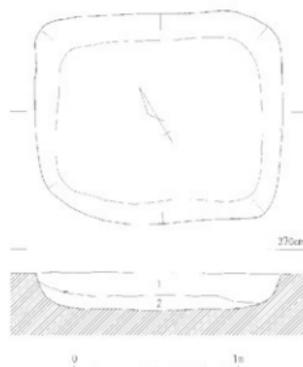
第99図 土壌47 (1/30)



1 坑底褐色 (10974/2) 粘質土 (地・塊多含、炭・焼土粒含、陶片混)
2 坑底褐色 (10977/2) 粘質土 (地・塊多含、炭・焼土粒多含)



第100図 土壌48 (1/30)・出土遺物 (1/4)

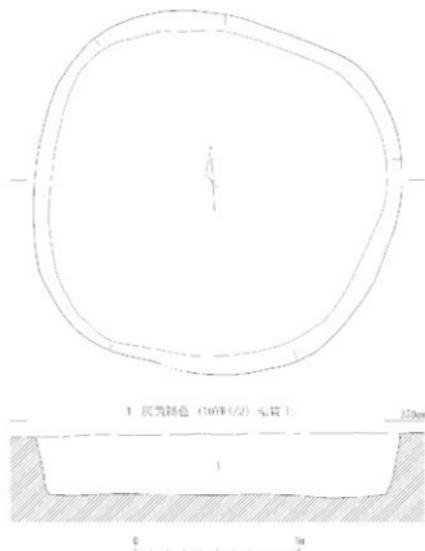


1 坑底褐色 (10974/2) 粘質粘砂
(地・塊多含、炭・焼土粒含)
2 坑底白褐色 (10975/2) 微砂質土
(地・塊多含、炭・焼土粒含)

第101図 土壌49 (1/30)

土壌51 (第25・103図、図版38)

8 A区に位置する土壌である。後述の土壌51と重なり、古いことを確認した。また、掘立柱建物3とも重なるが先後関係は不明である。検出時の平面形は、長径116cm、短径70cmの長楕円形を呈し、深さ14cm、底面海拔高は359cmを測る。底は丸みをもち、断面形は楕形を呈する。



第102図 土壌50 (1/30)

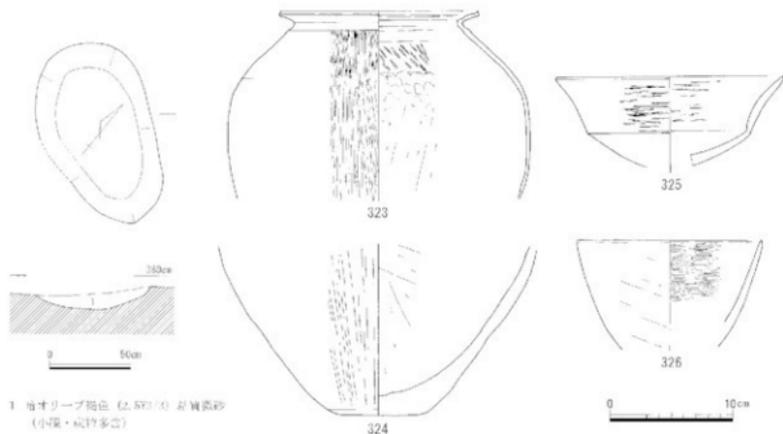
図示した遺物は、甕323・324、高杯325、鉢326である。高松平野産甕323の内面の頸部直下には工具による刺突が顕著に見られる。

土壌の時期は、出土遺物から百・後・IVと考えられる。

土壌52 (第25・104図)

8 A区に位置し、土壌53に切られる。検出時の平面形は、長軸122cm、短軸76cmの隅丸長方形を呈し、深さ43cm、底面海拔高は310cmを測る。平坦な底からオーバーハングして壁が立ち上がり、断面形は袋状を呈する。埋土の第1・2層は砂層で、第3層が粘土層である。

遺物は少量の土器細片のみである。



第103図 土壌51 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。

土壌53 (第25・104図)

検出時の平面形は不定形で、長軸124cm、短軸80cm、深さ26cm、底面海拔高は347cmを測る。底は平坦で、壁が垂直か急斜に立ち上がる。埋土は微砂で、後期末の洪水砂あるいはその再堆積と考えられる。遺物は少量の土器細片のみである。

土壌の時期は、検出状況から後期と考えたい。

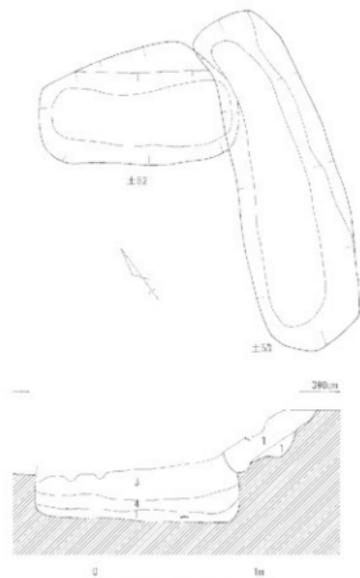
土壌54 (第25・105図)

8A区に位置するもので、土壌53の東側に接する。検出時の平面形は、長径213cm、短径62cmの長楕円形を呈し、深さ39cm、底面海拔高は349cmを測る。底は凹凸があり、壁が急斜に立ち上がる。埋土は微砂で、洪水砂あるいはその再堆積と考えられる。遺物は少量の土器細片のみである。

時期は、検出状況から後期と考えられる。

土壌55 (第25・106図)

7A区に位置するもので、検出時の平面形は、径72cmの円形を呈し、深さ67cm、底面海拔高は305cmを測る。底は凹凸があり、急斜に立ち上がる壁の途中にも段がある。遺物は少量の土器細片のみである。柱穴の可能性が高いが、周囲に対応するものはない。時期は後期と考えられる。



- 1 黄褐色 (2.5Y5/1) 微砂
- 2 灰色 (10Y5/6) 微砂
- 3 ヌリブ褐色 (2.5Y/1) 微砂
- 4 ヌリブ褐色 (2.5Y/1) 砂
- 5 竹才シロフ灰白 (2.50Y3/1) 粘土

第104図 土壌52・53 (1/30)



- 1 暗灰褐色 (2.5Y2/3) 粘質微砂 (灰・黄土相混)
- 2 灰褐色 (2.5Y5/2) 粘砂質土
- 3 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土 (粘土・粘合、Wt沈着多)

第105図 土壌54 (1/30)



- 1 灰褐色 (10Y5/2) 粘質微砂 (Wt沈着)
- 2 灰・黄褐色 (10Y5/4) 粘質微砂 (Wt沈着)
- 3 暗灰黄色 (2.5Y/2) 粘質微砂 (灰・黄土相混、Wt沈着)
- 4 暗灰黄色 (2.5Y/2) 粘質微砂 (Wt沈着、灰・黄土相混)

第106図 土壌55 (1/30)

土壌56 (第25・107図、図版11-1・37)

7 A区南隅に位置する土壌である。検出時の平面形は、径39~54cmの長筒円形を呈し、深さ15cm、底面海拔高は351cmを測る。底は平坦で、急斜に壁が立ち上がる。

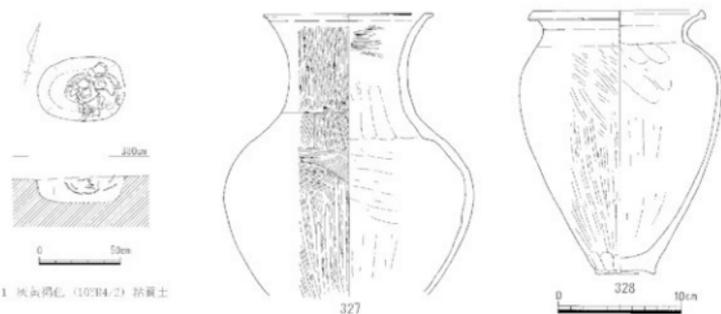
図示した遺物は、壺327、甕328である。土壌の時期は、出土遺物から百・後・Ⅱと考えられる。

土壌57 (第25・108図)

7 A区南隅に位置する土壌である。不定な平面形を呈し、長軸115cm、短軸80cm、深さ36cm、底面海拔高は330cmを測る。底は数段に落ち込み、ピット状も見られる。329は壺の11縁部外面に櫛掻き波状文の施文後、円形浮文を貼り付け、内面に波状文を施す。時期は、百・後・Ⅳと考えられる。

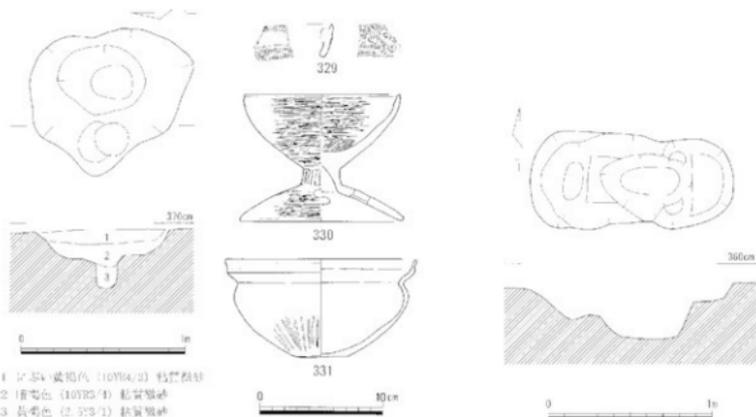
土壌58 (第25・109図)

A区の8ライン上に位置する土壌で、土壌57の南側に近接する。遺物は少量の土器細片のみである。土壌の時期は、検出状況から土壌57と近接した時期が考えられる。



1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土

第107図 土壌56 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質砂砂
2 黄褐色 (10YR5/4) 粘質砂砂
3 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質砂砂

第108図 土壌57 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第109図 土壌58 (1/30)

土壌59 (第25・110図)

7A区南隅に位置する土壌である。検出時の平面形は不定形なもので、長軸164cm、短軸71cm、深さ20cm、底面海拔高は340cmを測る。断面形は碗形を呈し、底はほぼ平坦となる。遺物は少量の土器細片のみである。土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。

土壌60 (第25・111図)

7A区南隅に位置する土壌である。検出時の平面形は歪な楕円形で、長径98cm、短径90cm、深さ29cm、底面海拔高は323cmを測る。底はほぼ平坦であるが、南西隅に小ピットをもつ。壁は急斜に立ち上がる。遺物は少量の土器細片のみである。

土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。

土壌61 (第25・111図)

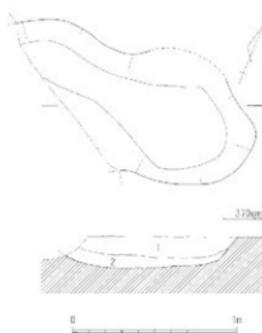
7A区南隅に位置する土壌である。検出時の平面形は、径60～75cmの楕円形を呈し、深さ70cm、底面海拔高は294cmを測る。底は二段に落ち込み、壁が急斜に立ち上がる。遺物は少量の土器細片のみである。柱穴の可能性も高いが、周囲に対応するようものはない。

時期は、検出状況から後期と考えられる。

土壌62 (第25・111図)

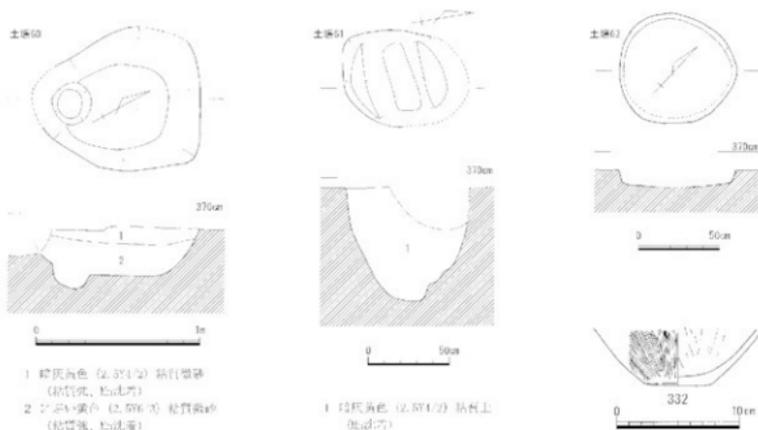
7B区の東隅に位置する土壌である。検出時の平面形は、径66～72cmの円形を呈し、深さ11cm、底面海拔高は348cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底はほぼ平坦となる。遺物は少量の土器細片のみである。

土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。



1 惣輪盆 (0.078x0.2) 粘質陶砂
2 胎輪盆 (0.078x0.2) 粘質陶砂 (断面確認)

第110図 土壌59 (1/30)



1 暗灰黄色 (2.5Y1/2) 粘質陶砂
(粘質陶、粘土層)
2 シロ・黄赤 (2.5Y5/3) 粘質陶砂
(粘質陶、粘土層)

1 暗灰黄色 (2.5Y1/2) 粘質土
(粘土層)

第111図 土壌60～62 (1/30)・土壌62出土遺物 (1/4)

土壙63 (第25・112図)

7 B区に位置する土壙である。土壙64に西半部を切られる。検出時の規模は、南北74cm、東西75cm以上、深さ32cm、底面海拔高は320cmを測る。遺面形は隅丸方形と推定する。断面形は逆台形を呈し、底はほぼ平坦となる。遺物は少量の土器破片のみである。土壙の時期は、検出状況から後期と考えられる。

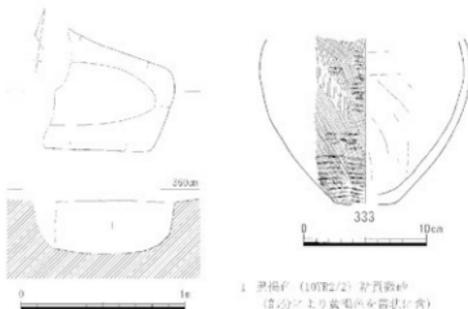
土壙64 (第25・113図、図版11-2)

7 B区に位置する土壙である。土壙63を切っている。検出時の平面形は、長軸157cm、短軸91cmの隅丸長方形を呈し、深さ49cm、底面海拔高は301cmを測る。底はほぼ平坦となり、壁面は南北の両短辺側が袋状にオーバーハングする。

埋土は4層で、炭と焼土塊で充填した最下層が底面中央に盛り上がる。また、第2層に見られるような炭・焼土塊が特に第1層下部にも多く見られる。

遺物は少量の土器片で、図示したものは甕の底部334である。

土壙の時期は、出土遺物から百・後・IVと考えられる。



第112図 土壙63 (1/30)・出土遺物 (1/4)

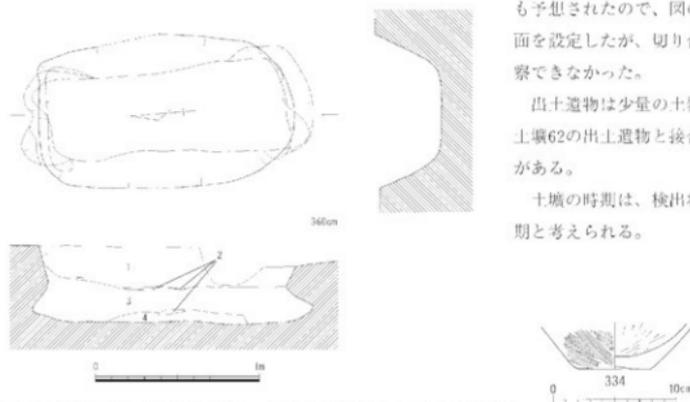
土壙65 (第25・114図)

7 B区に位置する土壙である。検出時の平面形は不定形を呈し、規模は東西84cm、南北73cm、深さ36cm、底面海拔高は330cmを測る。底は数段に落ち込み、壁が急斜に立ち上がる。

2基の土壙が重なっていることも予想されたので、図の位置に断面を設定したが、切り合い等は観察できなかった。

出土遺物は少量の土器片だが、土壙62の出土遺物と接合する破片がある。

土壙の時期は、検出状況から後期と考えられる。



第113図 土壙64 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

土壌66 (第25・114図)

8区のBライン上に位置する土壌である。検出時の平面形は、長径95cm、短径66cmの楕円形を呈し、深さ60cm、底面海拔高は297cmを測る。底は二段に落ち込み、壁が垂直近くに立ち上がる。

出土遺物はなく、検出状況から後期と考えられる。

土壌67 (第25・115図、図版38)

8A区に位置し、土壌66の東側に近接する土壌である。北側を古墳時代の溝34に切られる。検出時の平面形は、溝状の長楕円形を呈し、長さ161cm以上、幅53cm、深さ28cm、底面海拔高は325cmを測る。底は長軸方向がほぼ一定の深さで、短軸方向が丸みをもつ腕形の断面形状となる。

図示した出土遺物は、ほぼ完形の壺335と鉢336である。壺335の内面調整はヘラケズリ後ハケメを施す。

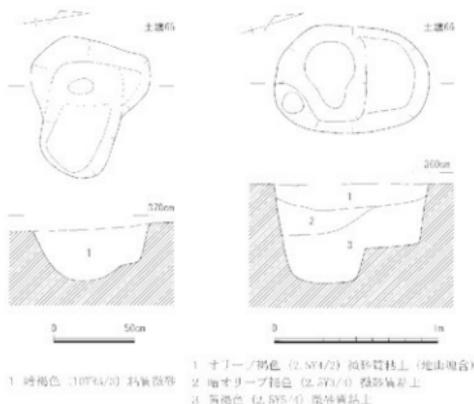
土壌の時期は、出土遺物から百・後・Ⅱと考えられる。

土壌68 (第25・116図)

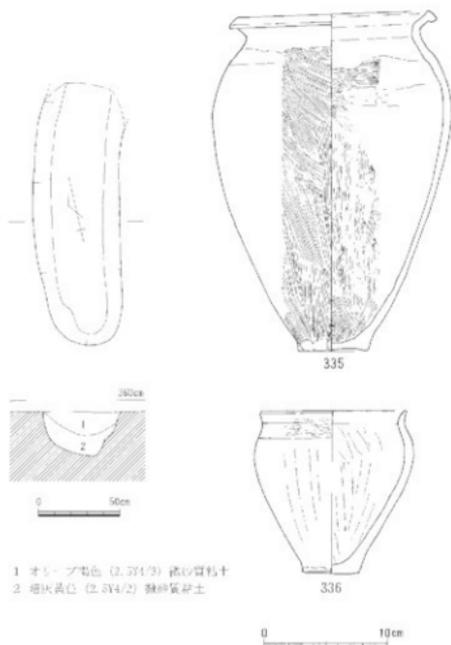
B区の8ラインに位置する土壌である。検出時の平面形は、長軸222cm、短軸186cmの隅丸方形を呈し、深さ19cm、底面の海拔高は338cmを測る。底は平坦で、壁が急斜に立ち上がる。

埋土は、後期末の洪水砂に類似する微砂の2層で、いずれも地山塊を含むが、特に下層において顕著である。

出土遺物はなく、検出状況から後期と考えられる。



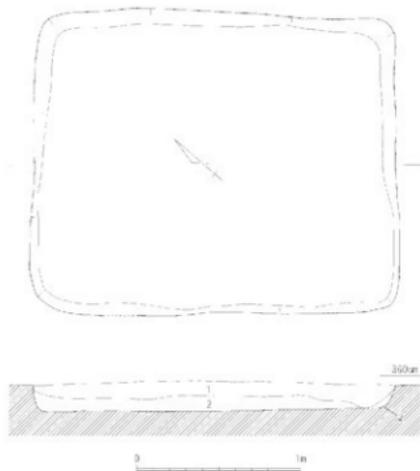
第114図 土壌65・66 (1/30)



第115図 土壌67 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

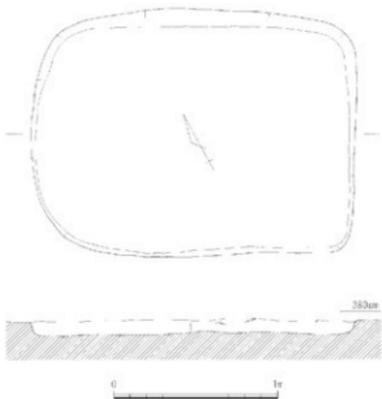
土壌69 (第25・117図)

8 B区の中央に位置する土壌である。掘立柱建物4の北側1.5m、竪穴住居6の北側3mにある。



- 1 灰土層 (10795/2) 雑砂 (老山層含)
2 赤い黄褐色 (10795/3) 雑砂 (建坪地層多含)

第116図 土壌68 (1/30)



- 1 暗棕色 (10793/4) 粘質砂

第117図 土壌69 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

検出時の平面形は、西辺がやや弧状となる隅丸方形を呈し、長軸200cm、短軸150cm、深さ10cm、底面海拔高は365cmを測る。底はほぼ平坦で、壁が急斜に立ち上がる。

図示した出土遺物は、壺337、甕338～341、鉢342、石鉢S34である。

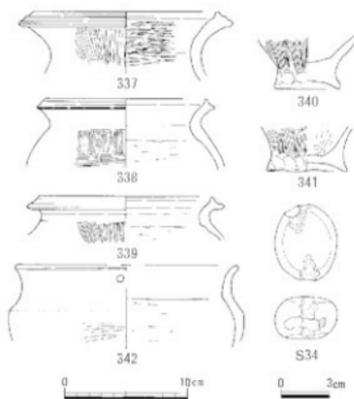
土壌の時期は、出土遺物から百・後・IIと考えられる。

土壌70 (第25・118図)

7 C区に位置する土壌で、竪穴住居4の南側1mにある。検出時の平面形は、長楕円形を呈するもので、その規模は、長径149cm、短軸73cmと推定され、深さ50cm、底面海拔高は319cmを測り、底は数段に落ち込む。

図示した高杯343のほか、数片の高杯片がある。

土壌の時期は、出土遺物から百・後・IIIと考えられる。

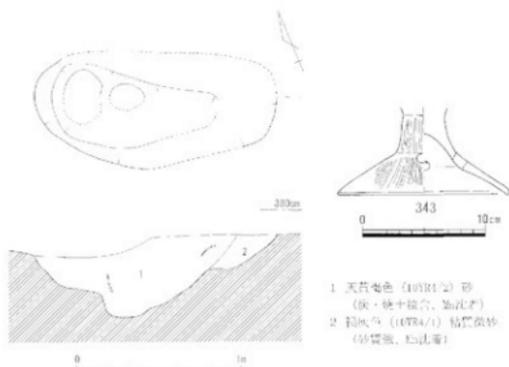


土壌71 (第25・119図)

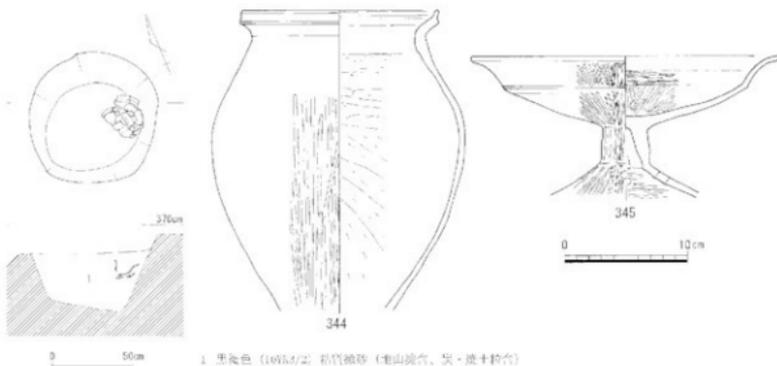
7 C区に位置する土壌で、竪穴住居4の南側2mにある。検出時の平面形は、径80~84cmの円形を呈し、深さ47cm、底面海拔高は317cmを測る。断面形は逆台形で、底はやや傾斜する。

図示した遺物は、壺344、高杯345で、いずれも土壌西側からまとまった状態で出土した。

土壌の時期は、百・後・Ⅲと考えたい。



第118図 土壌70 (1/30)・出土遺物 (1/4)



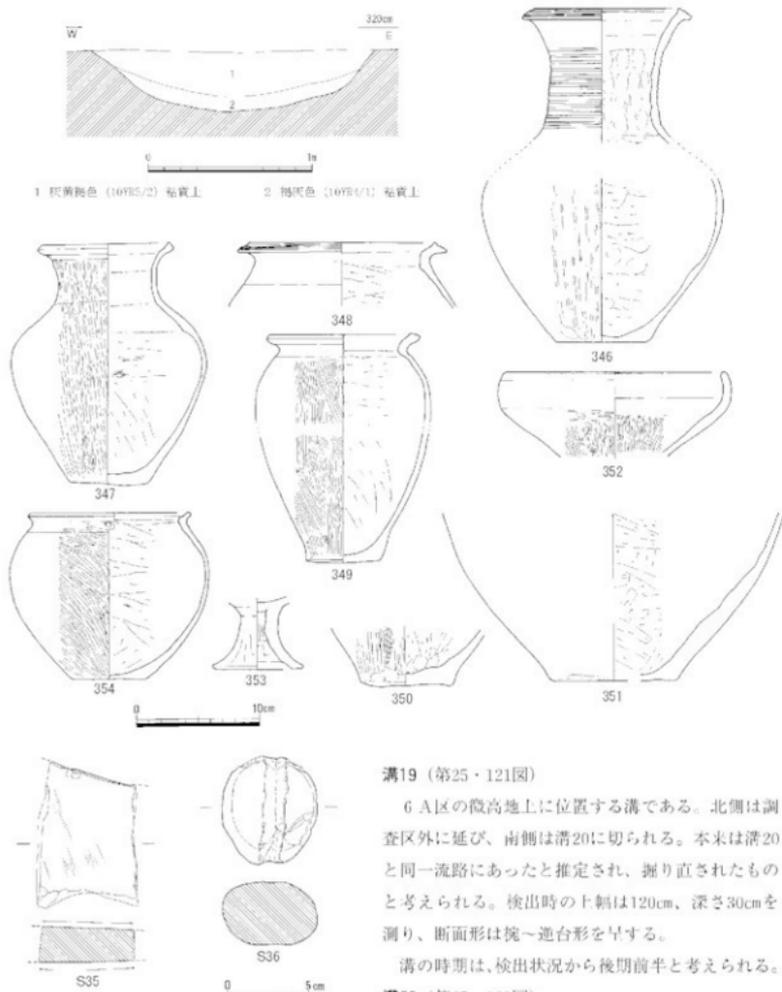
第119図 土壌71 (1/30)・出土遺物 (1/4)

(7) 溝

溝18 (第5・25・120図、図版38)

5・6 B・C区の低位部に位置し、後期末の水田耕作土の除去後に検出した溝である。微高地端部に沿ってやや弧を描きながら南流するもので、両端は調査区外に延び、南側は「百間川原尾島遺跡3」の「溝7」に接続すると思われる。検出時の上幅は173cm、深さ38cmを測り、断面形は腕形を呈する。比較的多くの遺物が出土しており、図示したものは、壺346・347・351、壺348~350、高杯353、鉢352・354、瓦石S35、石鍾S36である。

溝の時期は、出土遺物から百・後・Ⅰと考えられ、水田2は本溝の埋没後に拓かれたものと考えられる。



第120図 溝18 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

6 A区の微高地上に位置する溝である。北側は調査区外に延び、南側は溝20に切られる。本来は溝20と同一流路にあったと推定され、掘り直されたものと考えられる。検出時の上幅は120cm、深さ30cmを測り、断面形は椀～逆台形を呈する。溝の時期は、検出状況から後期前半と考えられる。

溝19 (第25・121図)

6・7 A～C区に位置し、微高地上を南流する溝である。内堀は調査区外に延び、南側は「白濁川原尾島遺跡3」の「溝13」に接続すると考えられる。下部には先述した弥生時代中期後半の溝3がほぼ重なるようにあり、弥生時代前～中期の微高地端の高所を連線と掘削した溝群の最終流路と考えられる。検出時の上幅は243cm、深さ50cmを測り、断面形は椀～逆台形を呈する。図示した土器は溝3からの混入か。溝の時期は、検出状況から後期前半と考えられる。

溝20 (第25・121図)

6・7 A～C区に位置し、微高地上を南流する溝である。内堀は調査区外に延び、南側は「白濁川原尾島遺跡3」の「溝13」に接続すると考えられる。下部には先述した弥生時代中期後半の溝3がほぼ重なるようにあり、弥生時代前～中期の微高地端の高所を連線と掘削した溝群の最終流路と考えられる。検出時の上幅は243cm、深さ50cmを測り、断面形は椀～逆台形を呈する。図示した土器は溝3からの混入か。溝の時期は、検出状況から後期前半と考えられる。

溝21・22 (第25・122図)

6・7 A～C区の微高地を南流する溝で、後期後半の多くの遺構に切られる。6 A中央付近で始まる溝21がBライン以南で分流し、約15m下流で再び合流する部分を溝22とする。南側は「百岡川原尾馬遺跡3」の「溝7」に接続すると考えられる。

検出時の規模は、溝21の上幅59cm、深さ21cm、溝22の上幅67cm、深さ16cmを測り、断面形はいずれも碗形を呈する。溝の時期は、検出状況から後期と考えられる。

溝23 (第25・122図)

7 B区に位置し、溝22の東側1mに並流する溝である。北端を井戸4、南側を溝24に切られる。検出時の規模は、長さ7.3m、上幅30cm、深さ5cmを測り、断面形は皿形を呈する。検出状況から後期前半か。

溝24 (第25・122図)

7 B区に位置し、溝28の北側1.5mに並流する溝である。西端を近世土取り遺構で切られるが、本来は微高地端から低部位に注いでいたものと考えられる。検出時の規模は、長さ8.5m、上幅30cm、深さ20cmを測り、断面形は進台形を呈する。検出状況から溝25に先行する竪穴住居5の排水溝と考えたい。

溝25 (第25・123図、図版38)

7・8 B区に位置する溝で、微高地端に直交する東西方向の溝である。東半部は溝5などの遺構で切られるために途切れがちだが、竪穴住居5 Bに接続し、同住居の排水溝と考えられる。また、西端は近世土取り遺構で切られるが、溝24同様、本来は微高地端から低部位に注いでいたものと考えられる。

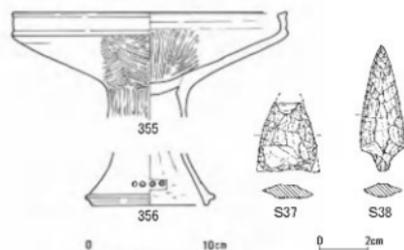
検出時の規模は、上幅55cm、深さ49cmを測り、断面形は進台形を呈する。最上層の砂は後期末の洪水砂層と考えられる。

図示した出土遺物は、壺357・358、高杯359、鉢360で、いずれも第2層以下で出土している。

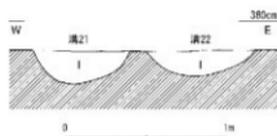
溝の時期は、検出状況と出土遺物から百・後・IVと考えられる。



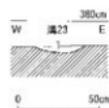
- 1 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質微砂 (根・糠土粒含)
- 2 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘質微砂 (根・糠土粒含)
- 3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質微砂 (炭・焼土粒含)
- 4 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂 (地山塊多含、根・焼土粒含)
- 5 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂 (炭・焼土粒含)
- 6 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂 (地山塊多含、根多含)



第121図 溝5・19・20 (1/60)・出土遺物(1/4・1/2)



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂 (砂質泥、下部地山塊多含、Mn2+富)

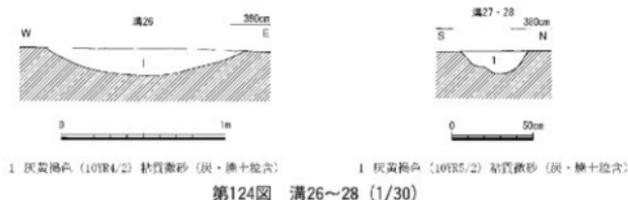


- 1 濃い黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂 (糠土粒含)



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂 (Mn沈着)
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂 (Mn沈着)

第122図 溝21～24 (1/30)



溝26 (第25・124図)

7 B・C区に位置し、溝20の西側1.7mに並流する溝である。南側は「百間川原尾島遺跡3」の「溝9」に接続すると考えられる。出土遺物はないが、検出状況から後期前半と考えたい。

溝27・28 (第25・124図)

8区のBライン上に位置し、「X」字状に交差する溝である。東側は調査区外に延び、西側は近現代用水路に切られるため不明である。調査区東壁での規模は、溝27が上幅52cm、深さ30cm、溝28が上幅27cm、深さ24cmを測り、断面形はいずれも椀形を呈する。検出状況から後期と考えたい。

(8) 水田

水田2 (第25・125図、図版11)

5・6 B・C区の低位部に検出した洪水砂埋没水田である。微高地側を近世の上取り溝構で切られるため、畦畔の微高地への取り付け状況は5 C区東隅で確認したのみである。畦畔は「田」字状に設けられ、その上幅は10~20cm、下幅は35~45cm、高さは2~4cmを測る。水口は南北畦畔に1か所確認している。田面の海拔高は、5 A区の微高地際で315cm、5 C区の調査区南西端で300cm前後を測る。



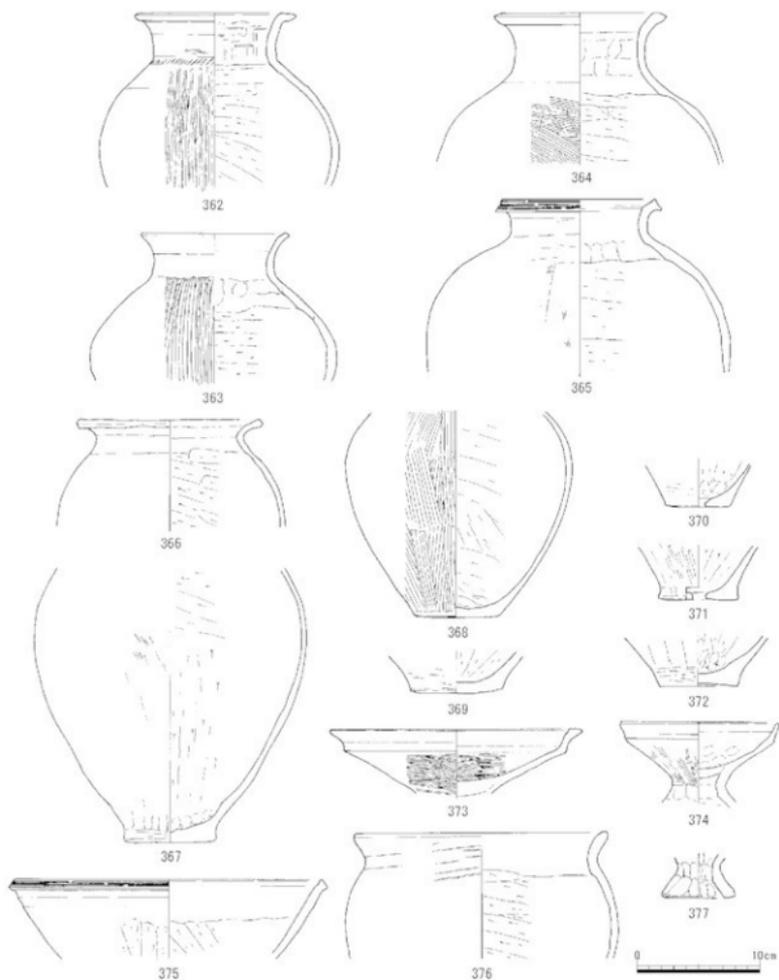
第125図 水田2
出土遺物 (1/4)

図示した遺物は、壺の頸部361で、貼付け糸帯上にヘラ状工具による深い刻みを施している。

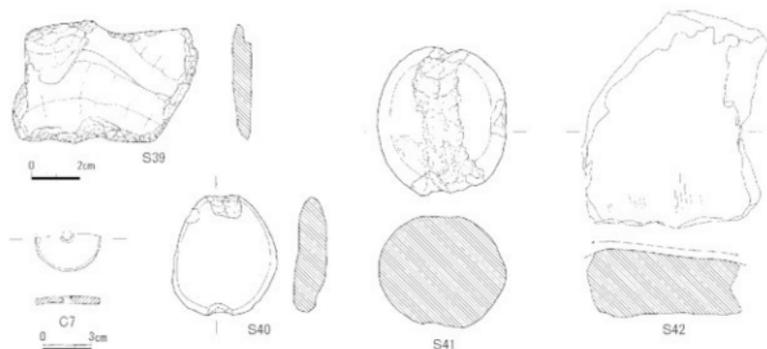
(9) 土器溜まり

土器溜まり1 (第25・126・127図)

7 A区に位置する土器溜まりである。溝20の上部、5×5mの範囲に土器集中する。図示したのは、壺362～365、甕366～372、高杯373・374、鉢375・376、製塩土器377で、甕底部370・371には焼成後穿孔が見られる。また、スクレイパーS39、石錘S40・41、砥石S42、土製紡錘車C7がある。



第126図 土器溜まり1出土遺物① (1/4)

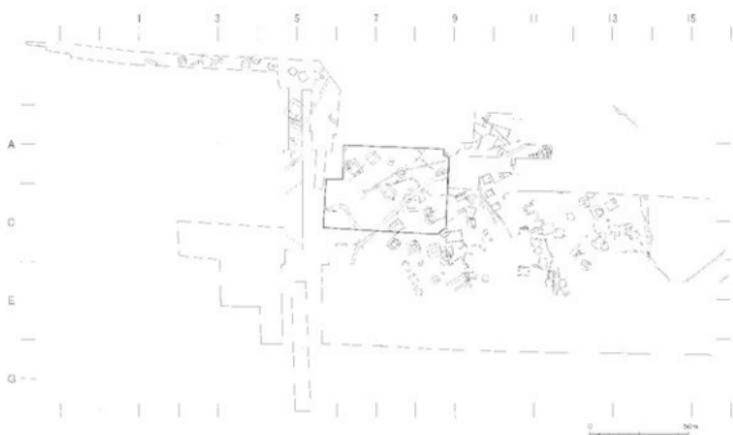


第127図 土器溜まり1出土遺物② (1/3・1/2)

3 古墳時代の遺構・遺物

(1) 古墳時代の概要

古墳時代の遺構は、堅穴住居15軒、掘立柱建物4棟、柱穴列2列、井戸7基、土塼17基、焼成土塼1基、溝6条を掲載する。遺構は、低部位の土塼2基と溝2条以外はすべて微高地上に位置する。低部位は、弥生時代後期末の洪水砂やその上層の粘土層で埋没しつつあるが、主たる居住区にはならない。微高地上は、弥生時代後期の居住区にはほぼ重なるが、初頭の井戸が調査区中央付近を占地する。遺構では、5世紀末～6世紀初頭の辺8m超の大形住居や、微高地を東西に貫流する大溝が目される。遺物では、5世紀末～6世紀初頭の住居出土の滑石製品や、大溝出土の鉄釘関連遺物がある。



第128図 百間川原尾島遺跡 古墳時代遺構全体図 (1/2,500)

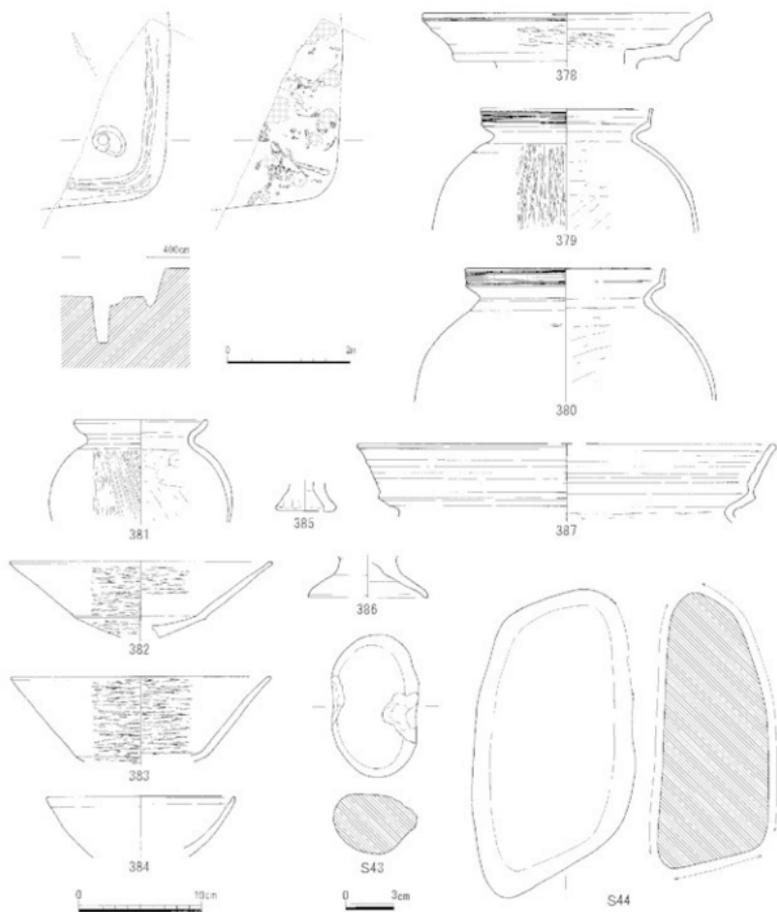


第129図 古墳時代遺構全体図 (1/250)

(2) 竪穴状居

竪穴状居 8 (第129・130図)

6 A区の調査区北端に位置する焼失住居で、隅丸形と推定される住居の南隅と考えられる。床面までの深さは50cmを測り、床面では、柱穴1個と壁体溝を確認した。柱穴の平面形は楕円形を呈し、長径60cm、短径46cm、床面からの深さ74cmを測る。壁体溝は壁が数段に落ち込むもので、床面からの深さは14cm、底面海拔高366cmを測る。図示した遺物は、壺378、甕379、甕380、器381、脚部385、鉢382、鉢383、鉢384、裂塩土器385、脚部386、鉢387、石錘S43、磨石S44である。住居の時期は、百・古・Ⅱである。

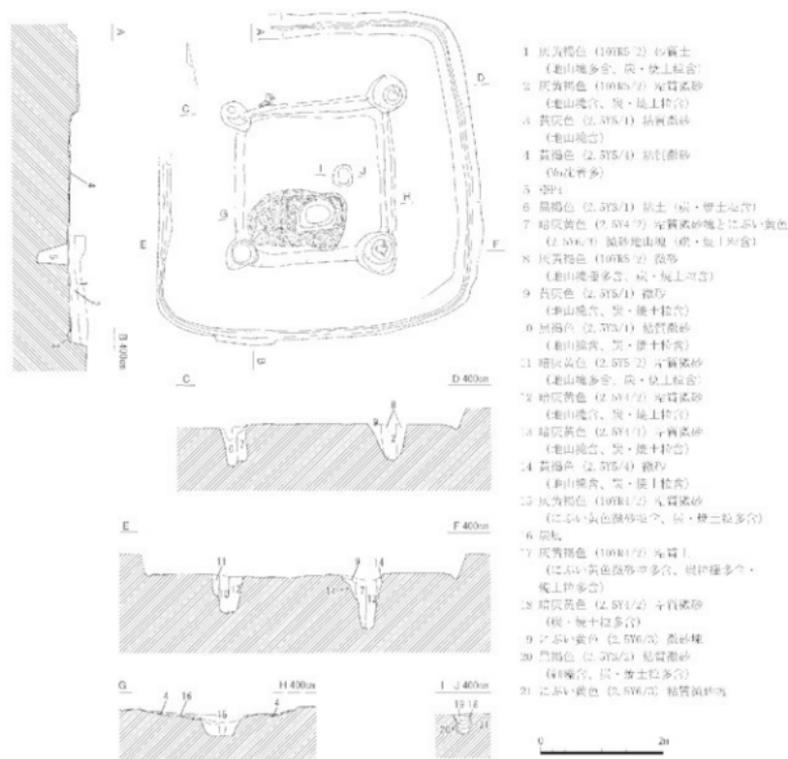


第130図 竪穴状居 8 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

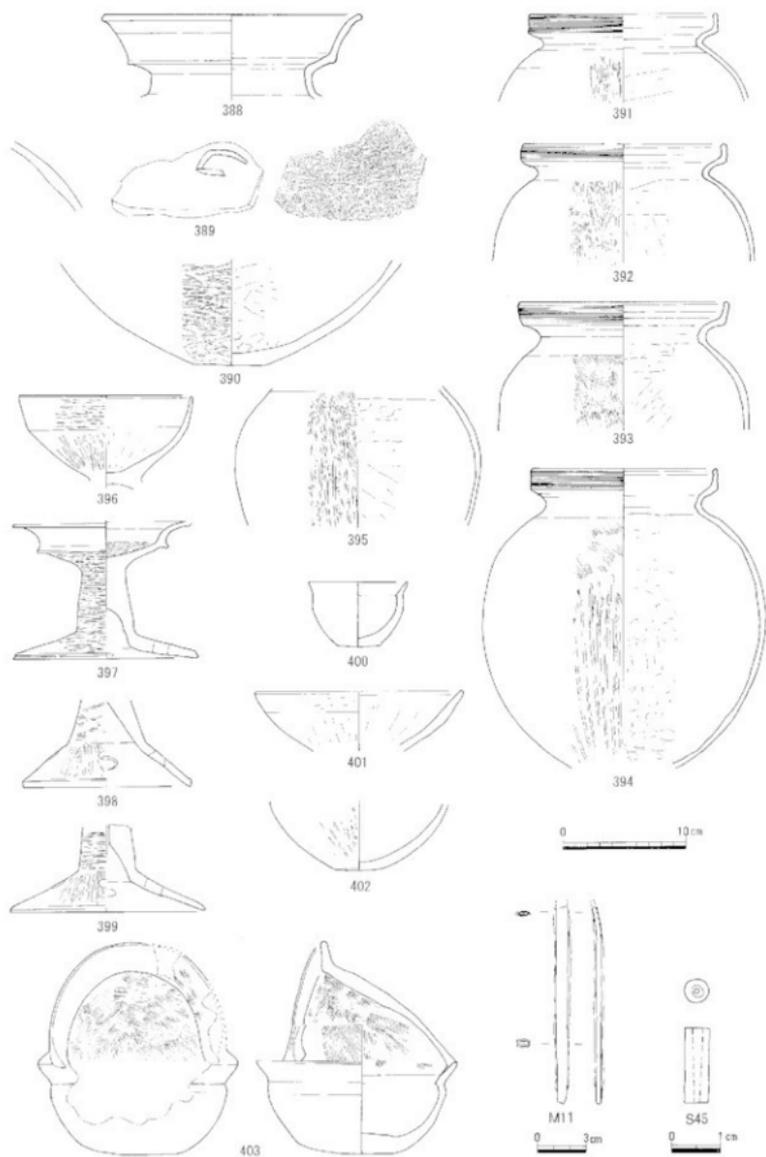
竪穴状居9 (第129・131・132図、図版12-1・39)

6 A区に位置する竪穴住居である。弥生時代後期末の竪穴住居1、後述の住居10と重なる。

住居の平面形は、隅丸方形を呈する。検出時の規模は、578×576cm、深さ38cm、床面の海拔高327cm、残存床面積は21.98㎡を測る。また、主軸はN-9°-Eとなる。貼り床は、ベッド状遺構を含めた床面全体で確認し、厚さ2~4cmを測る。ベッド状遺構は、基盤層を削り出して床面周囲に巡らされ、住居中央は平面四角形に切り取られる。ベッド状遺構と住居中央との比高差は3~5cmである。また、P1 2とP2 3間のベッド状遺構際が二段に落ち込む。中央穴は、隅丸長方形の浅い落込みの中央がさらに径60×44cm、深さ35cmに落ち込むもので、中央穴の西側には薄い炭層が広がっている。中央穴から北東側の小土壌がある。上柱穴は4個で、掘り方は楕円~円形となる。規模は径56~75cm、深さ60~88cmを測り、径15cm前後の柱痕跡をもつ。P3の底面には根がらみの痕跡が認められる。各柱穴の距離は228~271cmとなる。出土遺物と検出状況から、百・古・Iと考えられる。



第131図 竪穴住居9 (1/80)

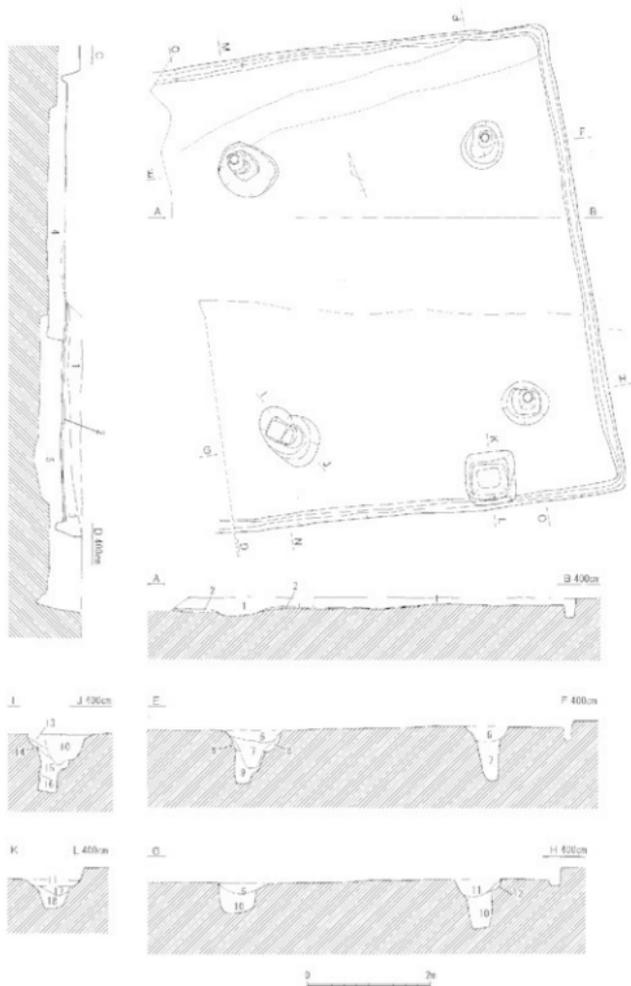


第132図 竪穴住居9出土遺物 (1/4・1/3・1/1)

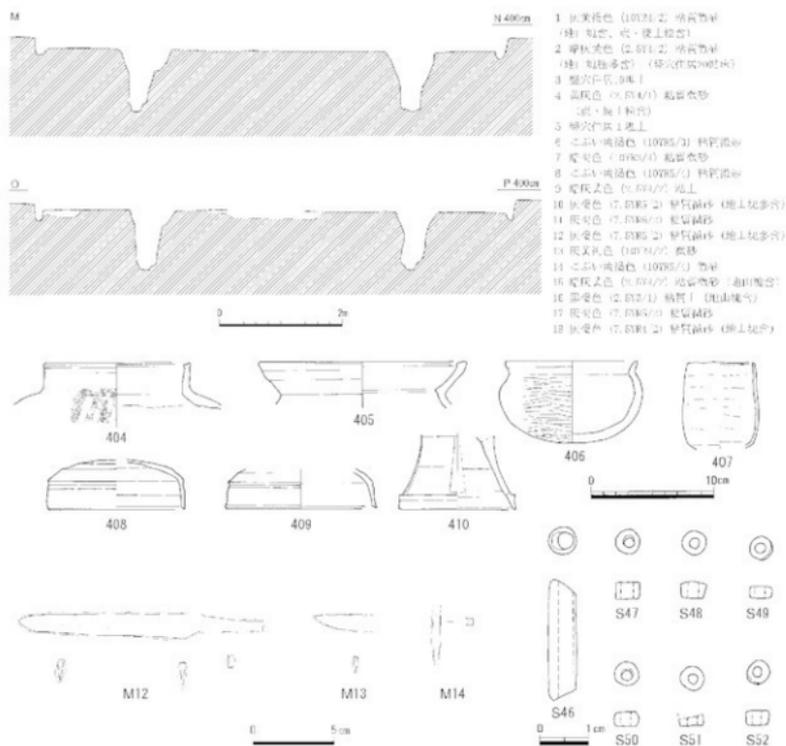
竪穴状居10（第129・133・134図、図版12-2・39）

6 A区に位置する竪穴状居である。弥生時代後期末の竪穴状居1、古墳時代初頭の住居9と重複し、その関係を第133図のC—D断面に示す。住居西辺と中央を近世用水路で切られる。

住居の平面形は、方形と推定される。検出時の規模は、南北長775cm、東西長653以上、深さ30cm、



第133図 竪穴状居10 (1/80)



第134図 壁穴住居10出土遺物 (1/4・1/3・1/1)

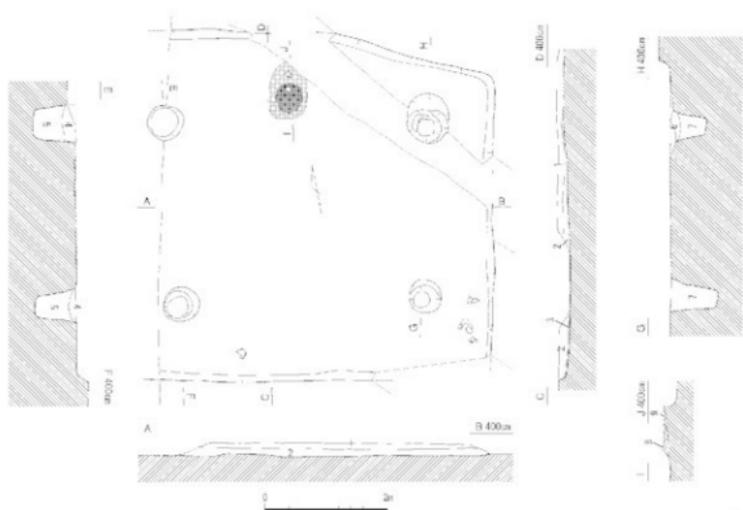
床面の海拔高385cm、残存床面積48.15㎡を測る。また、主軸はN-13°-Eとなる。床面の施設としては、貼り床、柱穴、方形土障、壁体溝を確認している。主柱穴は4個で、掘り方は円形を呈するが、西側のP1・4は掘り直され、楕円形を呈する。規模は、P2・3で径80cm、深さ82~90cmを測り、P1・4で長径100cm前後、深さ90~96cm、柱間410~448cmを測る。中位以下底面の平面形が方形を呈することから、柱を方形に加工していたと考えられる。方形土障は、87×81cm、深さ49cmを測り、南辺の東寄り位置し、壁体に接する。土障埋没後に壁体溝を設けている。

住居の時期は、出土遺物と検出状況から、5世紀末~6世紀初頭と考えられる。

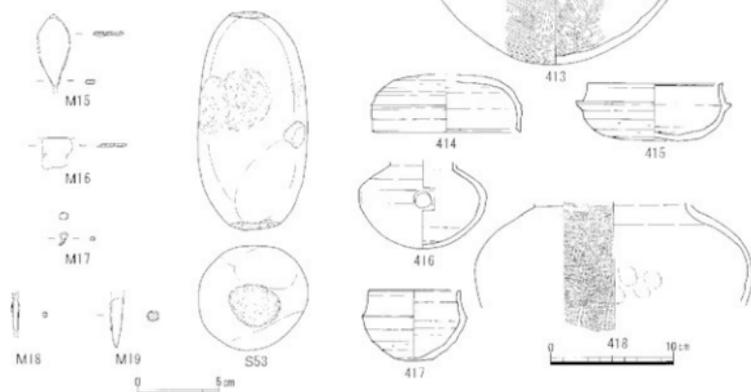
壁穴状居11 (第129・135図、図版12・3・39)

6・7A区に位置する壁穴状居である。住居西辺と中央・北東部を近世用水路で切られる。

住居の平面形は、東西に長い長方形と推定される。検出時の規模は南北長572cm、東西長535cm以上、深さ24cm、床面の海拔高358cm、残存床面積25.69㎡を測る。また、主軸はN-10.5°-Wとなる。床面の施設としては、カマド、柱穴、壁体溝を確認している。主柱穴は4個で、掘り方は円形を呈する。



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質砂形 (砂) (強、Mo:Ca)
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質砂形 (弱) (此層)
- 3 赤い黄褐色 (10YR5/3) 粘質砂形 (砂) (強) (此層)
- 4 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質砂形 (弱) (此層)
- 5 暗赤褐色 (2.5Y5/2) 粘質砂形 (砂) (強、Mo:Ca)
- 6 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質砂形 (弱) (此層)
- 7 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質砂形 (弱) (此層)
- 8 赤い粘土 (5YR4/3) 以上 (変化)
- 9 赤色粘土層



第135図 竪穴住居11 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

規模は、径55cm前後、深さ70cm前後を測り、柱穴間の距離は東西で127cm、南北で280cmとなる。北辺中央の86×62cmを測る楕円形の被熱面は、カマド底面と考えられるが、詳細な構造は不明。

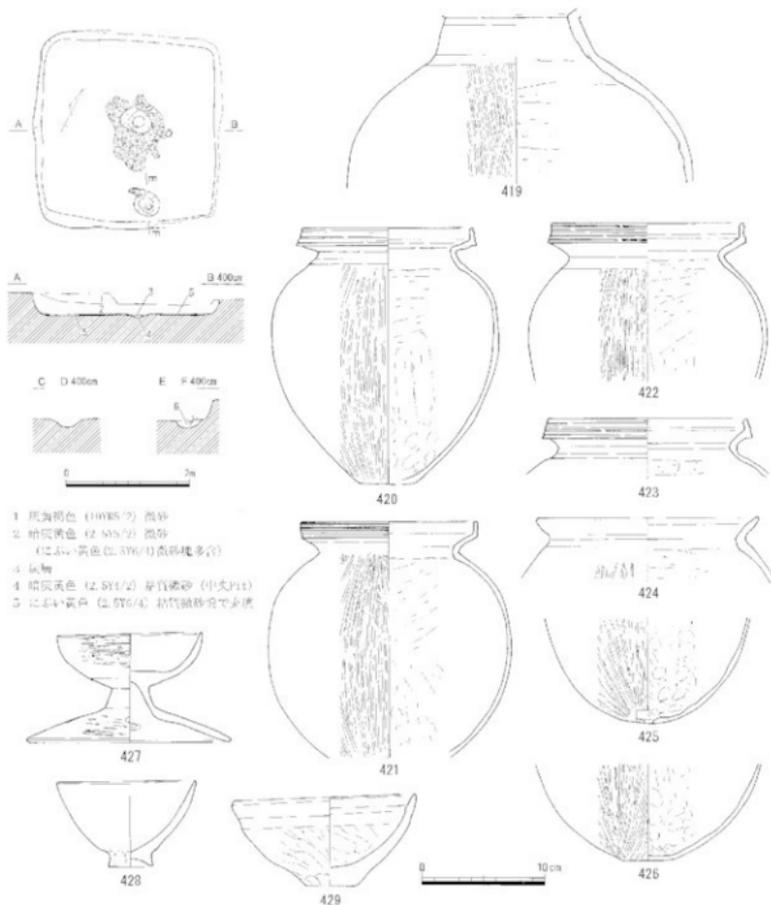
図示した出土遺物は、土師器甕411・413、斜412、須恵器杯蓋414、杯身415、甕416、碗417、甕418、鉄鉢M15、鉄釘M17、鉄釘M18・19、不明鉄片M16、敲き石S53である。

住居の時期は、出土遺物と検出状況から、5世紀末～6世紀初頭と考えられる。

竪穴状居12 (第129・136・137図、図版39)

7 A区中央に位置する竪穴状住居である。住居北半部を近世用水路で切られる。

住居の平面形は、方形と推定され、検出時の規模は、南北長322cm、東西長300cm、深さ34cm、床面



第136図 竪穴状居12 (1/80)・出土遺物① (1/4)



第137図 竪穴住居12出土遺物② (1/3)

の海拔高348cm、床面積7.97㎡を測る。また、主軸はN-26°-Wとなる。床面の施設としては、貼り床、中央穴、土塼を確認している。中央穴は、50×37cmの楕円形を呈し、深さ13cmを測る。その周囲には炭層が広がる。また、土塼は径42×40cmの円形を呈し、深さは12cmを測る。

出土遺物は、土師器、土製品、サソカイト製の打製石砲丁で、高杯427は土塼からの出土である。

住居の時期は、出土遺物と検出状況から、百・古・Iと考えられる。

竪穴住居13 (第129・138図、図版13-1・39)

7A区に位置する竪穴住居である。住居中央を東西溝32に切られる。

住居の平面形は、南北に長い隅丸長方形を呈する。検出時の規模は、南北長458cm、東西長408cm、深さ30cm、床面の海拔高345.5～347.5cm、床面積15.56㎡を測る。また、主軸はN-76.5°-Eとなる。床面の施設としては、中央穴、柱穴、方形土塼、壁体溝を確認している。土柱穴は4個で、掘り方は円形を呈する。規模は、径40～45cm、深さ40cm前後を測る。P2～4は径12cm前後の柱痕跡を検出している。さらにP1はその底面から70cmも深くなる柱痕跡を確認し、柱の激しい沈み込みが想定される。柱穴間の距離は東250～274cmとなる。中央穴は、55×37cmの長楕円形を呈し、深さ10cmを測る。さらに南辺中央の壁に接して方形土塼が設けられる。底が92×57cm、深さ27cmで、その規模は二段に落ち込む。

図示した出土遺物は、土師器甕430～432、高杯433・434、鉢435～438、製塩土器439、鉄鎌M20、門み石S55である。

住居の時期は、出土遺物と検出状況から、百・古・IIと考えられる。

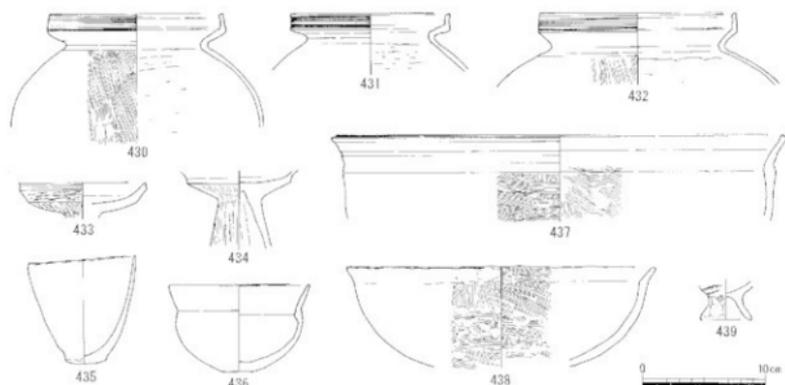
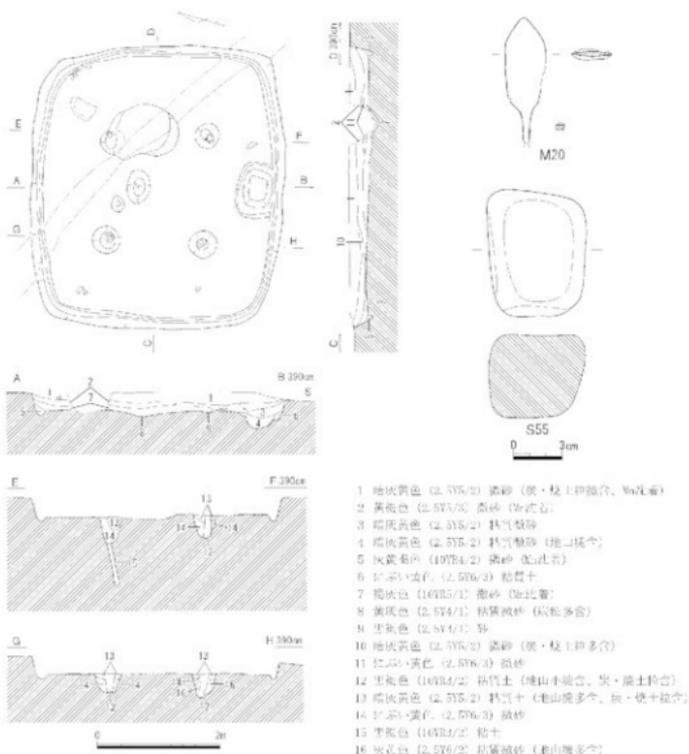
竪穴住居14 (第129・139図、図版13-2・39)

7B区に位置する竪穴住居である。住居中央を近世用水路に、北東溝を溝33に切られる。

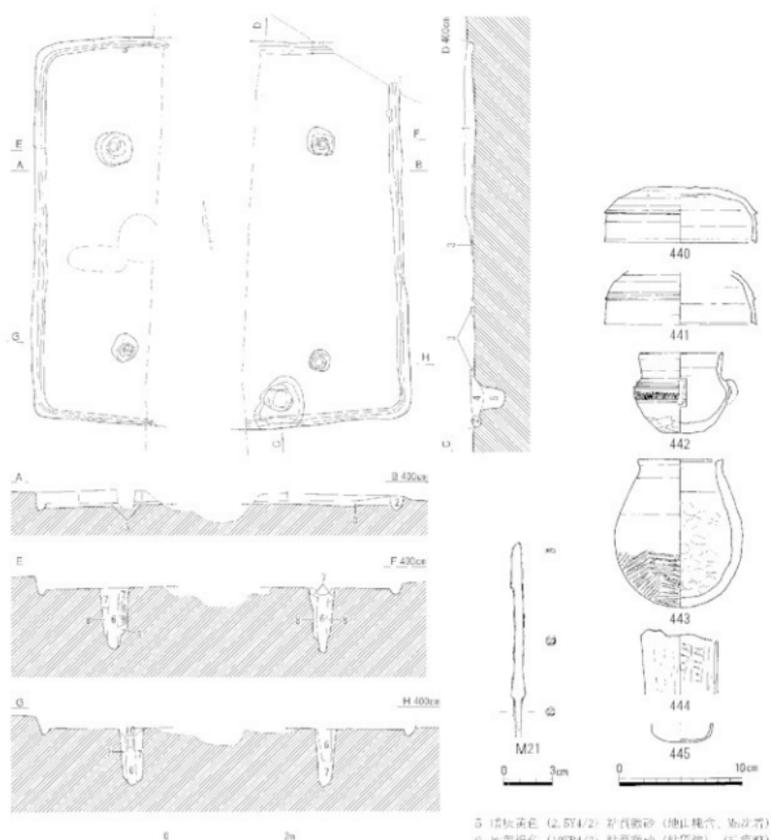
住居の平面形は、南北にやや長い方形を呈する。検出時の規模は、南北長634cm、東西長600cm、深さ20cm、床面の海拔高366cm、残存床面積25.10㎡を測る。また、主軸はN-7.5°-Eとなる。床面の施設としては、柱穴、土塼、壁体溝を確認している。土柱穴は4個で、掘り方の平面形は円形を呈する。規模は、径30～60cm、深さ100cm前後を測る。すべての柱穴で径15cmの柱痕跡が確認され、底面で柱根跡を検出している。柱穴間の距離は314～357cmとなる。また、南辺中央やや東寄りの土塼は、86×77cmの不整楕円形を呈し、深さ57cmを測る。壁体溝に先行する。

図示した出土遺物は、須恵器杯蓋440・441、把手付杓442、碗443、製塩土器444・445、片刃箭長頭鎌M21、滑石製白玉S56～74である。

住居の時期は、出土遺物と検出状況から、5世紀末～6世紀初頭と考えられる。



第138図 竪穴住居13 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

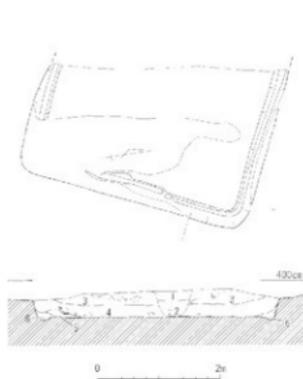


- 1 土器Ⅰ式底 (2.576/4) 粘質磁砂 (砂質灰、L2/L3層)
- 2 粘灰黄色 (2.574/2) 粘質磁砂 (砂質灰、3m沈着)
- 3 明灰青色 (2.576/6) 粘質磁砂 (砂質灰)
- 4 粘灰青色 (2.571/2) 粘質磁砂 (灰・土1種合、赤泥着)

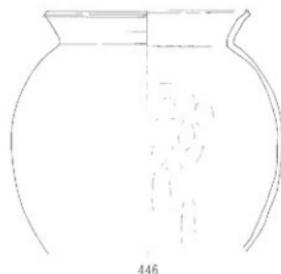
- 5 粘灰黄色 (2.574/2) 粘質磁砂 (地土種合、3m沈着)
- 6 灰黄褐色 (1000/2) 粘質磁砂 (粘質灰) (〇・底層)
- 7 黄褐色 (2.575/2) 粘質磁砂 (粘質灰)
- 8 黄褐色 (2.574/2) 粘質磁砂 (粘質灰)
- 9 黄褐色 (2.575/4) 粘質磁砂 (砂質灰)
- 10 粘灰黄色 (2.575/2) 粘質磁砂 (砂質灰)
- 11 灰黄褐色 (1000/2) 粘質磁砂 (地土種合)



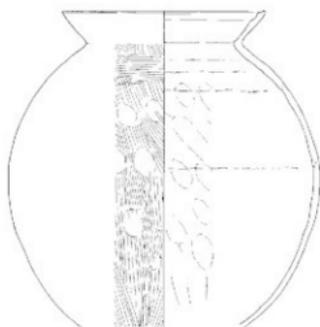
第139図 竪穴住居14 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3・1/1)



- 1 灰黄褐色 (101R4/2) 粘質微砂 (砂質強)
- 2 灰黄褐色 (101R4/2) 粘質微砂 (砂多含、灰・赤土粒含)
- 3 暗灰黄色 (2.1013/2) 微砂 (土・角礫含、やや粘質、灰・赤土粒含)
- 4 暗灰黄色 (2.1013/2) 微砂 (土・角礫含、地味粘多含、灰・赤土粒多含)
- 5 暗灰黄色 (2.1013/2) 微砂
- 6 黒褐色 (2.1013/2) 粘砂 (土) (灰土)



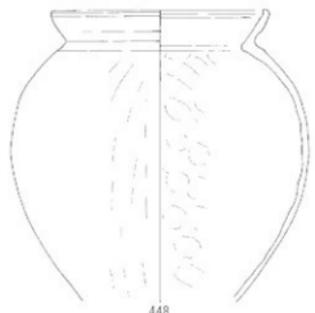
446



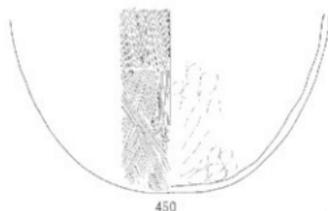
447



449



448



450

0 10cm



451



452

第140図 竪穴住居15 (1/80)・出土遺物 (1/4)

竪穴状居15 (第129・140図)

6 B区の微高地端に位置する竪穴住居である。住居西半部を近世用水路で切られる。

住居の平面形は、方形と推定され、検出時の規模は、南北長374cm、東西長267cm以上、深さ45cm、床面の海拔高339cmを測る。また、主軸はN-25°-Eとなる。床面の施設としては、壁体溝を確認している。

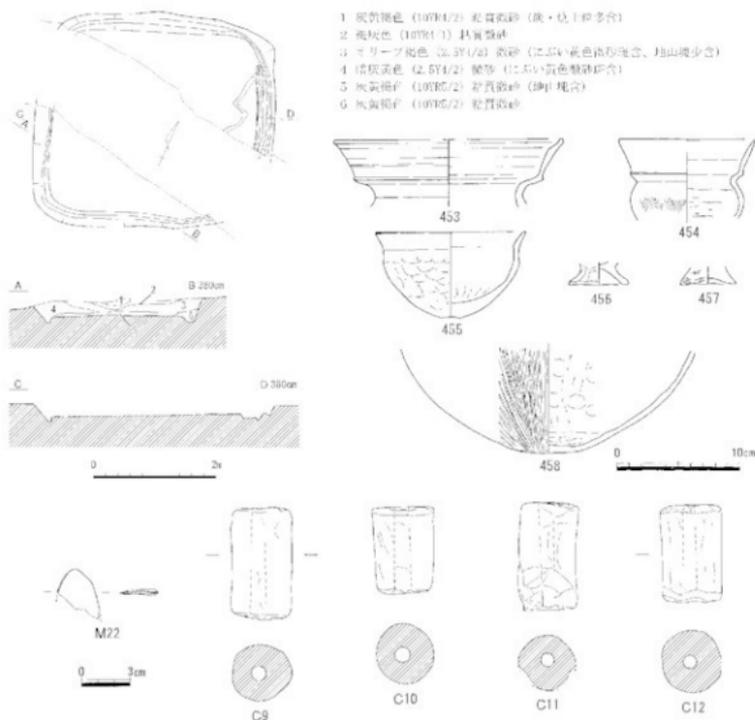
図示した出土遺物は、土師器甕446～450、高杯451、手焙り452である。手焙りは混入か。

住居の時期は、出土遺物と検出状況から、5世紀末～6世紀初頭と考えられる。

竪穴状居16 (第129・141図、図版13-3)

7 B区に位置する竪穴住居である。竪穴住居19の北隣にほぼ重なり、住居の中央大半を溝34に切られる。住居の平面形は、東西に長い隅丸長方形と推定される。検出時の規模は、東西長387cm、南北長350cm、深さ24cm、床面の海拔高340cmを測る。また、主軸はN-67.5°-Eとなる。床面の施設としては、壁体溝を確認している。

図示した出土遺物は、土師器壺453・454、鉢455、製塩土器456・457、甕458、鉄鏝M22、土師C9～



第141図 竪穴住居16 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

12である。

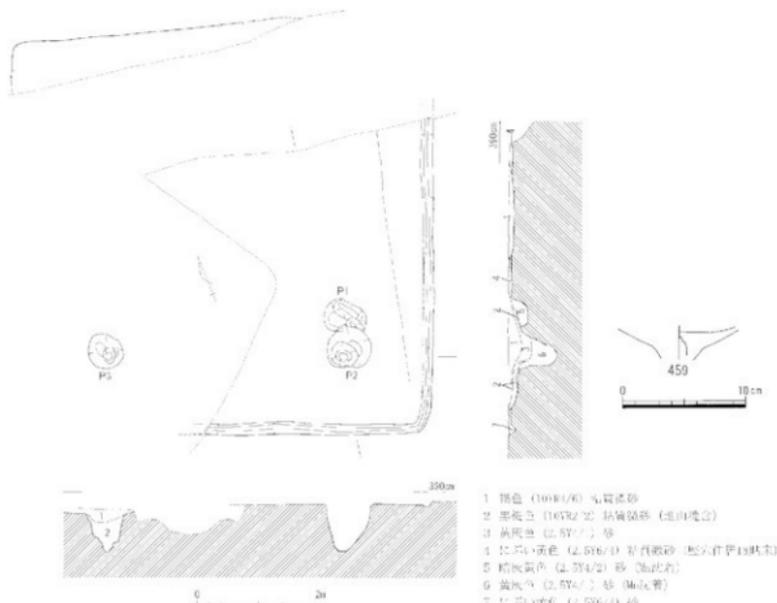
住居の時期は、出土遺物と検出状況から、百・古・Ⅱと考えられる。

竪穴状居17・18（第129・142・143図、図版39）

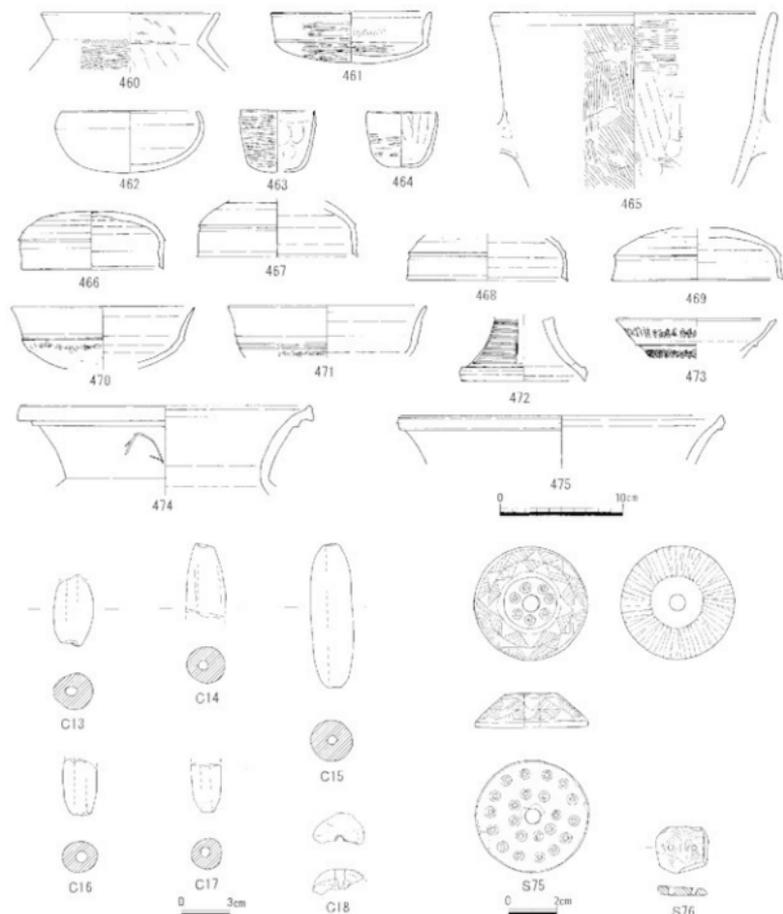
B区の8ライン付近に位置する竪穴住居で、2軒が重複する。住居西部を竪穴住居19に、北辺部を溝34に大きく切られる。溝34の北側に検出した辺と、点線で示したものが先行する住居17で、東と南辺の単体溝の一部を検出したものが住居18である。平面形は、いずれも方形と推定される。検出時の規模は、住居18で辺600cmと推定され、主軸はN-22°-Eとなる。床面の海拔高はいずれも370cmである。住居17の主柱穴はP1・3の2個を想定している。規模は、径56～64cm、P1の深さ32cmを測る。柱穴間の距離は370cmとなる。また、住居18の主柱穴はP2・3の2個を想定している。規模は、径56～72cm、P1の深さ80cm、P3の深さは74cmを測る。柱穴間の距離は370cmとなる。

図示した出土遺物は、住居17にともなうものが、土師器高杯459である。また、住居18の出土遺物としては、土師器甕460、杯461、碗462、製塩土器463・464、甕465、須恵器杯蓋466～469、高杯470～472、甕473、甕474・475、土鉢C13～18、滑石製紡錘車S75、同製双孔門板S76である。杯461は、全面に黒色処理を施すもので、東日本の須恵器模倣土師器の搬入品の可能性がある。

住居18の時期は、出土遺物と検出状況から、5世紀末～6世紀初頭と考えられる。住居17については、それより古いのが、近接した時期と考えられる。



第142図 竪穴住居17・18 (1/80)・竪穴住居17出土遺物 (1/4)



第143図 竪穴住居18出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

竪穴状居19 (第129・144~146図、図版14-1~3・4)

7・8B区に位置する本調査区最大の竪穴住居である。焼土住居で、住居北部を溝34に切られる。また、住居中央から北側を現代掘削で床面付近まで失っている。

住居の平面形は方形を呈する。検出時の規模は、東西長835cm、南北長820cm、深さ15cm、床面の海拔高375cm、残存床面積52.33㎡を測る。また、主軸はN-51.5°-Eとなる。

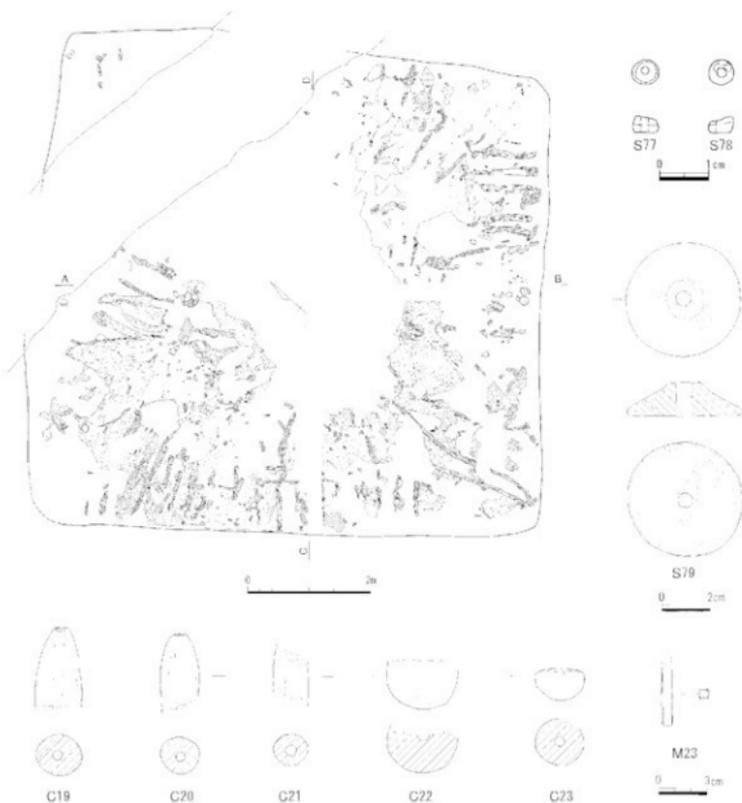
床面の施設としては、柱穴と壁体溝を確認している。主柱穴は4個で、掘り方は円形を呈する。根

横は、径60～65cm、深さ94cm前後を測り、柱穴間の距離は400～458cmとなる。P3・4では径18～20cmの柱痕跡が確認され、さらにすべての底面柱のめり込みがみられる。

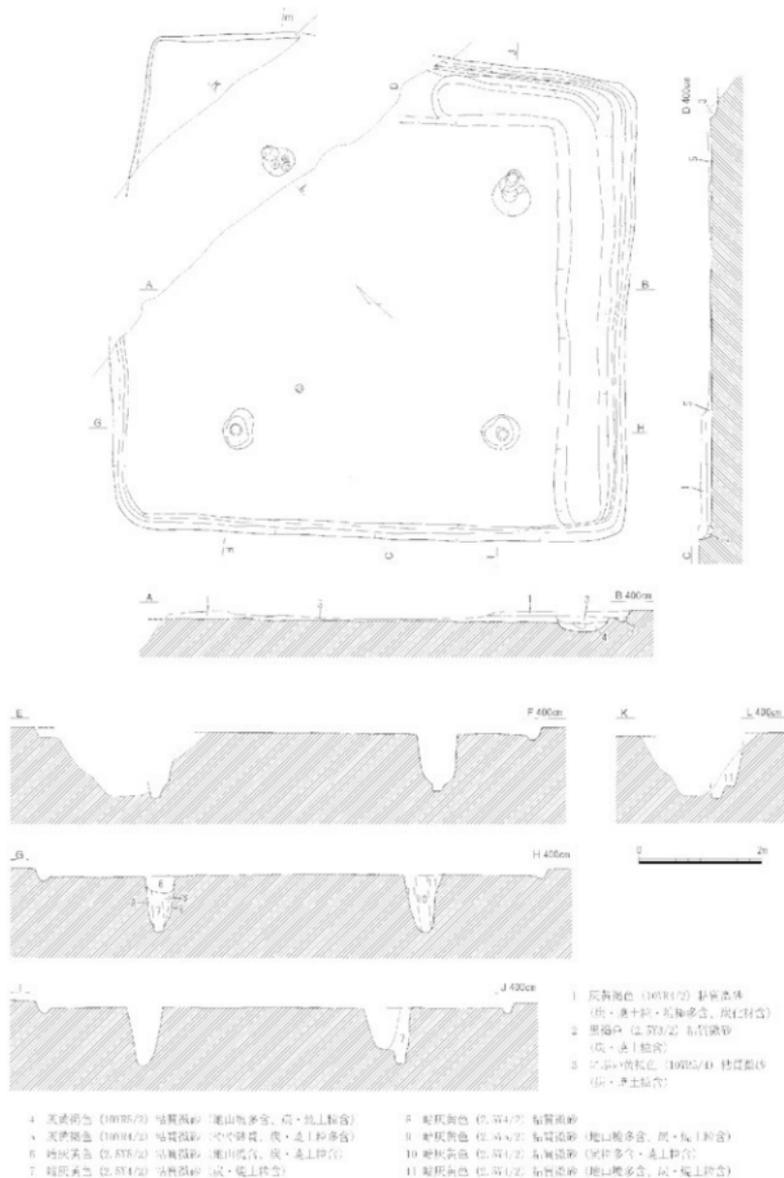
床面下の施設としては、北東辺中央から南東辺で、幅90cm前後、深さ25cm前後の溝を検出した。これは、埋上の第5層を切り、壁体溝には切られていることから、住居構築にともなう下部構造であり、生活時には埋め立てられていたと推定する。その機能は定かではないが、防湿目的を考えたい。

図示した出土遺物は、土師器壺479、甕476・478・480、甕481～483、甕484、須恵器杯蓋485～491、杯身492～495、壺496・497、高杯498～501、甕503、碗504、甕502・505、鉄釘M23、土鍾C19～23、滑石製白玉S77・78、滑石製紡錘車S79である。479の外表面は、櫛描き沈線と櫛歯列点が施される。また付載2に掲載する殿治津の出上がある。

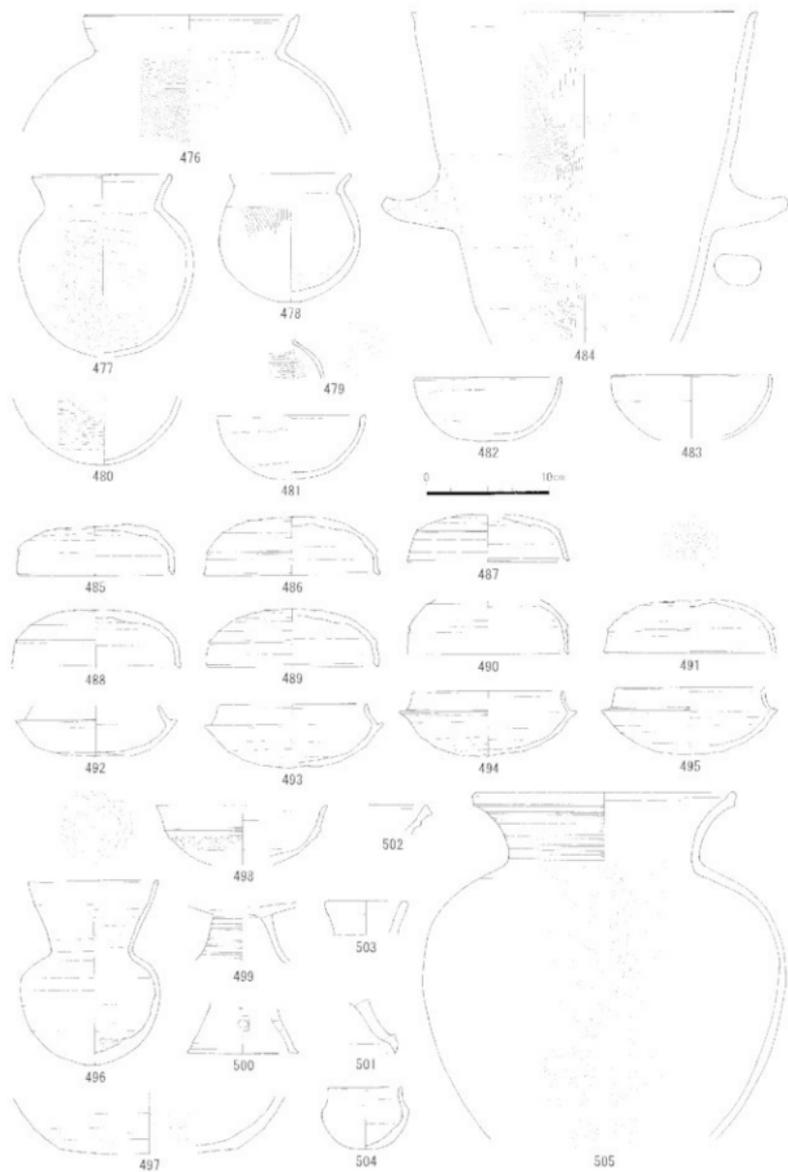
住居の時期は、出土遺物と検出状況から、5世紀末～6世紀初頭と考えられる。



第144図 竪穴住居19炭化材検出状況 (1/80)・出土遺物 (1/3・1/2・1/1)



第145图 竖穴住居19 (1/80)



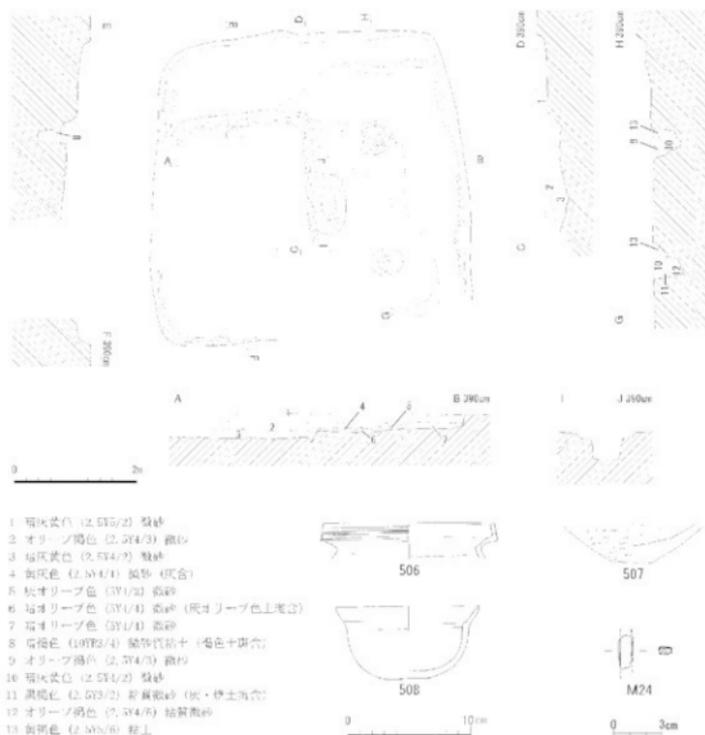
第146図 竪穴住居19出土遺物 (1/4)

竪穴状居20 (第129・147図、図版15-1・40)

8A区の調査区端に位置する竪穴住居である。住居南半部を溝34に切られる。住居埋土は微砂である。検出時の平面形は方形を呈する。その規模は、南北長490cm、東西長520cm残存床面積16.33㎡を測り、主軸はN-82.5°-Eとなる。床面の施設としては、ベッド状遺構、中央穴、柱穴、壁体溝を確認している。ベッド状遺構は盛り土によるもので、北と東辺に設ける。さらに南西隅に接して4×2.6mの隅丸方形の範囲がさらに一段深くなり、間仕切り状の小溝が巡る。この部分での海拔高は345cmである。確認した主柱穴は3個で、溝34で切られることから本来4本柱と推定する。掘り方はいずれも円形を呈するが、東側2個が大きい。P2・3の規模は、径50～54cm、深さ50cmを測る。また、P1は径23cm、深さ53cmを測る。柱穴間の距離は208～235cmとなる。中央穴は、96×53cmの長方形を呈し、中央がさらに円形に落ち込むもので、深さ44cmである。

図示した出土遺物は、土師器寛506・507、鉢508である。M24は鉄鉢の蓋か。

住居の時期は、出土遺物と検出状況から、百・古・Iと考えられる。

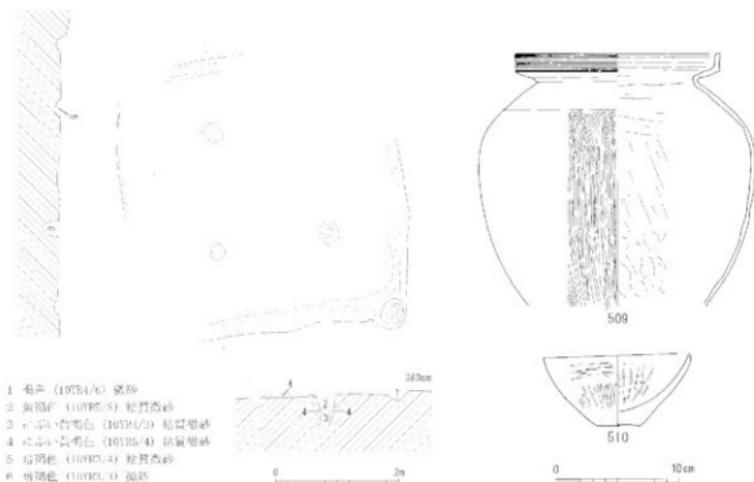


第147図 竪穴住居20 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴状居21（第129・148図、図版40）

8区Cライン上に位置する竪穴状居である。北隣を竪穴状居22に、上部をほとんど床面まで現代擾乱に削平されるなど、遺存状況が悪い。住居の平面形は、東西に長い長方形と推定される。検出時の規模は、456×454cm、深さ5cm、床面の海拔高361cm、残存床面積15.13㎡を測る。また、主軸はN-3.5°-Wとなる。確認した柱穴は3個で、掘り方は円～楕円形を呈する。柱穴間の距離は188～190cmとなる。壁体溝は、西辺を除く各辺で検出したが、南東隅にビット状の落ち込みをもつ。

住居の時期は、出土遺物と検出状況から、百・古・Ⅰと考えられる。



- 1 粘土 (10754/6) 磁器
- 2 灰陶片 (10756/5) 粘質赤砂
- 3 赤い白地土 (10754/3) 粘質赤砂
- 4 赤い白地土 (10755/4) 粘質赤砂
- 5 磁器片 (10753/4) 粘質赤砂
- 6 赤褐色 (10753/3) 磁器

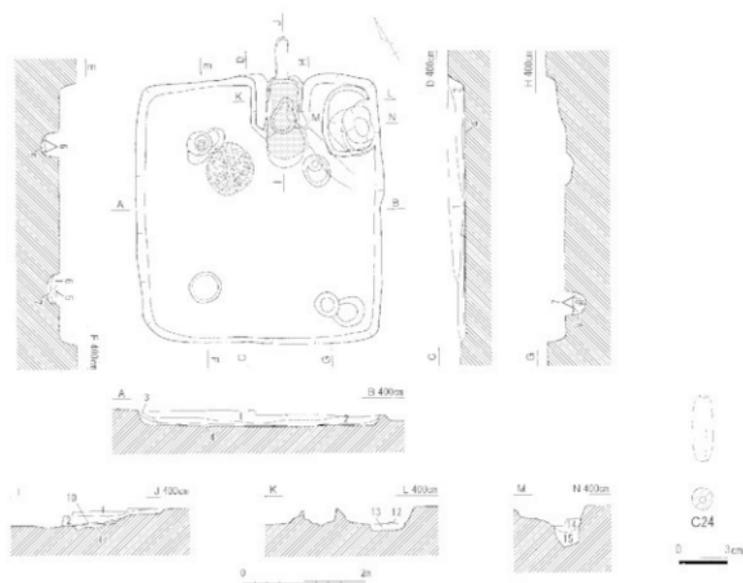
第148図 竪穴状居21 (1/80)・出土遺物 (1/4)

竪穴状居22（第129・149図、図版15—2・3・40）

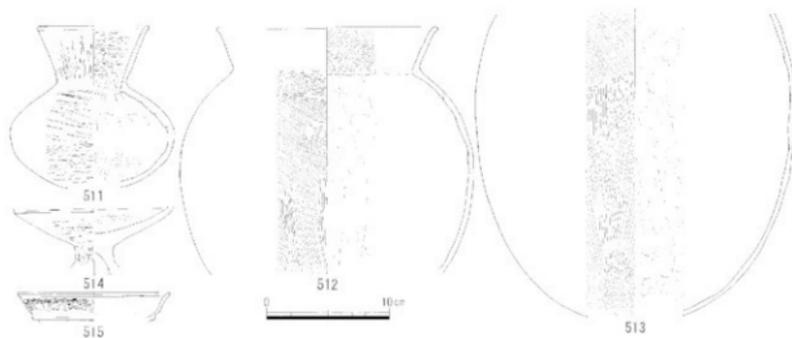
8B区に位置する竪穴状居である。住居の平面形は、南北にやや長い長方形を呈し、検出時の規模は、南北長436cm、東西長402cm、深さ25cm、床面の海拔高354cm、床面積14.21㎡を測る。また、主軸はN-30.5°-Eとなる。床面の施設としては、カマド、柱穴、方形土壇を確認している。主柱穴は4個と考えられるが、かなり歪な配置となる。掘り方は円形を呈し、規模は径40～50cm、深さ20～30cmを測り、柱穴間の距離は187～235cmとなる。北辺中央からやや東寄りにカマドを設ける。両袖を削り出し、住居外に棟道が延びる。カマド内の底面と壁はよく被熱し、カマドの西側に71～85cmの範囲に炭が広がる。方形土壇は、住居東隅に設けられる。80×78cmの楕円形を呈し、深さ45cmを測るものと、113×73cmの隅丸長方形を呈し、深さ13cmを測るものが重なり、後者が新しい。

図示した出土遺物は、土師器壺511、甕512・513、高杯514、須恵器壺515、土鍾C24である。土師器壺と高杯は混入か。

住居の時期は、出土遺物と検出状況から、5世紀末～6世紀初頭と考えられる。



- | | |
|--|--|
| 1 暗灰褐色 (L. 574/2) 粘質砂 (地) 地多含、炭・渣土粒含) | 9 灰白色 (L. 576/2) 粘質砂 |
| 2 暗灰褐色 (L. 575/2) 粘質黄土 (地) 地含、炭・渣土粒含) | 10 紫褐色 (L. 576/6) 炭と灰の層状3-4層 (地) 土多含) |
| 3 暗灰褐色 (L. 575/2) 粘質黄土 (地) 地多含、炭・渣土粒含) | 11 黄褐色 (L. 575/3) 粘質砂 |
| 4 黄褐色 (L. 575/2) 粘質砂 | 12 灰褐色 (L. 576/6) 灰土塊 |
| 5 黄褐色 (L. 575/2) 粘質砂 | 13 暗オリーブ褐色 (L. 577/4) 粘質土 (炭・渣土粒含) |
| 6 暗黄褐色 (L. 574/2) 粘質砂 (地) 地多含、炭・渣土粒少含) | 14 灰オリーブ色 (S. 572) 粘砂 (地) 地多含、炭・渣土粒含) |
| 7 灰白色 (L. 576/4) 粘質土塊口以下7cm | 15 紫褐色 (L. 577/2) 粘質砂 (地) 地多含、炭・渣土粒多含) |
| 8 黄灰色 (L. 574/1) 粘質砂 (地) 口下塊多含、炭・渣土粒含) | |



第149図 窪穴住居22 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

(3) 掘立柱建物

掘立柱建物6 (第129・150図、図版16-1)

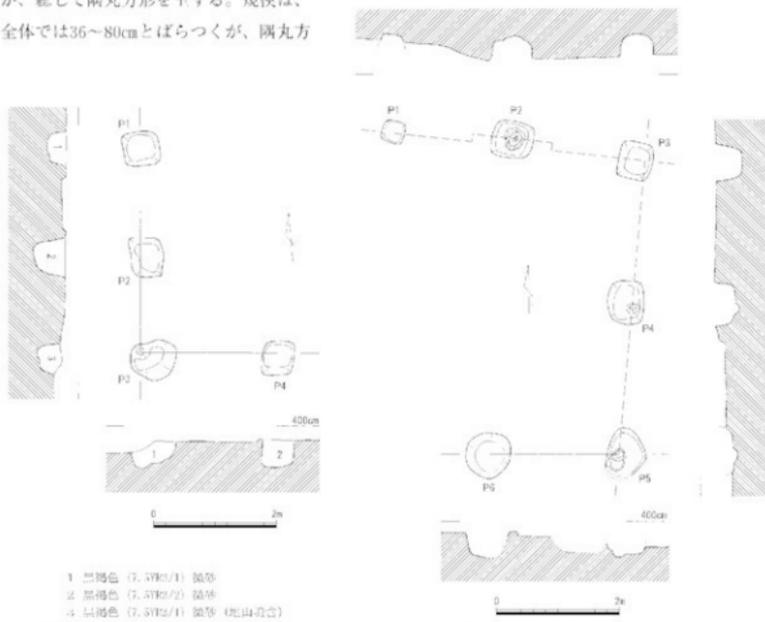
8A区の調査区端に位置し、2×1間以上と推定される掘立柱建物で、大半が調査区外と考えられる。柱間距離は、桁行が222cm、梁間が155cmと178cmを測る。棟方向はN-86.5°-Wである。柱穴掘り方は、P3がやや歪な形状で径70cmを超えるほかは、一辺54~62cm前後の隅丸方形を呈する。底面の海拔高は、P1が350cmと浅いほかは、330cmにはほぼ揃う。検出状況から後期と考えられる。

掘立柱建物7 (第129・151図)

7・8A区に位置する掘立柱建物である。規模は2間以上×2間と推定される。掘立柱建物6とは、棟方向がほぼ揃うが、近接するために同時存在は考えられない。柱間距離は、桁行が200~210cm、梁間が240cmを測る。棟方向はN-83°-Wである。柱穴掘り方は、P5・6がやや円形、ほかは隅丸方形を呈する。規模は、上部を近現代用水路に切られるP1以外は、64~72cmを測る。底面はほぼ平坦で、海拔340cmと揃い、P2・4・5は柱積跡が認められる。検出状況から後期と考えられる。

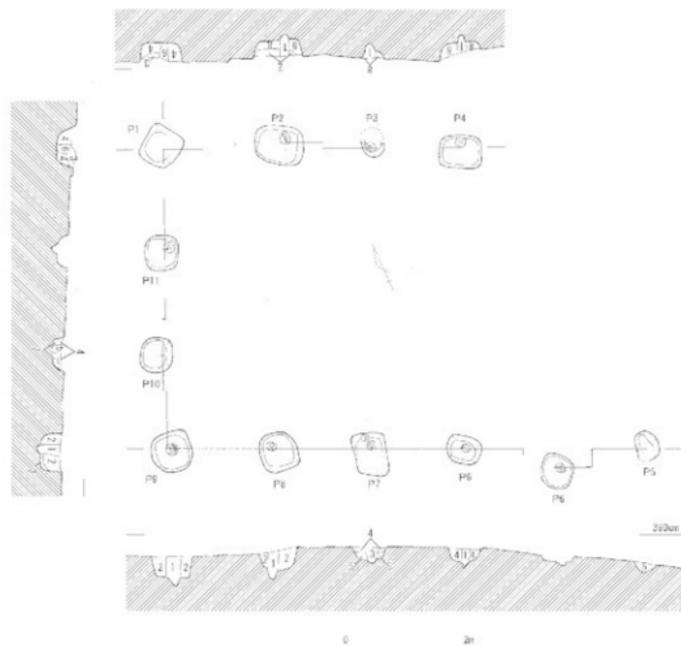
掘立柱建物8 (第129・152図、図版16-2)

8B・C区の調査区端に位置する掘立柱建物で、竪穴住居21・22上に重なる。北東側の柱穴を現代擾乱で失うが、5×3間と考えられる。建物の規模は、桁行全長755cmで柱間距離が152~172cm、梁間全長487cmで柱間距離が135~198cmを測る。棟方向はN-67°-Wで、建坪は36.77㎡と推定される。柱穴掘り方は、円形を呈するものもあるが、総じて隅丸方形を呈する。規模は、全体では36~80cmとばらつくが、隅丸方



第150図 掘立柱建物6 (1/80)

第151図 掘立柱建物7 (1/80)



- 1 赤褐色 (100R3/3) 赤質流砂 (灰・粘土混合)
- 2 赤褐色 (100R3/1) 赤質流砂 (灰・粘土混合)
- 3 褐色 (100R1/3) 粘質流砂 (灰・粘土混合)
- 4 に近い黄褐色 (100R1/3) 粘質流砂 (灰・粘土混合)

- 5 褐色 (100R1/3) 粘質流砂 (灰・粘土混合)
- 6 褐色 (100R1/3) 粘質流砂 (灰・粘土混合)
- 7 黄褐色 (100R3/3) 粘質流砂 (灰・粘土混合)
- 8 黒褐色 (100R2/3) 粘質流砂 (灰・粘土混合)

第152図 掘立柱建物 8 (1/80)・出土遺物 (1/4)

形を呈するものは50～60cm前後にまとまる。底面はほぼ平坦で、海拔326～360cmを測り、ほとんどの底面に柱根跡が認められる。また、断面観察でも柱痕跡を確認している。遺物は、土師器や須恵器細片が各柱穴から出土しているが、図示し得るものはない。

建物の時期は、検出状況から後期と考えられる。

掘立柱建物 9 (第129・153図、図版16—3)

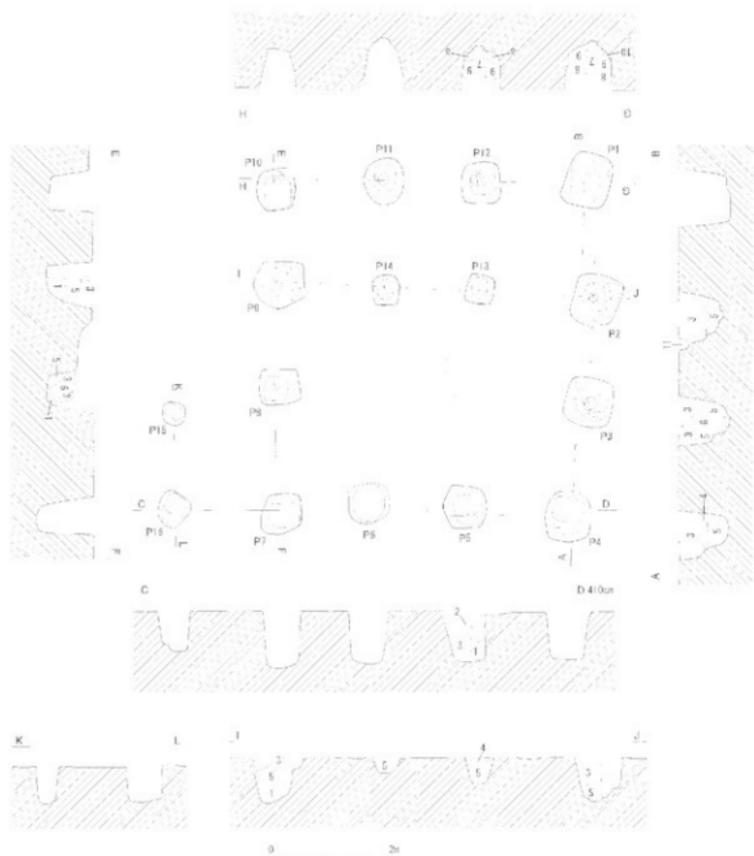
7 B・C区の調査区端に位置する掘立柱建物である。南西側のP 6・7・15・16の4個とP 8の一部は「百間川原尾島遺跡 3」の「建物30」として掲載されている。今回の調査では新たに検出した柱穴とともにこれら「建物30」の柱穴についても再検出し、現地において建物全体の検討を行っている。その結果、建物の規模については3×3間のものと判明した。また、西側については、扉の付く可能性がある。

建物の規模は、桁行全長530～535cmで、柱間距離150～205cm、梁間全長490～501cmで、柱間距離151～175cmを測る。棟方向はN-9°-Eで、建坪は26.50㎡となる。柱穴の掘り方は、隅丸方形ない

し方形を呈する。規模は、側柱が62~90cmで、深さ80cm前後を測り、P13~16の廂柱や束柱は38~58cm、深さ24~62cmと小規模となる。底面はほぼ平坦で、側柱では底面に柱根跡が認められ、断面観察で柱痕跡を検出するものがある。

遺物は、土師器や須恵器細片が各柱穴から出土しているが、図示し得るものはない。

建物の時期は、検出状況から後期と考えられる。



1 灰黄色 (2.5Y5/2) 赤質磁砂 (灰・粘土多含)

2 黄灰色 (2.5Y5/1) 磁砂 (池田焼合、灰多含)

3 灰黄色 (2.0Y4/2) 赤質磁砂 (池田焼合、灰・粘土多含)

4 浅褐色 (2.5Y7/4) 粘質磁砂 (池田焼合、灰多含)

5 黄灰色 (2.5Y4/2) 粘質磁砂 (池田焼合、灰多含)

6 黒褐色 (10B5.3/1) 粘質磁砂 (灰・粘土多含)

7 赤褐色 (10R5/2) 粘質磁砂 (池田焼合、灰・粘土多含)

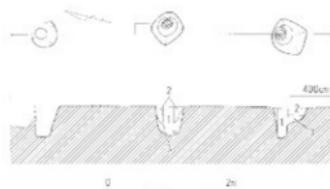
8 灰黄色 (1.0Y4/2) 赤質磁砂 (池田焼合、灰・粘土多含)

9 灰黄色 (1.0Y4/2) 赤質磁砂 (池田焼合、灰・粘土多含)

10 トロイ・雲間色 (10Y5/3) 磁砂 (池田焼合)

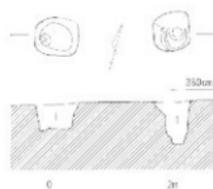
11 灰色 (5Y5/1) 磁砂 (灰・粘土多含) (中津柱穴)

第153図 掘立柱建物9 (1/80)



1 緑灰色 (L.584/2) 細砂
2 オリーブ褐色 (L.571/1) 微砂
3 赤褐色 (L.575/6) 微砂

第154図 柱穴列3 (1/80)



1 暗褐色 (1078.3/4) 粘質微砂

第155図 柱穴列4 (1/80)

(4) 柱穴列

柱穴列3 (第129・154図)

8 A区に位置し、柱間は180cmと205cmを測る。掘り方は、長44～54cmの円と方形を呈し、深さ50cmを測る。埋土はいずれも微砂である。時期は後期と考えられる。

柱穴列4 (第129・155図)

8 B区に位置し、竪穴住居21を切る。柱間は217cm、掘り方は、一辺62cmと70cmの隅丸方形を呈し、深さ42・64cmを測る。時期は、古墳時代と考えられる。

(5) 井戸

井戸8 (第129・157図、図版17-1・40)

B区の7ライン上に位置する井戸である。溝32に上部中央を切られる。検出時の平面形は、径160cm前後のほぼ円形を呈し、深さは190cm、底面海拔高は200cmを測る。断面形は「V」字形である。また、東西対称の壁が三日月状の平坦面を持ちながら、数段に落ち込む。

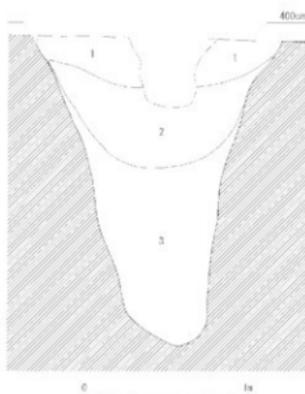
出土遺物は、土器片と鉄製品、土製品である。土器は第1層と西側からの出土が多い。

井戸の時期は、出土遺物から百・古・IIと考えられる。

井戸9 (第129・158図、図版40)

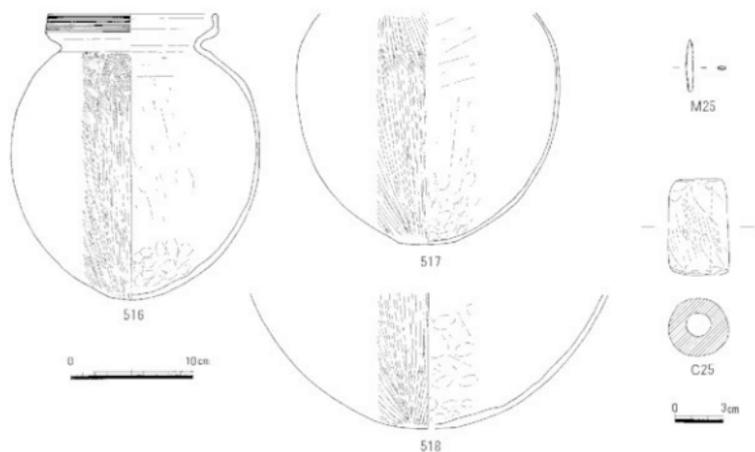
7区のBライン上に位置する井戸である。溝33に西府の一部を切られる。検出時の平面形は、径118～134cmのやや楕円形を呈し、深さは160cm、底面海拔高は205cmを測る。底面の北東側が一段落ち込み、断面形「U」字形を呈する。埋土は2層で、大半を占める第2層は地山境で人為的に埋められた可能性が高い。また、微砂層の第1層は、弥生時代後期末の洪水砂の再堆積か。

井戸の時期は、出土遺物から百・古・Iと考えられる。

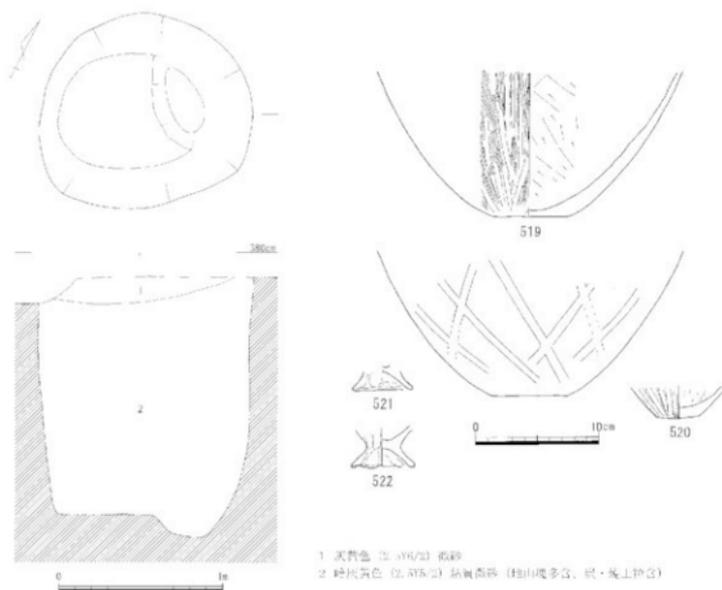


1 赤褐色 (10784/2) 粘質微砂 (山梨県産)
2 赤褐色 (10781/2) 粘質微砂
3 緑灰色 (L.574/2) 粘質土 (地山境)

第156図 井戸8 (1/30)

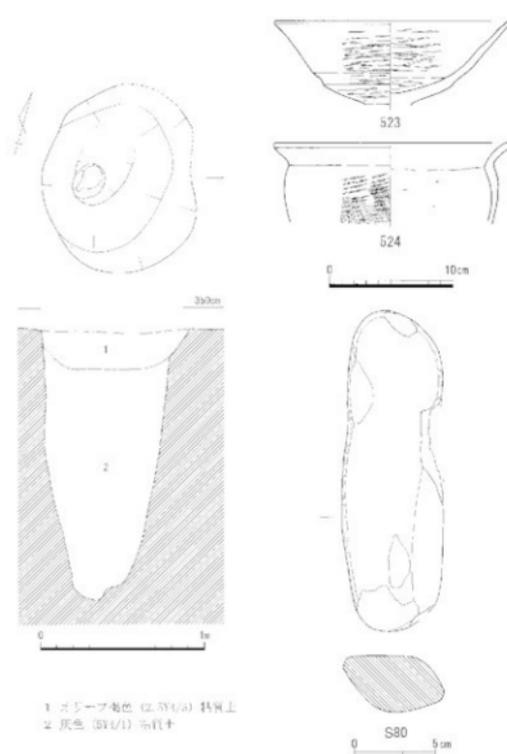


第157図 井戸8出土遺物 (1/4・1/3)



- 1 灰青色 (2. 74/2) 磁罎
2 緑灰色 (2. 75/2) 磁罎蓋 (埴山塊多含、泥・灰土物含)

第158図 井戸9 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第159図 井戸10 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

井戸10 (第129・159図)

7 A区に位置する井戸である。竅穴件居13に重なり、住居に井戸の上部を大きく削平される。

検出時の平面形は、長径で116cm、短径で91cmの重なる長楕円形を呈し、深さは166cm、底面海拔高は170cmを測る。

底面は二段に落ち込み、断面形はその底面からほぼ垂直に壁が立ち上がる「V」字形である。本報告における弥生時代後期末～古墳時代初頭の井戸の井戸の底面高は、170～200cmにはほぼとまる。

図示した出土遺物は、高杯523、鉢524、甌石S80である。鉢524については、井戸13から接合資料ではないものの、同一個体と考えられる上器片が出土している。井戸13は、本井戸から南偏へ6.5mの位置にある。

井戸の時期は、出土遺物から百・古・Iと考えられる。

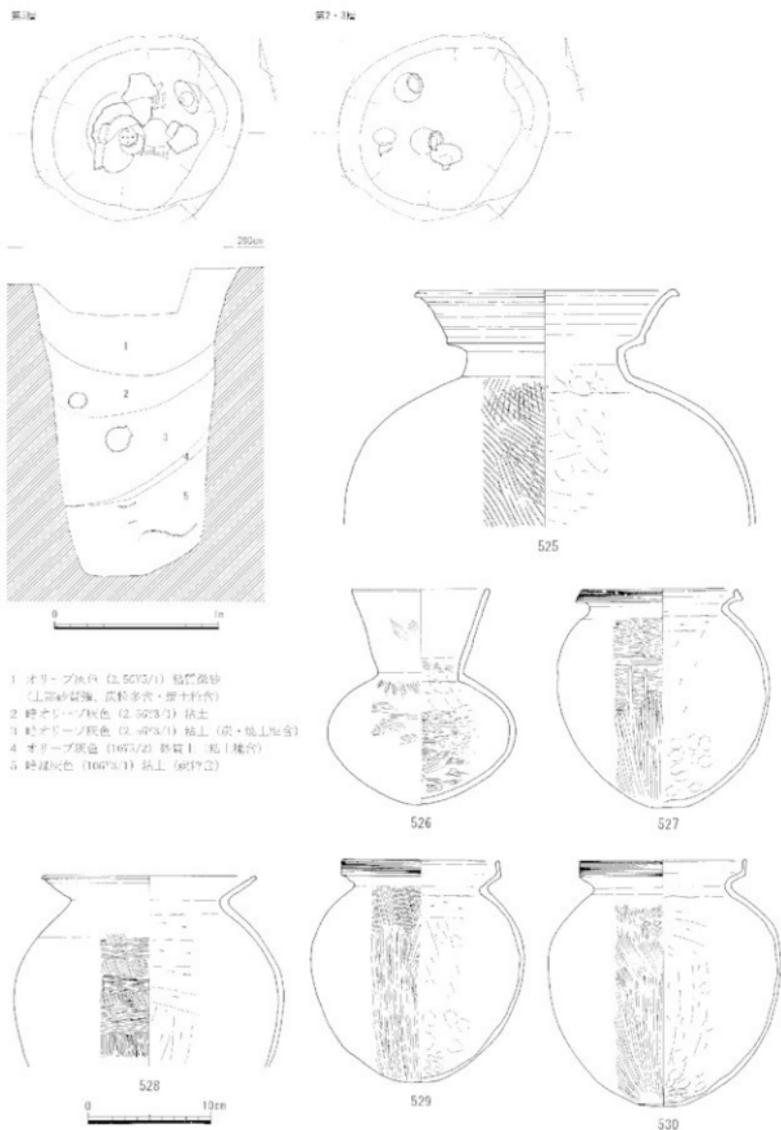
井戸11 (第129・160・161図、図版17-2. 3・41・42)

7 B区のはほぼ中央に位置する井戸である。上部を近世用水路に切られる。

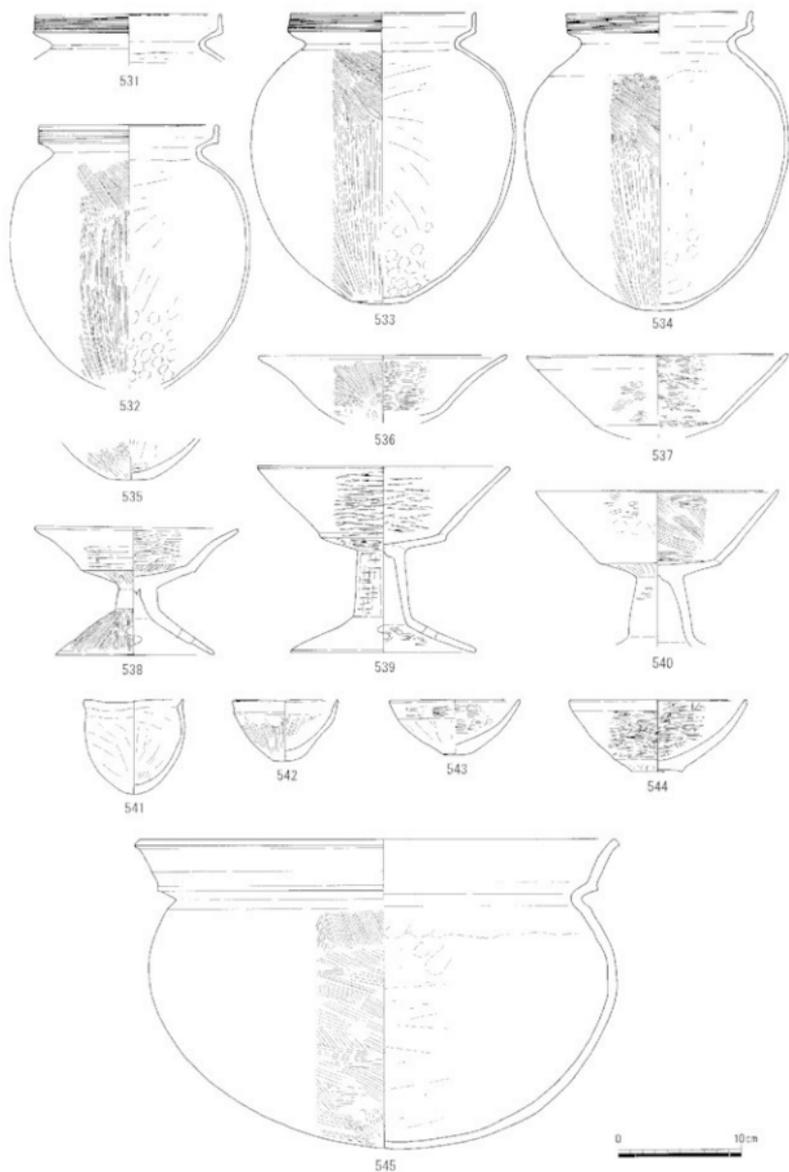
平面形は、径128cm前後の円形を呈すると推定され、検出面からの深さは190cm、底面海拔高は176cmを測る。底面はやや北西側に偏るもので、そこからほぼ垂直に壁が立ち上がる。井戸の断面形は、「U」字形を呈する。埋土は5層で、第2層以下は東から西側に向かって傾斜して堆積する。また、第4層は顕著な砂質土である。

遺物はすべて土器で、各層から出土するが、第2層以下からのものが多い。図示したものでは、甕528と鉢543が第1層出土で、第160図に出土状況を示している甕526、甕529・530、高杯540が第2・3層出土であるほかは、全て第5層からの出土である。甕の胴部最大径は、胴上半にあり、いわゆる下膨れのものはない。高杯には短脚のものと中空のものがあり、前者はより古い様相を示していると思われる。

井戸の時期は、出土遺物から百・古・IIの古い段階と考えられる。



第160図 井戸11 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第161図 井戸II出土遺物2 (1/4)

井戸12 (第129・162図、図版18—1・43)

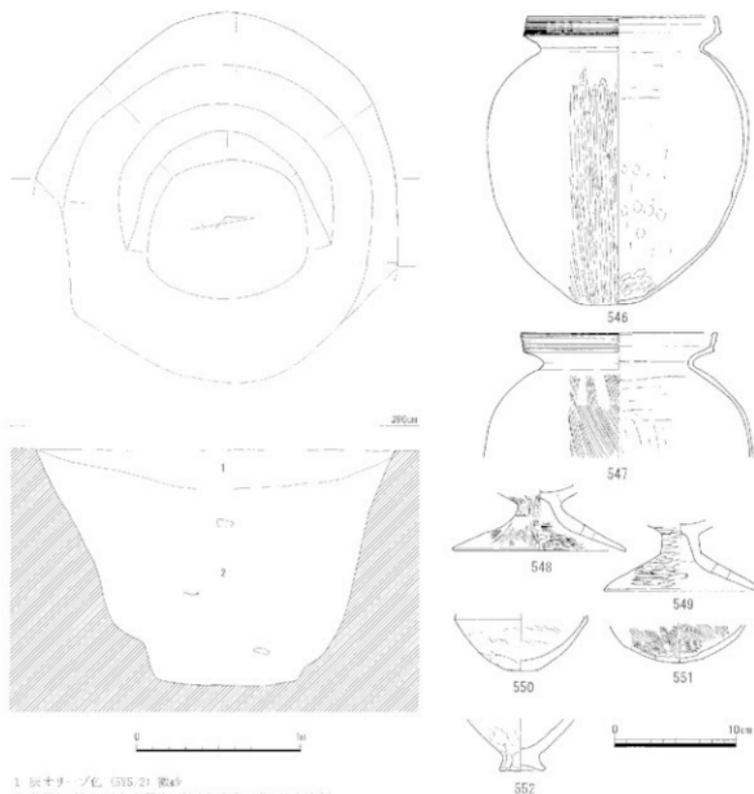
7 A区に位置する井戸である。東半分の上部を近現代用水路で削平される。

平面形は、径230cm前後の円形を呈するものと推定され、検出面からの深さは146cm、底面海拔高は229cmを測る。底面は95×85cmを測るほぼ平坦なもので、壁は直線的に急斜に立ち上がる。さらに、西側の壁は底面近くに狭く傾斜するテラスをもつ。

埋土は2層で、大半を占める第2層は多量の地山塊で人為的に埋められた可能性が高い。また、微砂層の第1層は、弥生時代後期末の洪水砂の再堆積と考えられる。

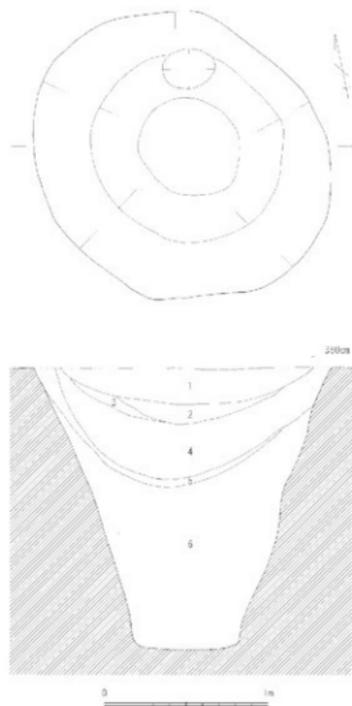
図示した土器はすべて第2層からの出土で、甕546・547、高杯548・549、鉢550・551、台付鉢552である。高杯の脚部はいずれも短脚となる。

井戸の時期は、出土遺物から百・古・Iと考えられる。

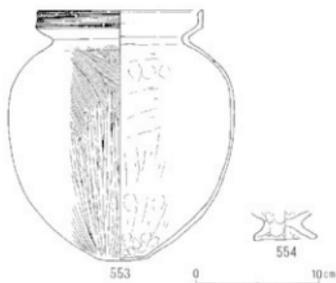


1 灰ナリ・ブル (G35・2) 微砂
2 海成色 (E・594・1) 粘質土 (地山塊多量、炭・灰土粒含)

第162図 井戸12 (I/30)・出土遺物 (I/4)



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 赤黄砂砂 (地山礫)
- 2 灰褐色 (10YR4/1) 粘(黄砂 (灰・焼土)多含)
- 3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 赤黄砂砂
- 4 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 赤黄砂砂 (地山礫含)
- 5 灰黄褐色 (10YR5/2) 赤黄砂砂 (灰・砂一は多含)
- 6 灰黄褐色 (10YR5/2) 赤黄砂砂 (地山礫含)



第163図 井戸13 (1/30)・出土遺物 (1/4)

井戸13 (第129・163図、図版18—2・43)

7 B区のはほぼ中央に位置する井戸である。上部を近世用水路に切られる。

検出時の平面形は、長径194cm、短径164cmの楕円形を呈し、深さは174cm、底面海拔高は199cmを測る。平坦な底面から急斜に壁が立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。

埋土は6層で、第4層以下は地山塊を含み、特に第5層は顕著である。

図示した遺物は、甕553と甕土器554であるが、このほかにも土師器片があり、中でも高杯片の出土が目立つ。

井戸の時期は、出土遺物から百・古・Iと考えられる。

井戸14 (第129・164図、図版43)

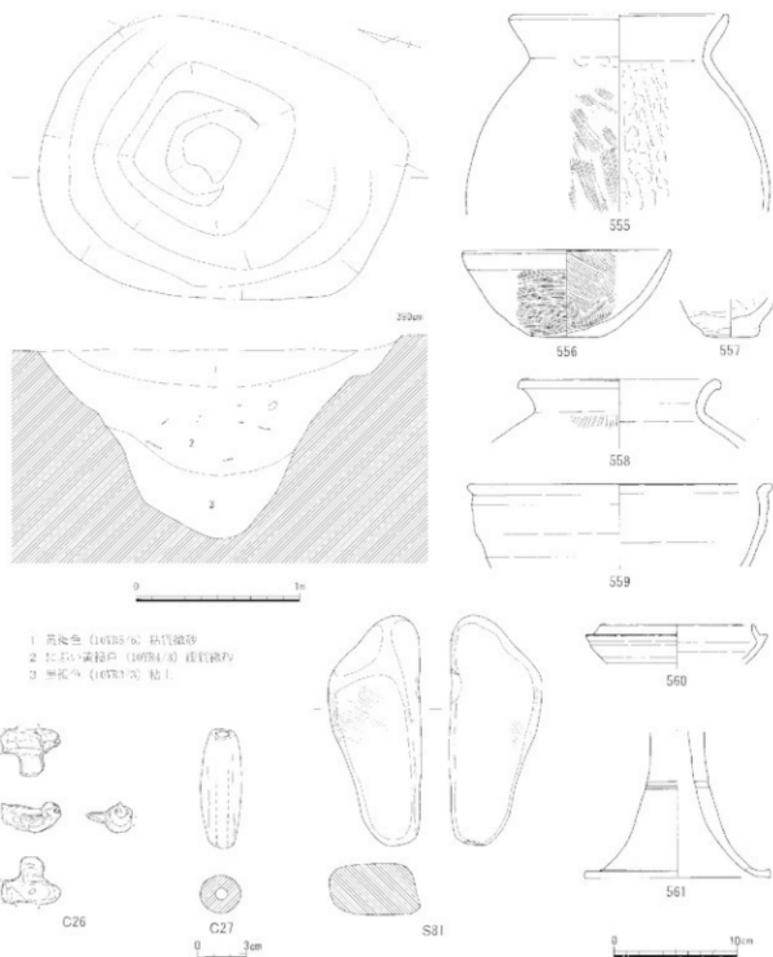
8 B区に位置するもので、西側を近現代用水路に切られる。

検出時の平面形は、長径214cm、短径175cm以上の楕円形を呈し、深さは127cm、底面海拔高は257cmを測る。小さな底面から数段に壁が立ち上がり、断面形は「V」字形を呈する。中位以下の平面形は隅丸方形を呈することから、本来は方形の掘り方をもっていた可能性がある。

埋土は3層で、第2層が砂礫と遺物を多く含むものである。

図示した遺物は、土師器、須恵器、石製品、土製品である。土師器は甕555、鉢556・557で、須恵器は甕558、鉢559、杯身560、高杯561である。また、S81は砥石、C27は土錘である。C26はつまみ出しと刺突による顔面表現があり、羽状表現の片方が割がれていることから、鳥形土製品と考えている。腹の部分に深さ1cmの穿孔があり、ここに棒状のものを突き刺して使用したと推定される。ただし、稲製の胎土であることから、弥生時代後期から古墳時代前期に属するような遺物の混入かもしれない。

井戸の時期は、出土遺物から6世紀末～7世紀初頭と考えられる。



第164図 井戸14 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

(6) 土壌

土壌72 (第129・165図)

6 A区に位置する土壌である。竪穴住居10の下面で検出している。検出時の平面形は、長径60cm、短径46cmの不整形円形を呈し、深さ17cm、底面海拔高303cmを測る。底は二段に落ち込む。図示した遺物は、壺の二重口縁である。土壌の時期は、出土遺物から百・古・Ⅱと考えられる。

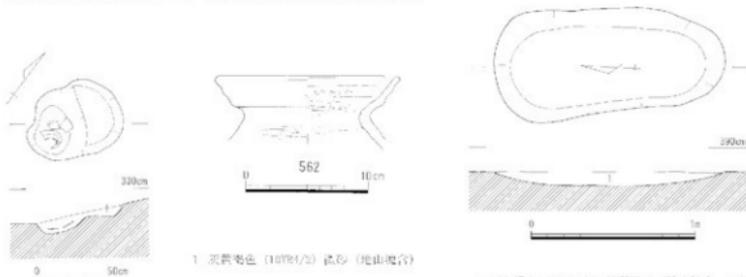
土壌73 (第129・166図)

7 A区に位置する土壌である。検出時の平面形は、長径142cm、短径64cmの長楕円形を呈し、深さ8cm、底面海拔高367cmを測る。土壌の時期は、検出状況から前期と考えられる。

土壌74 (第129・167図、図版18-3・43)

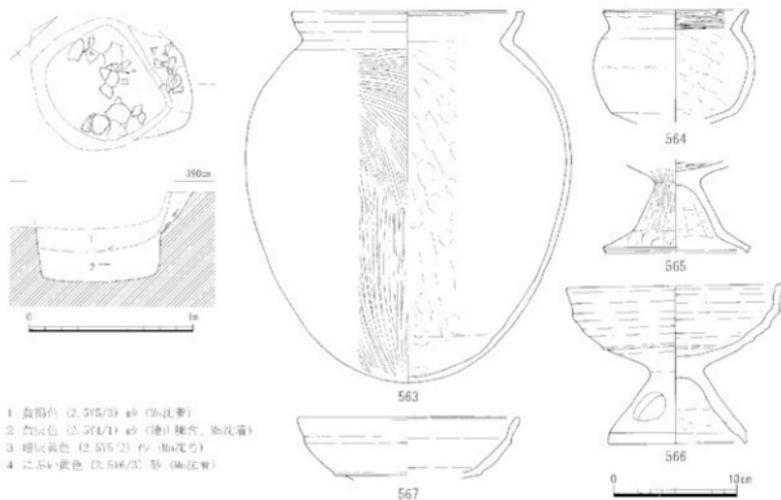
7 A区に位置する土壌である。竪穴住居11の南東隅に重なり、住居に先行する。また、上部を近現代用水路で大きく失う。平面形は隅丸方形と推定され、検出時の規模は91×79cm、深さ56cm、底面海拔高328cmを測る。底はほぼ平坦で、北辺の壁は底から垂直に立ち上がったのちに上半が広がる。遺物の出土状況は、土壌中位のものとは北辺側の壁際のものがある。

566はほぼ完形で、「ハ」字状に直線的に開く脚に大き



第165図 土壌72 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

第166図 土壌73 (1/30)



- 1 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂 (地山混合)
- 2 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂 (地山混合、地山層)
- 3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂 (地山層)
- 4 赤褐色 (2.5Y5/3) 砂 (地山層)

第167図 土壌74 (1/30) ・出土遺物 (1/4)

な透かしを三方に穿孔する。脚の端部を下方につまみ出して丸く収める。566と567は別個体であるが、杯部の形状が類似する。土壌の時期は、出土遺物から5世紀代と考えられる。

土壌75 (第129・168図、図版19-1・43)

6 A区に位置する土壌である。竪穴住居9の南側6mにある。検出時の平面形は、径67~77cmの楕円形を呈し、深さ18cm、底面海拔高358cmを測る。土壌の時期は、百・古・Iと考えられる。

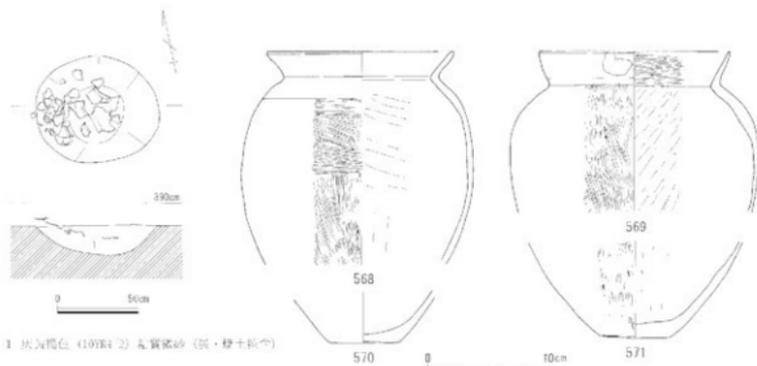
土壌76 (第129・169図)

6 A区に位置する土壌である。土壌75の南側1mにある。検出時の平面形は、81×68cmの隅丸方形を呈し、深さ10cm、底面海拔高375cmを測る。土壌の時期は、百・古・Iと考えられる。

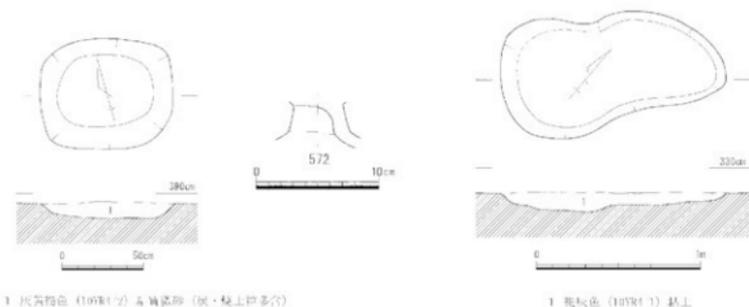
土壌77 (第129・170図)

5 B区の低位部に位置する土壌である。平面不整形楕円形を呈し、長軸139cm、短軸74cm、深さ12cm、底面海拔高301cmを測る。埋土は、低位部に広がる後期包含層と同じ褐色粘土である。

土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。

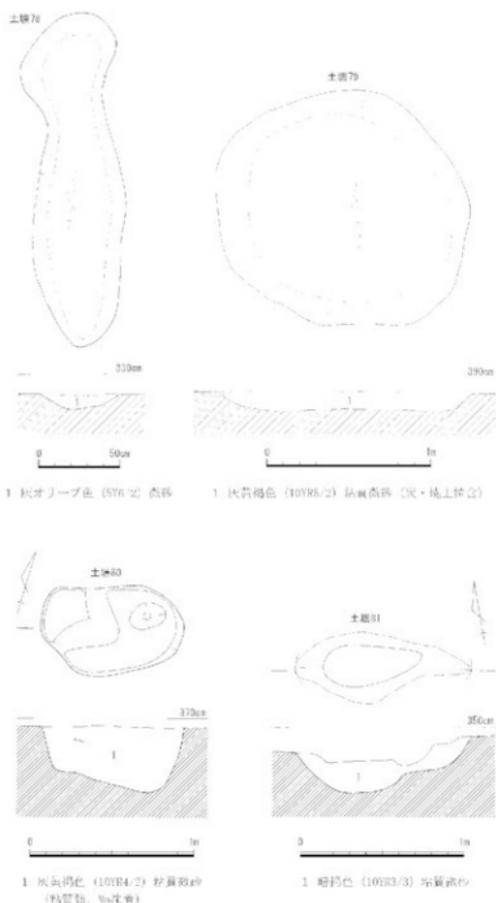


第168図 土壌75 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第169図 土壌76 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第170図 土壌77 (1/30)



第171図 土壌78～81 (1/30)

土壌82 (第129・172図)

8 B区の竪穴住居19下で検出した土壌で、長径150cm、短径123cmの不整形円形を呈し、深さ16cm、底面海拔高343cmを測る。底はほぼ平坦である。土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。

土壌83 (第129・172図)

7 B区に位置する円形を呈する土壌である。竪穴住居19下で検出し、溝34に北半部を切られる。出土遺物は、土師器と須恵器片がある。土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。

土壌78 (第129・171図)

5 B区に低位部に位置する土壌である。検出時の平面形は、不整形楕円形ともいべきもので、長軸206cm、短軸57cm、深さ9cm、底面海拔高308cmを測る。

時期は、検出状況から古墳時代と考えられる。

土壌79 (第129・171図)

B区の7ライン上に位置する土壌である。検出時の平面形は、径142～164cmの不整形円形を呈し、深さ12cm、底面海拔高369cmを測る。底は平坦で、壁は急斜に立ち上がる。土壌の時期は、検出状況から古墳時代か。

土壌80 (第129・171図)

7 B区に位置する土壌で、長径88cm、短径54cmの不整形楕円形を呈し、深さ40cm、底面海拔高324cmを測る。底は数段に落ち込み、壁は急斜に立ち上がる。出土遺物に須恵器片がある。

土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。

土壌81 (第129・171図)

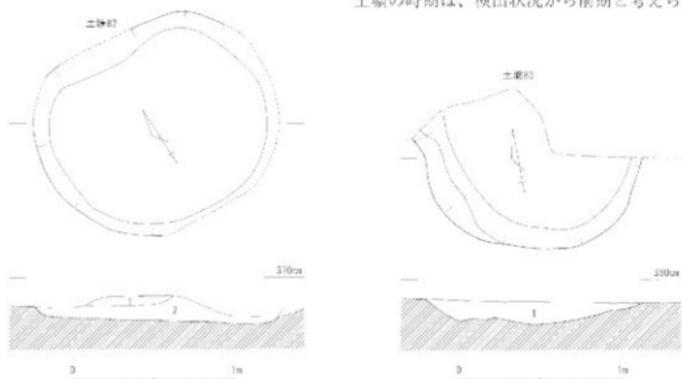
7 B区に位置する土壌である。検出規模は、長軸118cm、短軸44cm以上、深さ45cm、底面海拔高310cmを測る。底は二段に落ち込む。土壌の時期は、検出状況から前期と考えられる。

土壌84 (第129・172図)

8 B区に位置する土壌である。堅穴住居17・18下で検出している。平面形は、長径342cm、短径152cmの隅丸長方形と推定され、深さ27cm、底面海拔高340cmを測る。時期は、古墳時代か。

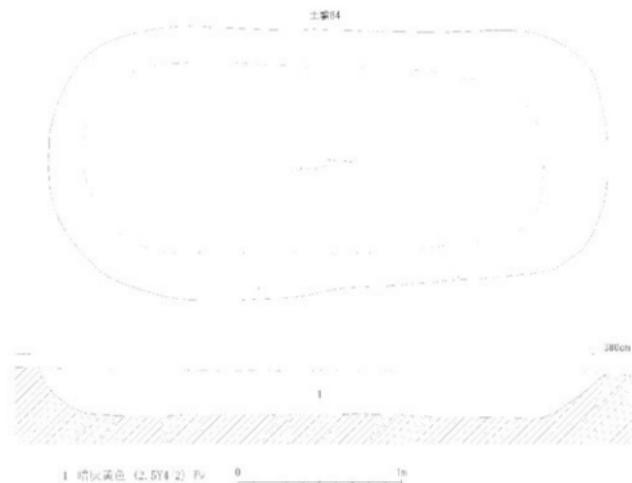
土壌85 (第129・173図)

8 B区に位置し、不整形形を呈する土壌である。堅穴住居19の南隅に重なり、上部を切られる。埋土全体に粗砂や炭や焼土粒、灰などを顕著に含む。土壌の時期は、検出状況から前期と考えられる。



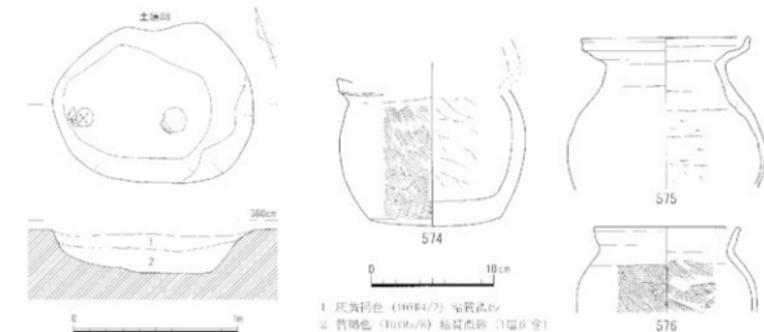
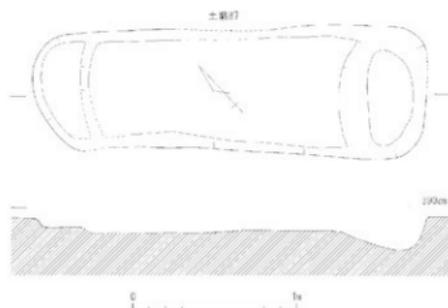
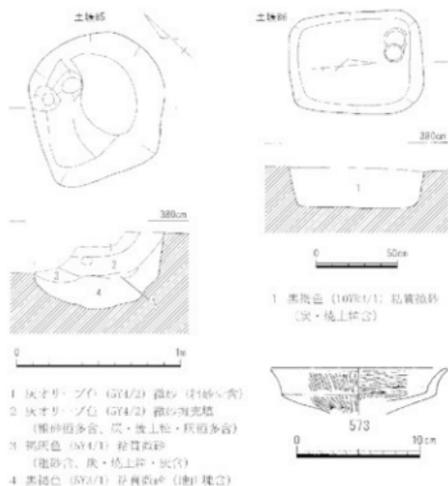
1 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 丸質粗砂 (上部に炭・灰・焼土多量)
2 黄褐色 (2.5Y5/6) 粘質粗砂 (黒褐色斑)

1 灰褐色 (7.0Y5/2) 粘質粗砂 (炭・灰・焼土多量)



1 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂

第172図 土壌82~84 (1/30)



第173図 土壌85～88 (1/30)・土壌88出土遺物 (1/4)

土壌86 (第129・173図)

7C区に位置し、隅丸方形を呈する土壌である。掘立柱建物9の中央付近にある。埋土は掘立柱建物9の柱穴の埋土に酷似する。

土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。

土壌87 (第129・173図)

7B区に位置し、隅丸方形を呈する土壌である。竪穴住居19の南側1mで、その南辺に主軸が平行する。

土壌の時期は、検出状況から後期と考えられる。

土壌88 (第129・173図、図版43)

8B区西隅に位置する土壌である。

掘立柱建物9の中央付近にある。検出時の平面形は、径98～124cmの不整形を呈し、深さ28cm、底面海拔高327cmを測る。底はやや丸みをもち、壁は急斜に立ち上がる。遺物は底面より浮いた状態で出土している。

574は手焙り形土器の鉢部である。

土壌の時期は、出土遺物から古墳時代初頭と考えられる。

(7) 焼成土壌

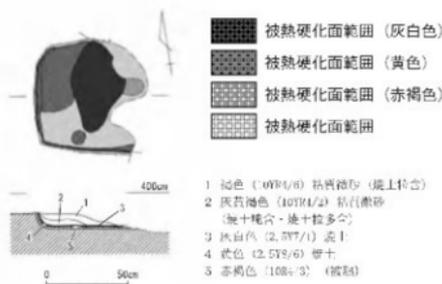
焼成土壌1 (第129・174図、図版19-2)

7 B区に位置する土壌である。焼失住居である竪穴住居19の炭化材を切って構築される。東半分は現代攪乱で失うため、その平面形は不明だが、一部が隅丸の矩形を呈するものと推定される。検出時の規模は、南北長66cm、東西長70cm以上、深さ8cm、底面海拔高380cmを測る。

埋土は2層で、全体に0.5~1.5cm大の焼成土塊を多く含み、底面と壁が被熱することから、焼成土塊と考えた。底面中央が灰白色を呈し、特によく焼けており、さらにその周囲と壁面が赤褐色~黄色に焼けている。

出土遺物は、土師器や須恵器片であるが、土壌の時期を示すものであるかは不明である。

土壌の時期は、以上の検出状況から住居19より新しく、5世紀末以降と考えられる。



第174図 焼成土壌1 (1/30)

(8) 溝

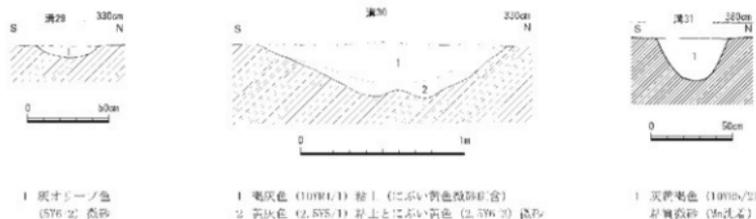
溝29 (第129・175図)

5・6 B区の低位部に位置する溝である。南東端は6ライン付近で始まり、北西側調査区外に延びる。溝30と調査区端で重なり、本溝が先行する。検出時の規模は、上幅44cm、深さ26cmを測り、断面形は碗形となる。少量の土師器片がある。溝の時期は、検出状況から古墳時代と考えられる。

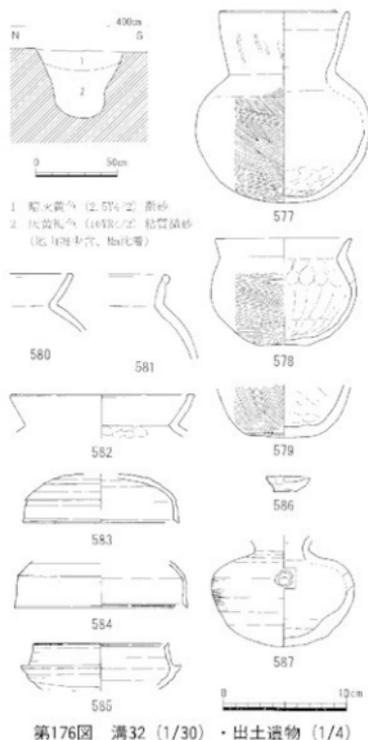
溝30 (第129・175図)

5・6 B・C区の低位部に位置する溝である。溝は6 B区で大きく屈曲するもので、両端とも調査区外に延びる。検出時の規模は、上幅153cm、深さ36cmを測り、断面形は逆台形となる。第1層の埋土の粘土は、低位部に堆積する古墳時代後期の包含層に類似する。

溝の時期は、検出状況から後期と考えられる。



第175図 溝29~31 (1/30)



第176図 溝32 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝31 (第129・175図)

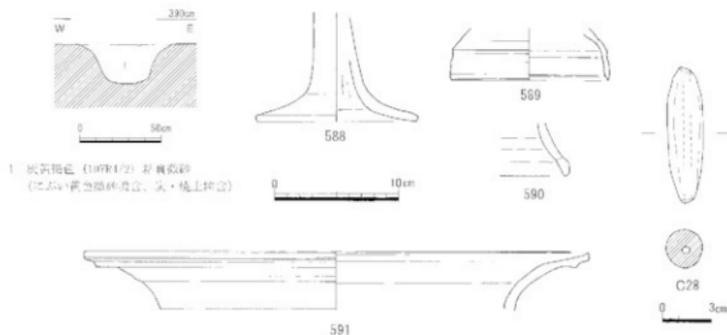
6 A区で検出した東西方向の溝である。南端を近世用水路や十取り遺構で切られる。竪穴住居10と重なり、溝が新しいことを確認している。時期は、古墳時代と考えられる。

溝32 (第129・176図、図版13)

6～8 A・B区の微高地上を東南-北西方向に直線的に流走する溝である。東端は調査区外に延び、「百間川原尾島遺跡3」の「溝47」に接続する可能性が高い。西側で溝33と交差する。検出時の規模は、上幅19cm、深さ41cmを測り、底面の海拔高は東端で350cm、西端340cm前後を測り、低位部方向に流れていたと考えられる。断面形は、「U」字形や逆台形を呈する。溝の時期は、5世紀末～6世紀初頭と考えられる。

溝33 (第129・177図)

6～8 A・B区の微高地上を流走する溝で、8 B杭付近で流れを大きく変える。東端は調査区外に延び、西端は近世十取り遺構で切れ、以西は不明である。西側で溝32と交差する。検出時の規模は、上幅56cm、深さ24cmを測り、底面の海拔高は東端で350cm、西端345前後を測り、低位部方向に流っていた



第177図 溝33 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

と考えられる。断面形は、逆台形や碗形を呈する。

出土遺物は、土師器588、須恵器589～591、土鍾C28である。

溝の時期は、5世紀末～6世紀初頭と考えられる。

溝34（第129・178～184図、図版19～3・44・45）

7・8A～C区の微高地上を東西に貫流する溝である。両端は調査区外に延び、西側は「百間川原尾島遺跡3」の「溝35」に接続すると考えられる。また東側はやや距離が離れるが、「百間川原尾島遺跡3」の「溝38」に接続するものと推定される。

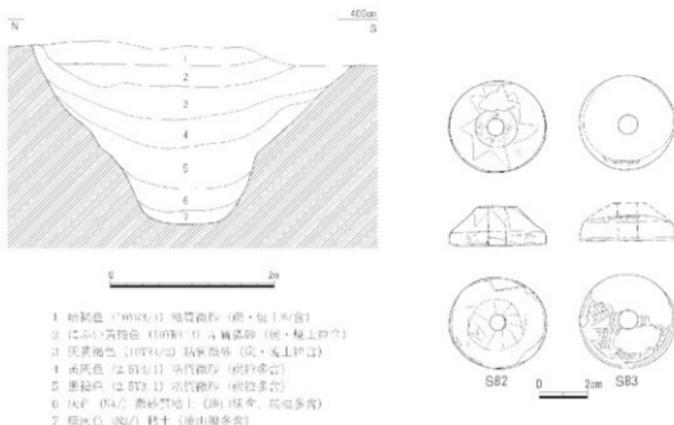
検出時の規模は、上幅198cm、底幅40cm、深さ112cmを測り、検出長は約46mである。底面の海拔高は8区で275cm前後、7区で270cm前後を測り、東から西へ傾斜する。断面径は、平坦な底面から壁が段をもって逆「ハ」字形に開くものである。

埋土は7層で、下半部は炭粒が顕著に見られる。また、特に下層の第6・7層では地山塊が顕著に認められる。

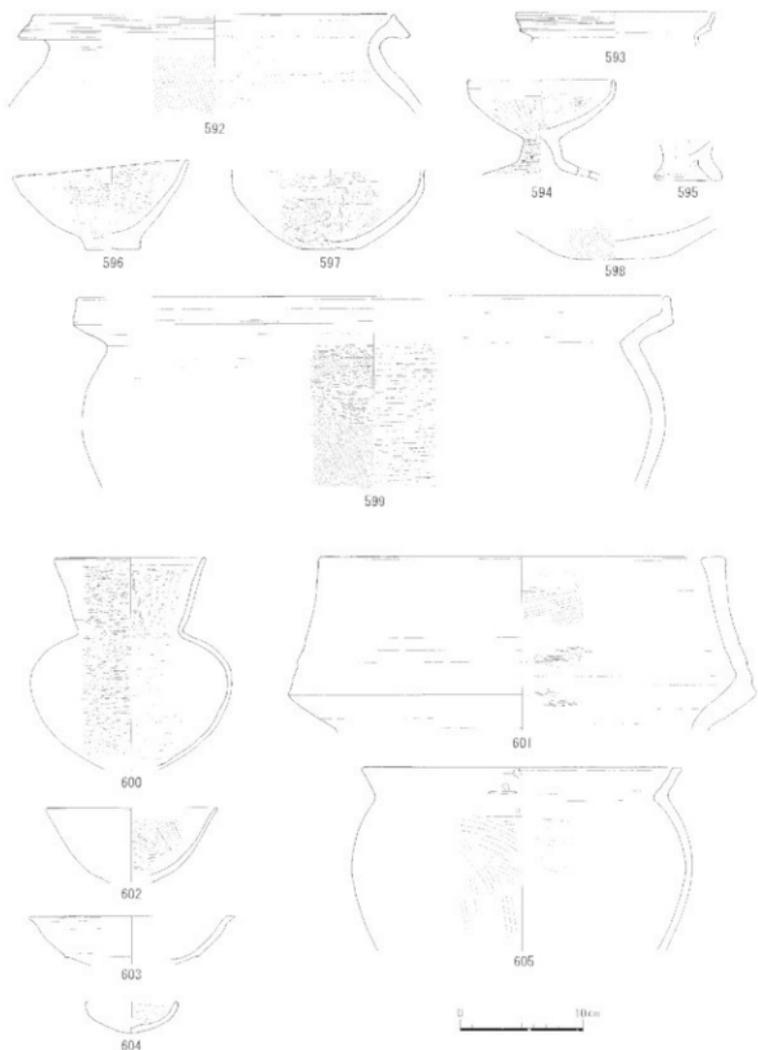
出土遺物は多種多様なものがある。これは、溝が微高地上を貫流し、多くの遺構を切っていることとも関係する。弥生土器と土師器については、第180図に掲載したものは溝よりも古い土器で、下層遺構からの混入と考えられる。弥生時代後期から古墳時代中期までの時期を示す。また、第182～184図に掲載した須恵器の中でも古い時期のものが混入している。以下、溝に伴うと考えられる遺物について記述する。

土師器は、甕606～610・616、鍋611、甕612、把手613～615、高杯617、製塩土器618である。甕610は長胴となり、製塩土器618は内外面タタキを施す。

須恵器は、杯蓋621～623、杯身625～631、高杯632～634・637～639、釜640、壺641・642、甕643・644・646、平甕647、提甕648、横甕649～652、甕653・654・656～660・663、器台664・665がある。

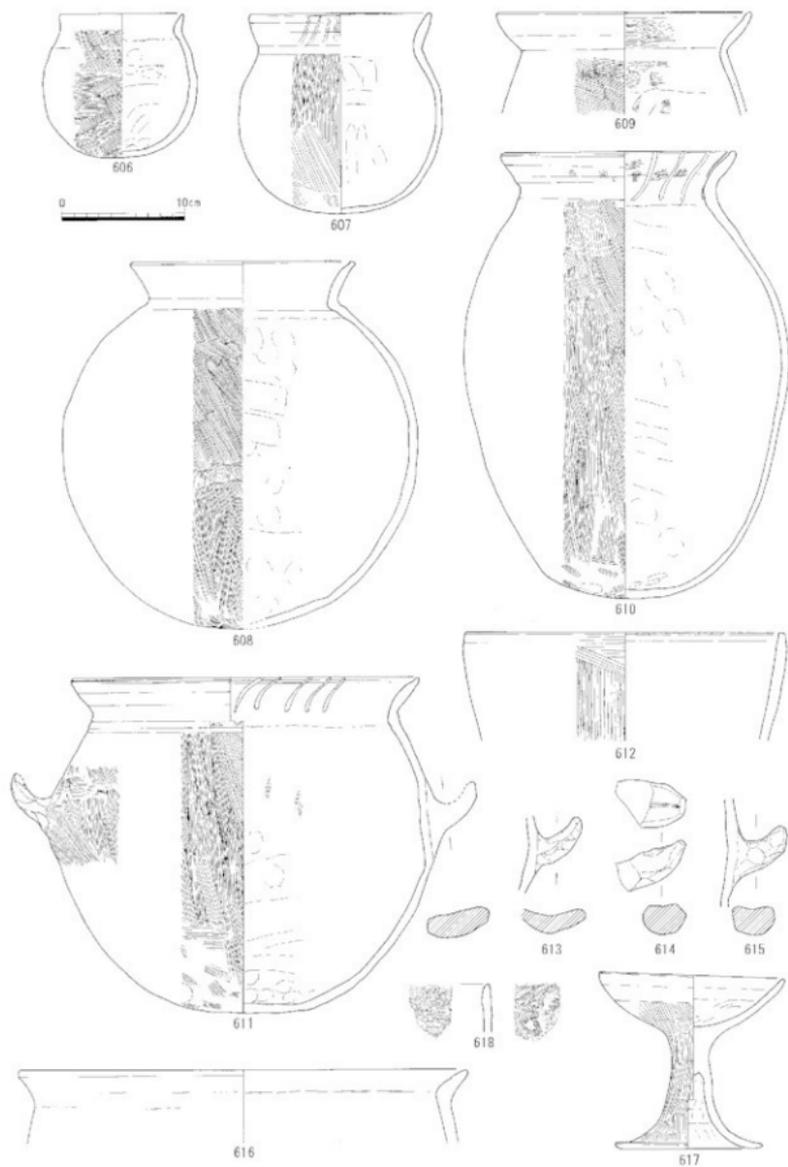


第178図 溝34 (1/60)・出土遺物① (1/2)

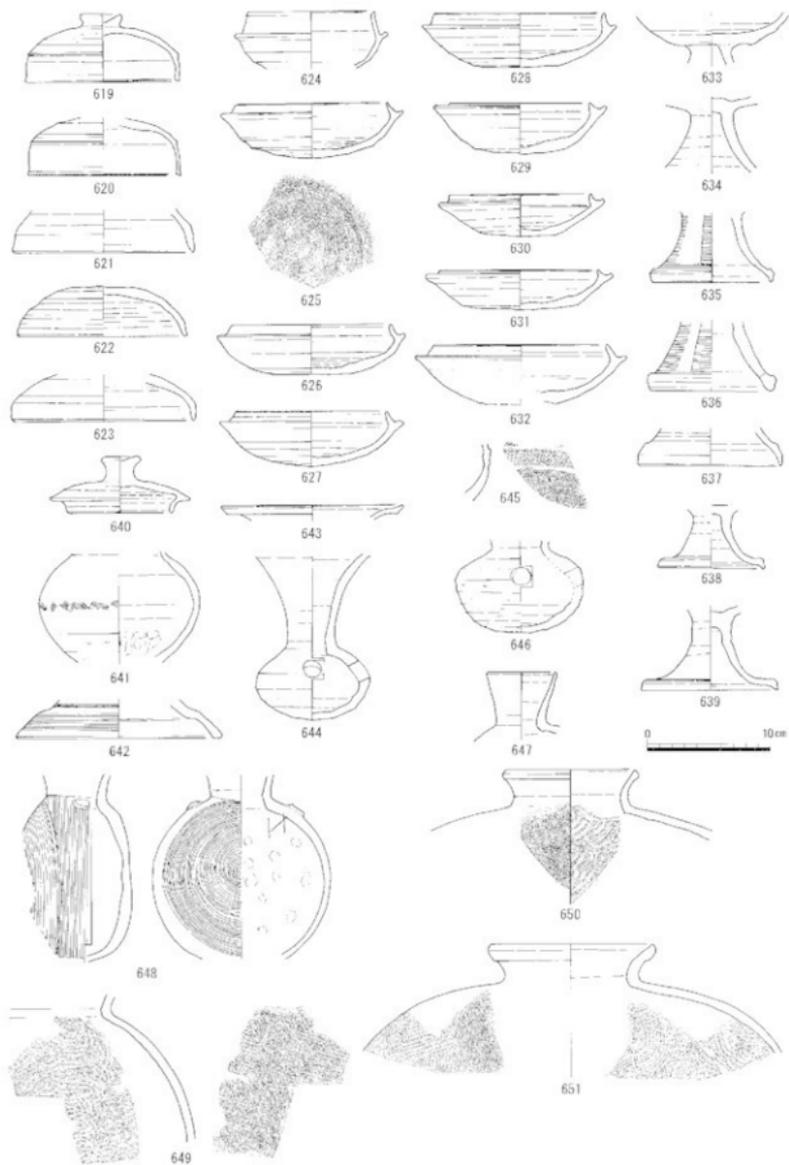


第179図 溝34出土遺物② (1/4)

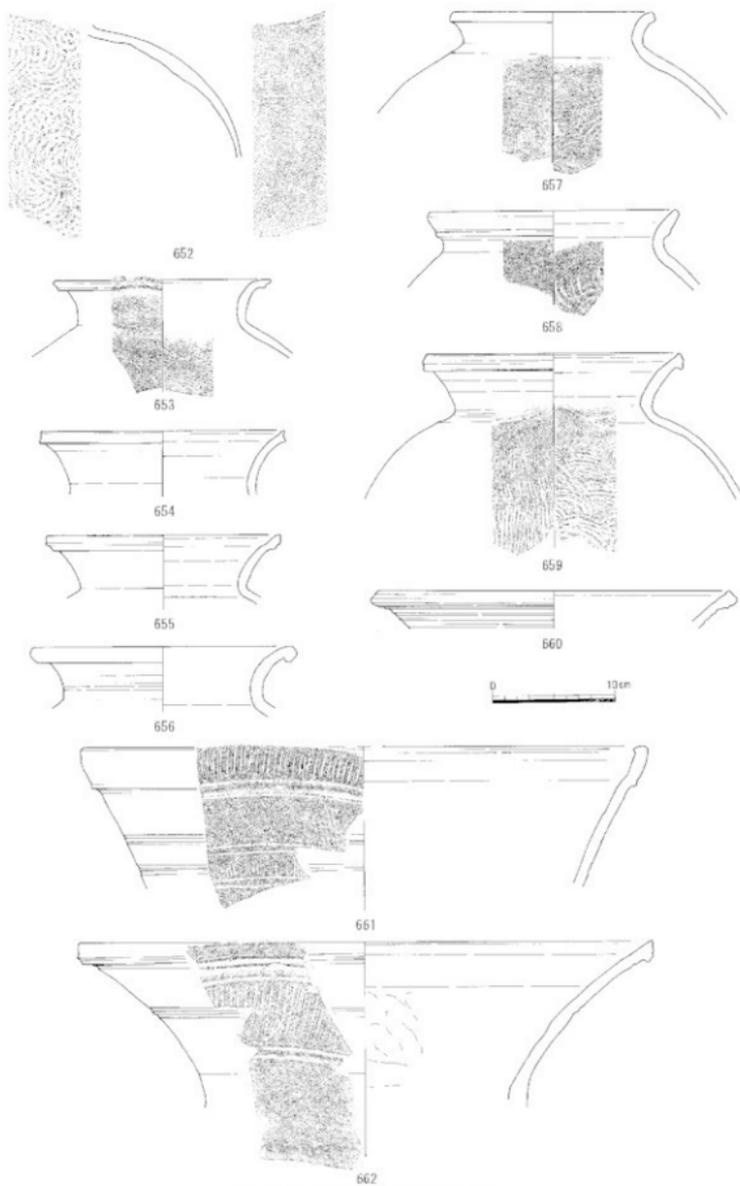
土器以外の遺物は、石製品、鉄製品、土製品、鉄滓、灰壁片がある。石製品では、滑石製紡錘車S82・83、砥石S84がある。鉄製品では、刀子M26・27、鎌M28、釘M29、不明鉄器や鉄片M30～32がある。土製品では、上錘C29～43と羽口C44・45がある。紡錘車2点は、いずれも上下面に線刻を施す。



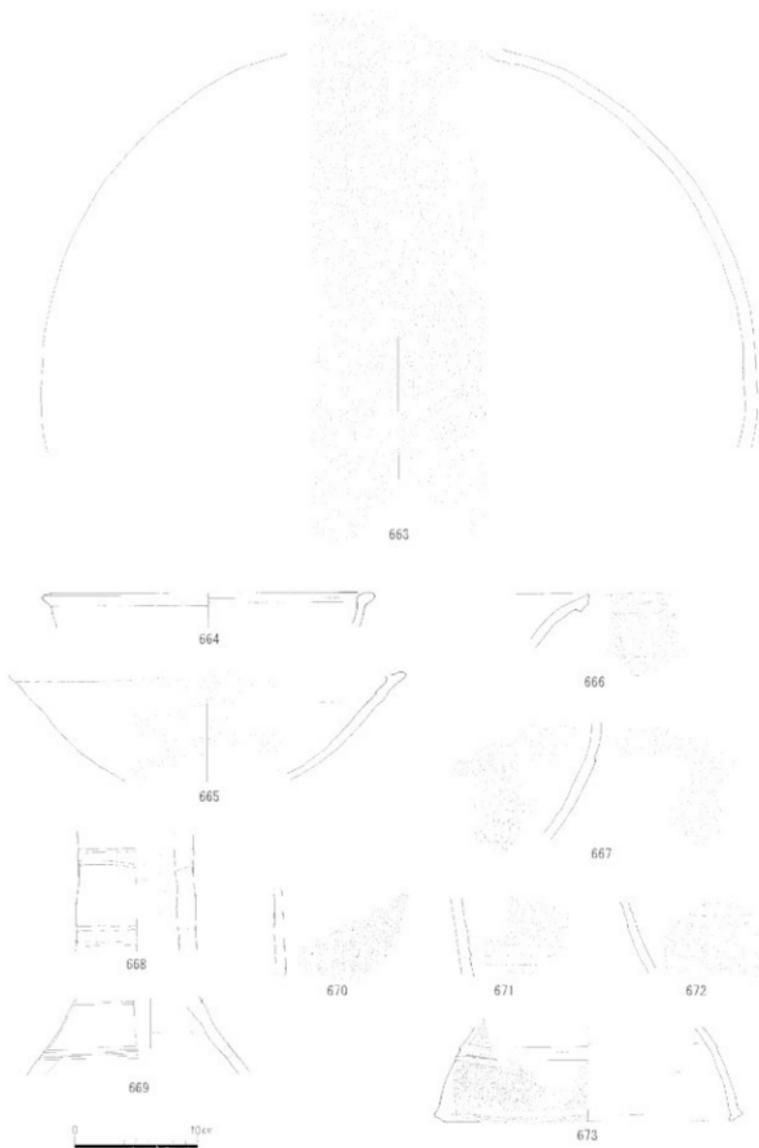
第180図 溝34出土遺物③ (1/4)



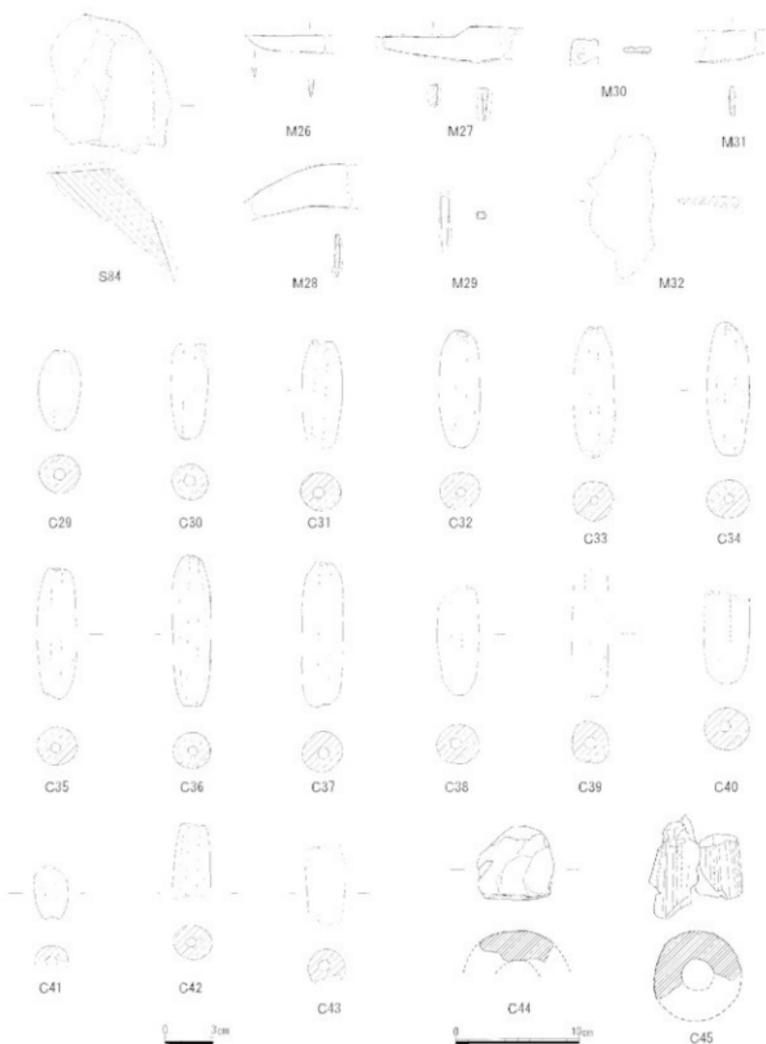
第181图 溝34出土遺物④ (1/4)



第182図 溝34出土遺物⑤ (1/4)



第183図 溝34出土遺物⑥ (1/4)



第184図 溝34出土遺物⑦ (1/4・1/3)

また、鉄滓と炉壁片については、大澤正己・鈴木瑞穂両氏に金属学的調査を依頼し、報告をいただいている（付載2）。それによると、鉄鉱石製錬とその後の精錬鍛冶作業が行われていたとされる。溝の時期は、出土遺物から6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

4 古代以降の遺構・遺物

(1) 古代以降の概要

この時期の遺構は、掘立柱建物1棟、土塙4基、土塚墓1基、溝4条、土取り遺構を掲載する。

古墳時代以前の低位部では、古代の溝3条を検出している。その後、近世の土取り遺構が掘削されるまで、目立った遺構は見られない。



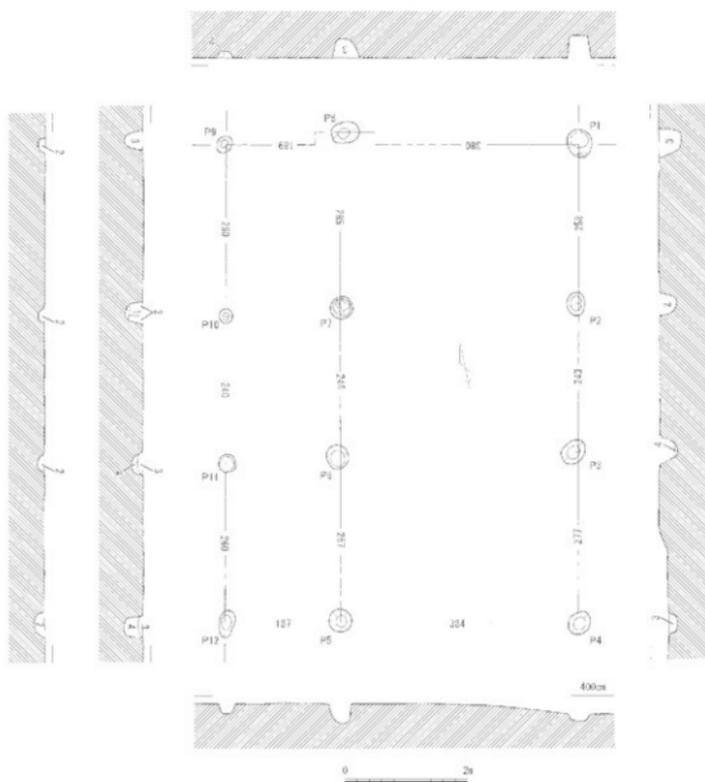
第185図 百間川原尾島遺跡 古代以降遺構全体図 (上:1/2,500)・古代以降遺構全体図 (下:1/500)

微高地上に位置する遺構は、低位部に続く古代の溝1条を除き、すべて中世と考えられる。掘立柱建物は、西面廂をもつ3×1間である。また、土壌墓においては、遺存状態の悪いものの人骨を検出している。

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物10 (第185・186図、図版20-1)

6・7B区に位置する3×1間の南北棟の掘立柱建物である。西面に廂をもつ。建物の現残は、桁行全長778cmと798cmで、柱間距離は243～285cmを測る。梁間は380cmと384cmである。建坪は30.41㎡で、棟方向はN-13°-Wである。母屋の柱穴掘り方は、円形か楕円形を呈し、径40cm前後、検出面からの深さ30～35cmを測る。また、P9～12の4個で構成される廂の柱穴掘り方は、円形か楕円形を呈



1 灰オリーブ色 (L.57%/1) 腐蝕
2 にぶい灰色 (L.57%/4) 粘質黄土

3 にぶい黄色 (L.57%/7) 粘質腐蝕地と黄褐色 (L.57%/4) 腐蝕地
4 赤灰色 (L.37%/1) 粘土塊と腐オリーブ色 (37%/4) 粘質黄土

第186図 掘立柱建物10 (1/80)

し、径24～46cm、検出面からの深さ10～18cmを測る。

遺物は各柱穴から少量が出土しているが、図示し得るものはない。P8から早島式土器片が出土している。建物の時期は、検出状況から中世と考えられる。

(3) 土塼

土塼89 (第185・187図)

7B区に位置し、掘立柱建物10の東側1mにある。西半部を近世用水路で切られるが、平面形は、楕円形と推定される。検出時の規模は、長径124cm、短径58cm以上、深さ5cm、底面海拔高は363cmを測る。平坦な底をもつ。出土遺物は少量の土器片がある。

土塼の時期は、検出状況から中世以降と考えられる。

土塼90 (第185・187図)

7B区に位置する土塼で、土塼89の南東側に近接する。

西隅を近世用水路で切られるが、平面形は隅丸長方形と推定される。検出時の規模は、長径138cm、短径68cm、深さ10cm、底面海拔高は357cmを測る。平坦な底から垂直に壁が立ち上がる。出土遺物は少量の土器片がある。

土塼の時期は、検出状況から中世以降と考えられる。

土塼91 (第185・187図)

7B区に位置する土塼で、掘立柱建物10に重なる。検出時の平面形は楕円形と推定される。その規模は、長径77cm、短径57cm、深さ20cm、底面海拔高は362cmを測る。やや傾斜する底から急斜に壁が立ち上がる。

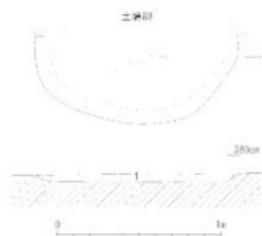
土塼の時期は、検出状況から中世以降と考えられる。

土塼92 (第185・187図)

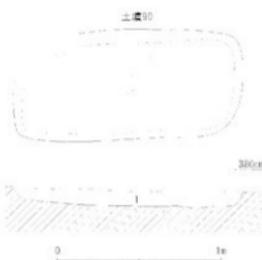
7B区の南隅に位置する土塼である。検出時の平面形は長楕円形と推定される。

規模は、長径73cm、短径53cm、深さ41cm、底面海拔高は342cmを測る。底は径24cmの平坦面で、直線的な壁が急斜に立ち上がる。出土遺物は少量の土器片があり、土師器碗の高台部片等が出土している。

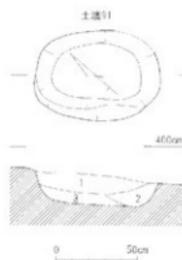
土塼の時期は、出土遺物から古代以降と考えられる。



1 天草赤色 (10710/2) 鉄質磁器 (地山塊混合)



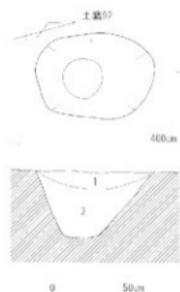
1 天草赤色 (10710/2) 鉄質磁器 (地山塊混合)



1 天草赤色 (10795/2) 粘質赤砂 (地山塊混合)

2 天草赤色 (10795/2) 粘質赤砂 (地山塊混合)

3 天草赤色 (10794/2) 粘質赤砂 (地山塊混合)



1 オリーブ黄色 (595/3) 粘質土 (地山塊混合)

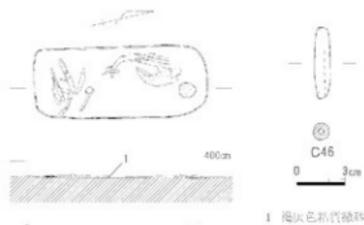
2 灰オリーブ色 (593/2) 粘質土 (地山塊混合)

第187図 土塼89～91 (1/30)

(4) 土壌墓

土壌墓1 (第185・188図、図版20・2)

7区のCライン上に位置する土壌墓である。現代耕作土直下で検出したため、その耕作等で上部を大きく削平されていると考えられる。



第188図 土壌墓1 (1/30)・出土遺物 (1/3)

土壌の掘り方は、隅丸長方形を呈し、長軸106cm、短軸41cm、深さ2cmを測る。底面海拔高は385cmで、骨片は土壌底から1cm前後浮いた状態である。

人骨はほぼ土質化しており、その分布状況から、北頭位で東向きの横臥屈伸と判断した。

出土遺物は、図示した土錘C46のほか、早鳥式土器や須恵器片があるが、詳細な時期を示すものはない。

土壌墓の時期は、出土遺物や検出状況から中世と考えられる。

(5) 溝

溝35・36 (第185・189図)

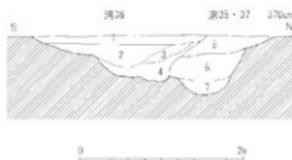
5・6B・Cの低位部に位置し、ほぼ重複する2条の溝である。両端は調査区外に延びる。その南側は「百間川原尾島遺跡3」の「溝50・51」に接続するものと推定される。検出時の規模は、溝35が上幅110cm以上、深さ72cmを測り、溝36が上幅216cm、深さ57cmを測る。断面形は、両者とも壁に段をもつ碗形となり、掘り直しが想定される。なお、第189図の第5層は溝37であり、二者の先後関係は、溝35→37→36となる。溝の時期は、検出状況から古代と考えられる。

溝37 (第185・189図)

6A区の微高地上を東西方向に流走する溝である。西側は5B区の低位部において、溝35・36の南半部に重複すると考えられる。溝の時期は、検出状況から古代と考えられる。

溝38 (第185図)

8B区の微高地上を南北方向に途切れながら流走する溝で、時期は中世以降と考えられる。



- 1 赤褐色 (10796/3) 磁砂 (66.3%)
- 2 灰黄褐色 (10796/2) 粘質磁砂 (赤褐色系磁砂は多量)
- 3 黄灰色 (10796/1) 粘質磁砂 (灰白色磁砂は多量)
- 4 黄灰色 (10795/1) 粘質磁砂 (赤褐色系磁砂は多量)
- 5 灰黄褐色 (10796/2) 粘砂 (磁粒多量) (C1, 28層)
- 6 灰黄褐色 (10796/2) 粘質磁砂
- 7 灰白色 (10794/2) 粘土に赤褐色 (2, 576/4) 磁砂小塊で充填

第189図 溝35～37 (1/60・1/30)

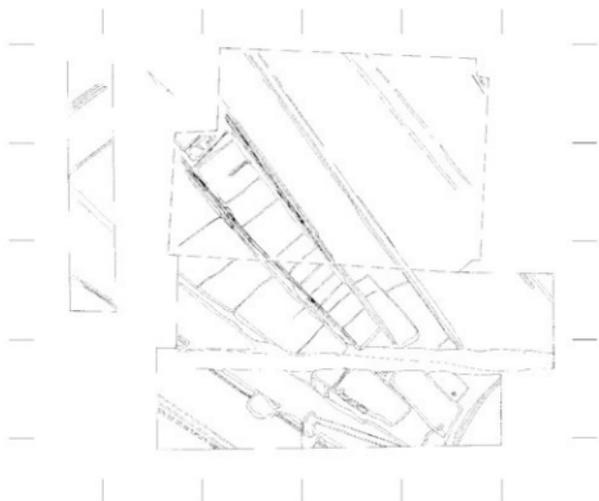


- 1 黄灰色 (2, 577/1) 磁砂
- 2 黄灰色 (2, 573/1) 磁砂

(6) 土取り遺構 (第190～192図)

5・6 A～C区において、間仕切り状の畦畔によって矩形に区画された遺構を検出している。その範囲は、弥生～中世までの低位部にはほぼ重なるものである。検出面から底までの深さは、80cmにもおよび、底面海拔高は、平均315cm前後となる。このレベルは、下部の遺構でいえば、弥生時代後期末水田の微高地際の田面高に一致し、調査区西隅では洪水砂中位にあたる。洪水砂の上層は古墳時代～中世段階の粘土層が堆積していたと推定されることから、これらの採土を目的とした土取り遺構と考ええる。土層は層上半が粘土塊で埋め立てたもの、下半が砂や粗砂の洪水による堆積と考えられる。

674は備前焼小杯、675～678は肥前染付碗、679は染付陶器の溶着、680は備前焼皿と考えられる。肥前陶器の時期は、17世紀半ば～18世紀初頭であり、これらが土取りの時期を示す可能性がある。

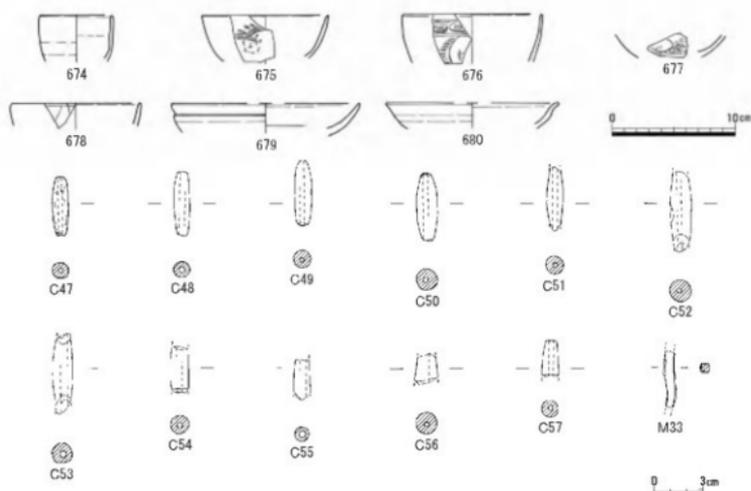


第190図 百間川原尾島遺跡 近世遺構全体図 (1/1,000)



- | | |
|---|----------------------------|
| 1 灰白色 (S16/1) 粘質細砂質土塊黄色 (S16/2)
粘質細砂塊で充填 (R1白色粘砂・Fe多穴) | 3 オリーブ黄色 (S16/3) 細砂粘土層多量 |
| 2 灰白色 (R05/1) 粘土 (灰白色粘質細砂多量) | 4 褐色 (S17/3) 粘砂 (土面に孔着跡あり) |

第191図 土取り遺構1 (1/80)



第192図 土取り遺構出土遺物 (1/4・1/3)

5 包含層等出土遺物

第193～201図に包含層等からの出土遺物を掲載する。

第193図は、微高地上の建物等としてまともななかった柱穴から出土した土器である。

681と682は、縄文土器の深鉢である。683～693は、弥生土器と土師器である。壺683、甕684・685・689、高杯686・687、鉢688、製塩土器690～693がある。694と695は須恵器で、杯蓋694と壺695である。壺695は西播磨に類例をもつもので、9世紀代に属するものと考えられる。696と697は、早島式土器の高台である。

第194図は、5・6 A～C区の低位部に堆積する弥生時代後期末の洪水砂層から出土した土器である。

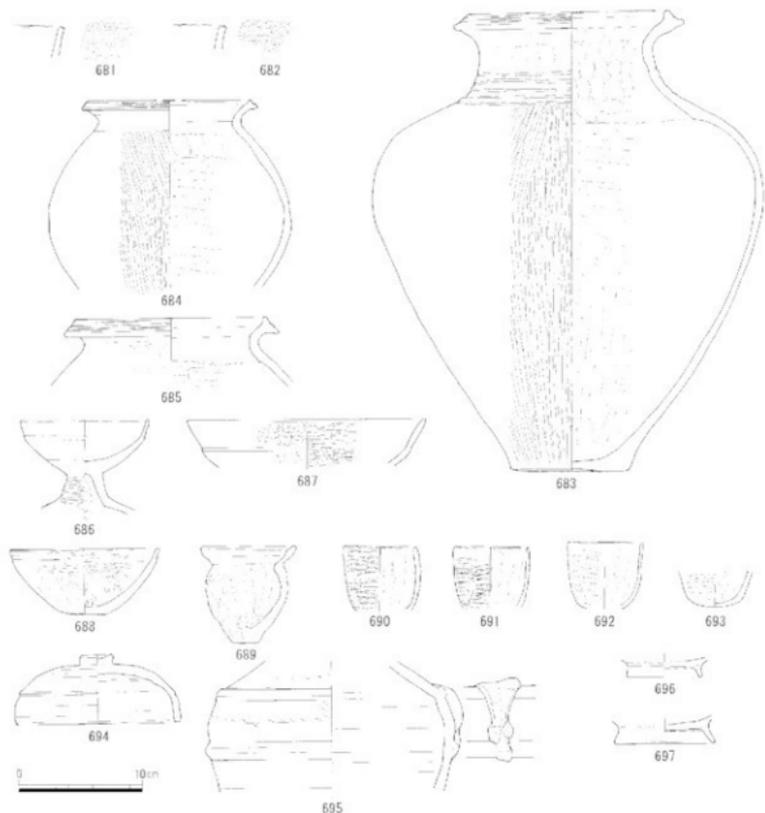
弥生土器の壺698・699、甕700～703、高杯704・705、鉢706～709、製塩土器710がある。

第195図は、弥生時代後期末の洪水砂以外の低位部包含層から出土した土器である。

縄文土器711・712、弥生土器・土師器713～734、須恵器735～742である。器種別では、深鉢711、浅鉢712、壺713～717、甕718～725、蓋726、高杯727～730、鉢731・732、製塩土器733・734、杯蓋735～737、短頸壺738、平甕739・740、長頸壺741、甕742である。

第196・197図は、微高地上の包含層から出土した土器である。

弥生土器・土師器743～772・782、須恵器773～780、黒色土器781、白磁783がある。器種別では、壺743～750・778、甕751～757・779、高杯758～760・776、台付鉢761、鉢762～768、直口壺769、製塩土器770、手づくね土器771、蓋772、杯蓋773～775、短頸壺777、器台780、高台椀781、小皿782、



第193図 包含層等出土遺物① (1/4)

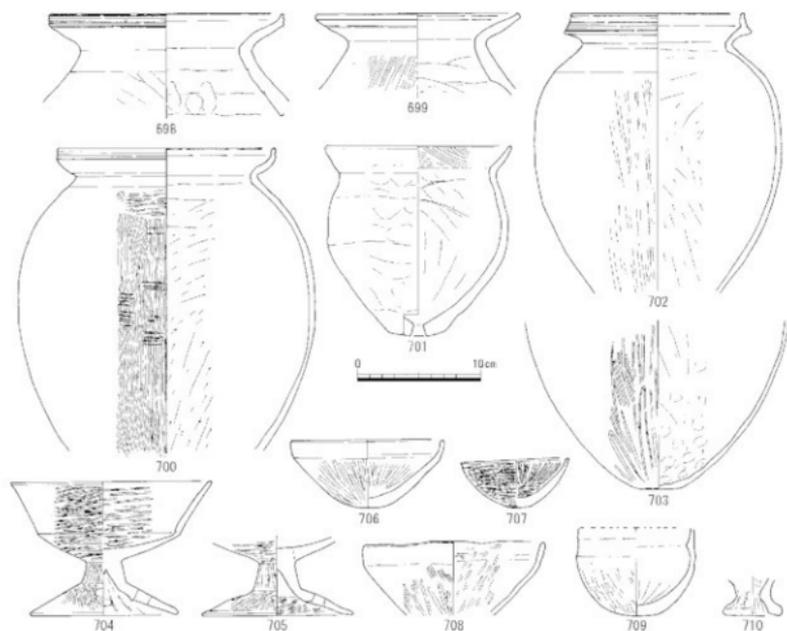
碗783である。

第198図上半は、近世土取り遺構から出土した土器で、土取り遺構よりも古い時期の包含層からの混入と考えられるものである。

須恵器784～790・793、早島式土器791・792、土師器794、輸入磁器795～800である。器種別では、甕784・785、鉢786～789、高台椀790～792、椀793、小皿794、白磁合子795、青磁碗796・800、白磁碗797～799である。

第198図下半は、主に近・現代の掘削から出土した土器である。

弥生土器801・802、須恵器803～808、輸入磁器809～814がある。器種別では、甕801・805、製塩土器802、高杯803、高杯型器台804、甕806、壺807、器台808、白磁碗809・811、青磁碗810～813、青磁小皿814である。



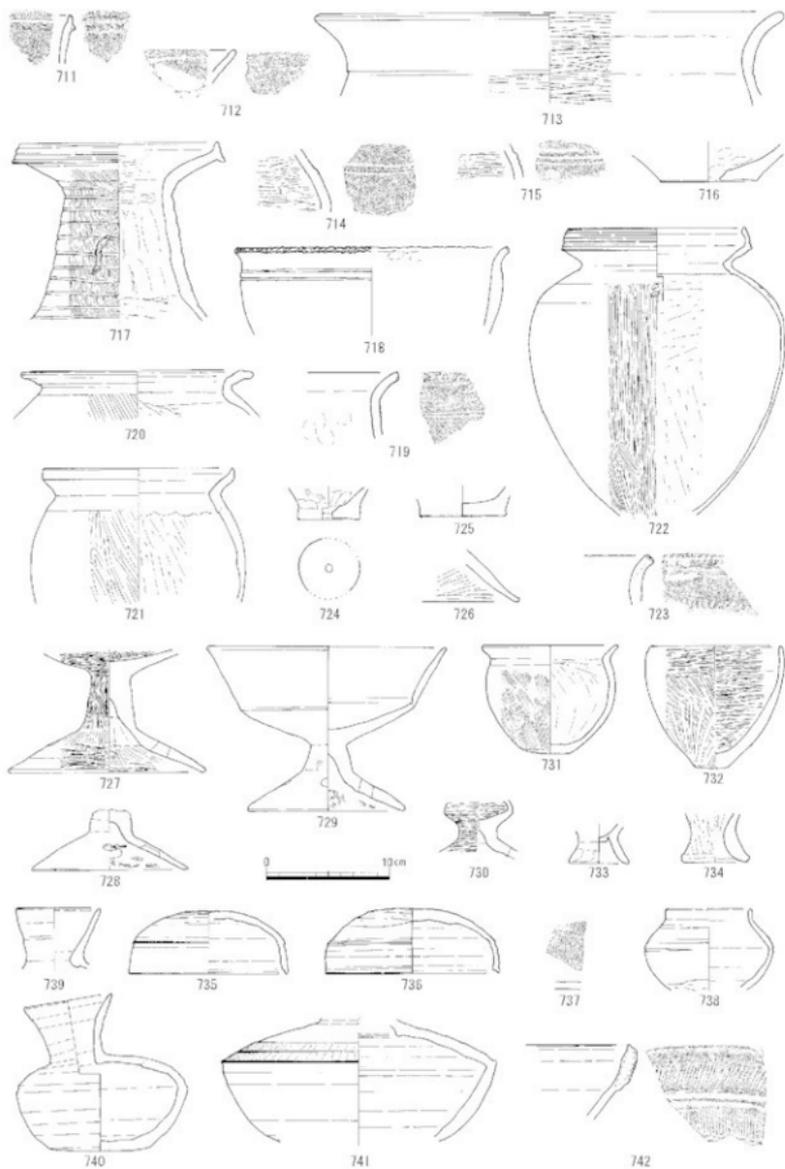
第194図 包含層等出土遺物② (1/4)

第199・200図は石器を掲載している。

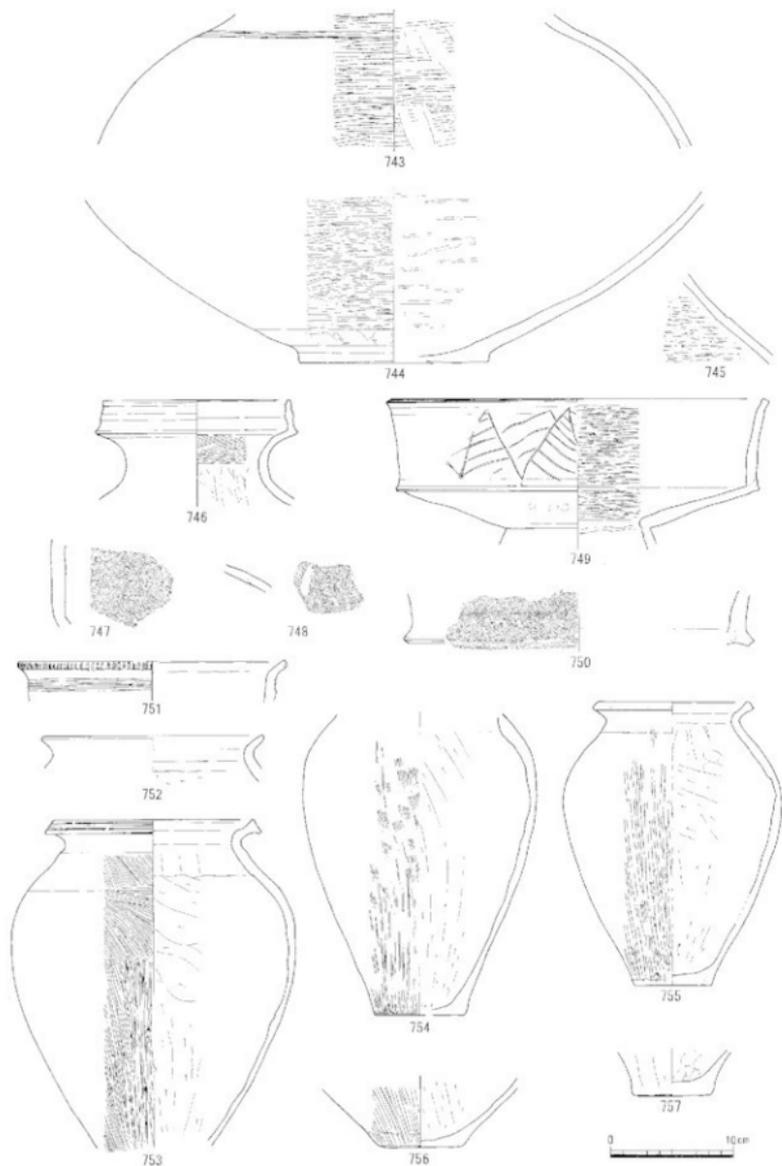
S 85～100はサヌカイト製の石楾、S 101はサヌカイト製石錘、S 102～113はサヌカイト製梗、S 114～116はサヌカイト製のUF、S 119はサヌカイト製石包丁である。S 117は石材不明の石包丁、S 118は粘板岩製石包丁である。また、S 120はサヌカイト製の打製石楾、S 121・122は粘板岩製の石楾で、S 121は打製である。S 123～126は石錘、S 129～132は砥石、S 133は滑石製の石錘か。S 134は粘板岩製の硯である。

第201図は、柱穴や包含層出土の金属製品とガラス製品、土製品を掲載する。

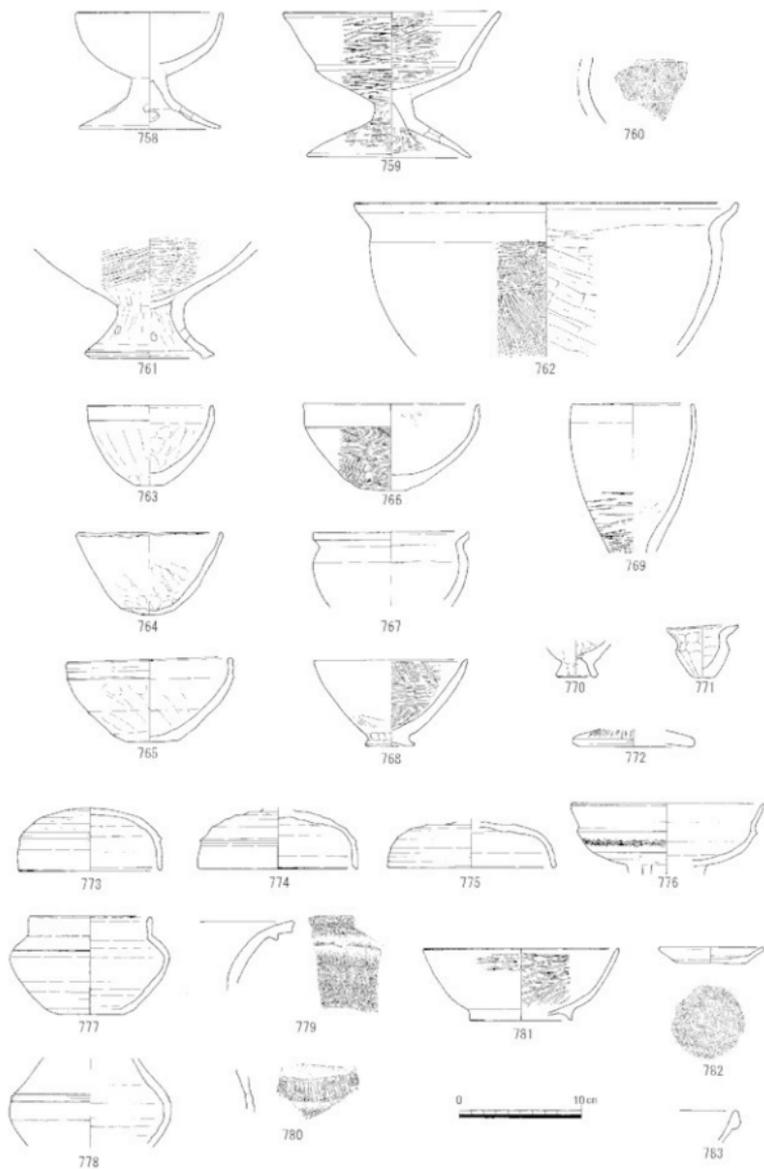
M 34は鉄器で器種不明、M 35は鉄釘、M 36は鉛弾、M 37は青銅製鏡である。M 37は珠文鏡片と考えられる。鑄上がりによるものか鏡背・面とも滑らかである。破断面はやや丸くなっている。破鏡としての使用も想定される。古墳時代の柱穴からの出土である。G 4はガラス小玉、S 135は滑石製白玉である。土製品は、C 58～82が土錘、C 83は備前焼片の円板形土製品、C 84～86は羽目である。



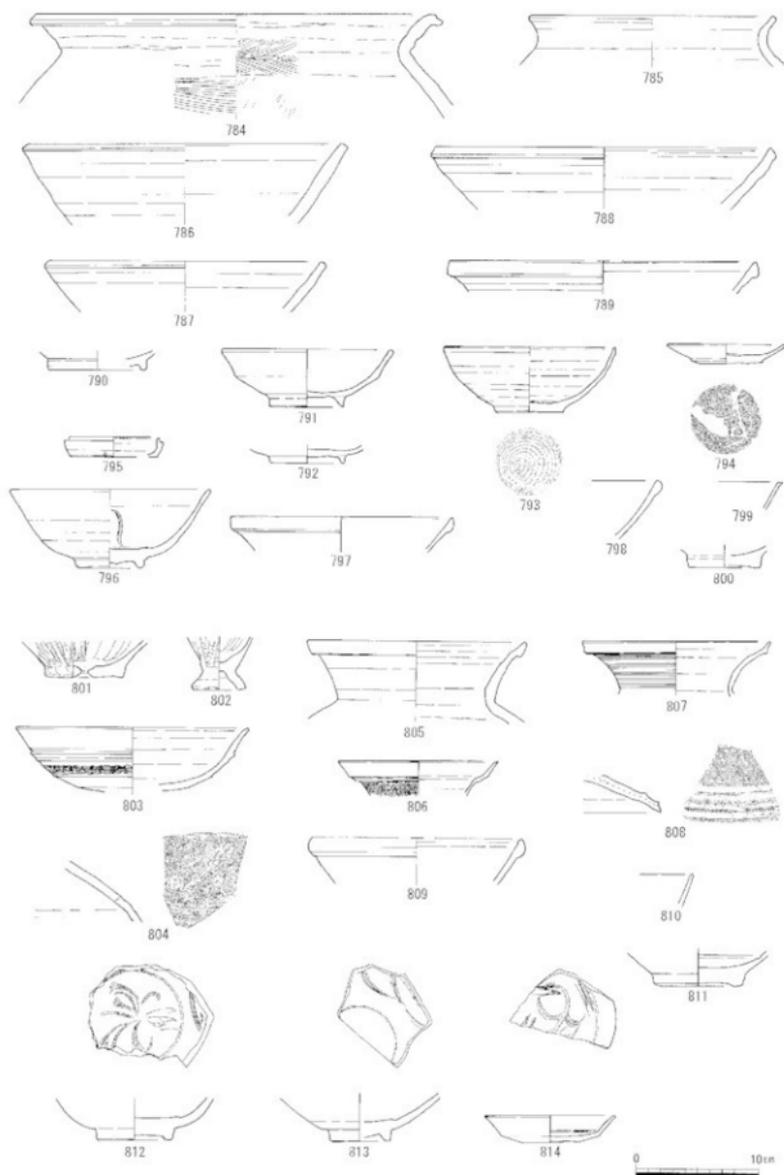
第195図 包含層等出土遺物③ (1/4)



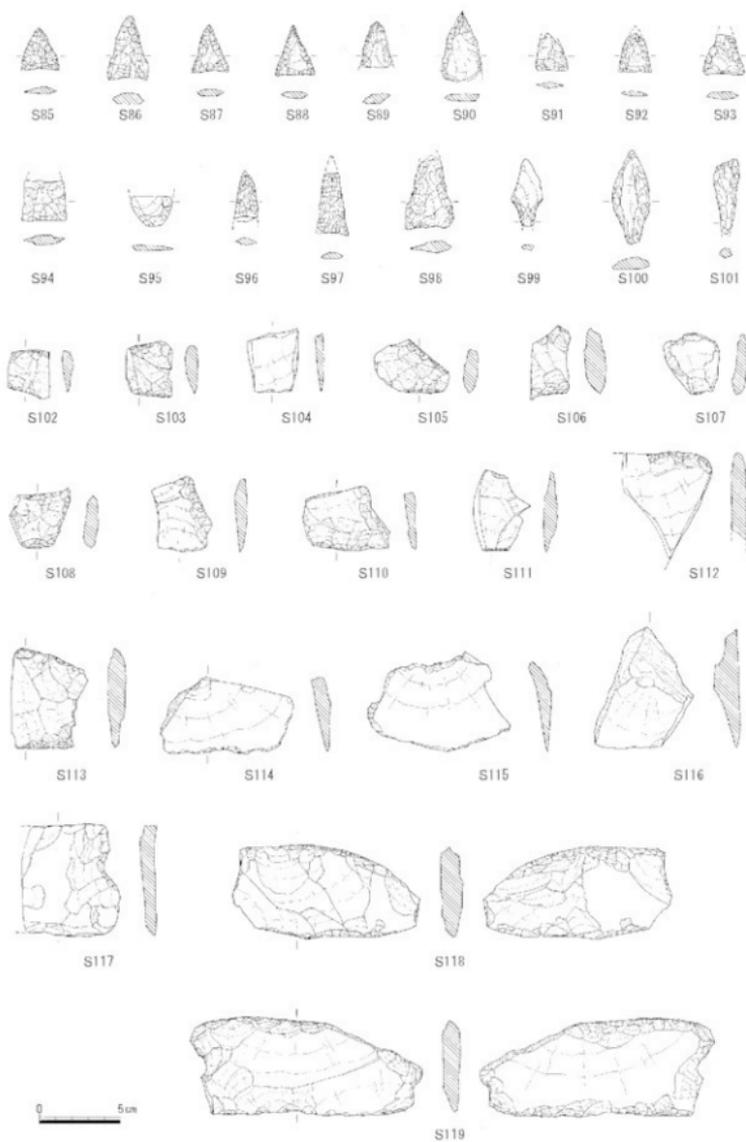
第196図 包含層等出土遺物④ (1/4)



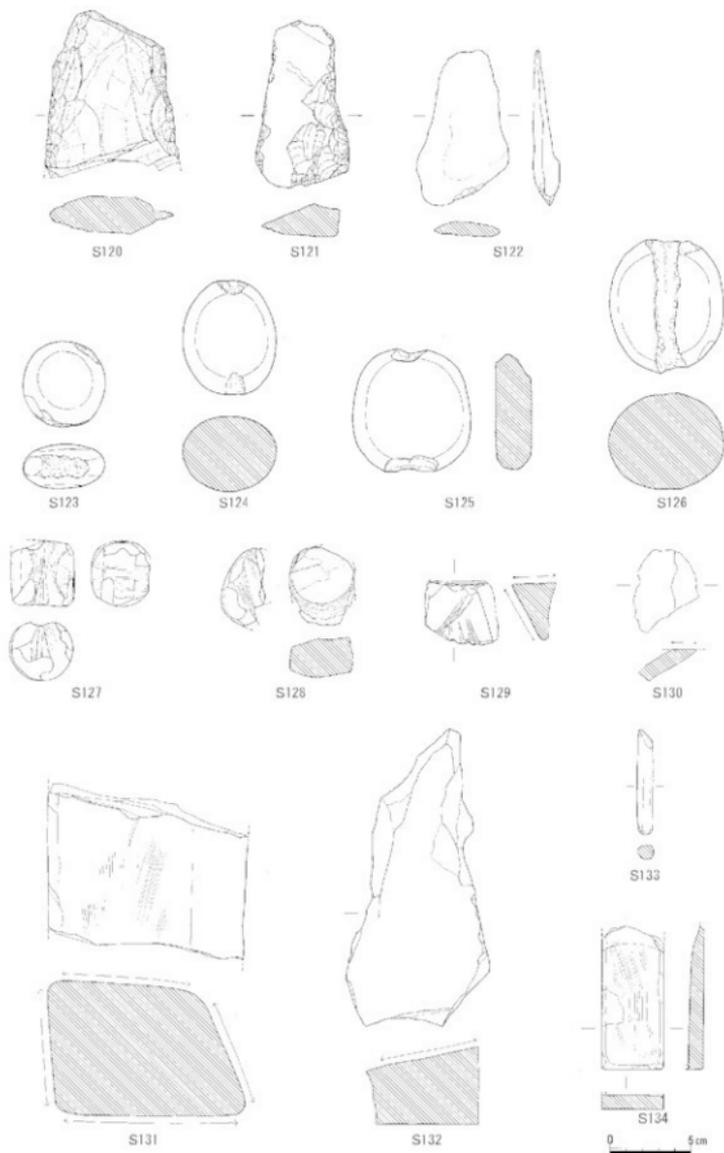
第197図 包含層等出土遺物⑤ (1/4)



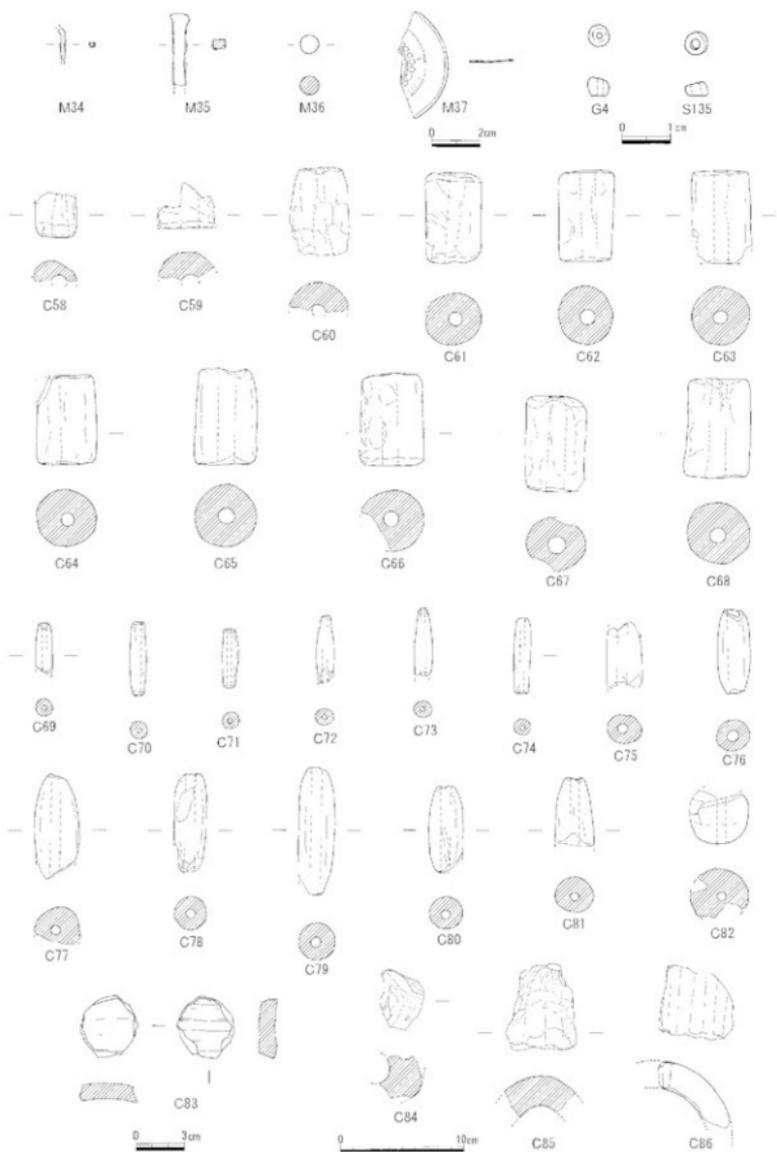
第198図 包含層等出土遺物⑥ (1/4)



第199図 包含層等出土遺物② (1/2)



第200図 包含層等出土遺物 8) (1/3)



第201図 包含層等出土遺物⑨ (1/4・1/3・1/2・1/1)

第4章 百間川二の荒手遺跡

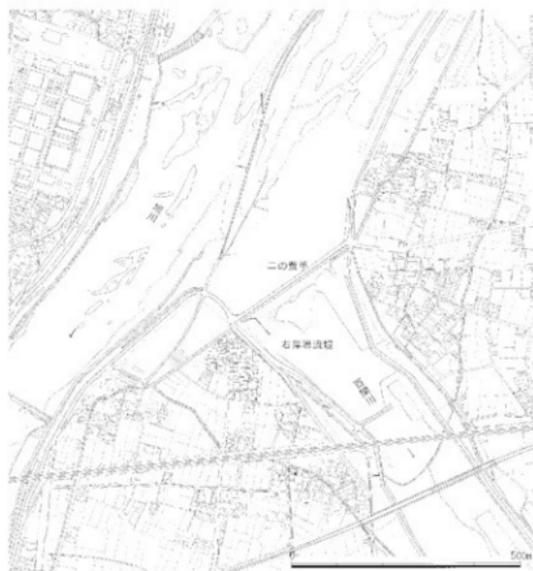
第1節 遺跡の概要と調査の経緯

1 遺跡の概要

百間川は、岡山県内の三大河川の一つである旭川の洪水調整用の放水路として築造された人工の河川である。岡山市竹田・中島付近の旭川から分流し南東方向に進み、操山北麓の原尾島・沢田付近から山裾を東流し操山丘陵東端の米田（通称大曲）で南に向きを変えて、岡山市神元の児島湾に至る流路12.9km、幅200～300mの一大放水路である。

築造は、江戸時代初めの寛文9年（1669）に旭川分流部の越流堤に始まり、貞享3年（1686）に三段構えの荒手が整備されて、その後、元禄6年（1692）に沖新田造成にともない、河口部に大堰堤と樋門を設けて現在に至る基本的な姿になったと伝えられている。これ以降にも、文化11年（1814）の荒手の改修見取り絵図が残されており、たびたび改修が行われたようである。この放水路の計画については承応3年（1654）に旭川の大洪水により岡山城下が未曾有の被害を受けたことを契機として、岡山藩那代津田水忠が陽明学者熊沢蕃山の施策を受け継ぎ、設計施工を行ったと云われている。

今回調査の対象となった二の荒手は、旭川の分流部に設けられた一の荒手を越流した水を一時貯留し、さらに増水すると下流に流す越流堤で、土砂の沈殿と下流域への急激な増水を防ぐ目的を持つものである。この荒手の両岸に設けられた導流堤は、増水し越流した流水を下流にスムーズに導く機能を持っている。なお、百間川の名前の由来は、導流堤を含めた二の荒手の幅が100間であったことによるようである。



第202図 百間川二の荒手遺跡位置図 (1/10,000)

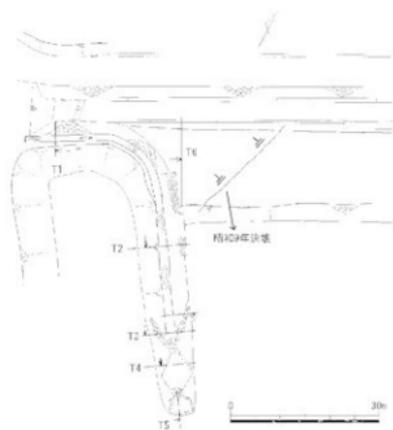
2 調査の経過

今回の調査は、二の荒手右岸袖部と右岸導流堤を対象とした。この付近は昭和9年9月の室戸台風により堤防が決壊し、甚大な被害を受けた場所と周知されており、岡山県風水害史や荒手本体、右岸袖部付近の石積み等の状況等から堤防決壊以降に修復された場所と捉えられていた。

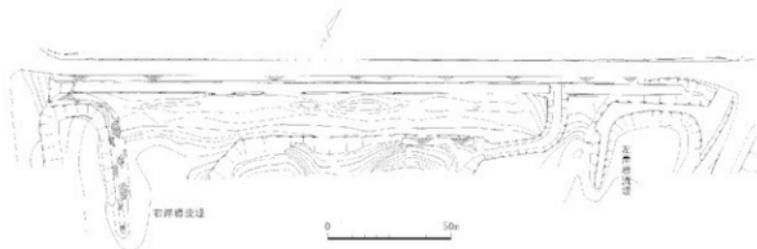
確認調査は、昭和9年の決壊状況、修復の有無や残存状況を把握するために平成7年3月22日から重機によるトレンチを4か所に設定した。右岸導流堤付近は既に堤防盛り土が一部行われおり、導流堤西側の下端部までは調査が不可能であった。右岸導流堤の現状は、先端部23m程に石敷き(巻石)が残り、北側では石敷きは認められず上盛りのままの状況であった。先端部3か所のトレンチ(T3・4・5)では、いずれも現存の石敷きの内部に旧石積みの基底部付近が検出された。このため、石敷きが残る先端部が昭和9年決壊の残存部と考えられた。トレンチ2では盛り土のみであった。袖部付近(四の樋)は、切石の整然とした石敷きで、断面(T1)の観察の結果では導流堤北半部と同様の盛り土の状況であった。T1からT2付近の堤が決壊後の修復の可能性が強まった。

確認調査の結果、昭和9年の堤防決壊時に残存した右岸導流堤の先端部の石敷き下部に旧石敷きが一部残存することが明瞭となり、先端部約35m程の全面調査を平成7年4、5月に実施した。なお、この間に荒手本体の西端部の断面観察もあわせて行った。

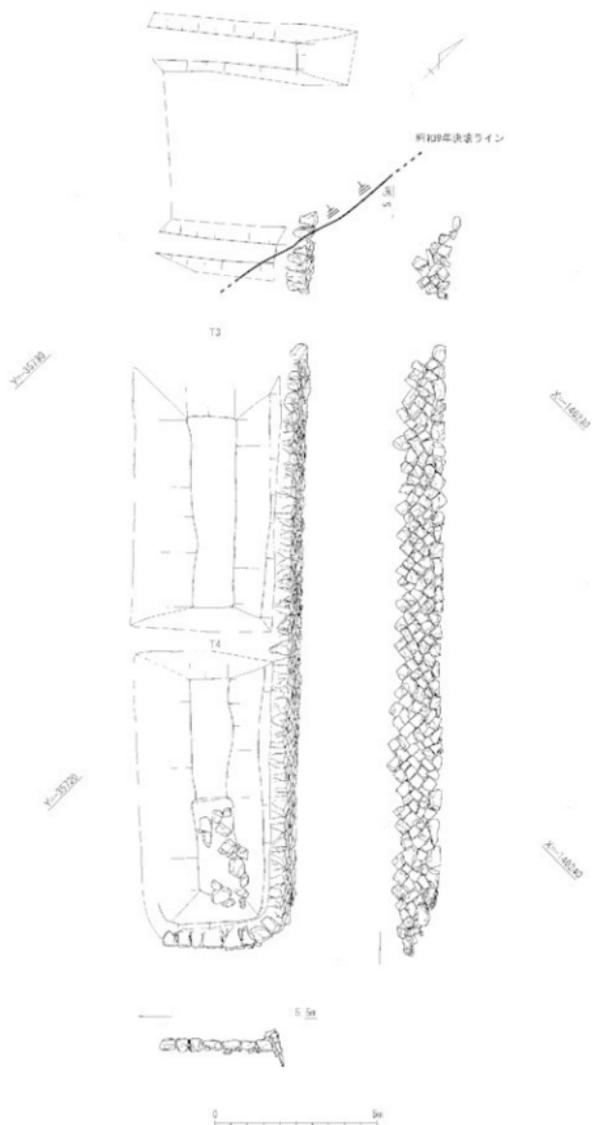
全面調査の結果は、東側と先端部に旧石積み連続して残存していることが確認された。トレンチ3の北側断面の観察では、昭和9年に決壊しその後の復旧による盛り土との境が確認できた。導流堤の旧石積みについては先端部の一部に自然石を使用した古い箇所も認められたが、それ以外では切石等の比較的新しい積み方であった。



第203図 トレンチ設定図 (1/1,000)



第204図 二の荒手測量図 (1/2,000)



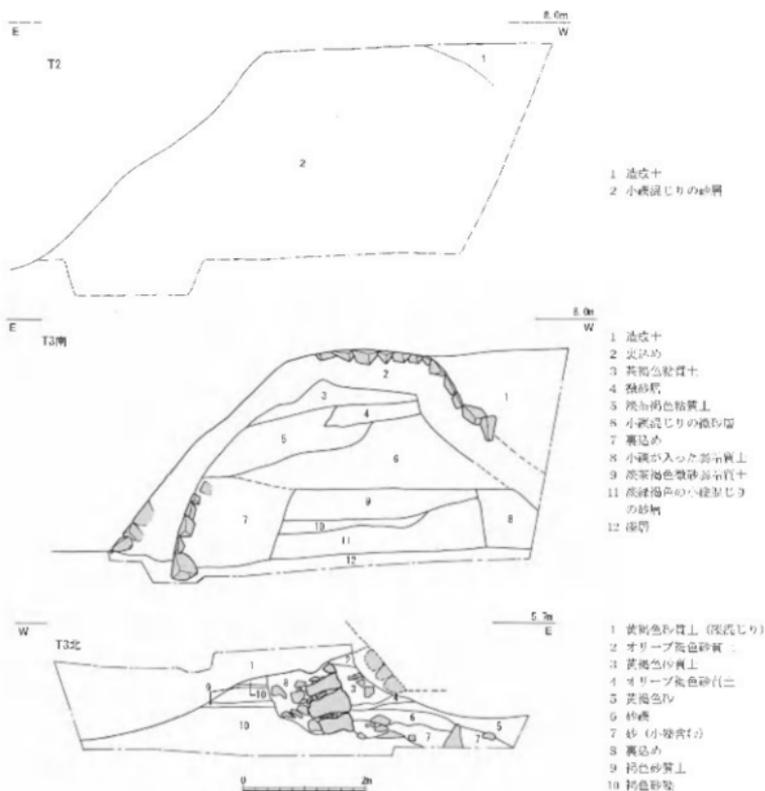
第205図 右岸滞流堤旧石積み (1/150)

第2節 遺構・遺物

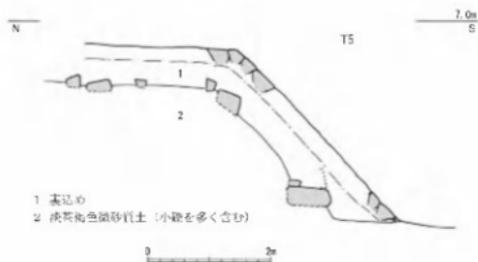
1 右岸導流堤

先端部の現石積み（巻石）を重ねにより除去した後に、周辺部を含めて400mほどの全面調査を行った。導流堤内側は白濁川堤防の改修が一部行われており下部部までは調査不可能であった。

旧石組みは全面露出の結果、導流堤の東側に長さ23m、先端部に幅3.8mにわたり残存していた。基底層は確認調査時の断面（T3・4）で把握したように東側は現状の石組みより50cm低く、先端部は、逆に30cm高い。石組みは良好な場所で高さ1.7m（6段）残存していた。T3の北側断面では昭和9年の洪水による決壊跡の、石組み残存部と復旧盛り土部分との境が明瞭に確認できた。



第206図 右岸導流堤断面1 (1/80)



第207図 右岸導流堤断面2 (1/80)

先端部の石積みは、最下段の根石のみであるが明らかに東側列の石材と異なっていた。根石は、加工していない長さ40cmほどの石7個を並べて、底部を海拔4.5m付近にはほぼ水平に設置していた。また先端の頂部にも未加工の石材が散在しており、根石と同様に古い石積みの一部と考えられた。なお、胴木などの下部構造は認められな

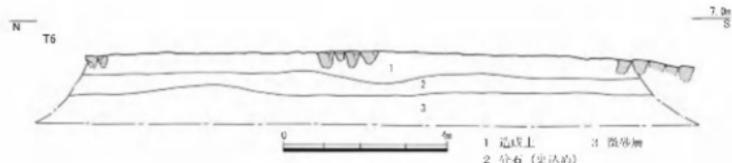
かった。東側石積みは、一部には未加工の石材の使用も認められたが大半が一辺30~40cmほどの切り石を使用し整然と積み上げていた。基底部は海拔3.6~3.7m付近で、ほぼ水平である。胴木などの下部構造は先端部と同様に認められなかった。

堤盛り上の状況は、旧石積みの残る先端部2か所のトレンチ断面により観察を行った。堤盛り上は、砂、礫、粘質土の互層による丁寧な造りで、旧石積みの残る高さまで裏込めが残存していた。右岸導流堤付近は増水による濁流を最も受けやすい場所に当たっており、石積みの形状から少なくとも3回程度の改修が行われたことが確認された。ただ、先端部の未加工の石材を使用した付近は築造当初の形状を残している可能性が考えられる。

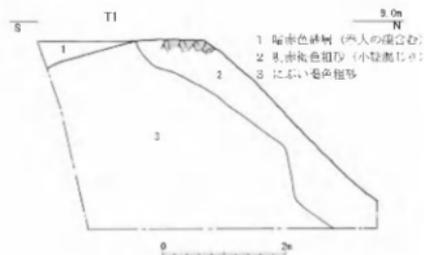
2 右岸袖部 (四の樋付近) ・二の荒手 (右岸端部)

この付近はいずれも昭和9年の室戸台風の増水により堤防決壊の場所と周知されており、表面観察でも明らかに石積み異なる状況を呈していた。調査は袖部については3月末の確認調査時に、荒手本体については4、5月の導流堤の本調査時に行った。

袖部の調査は、導流堤が西端で堤防本体と接合する付近の頂部から北側斜面に設定した。断面の状況は、切石敷きの内部に厚さ30cmほどの裏込めを施している。導流堤の盛り土は均一な黄褐色微砂層である。



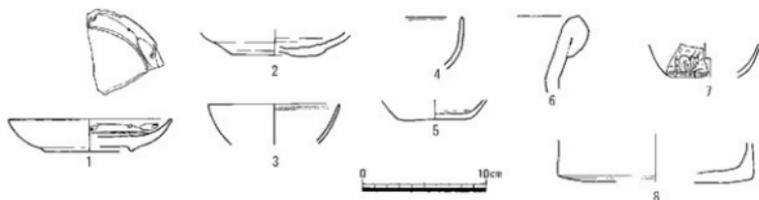
荒手本体は、右岸西端の付け根付近に荒手に直交する断面を設定した。荒手の西詰めを斜めに横断する切石の石積みが昭和9年以降の修復場所と考えられている。切石は袖部付近と同様に一辺40～50cmのものを整然と敷き詰め、その下部に厚さ20cmほどの表込めを施していた。露り上は第2層に明赤褐色、第3層ににぶい褐色のいずれも粗砂のほぼ水平な堆積である。ただ昭和9年の堤防決壊時に下部がどのあたりまで削平されたかは断面観察では不明瞭であった。



第208図 二の荒手 (T6)・右岸袖部 (T1) 断面
(1/120・1/80)

3 出土遺物

遺物は導流堤東側の堆積上の掘り下げや北半部の上盛り中、南半部の新石積みの裏込め上から出土している。いずれも導流堤の築造時に直接関連する遺物とは認められない。1・3・4・7は肥前系の染付で、1は波佐見窯か、5・6は備前焼で、6は古い様相を示し磨滅が顕著である。2は須恵質の碗か、8はサヤ形の鉢の底部かと考えられる。図示した土器類は古い様相の備前焼甕や須恵器の碗を除き江戸時代中期以降が中心であると思われる。



第209図 出土遺物 (1/4)

参考文献

岡山河川工事事務所編『百間川の歴史』1978

岡山大学附属図書館編『池田家文庫等貴重資料展』1979 百間川の文献、資料等については、左記文献の分頁執筆や解説をされた中野美智子氏に便宜を回っていただき、教示をいただいた。

第5章 まとめ

百間川原尾島遺跡のこれまで調査成果は、計6冊の報告書にまとめられており¹⁾、遺跡は3つの微高地とその周囲の低位部で構成されていることが明らかになっている。本書に掲載する調査区は、最上流部に位置する微高地（以下、微高地1）と称する。百間川原尾島遺跡の各微高地の位置については、第210図に示す）と、その西側の低位部にあたる。

第1節では、本書掲載の遺構・遺物についての概要を述べ、中でも特徴的なものの指摘をしたい。第2・3節では、遺構密度の高い弥生時代後期と古墳時代の集落について取り上げる。また、第4節では、弥生時代後期末から古墳時代初頭の外来系土器について整理する。なお、本書に掲載する遺構・遺物については、ゴシック体で表記し、本書以外のものと区別した。

第1節 遺構・遺物の概要

1 弥生時代中期以前

弥生時代中期以前の遺構は、微高地1—1の端部とその西側の低位部で検出している。

土壙5は、縄文時代晩期中葉の土器片を出土した。このほかにも焼土塊と炭を多く含む土壌の中には、縄文時代晩期に遡る可能性をもつものがある。微高地1—1における縄文時代の遺構としては、「百間川原尾島遺跡1」の左岸用水調査区の晩期の上礫がある。しかし、微高地1—2の東斜面にみられるようなまとまった縄文土器の出土は周囲にない。

弥生時代前～中期の遺構は、土壙・溝・水田がある。このうち、溝1は低位部にあって、微高地に沿って流走する。層位と埋土に粗砂を含むことから弥生時代中期の可能性が高い。弥生時代中期末の溝3・4は、微高地縁を北から南に流走するもので、弥生時代後期初頭の溝19・20に踏襲されるものである。水田1は、水田面上に遺存の悪い畦畔を検出したのみで、時期は特定できない。層位的には溝1よりも古く、弥生時代中期以前と考えられる。

2 弥生時代後期

弥生時代後期の遺構は、微高地上で竪穴住居、掘立柱建物、柱穴列、井戸、土壇、溝等を検出し、低位部では溝と水田を検出している。

微高地1—1の西側端部は、近世の土取り遺構で削平されているが、溝18の東層にはほぼ重なるものと考えられる。微高地上の微地形は、溝19～21の位置する部分が高く、そこから北東側にやや下がっていくものである。これは、後世の削平等で遺存の悪いものの、8A区付近の微高地上で弥生時代後期末の洪水砂を確認していることと、「百間川原尾島遺跡3」において示した微地形と整合する²⁾。

百・後・I～II古段落の主な遺構は、竪穴住居2、井戸5・7、溝18～21である。このうち、溝19～21は、微高地高所を南流する弥生時代前期以降の用水路と考えられ、この期に埋没する。周辺の状況変化により、用水路が廃絶したのと考えられる。また、竪穴住居2は「焼失住居」で、出土した大

量の土器は「焼失」後に廃棄されたものである。大量の土器を出土した井戸5とは、4.5m離れた位置にあり、両者における壺の大・中・小の補充関係や、鉢の比率の高さの共通性が指摘される。

百・後・Ⅱの主な遺構は、溝19～21の埋没後に築かれた竪穴住居3のほか、住居2軒がある。また、掘立柱建物2が当期と考えられ、近接して棟方向や規模を揃える掘立柱建物3についても近い時期と考えられる。この掘立柱建物2棟が位置する場所は、後の百・後・Ⅳになって土壇数基が配置され、建物との切り合い関係がある。なお、低位部では、この期以降に水田が拓かれたと考えられる。

百・後・Ⅲの遺構は、敷基の土壌のみみられるのみである。この期の微高地1-1の南半の8～13B～E区における集住性は高く、本書掲載地区の知見を追加したことにより、一層顕著になっている。

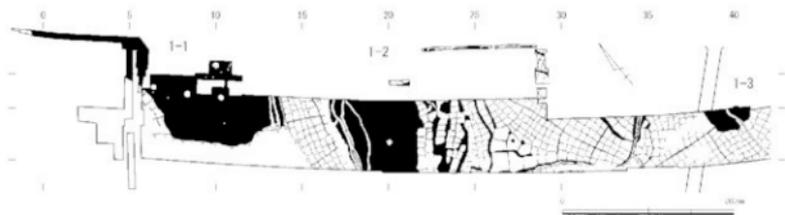
百・後・Ⅳの遺構は、調査区全体にみられ、竪穴住居3軒、井戸3基、土壇23基と水田がある。中でも注目されるのは、弥生時代後期末の洪水砂で埋没した遺構の存在である。

竪穴住居1は、床面まで洪水砂で埋没している。主柱穴5本すべてに柱痕跡がみられ、ここには微砂が混入していないことから、柱が立っている状態で被災したと考えられる。また、中央穴にも微砂がみられないことから、洪水時にはすでに埋まっていたことがわかる。なお、本住居の南西2.5mに位置する井戸2は、検出時の上半以上が洪水砂で埋没しており、住居と同時に存在した可能性がある。この竪穴住居1は、西側の微高地端から6.5mの位置にあり、水田2に面していたと言えよう。

そのほか、ほぼ底面まで洪水砂で埋没した遺構は、土壇16と土壇28であり、上部に洪水砂が観察できる遺構は、竪穴住居5B、井戸4、土壇34、溝25である。このうち、溝25は竪穴住居5Bの中央穴から延びる排水溝と考えられ、洪水砂の存在によっても両者の有機的な関係が証明される。

なお、第210図は、百間川原尾島遺跡の百・後・Ⅳの洪水砂埋没水田と微高地の関係を示したものである。微高地上の白抜きは、同時埋没の竪穴住居や井戸であり、被災時の集落景観を表している。

つぎに、土壇19は、長軸の方がやや広がる隅丸長方形の平面形をもつもので、この土壇の周囲に主軸を合わせた3×1間の掘立柱建物を検出したことで注目される⁹¹⁾。土壇の長軸はほぼ東西方向で、深さ50cmを測る。床面はほぼ平坦で、床面や壁面に被熱した痕跡はみられない。ここでは、貯蔵穴とそれに伴う覆屋の可能性を指摘したい。また、土壇19に近接し、主軸を平行・直交させる2基の土壇22・25も百・後・Ⅳの可能性がある。さらに8A区においては、平面が隅丸方形を呈する5基の土壇が主軸をほぼ揃えて存在する。各土壇は1.0～2.5m離れ、それぞれの深さは23～46cmを測る。規模はややばらつくものの、平坦な底で埋土に地山塊を多く含む点が共通する。遺物は土壇46と土壇48でまとまって出土し、その時期は百・後・Ⅳである。



第210図 百間川原尾島遺跡の微高地位置図(弥生時代後期末洪水砂埋没遺構)

注目される遺物としては、2種類の胎土を使用した土器がある。いずれも百・後・Ⅳに属し、棕色の精製粘土と淡黄橙色の粘土を使用する。このうち、高杯135は杯のI線部と脚部を精製粘土、杯の底を精製以外の粘土で作り分けている。赤白の視覚的効果を意図したものと考えられる^[5]。また、壺260は、大分県別府清南岸からの搬入品と考えられる安国寺式の壺である^[6]。在地の百・後・Ⅳの上器と共存することから、両地域の土器の並行関係を示す資料としても注目される^[7]。今回の調査区では、このほかにも外來系と考えられる土器が出土しており、第4節の表6に示すように百間川原尾島遺跡における地域間の人的交流が最も活発化する時期といえる。

3 古墳時代

古墳時代の遺構は、微高地上で堅穴住居、掘立柱建物、柱穴列、井戸、土塙、焼成土塙、溝等を検出し、低位部では土塙と溝を検出している。

前期の主な遺構は、百・古・Ⅰの堅穴住居4軒、井戸4基、百・古・Ⅱの堅穴住居3軒、井戸2基である。井戸がややまとまるものの、住居は散在傾向にある。遺物では、特徴的な胎土から、壺601が高松平野からの搬入品と考えられる。

後期の主な遺構は、堅穴住居7軒、掘立柱建物4棟、井戸1基がある。堅穴住居はいずれも5世紀末～6世紀初頭頃と考えられる。このうち**堅穴住居19**は一辺約8.3mを測る大形住居で、百間川原尾島遺跡の当期最大となる。住居の床面下には、北東辺の中央から南東辺にかけて溝が設けられている。生活時には埋められていたことがわかり、同様の施設には、微高地1-1上の「百間川原尾島遺跡6」の堅穴住居24がある^[8]。また、**堅穴住居10・14・18・19**において滑石製紡錘車・双孔円板・白玉の製品を出土するが、未成品はみられない^[9]。

掘立柱建物4棟は、いずれも方形掘り方の柱穴で構成される。出土遺物が乏しく、時期の決定は困難だが、**掘立柱建物9**が**溝34**に軸線をほぼ揃えることと、建物と他遺構との切り合い関係から6世紀末～7世紀初頭の時期が与えられる。微高地1-1全体でも、当期と考えられる建物群が**溝34**の南北に集中し、かつ**溝34**と重複しないことが指摘でき、同時に存在した可能性が高い。

後期の遺物では、須恵器模倣土師器の出土がある。**堅穴住居18**出土の杯461は、須恵器杯蓋を模倣したものと考えられる。同期の須恵器に比べて厚手のつくりで、外反する口縁をもつ。全体の黒色処理後、内外面をヘラミガキする。東日本の鬼高式土器の杯に類似する^[10]。また、**土塙74**出土の高杯566は、明らかに土師器の胎土であるが、杯部の後の多さや脚部の透かし孔、脚端部の収め方などは須恵器高杯を模倣したものと考えられる。共存する567も須恵器模倣の可能性が高い。このほか、「百間川原尾島遺跡5」の溝29出土の黒色処理した杯864についても、須恵器杯を模倣した土師器と考えられる。これらは、調整や技法、形態の細部において須恵器のものとは異なり、明らかに土師器工人の手による製品である^[11]。ただし、在地の製品が搬入品の区別や、工人間の交流によるものか単に既存の須恵器の模倣であるかについては、今後の検討課題としたい。

4 古代以降

古墳時代以前の低位部はほぼ埋没したと考えられるが、居住区にはならない。古代の溝は、この低位部と微高地上で3条検出している。中世の遺構には、微高地上の掘立柱建物や土塙、土塙墓があるが、遺構密度は低い。低位部は、近世の上取り地となり、百間川の築堤との関連が指摘される。

第2節 弥生時代の百間川原尾島遺跡

ここでは、弥生時代の百間川原尾島遺跡のまとめをおこなう。ただし、すでに詳細な分析がなされており¹²⁾、主に本書に関連する微高地1-1の後期集落を取り上げる。なお、文中の時期分類や遺構の略称と図の略号とは、それぞれ「百間川原尾島遺跡6」の「第4節」にならうものとする。

弥生時代の遺構数の変化は、表4に示すとおりである。各微高地間の集落の消長の違いは明瞭で、微高地1-1が後期以降の拠点集落であるのに対し、微高地1-2は、前期の集落の廃絶後、後期に再び集落が営まれるが、微高地1-1との集落規模は比較にならない。微高地1-3では、百間川原尾島遺跡で唯一、中期の遺構が存在するが、中～後期は集落からやや離れた地区と考えられる。

微高地1-1のⅠ期(百・後・Ⅰ～Ⅱ古)は、微高地全体において3～4軒のグループが30～70mの距離をおいて展開している。本書掲載の7住 2は、1桶住 2・1桶住 4とグループ化されよう。また、微高地の西端部に南北に流走する溝は、後期初頭までに機能を終える用水路と考えられる。

Ⅱ期(百・後・Ⅱ)は、微高地1-1の東側に径10m前後の大形住居が出現する。また、6住-2付近の土器溜まりの周囲に、近接する2軒が数グループ展開することがすでに指摘されており、本書掲載分では7住-6・7住-7がこれに近い。微高地北部の左岸用水や新田サイフォン調査区においても、2軒のまとまりがある。微高地内側の低位部に水田が拓かれるのはこの期以降と考えられる。

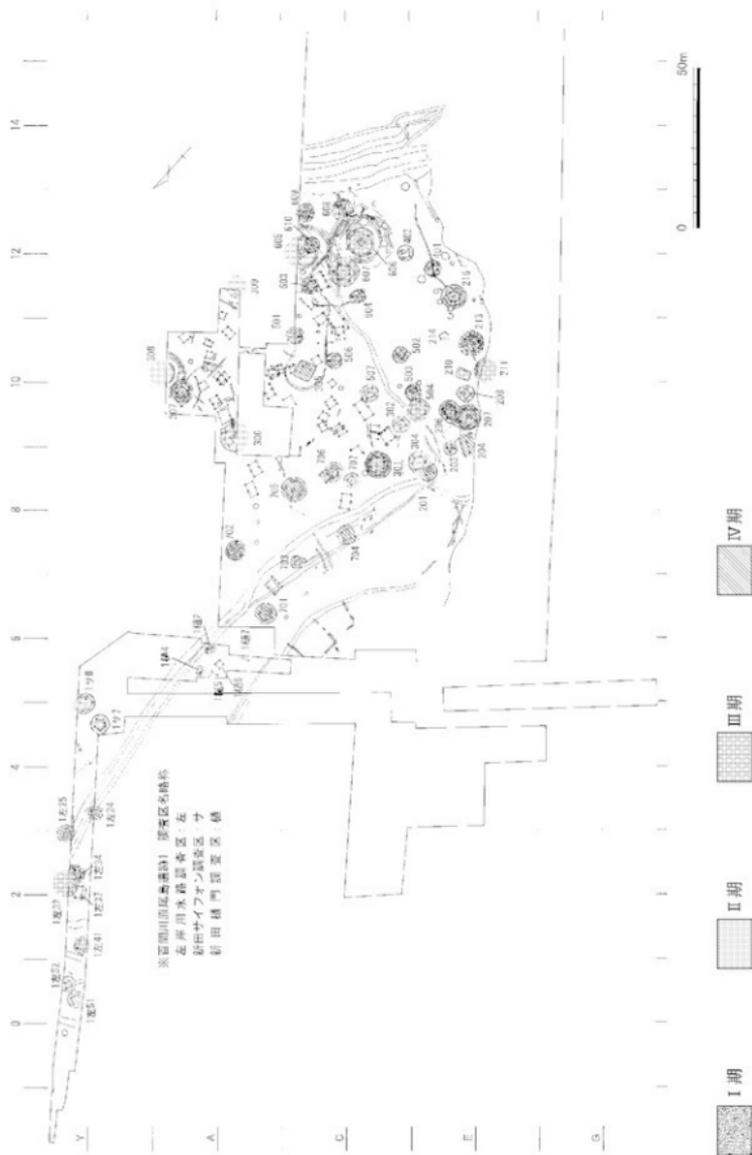
Ⅲ期(百・後・Ⅲ)は、先の土器溜まりを中心に集住性が高い。本書掲載地区でこの期の竈穴住居はなく、その状況が一層顕著になった。なお、掘立柱建物については、その時期判定が困難であることと、建物と認識できなかったものが数多く存在すると予想されるが、時期の類推できたもの多くは、Ⅱ・Ⅲ期に比定される。その分布はⅢ期の住居群の北側の微高地中央に集中している。

Ⅳ期(百・後・Ⅳ)は、本書掲載の7住-1・4・5を加えても散在的なあり方を示すことには変わらない。各住居は20～30m離れて存在し、微高地北部にはみられない。

表4 弥生時代の遺構数の変化

微高地	土遺構	時 期												
		百・後・Ⅰ	百・後・Ⅱ	百・後・Ⅲ	前期	中 期	百・後・Ⅳ	百・後・Ⅴ	百・後・Ⅵ	百・後・Ⅶ	後期			
1-1	竈穴住居									26	17	33	14	11
	掘立柱建物									3	1	6		31
	井戸									17	9	6	10	2
	土版		9		2					16	15	96	58	50
	土器溜									6	9	1		
	竈									2				
	計		9		2					95	81	142	82	94
1-2	竈穴住居	1	2							8	7	4	5	1
	掘立柱建物									4	9	1		7
	井戸									7	12		1	3
	土版		7	1	14					20	87	11	1	70
	土器溜													
	竈													
	計		10	2	14					42	116	22	6	89
1-3	竈穴住居													1
	掘立柱建物										1			
	井戸													
	土版			40	5	8	5		2	1				2
	土器溜													
	土器溜													
	計			44	5	8	5		2	1				1

※時期の「前期」、「中期」、「後期」は、時期区分ができないもの、当期に属すると考えられる遺構数を示す。



第211区 弥生時代後期の集落 (1/1,500)

第3節 古墳時代の百間川原尾島遺跡

本節では、古墳時代の百間川原尾島遺跡のまとめをおこなうが、弥生時代と同様に主に本書に関連する微高地1-1-1の集落を取り上げることとする¹³²⁾。

古墳時代の遺構数の変化を表5に示す。全期間を通じてほぼ集落が営まれるのは、微高地1-1-1のみである。ただし、比較的集住性が高いと言えるのは、Ⅰ期(百・古・Ⅰ)とⅣ期(5世紀後半～6世紀初頭)である。微高地1-2は、初頭の時期にややまとまるのと、6世紀以降に遺構が散在する状況である。また、微高地1-3では、ほぼ全期間集落は営まれない。

Ⅰ・Ⅱ期(百・古・Ⅰ・Ⅱ)の集落は、微高地1-1の北部を占地する。左岸用水調査区や新田サイフォン調査区で竪穴住居が近接する他は、やや散在的である。本書掲載のⅠ期は、7住-9・12・20・21であり、Ⅱ期は7住-8・13・16と2各住居が20m前後離れて位置する。特筆されるのは、新田サイフォン調査区の大形住居である。1サ住-1は一辺約9mを測るもので、1サ住-2についても同規模の可能性がある。いずれもⅠ期に属し、微高地の西端部に位置する。床向宿では、同期の他の住居の3～4倍に復元され、その隔絶性は高い。Ⅲ期(百・古・Ⅲ)は、微高地南部の5軒でまとまる。

Ⅳ期(5世紀後半～6世紀初頭)は、微高地1-1で最も集住する時期である。本書掲載の竪穴住居8軒を加えて総数は33軒となる。そのまともりは、本書掲載地区までであり、以北は左岸用水調査区の2軒までの空閑地となる。7住-19は、一辺8.2～8.3mを測る大形住居である。約25m離れて一辺約7.8mを測る7住-10があり、両者の規模は他のものと断絶し、首長の住居と考えられる。7住-19の北側の溝は、住居の北西側で流れを変えており、この住居を意識していた可能性がある¹³³⁾。また、7住-19からは鍛冶滓が出土しており、いち早く製鉄関連作業を開始していたと考えられるが、その他の出土遺物では、同時期の住居と大きな違いはない。

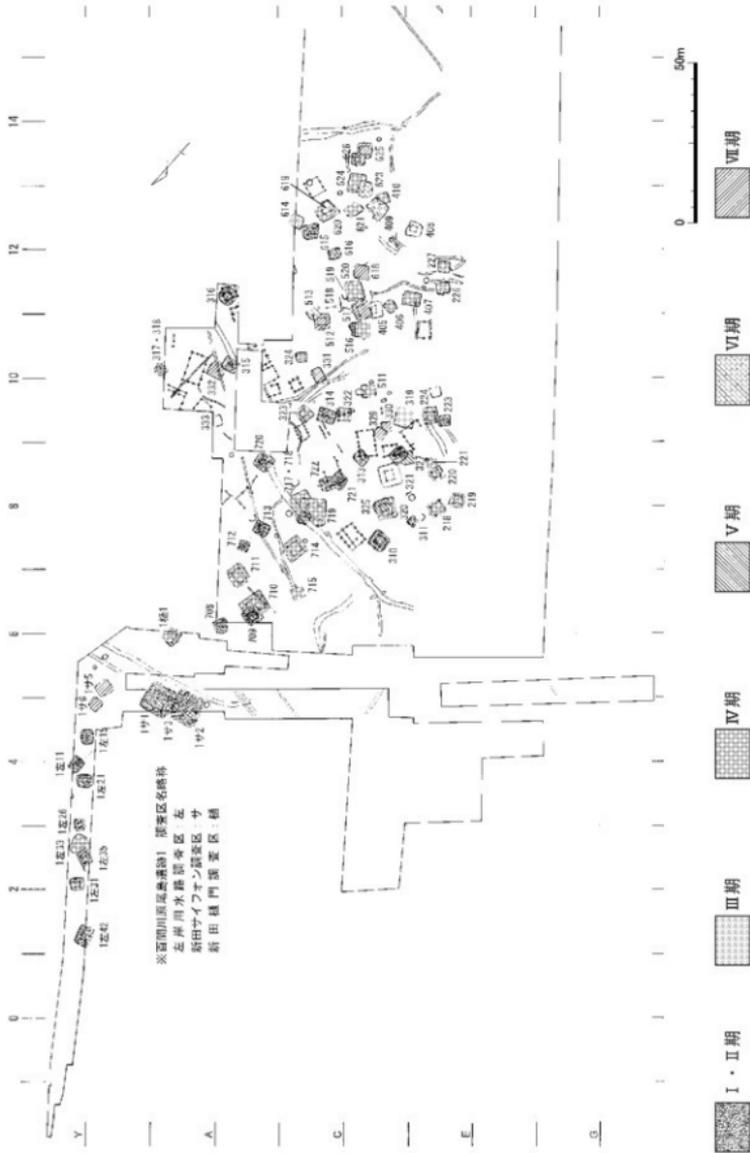
V・Ⅵ期(6世紀前半～後半)は、Ⅳ期から住居が激減し、微高地上に散在する状況となる。

Ⅶ期(6世紀末～7世紀初頭)は、微高地中央を東西に貫流する大溝の向側に掘立柱建物が集中し、その南側に竪穴住居が散在する状況を呈す。大溝と重複する当期の遺構はなく、この大溝に極めて規制された集落の操相といえる¹³⁴⁾。大溝からは、扇羽口や鉄滓等の製鉄関連遺物がまともって出土した。

表5 古墳時代の遺構数の変化

微高地	主な遺構	時 期							総計	
		百・古・Ⅰ	百・古・Ⅱ	百・古・Ⅲ	Ⅳ期	5世紀後半～6世紀初頭	6世紀後半～7世紀前半	Ⅶ期		
1-1	竪穴住居	23	6	5	4	33	1	10	8	10
	掘立柱建物	1			1	1			6	15
	井戸	12	3			2		1	1	
	土塼	3	3		2	4		1	4	11
	竪・板成土塼									2
計	39	12	5	10	40	1	12	22	38	
1-2	竪穴住居	5			1		1			
	掘立柱建物								7	1
	井戸	7						1		
	土塼	1						1		1
	竪・板成土塼									
計	13			1		1	2	7	2	
1-3	竪穴住居			1						
	掘立柱建物									
	井戸									
	土塼									
	竪・板成土塼									
計			1							

※時期の「Ⅰ期」、「Ⅶ期」は、時期区分ができないもの、当期に該当すると考えられる集構数を示す。



第212図 古墳時代の集落 (1/1,500)

第4節 百問川原尾島遺跡出土の外来系土器

本書掲載の遺物でいくつか外来系土器と考えられるものがあり、ここではそれらを含めて弥生時代後期末から古墳時代初頭の外来系土器について整理してみたい。なお、表6にまとめた外来系土器数は、百問川原尾島遺跡の各報告書に掲載された土器について数値化したものである。遺構と包含層のものすべてを対象とした。また、第213図に掲載したものは、その一部であり、土が百・後・Ⅲ・Ⅳ期、トが百・古・Ⅰ・Ⅱ期に属する。土器のトの数字は、各報告書のシリーズ番号と掲載土器番号を示している。

百問川原尾島遺跡における外来系土器の出土は、百・後・Ⅲ以降にみられる。そのピークは、第6表でも明らかのように、百・後・Ⅳである。続く百・古・Ⅰもほぼ同量の出土がみられるが、百・古・Ⅱには激減する。これを第4・5表に示した竪穴住居数の変化でみるとしよう。百・後・Ⅲの竪穴住居数は37軒であり、特に敷高地1-1において集住する時期である。つぎに百・後・Ⅳは19軒、百・古・Ⅰは28軒、百・古・Ⅱは6軒である。百・後・Ⅳと百・古・Ⅰの出土状況は、百・後・Ⅲからの遺構数の変化に反比例する外来系土器の流入といえる。

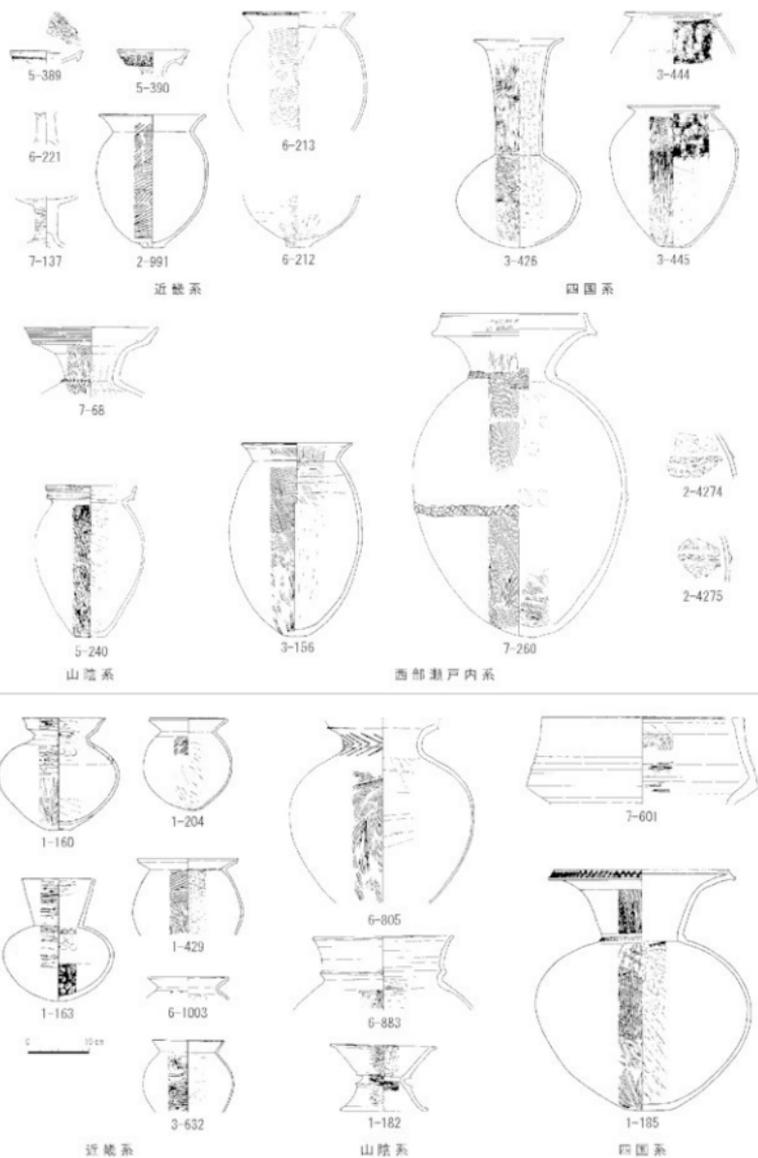
つぎに外来系土器の系譜別に概観する。最も多いのは、周辺部としたものである。従来から瀬戸内中部の島嶼部を中心に瀬戸内東部の地域産と考えられるものである¹⁶⁾。中には四国産と分類すべきものを含むと考えられる。外面にタタキをもつものや、内面をヘラケズリでなく、ハケメで仕上げるものがある。ついで多いのが、近畿系としたものである。6・213・214の「淡路型甕¹⁷⁾」を含む。弥生時代の四国系では、3-444・445の「下川津B類¹⁸⁾」の甕が多いが、古墳時代になると甕は減少し、7-601や1-185のような壺が出土している。山陰系は古墳時代にやや増加する。なお、本書掲載の百・後・Ⅳの7-68は、門縁部の多条擬凹線から山陰地方以东の日本海岸を想定している。

西部瀬戸内系では、本書に掲載する安国寺式の壺7-260をはじめ、百・後・Ⅳのものがある。7-260は、胎土に結晶片岩を含むことから、大分県別府湾岸でも南岸産と考えられる。2-4274・4275は、壺胴部の突帯上に大きめの刻み目を施すもので、西部瀬戸内系を含む九州産と考えられる。

百問川遺跡群から出土する弥生時代末から古墳時代初頭にかけての外来系土器は、同期の足守川下流域の拠点集落の出土量や系譜地域の多様さには及ばない¹⁹⁾。しかし、足守川下流域とのあいだに従前いわれるような格差がなぜあるのかを考える端緒として、まず百問川原尾島遺跡の外来系土器を見直してみた。今後は、百問川遺跡群全体についても整理していきたい。

表6 百問川原尾島遺跡出土の外来系土器数

	百・後・Ⅲ	百・後・Ⅳ	百・古・Ⅰ	百・古・Ⅱ
近畿系	2	25	14	4
四国系	1	14	5	
山陰系		3	6	
備後	1	1	1	
西部瀬戸内系		5	1	
周辺部	1	24	26	3
不明	2	4	8	1



第213図 百間川原尾島遺跡出土の外來系土器 (1/8)

註

- (1) 百間川原尾島遺跡の各概報告書については、本書第2章第2節の表3を参照していただきたい。
- (2) 宇垣正章「弥生時代遺構・遺物について」『百間川原尾島遺跡3』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88 岡山県教育委員会ほか 1994
- (3) このような土壌と覆屋の同時存在を示す例としては、総社市市溝手遺跡の弥生時代後期初頭の土壌215がある。この南溝手遺跡例は壁面が焼けており、2×1間の覆屋をもつ。
「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107 岡山県教育委員会 1996
- (4) 南溝手遺跡の土壌215は、土器焼成土壌と指摘される。
宇垣正章「古墳弥生社会の諸問題、『論争古備』考古学研究会岡山例会委員会編 1999
- (5) 2種類の胎土を使用した例として、古墳時代初頭の高杯が報告されている。
「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』158 岡山県教育委員会ほか 2001
- (6) 胎土に結晶片岩を含むことを肉眼観察と胎土分析により確認しており、別府湾岸における地域限定要素となっている。
- (7) 坪根伸也氏の御教示によれば、現時点での安国寺式土器の東限例と考えられる。
- (8) 堅穴住居24の時期は、5世紀末と考えられる。
- (9) 本遺跡の北約900mの原尾島遺跡では、滑石(蛇紋岩)の未成晶や剥片が出土し、製作地と考えられる。両遺跡が製作地と消費地の関係にあるとは断定できないが、原尾島遺跡の溝18は「百間川原尾島遺跡5」の溝29に接続する可能性が指摘されており、少なくとも用水路では有機的な関係にあったと考えられる。
「原尾島遺跡(藤原光町3丁目地区)」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139 岡山県教育委員会 1999
- (10) 酒井清治「渡来人の移住と換装土器」『季刊考古学』第24号 1988
- (11) 橋口達也「似非土師須恵器」『横山浩一先生退官記念論集』I 横山浩一先生退官記念事業会 1989
- (12) 柳瀬昭彦「第1節 弥生時代の集落」『百間川原尾島遺跡5』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106 岡山県教育委員会ほか 1996
柳瀬昭彦「第4節 弥生～古墳時代の集落変遷」『百間川原尾島遺跡6』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179 岡山県教育委員会ほか 2004
- (13) 柳瀬昭彦「第2節 古墳時代の集落」『百間川原尾島遺跡5』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』106 岡山県教育委員会ほか 1996
- (14) 古備の南部地域では、堅穴住居群を溝で囲む例として加茂政所遺跡と津寺遺跡があり、6世紀後半～7世紀初頭とされる。
草原孝典「3 古墳時代後期」『赤出東遺跡』岡山市教育委員会 2005
- (15) 草原は註14文献で、この大溝を区画溝とする。溝の規制は人きいが渠水路と考えたい。
- (16) 高橋 謙「弥生時代終末の土器編年」研究報告、9 岡山県立博物館 1988
- (17) 松尾佳子「第3節 淡路型甕について」『百間川原尾島遺跡6』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179 岡山県教育委員会ほか 2004
- (18) 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『下川津遺跡』香川県教育委員会 1990
- (19) 亀山行雄「古備地域の古式土師器」『古式土師器の年代学』樹田法人大阪府文化財センター 2006

付載 1 百問川原尾島遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

1. 分析目的

この分析では、百問川原尾島遺跡から出土した弥生時代後期および古墳時代後期の土器類について、理化学的な胎土分析を実施し、以下の事情について検討した。

(1) 弥生時代後期出土土器のなかには、搬入品と考えられるもの（讃岐系、山陰系、安国寺式土器）が出土している。そこで胎土分析から、百問川原尾島遺跡出土の在産土器と、この搬入土器に違いがあるかどうか。

(2) 古墳時代後期の製鉄関連遺物（炉壁・フィゴ羽口）の胎土が、以前分析した原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）から出土している炉壁⁽¹⁾および岡山県南部地域の炉壁粘土との胎土比較。

2. 分析試料

分析に供した試料は、第1表に示した百問川原尾島遺跡出土土器と古墳時代後期の炉壁・フィゴ羽口の20点である。また、弥生時代後期の他地域の比較試料として、讃岐地方（高松市上天神遺跡・中岡西井坪遺跡・空港跡地遺跡）、山陰地方（鳥取市秋里遺跡、倉吉市猫山遺跡）の試料。古墳時代後期の製鉄関連試料としては岡山県南部の岡山市奥池・猪ノ坂南・大井人森・みそのお・原尾島溝18と総社市藤原1号・かなくろ谷・くもんめふ・板井砂奥の各遺跡から出土した炉壁を比較試料とした。

3. 分析結果

理化学的な分析方法は、蛍光X線分析法で実施した。この方法は、試料に含まれる成分（元素）量を測定するもので、その成分量の違いから胎土の差を推定する方法である。また蛍光X線分析装置の特徴は、分析試料の作製が簡単で、測定も短時間のため、多量に試料を分析するのに有効である。しかし、測定試料は均質性が求められることから、分析試料を2gほど粉末にする必要があり、一部破壊分析である。

測定装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ社製 SEA2010L）を使用し、 $\text{SiO}_2 \cdot \text{TiO}_2 \cdot \text{Al}_2\text{O}_3 \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{MnO} \cdot \text{MgO} \cdot \text{CaO} \cdot \text{Na}_2\text{O} \cdot \text{K}_2\text{O} \cdot \text{P}_2\text{O}_5 \cdot \text{Rb} \cdot \text{Sr} \cdot \text{Zr}$ の13元素を測定した。第1表の出土試料分析値一覧表からTiO₂（チタン）、CaO（カルシウム）、K₂O（カリウム）の各元素に顕著な違いがみられる。そこで、これらの元素のXY散布図を作成し、胎土の比較を行った。

また蛍光X線分析法以外に実体顕微鏡観察法により胎土の差異を検討した。この方法は土器の表面に観察される砂粒（岩石・鉱物）の種類や大まかな含有量を調べる方法である。

(1) 蛍光X線分析結果

第1図 K₂O-CaO 散布図では、百問川原尾島遺跡出土土器（弥生時代後期）のなかで胎土に違いがあるかどうか検討した。その結果、大きく3つのグループに分類できた。それは、讃岐産?と安国寺式・撫抄沈線文とそれ以外の土器（装飾器台・壺、山陰圏系?など）である。

次に第2図 K₂O-CaO 散布図では、現在までに蓄積している讃岐（上天神遺跡、中岡西井坪遺跡、

空港跡地遺跡)、山陰(鳥取市秋里遺跡、倉吉市猫山遺跡)、百間川原尾鳥遺跡の各地域の遺跡と比較した。その結果、試料番号1・8の讃岐産と考えられる土器は、讃岐土器の分布域入り、試料番号13の安国寺式?と試料番号18の櫛描沈線文は山陰産土器の分布域に、それ以外の土器は、これまでに分析した在地で生産された百間川原尾鳥遺跡出土土器(弥生時代後期)の分布域にそれぞれ入る結果となった。なお、この散布図で安国寺式と櫛描沈線文は山陰産土器の分布域に入っているものの、その他の元素($\text{SiO}_2 \cdot \text{TiO}_2 \cdot \text{Sr}$)で山陰産土器とは胎土が異なっていた。

第3図K₂O-CaO 散布図では、溝34出土の炉壁およびフイゴ羽口と原南部の製鉄遺跡出土炉壁と比較した。その結果、溝34出土の炉壁(試料番号11)は、以前分析した原尾鳥遺跡溝18出土炉壁と胎土的には同じであった。また、製鉄遺跡出土炉壁との比較では、砂質岩～泥質岩層と山砂利層を基盤層とする製鉄遺跡の分布域に分布した。

(2) 実体顕微鏡観察法による結果

今回分析した土器20点の表面観察を実施したところ、以下のような砂粒に分類された。

- a類 …… 石英、長石の他に多量の角閃石、黒雲母を含むもの(試料番号1・8、写真1)
- b類 …… 石英、長石と少量の角閃石を含むもの(試料番号18、写真2)
- c類 …… 石英、長石、雲母と片岩を含むもの(試料番号13、写真3)
- d類 …… 石英、長石と砂岩を含むもの(試料番号11、写真4)
- e類 …… 石英、長石と少量の雲母を含むもの(その他の土器、写真5)
- f類 …… 石英、長石のみを含むもの(フイゴ羽口、写真6)

以上6種類の胎土に分類される。このうちa類は讃岐産、b類は足守川下流域の遺跡から出土する吉備型甕、c類は安国寺式土器、d類は炉壁、e類は百間川原尾鳥遺跡出土の在地産土器、f類は溝34出土ふいご羽口にそれぞれ対応する。この分類では特に、c類の安国寺式土器の砂粒に片岩の砂粒が含まれていた。

4. まとめ

百間川原尾鳥遺跡出土土器類の胎土分析を実施したところ、以下のことが明らかになった。

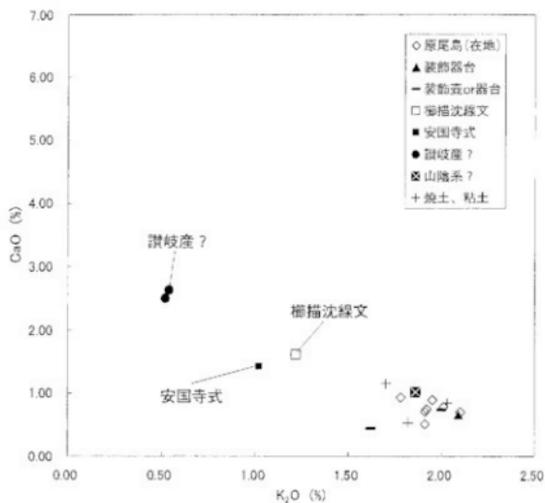
(1) 遺跡内出土土器のうち、搬入品と考えられる讃岐産と安国寺式土器(胎土に片岩などの岩片がみられた)はいずれも胎土に違いがみられ、この分析でも搬入品と推定された。また、試料番号18の古備型甕も足守川下流域からの搬入品と推測される。なお、安国寺式土器は生産地土器試料との胎土と比較する必要があり、今後の課題である。その他の土器は分析値、砂粒観察から在地で生産されていると推定される。

(2) 溝34出土の炉壁は分析値で砂質岩～泥質岩層と山砂利に、砂粒観察では砂岩の岩片が観察されることから砂質岩～泥質岩層を基盤とする地域の粘土を使用して生産されたと推定される。

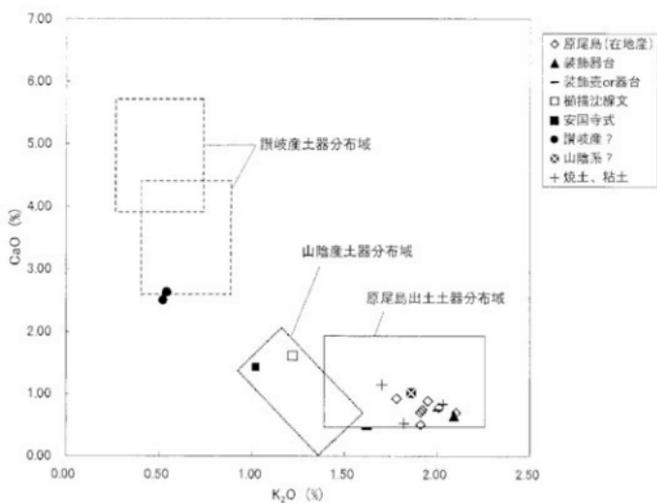
この分析の機会を与えていただいた、高田恭一郎氏および岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々にはいろいろご教示いただいた。末筆ではありますが、記して感謝いたします。

註

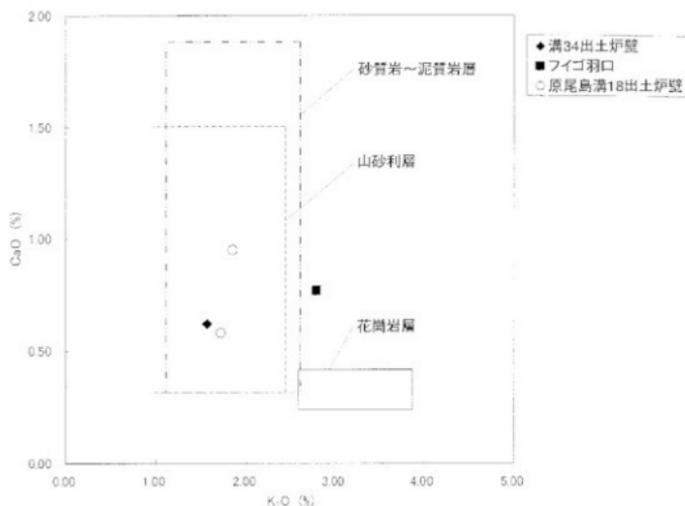
- (1) 白石 純「原尾鳥遺跡(藤原光町3丁目地区)出土の気焼土器の分析」『原尾鳥遺跡(藤原光町3丁目地区)岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139、1999



第1図 遺跡内出土土器の比較 (K₂O-CaO散布図)



第2図 遺跡出土土器の産地推定 (K₂O-CaO散布図)



第3図 各地域出土製鉄関連炉壁の胎土比較 (K₂O-CaO散布図)

表1 百間川原尾島遺跡出土土器分析値一覧表

単位：SiO₂～P₂O₅ (%)

番号	器種	器種・形状	遺構名	出所	土質・方眼	用途	分析	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	K ₂ O	CaO	MgO	P ₂ O ₅	Na ₂ O	SiO ₂
1	灰土土器	鉢・高脚	1期3号	白土・灰	8.7	遺構中	36.95	1.53	21.25	16.44	0.47	1.97	2.50	1.28	0.52	1.06	
2	灰土土器	鉢・1脚型	2期1号	白土・灰	8.3		67.32	0.86	16.78	5.87	0.10	1.46	0.75	1.91	1.92	0.79	
3	灰土土器	鉢・1脚型	2期2号	白土・灰	8.7	竹野土器	83.69	1.47	18.37	8.87	0.35	1.48	0.93	2.14	1.74	0.47	
4	灰土土器	鉢・1脚型	2期3号	白土・灰	8.3	遺構中	66.44	0.93	17.23	5.82	0.12	1.66	1.52	2.06	1.85	0.21	
5	灰土土器	鉢・1脚型	2期4号	白土・灰	8.3	土器2	69.76	0.75	18.37	3.13	0.76	1.58	0.70	2.72	2.10	1.03	
6	フイゴ	二	遺構	4C-E-7C	7.0		88.22	0.49	13.27	3.74	0.38	1.46	0.72	1.98	2.79	0.65	
7	灰土土器	鉢・1脚型	2期1号	白土・灰	8.3		67.40	0.88	18.62	5.77	0.39	1.67	0.89	2.03	1.87	0.48	
8	灰土土器	鉢・高脚	2期1号	白土・灰	8.3	遺構中	78.89	1.11	20.55	14.88	0.57	1.83	2.53	1.90	0.54	0.78	
9	灰土土器	鉢・高脚	2期1号	白土・灰	8.7		66.11	0.81	20.46	5.35	0.52	1.34	0.57	3.04	1.57	0.42	
10	灰土土器	鉢・1脚型	2期1号	白土・灰	8.3		66.41	0.78	18.17	7.47	0.10	1.57	0.79	2.22	2.31	0.53	
11	灰土		溝34	7.0	8.3		71.99	0.72	13.39	3.51	0.12	1.58	0.82	2.23	1.57	0.46	
12	灰土		2期1号	白土・灰	8.3	2期1号	62.32	0.86	13.44	10.49	0.14	1.38	0.53	2.14	1.62	0.69	
13	灰土土器	鉢・高脚	1期3号	白土・灰	6.7	遺構中	58.19	1.29	21.59	11.13	0.22	1.62	1.43	2.75	1.32	0.48	
14	灰土土器	鉢・1脚型	1期3号	白土・灰	7.3		66.18	0.72	18.87	6.61	0.38	1.63	0.71	2.14	1.81	0.72	
15	灰土土器	鉢・高脚	1期10	白土・灰	6.7	灰土土器	68.75	0.65	18.31	5.17	0.36	1.55	0.60	2.37	2.09	0.67	
16	灰土土器	鉢・高脚	1期10	白土・灰	6.7	灰土土器	69.75	0.67	18.25	6.86	0.25	1.51	0.74	2.06	2.30	0.55	
17	灰土土器	鉢・高脚	1期10	白土・灰	7.3	灰土土器	63.22	0.65	20.31	6.86	0.37	2.12	0.44	4.36	1.42	0.19	
18	灰土	灰土	2期1号	白土・灰	6.7	遺構中	68.36	0.97	21.88	6.32	0.15	1.80	1.61	2.74	1.24	0.72	
19	灰土		1期11	白土・灰	7.0		62.64	1.55	18.67	6.03	0.39	1.81	1.15	2.71	1.70	0.63	
20	灰土		1期11	白土・灰	6.0		67.22	0.87	19.10	6.07	0.31	1.78	0.94	1.77	1.30	0.68	



写真 1. 讃岐産土器(1,8)

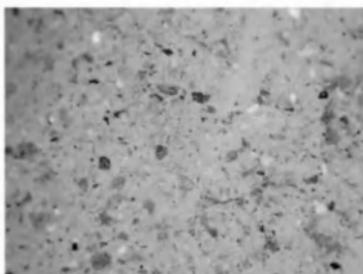


写真 2. 吉備型甕(18)

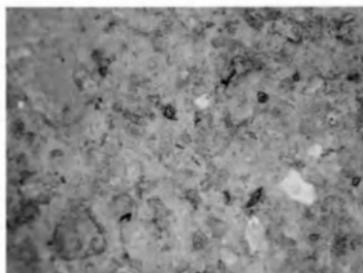


写真 3. 安国寺式土器(13)

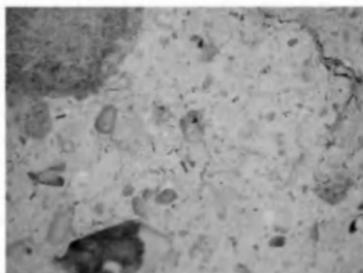


写真 4. 炉壁(11)

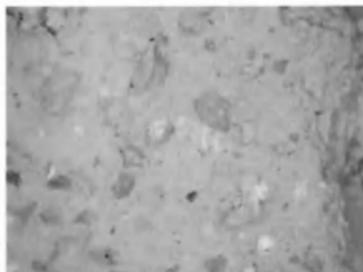


写真 5. 原尾島遺跡在地土器(15)

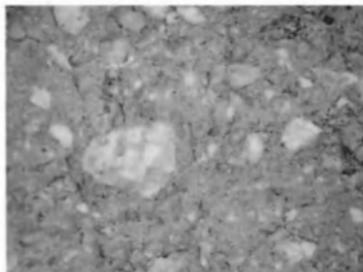


写真 6. フィゴ羽口(6)



第 4 図 原尾島遺跡出土土器の実体顕微鏡写真

付載 2 百間川原尾島遺跡出土製鉄・鍛冶関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター 大澤正己・鈴木瑞穂

1. いきさつ

百間川原尾島遺跡では、古墳時代後期の鍛冶遺構や、5世紀末から7世紀初頭の製鉄・鍛冶関連遺物の出土及びその分析調査結果^{(1)・(2)}が既に報告されている。今回新たに出土した製鉄・鍛冶関連遺物を含めて、遺跡内での生産の様相を検討する目的から、金属学的調査を行う運びとなった。

2. 調査項目

(1) 肉眼観察 (2) 顕微鏡組織 (3) ビッカース断面硬度 (4) 化学組成分析

3. 調査結果

No 1 : 鍛冶滓

(1) 肉眼観察：19g弱と小型の楕形鍛冶滓の約1/2破片と推測される。表面は細かい木炭灰による凹凸が顕著で、一部木炭片の噛み込みもみられる。滓の色調は暗灰色で、表面の気孔は少なく緻密な滓である。

(2) 顕微鏡組織：Photo.1 ①～③に示す。①は試料表層に付着する鍛造剥片である⁽³⁾。

②③は滓部で、発達した白色粒状結晶ウスタイト (Wustite : FeO) が晶出する。鉄化合物主体の鉱物組成であった。また②の明白色部は金属鉄である。滓中にはこうした微小金属鉄粒が若干散在する。高温押し鍛接・鍛錬鍛冶滓に分類される。

(3) ビッカース断面硬度：Photo.1 ③の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は428Hvであった。ウスタイトの文献硬度値⁽⁴⁾450～500Hvより若干軟質であるが、風化の影響であろう。

(4) 化学組成分析：Table 2 に示す。全鉄分 (Total Fe) は55.17%と高値であった。金属鉄 (Metallic Fe) 0.14%、酸化第1鉄 (FeO) 21.72%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 54.54%の割合である。また造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) 12.44%と低めで、主に製鉄原料 (塊鉱石) の脈石鉱物に由来する、塩基性成分 (CaO + MgO) も0.82%と低値であった。さらに主に砂鉄 (含チタン鉄鉱) に含まれる「酸化チタン (TiO₂) は0.11%、バナジウム (V) も<0.01%と低い。銅 (Cu) は0.05%と高めである。

当試料は鉄化合物主体であり、熱間では鉄材を鍛錬した際の吹き減り (酸化による損失) で生じた鍛錬鍛冶滓に分類される。また銅 (Cu) がやや高めであることから、鉄材の始発原料は鉄鉱石 (塊鉱石) の可能性が高いと考えられる。

No 2 : 炉外流出滓 (製錬滓)

(1) 肉眼観察：滑らかな流動状の炉外流出滓の側面部破片である。上面から側面表層は紫紅色を呈する。地は灰褐色で、表面は風化が進んでいる。また下面には炉壁粉が固着する。破面には上面側に大型の気孔が散在するが、比較的緻密で重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織：Photo.1 ④～⑥に示す。④中央は微小金属鉄粒である。5%ナイタルで腐食したところ、過共析組織 ($C > 0.77\%$) が確認された。

また滓中には、ごく微細な白色樹枝状結晶ウスタイトと、発達した淡灰色盤状結晶ファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が品出する。

(3) ピッカース断面硬度：Photo.4 ⑥の淡灰色盤状結晶の硬度を測定した。硬度値は647Hvであった。ファイヤライトの文紙硬度値600～700Hvの範囲内で、ファイヤライトに同定される。

(4) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) 45.78%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.10%、酸化第1鉄 (FeO) 54.00%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 5.30%の割合であった。渣滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 38.33%と高値で、主に製鉄原料 (塊鉄石) の脈石鉱物に由来する。塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) も4.29%と高めであった。これに対して、主に砂鉄 (含チタン鉄鉱) に含まれる二酸化チタン (TiO_2) は0.33%、バナジウム (V) が0.01%と低値であった。また銅 (Cu) は0.01%である。

以上のように、地域の塊鉄石 (磁鉄鉱) に含まれる脈石鉱物起源の成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) が高値傾向を示すため、当試料は塊鉄石を原料とする反応副生物 (製錬滓) に分類される。

No.3：炉内滓 (製錬滓)

(1) 肉眼観察：170g弱とやや小型のが内滓の破片である。滓の色調は灰褐色で、表面は風化が進んでいる。上面は木炭痕による凹凸が著しい。下面には全面灰白色の炉床粘土が固着する。破面の気孔は少なく、緻密で重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織：Photo.1 ⑦に示す。ごく微細な白色樹枝状結晶ウスタイトと、発達した淡灰色盤状結晶ファイヤライトが品出する。

(3) ピッカース断面硬度：Photo.1 ⑦の淡灰色盤状結晶の硬度を測定した。硬度値は636Hvで、ファイヤライトである。

(4) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) 46.62%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.07%、酸化第1鉄 (FeO) 55.65%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 4.71%の割合であった。渣滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 37.73%と高値で、製鉄原料 (塊鉄石) の脈石鉱物に由来する塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) も5.49%と高めであった。これに対して、主に砂鉄 (含チタン鉄鉱) に含まれる二酸化チタン (TiO_2) は0.30%、バナジウム (V) も0.01%と低値であった。また銅 (Cu) は0.01%であった。

当試料は炉外流出滓 (No.2) と類似する鉱物・化学組成であり、やはり塊鉄石を原料とする製錬滓に分類される。

No.4：炉壁 (製鉄炉)

(1) 肉眼観察：強い熱影響を受けて、内面表層が黒色ガラス質化した炉壁片である。外面側の胎土部分は淡褐色で、真砂 (花こう岩の風化砂) や短く切ったスサを多量に混和している。

(2) 顕微鏡組織：Photo.2 ①に示す。内面の黒色ガラス質滓部分で、ごく微細な灰褐色樹枝状結晶マグネタイト (Magnetite : $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$) が品出する。またガラス滓中には混和された真砂 (石英・長石粒) が溶融せず点在している。

(3) 化学組成分析：Table2に示す。強熱減量 (Ig loss) 0.84%と低値であった。強い熱影響を受けて、結晶構造水のほとんどが飛散した状態での分析である。鉄分 (Fe_2O_3) は2.06%と低めであるが、酸化アルミニウム (Al_2O_3) 11.34%と低値で、耐火性には不利な成分といえる。

(4) 耐火度：1177℃であった。製鉄炉の炉壁としては、かなり耐火性の低い性状であった。耐火性より、内面が溶融して造滓剤の役割 (SiO_2 、 Al_2O_3 の供給) を果たすことを期待して、粘土の選択がなされた可能性が考えられる。

No 5：炉壁溶融物

(1) 肉眼観察：黒色ガラス質主体の遺物で炉壁溶融物と推定される。表面は弱い流動状で、不規則な凹凸が顕著である。また茶褐色の錆化物や、光沢の強い暗灰色の製錬滓も確認されて磁力が強い。

(2) 顕微鏡組織：Photo.2 ②～④に示す。②は製錬滓部分である。灰褐色多角形結晶マグネタイト、淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶出する。鉱石系製錬滓の晶癖といえる。

また③④はガラス質部分である。凝集気味の不定形灰褐色結晶は、製鉄炉内に装入された塊鉱石 (磁鉄鉱) が分解・溶化したマグネタイト結晶である。

(3) ピッカース断面硬度：Photo.2 ④の不定形灰褐色結晶の硬度を測定した。硬度値は500Hvであった。マグネタイトの文献硬度値500～600Hvの範囲内で、マグネタイトに同定される。

以上の鉱物組成から、当試料は塊鉱石を製錬した炉壁内面溶融物と推定される。

No 6：鍛冶滓

(1) 肉眼観察：64g 割とやや小型で偏平な碗形鍛冶滓の破片である。表面は小型の木炭痕が密に残る。滓の地の色調は暗灰色で、破面は比較的密な個所と、中小の気孔が密に分布する個所とが存在する。

(2) 顕微鏡組織：Photo.2 ⑤～⑦に示す。⑤中央の灰色粒は錆化鉄である。フェライト地にパーライトが析出する亜共析組織 (C:<0.77%) の痕跡が残存する。また滓中には発達した白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファイヤライトが晶出する。

(3) ピッカース断面硬度：Photo.2 ⑦の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は438Hvであった。鍛冶滓 (No 1) と同様、ウスタイトの文献硬度値より若干軟質であるが、風化の影響と推測される。

(4) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) 50.60%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.08%、酸化第1鉄 (FeO) 53.30%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 13.00%の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 30.27%と高めで、主に製鉄原料 (塊鉱石) の脈石鉱物に由来する塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は3.67%であった。また上に砂鉄 (含チタン鉄鉱) に含まれる二酸化チタン (TiO_2) は0.26%、バナジウム (V) も<0.01%と低値であった。銅 (Cu) も<0.01%と低い。

当試料は製錬滓 (No 2、3) と比較すると、地域の塊鉱石 (磁鉄鉱) に含まれる脈石鉱物起源の成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) が低めである。また発達したウスタイト (FeO) が晶出することから、精錬鍛冶滓の可能性が最も高い。塊鉱石 (磁鉄鉱) を製錬して生成された鍛冶原料 (製錬鉄塊系遺物) の不純物除去で生じた滓であろう。ただし、脈石鉱物の少ない鉄鉱石を製錬した反応副生物 (鉱石系製錬滓) の可能性も、完全に否定はできない。

4. まとめ

百間川原尾高遺跡から出土した、製鉄・鍛冶関連遺物を調査した結果、以下の点が明らかとなった。

〈1〉5世紀末に比定される鍛冶滓（No 1）は鍛錬鍛冶滓と推定される。鉄酸化物主体で、熱間加工時の吹減り（鉄素材の酸化による損失）で生じた滓の特徴を示す。

また付着土砂中には、鍛造剥片が複数確認された。これも加熱された鉄材表面に生じた酸化膜の破片であり、この時期、鉄材を赤熱状態で鍛錬するような、本格的な鍛冶作業が行われたものと判断される。鍛冶原料鉄は海外からの搬入品であろうか。

〈2〉6世紀末～7世紀初頭に比定される遺物群のうち、溝34から出土した鉄滓（No 2、3）、炉壁とその溶融物（No 4、5）は全て鉄鉱石製錬に伴う遺物であった。

以前藤原光町3丁目地区から出土した鉄鉱石は塩基性成分（ $\text{CaO} + \text{MgO}$ ）の高値傾向が顕著で、特に酸化カルシウムの割合が高い（ CaO :9.64%）。接触交代鉱床から採掘された磁鉄鉱の特徴を有している。今回分析調査を実施した製錬滓2点（No 2、3）にも、同様に塩基性成分の高値傾向がみられるため、やはり同様の鉄鉱石（塊鉄石：磁鉄鉱）が製鉄原料であったと推定される。在地での鉄生産の開始を証明する遺物と見做される。

また炉壁は、製鉄炉としては耐火性の低い性状であった（耐火度：1177℃）。耐火性より、内面が溶融して造滓剤の役割（ SiO_2 、 Al_2O_3 の供給）を果たすことを期待して、粘土の選択がなされた可能性が考えられる。

さらに溝34から出土した鉄滓（No 6）は、精錬鍛冶滓（始発原料：鉄鉱石）の可能性が高いと考えられる。塩基性成分が製錬滓（No 2、3）と比較すると低めで、製錬生成鉄の不純物（付着製錬滓）の除去作業で生じた滓と推測される。

以上の調査結果からこの時期には、鉄鉱石製錬と後工程の鍛冶作業が、地域で密接な繋がりを持って行われていたと推測される。

注

- (1) 和鋼博物館「百間川原尾高遺跡出土の鉄滓の調査」『百間川原尾高遺跡4』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1995
- (2) 大澤正巳「原尾高遺跡（藤原光町3丁目地区）出土製鉄関連遺物の金相学的調査」『原尾高遺跡（藤原光町3丁目地区）』岡山県教育委員会 1999
- (3) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる。
鍛造剥片の酸化鉄相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite： Fe_2O_3 ）、中間層マグネタイト（Magnetite： Fe_3O_4 ）、大部分は内層ウスタイト（Wustite： FeO ）の3層から構成される。
- (4) 日刊工業新聞社「焼結並組織写真および識別法」1968
ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。

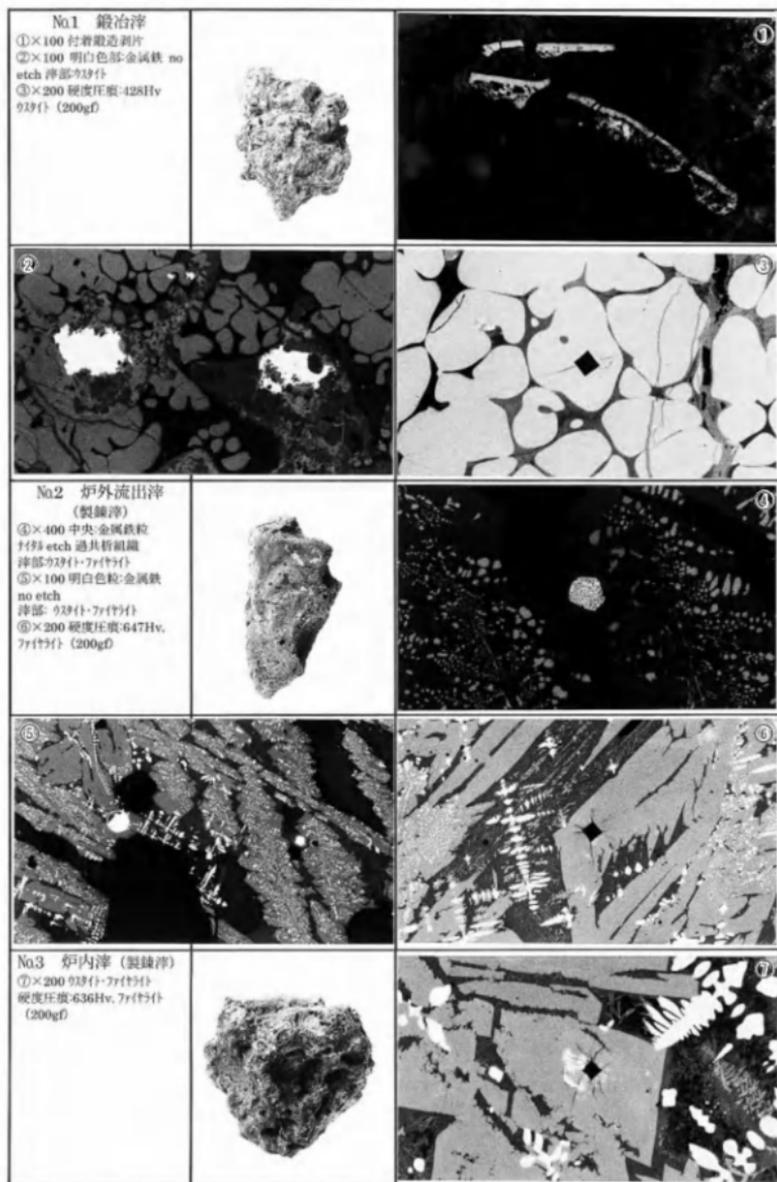


Photo.1 鍛冶滓・炉外流出滓（製錬滓）・炉内滓（製錬滓）の顕微鏡組織

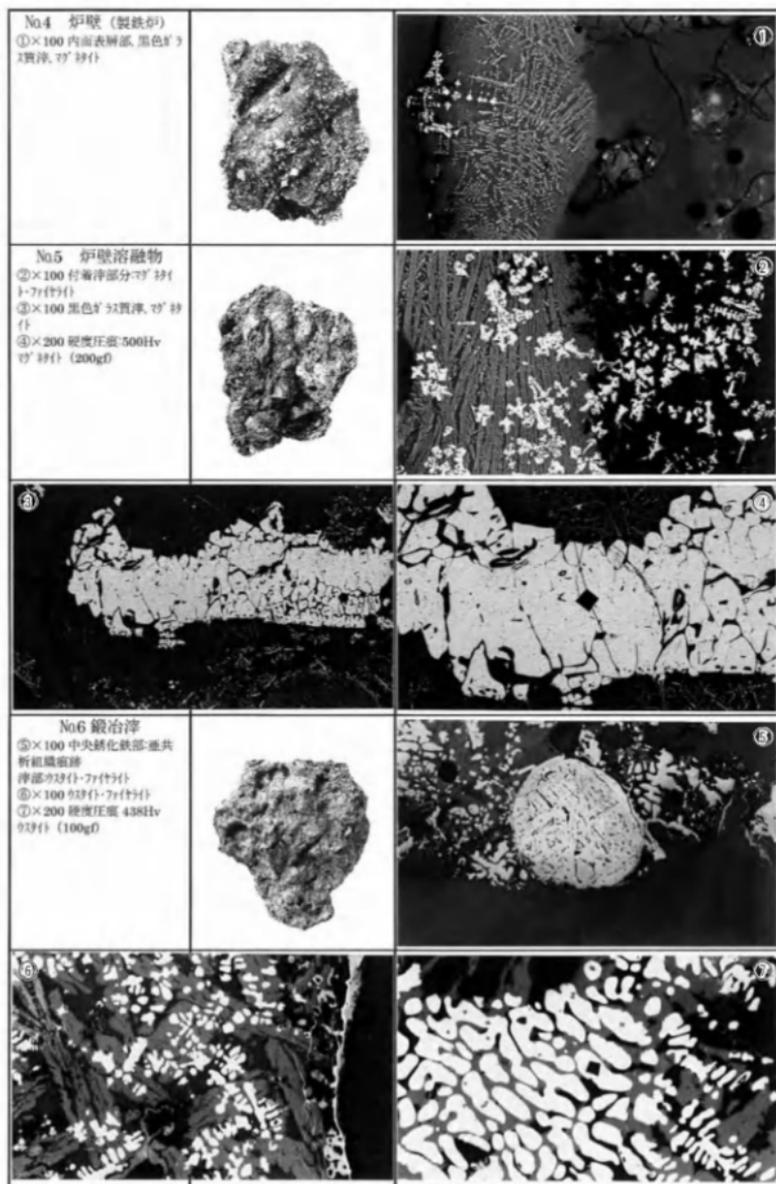


Photo.2 炉壁 (製鉄炉)・炉壁溶融物・鍛冶滓の顕微鏡組織

付載3 百問川原尾島遺跡の樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、住居から出土した建築部材と考えられる木材・炭化材20点（試料番号1～20）である。

2. 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

炭化材は、3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林（1991）、伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を表3に示す。試料番号8, 12の2点は、木材組織が全く認められず、種類不明とした。その他の試料は、針葉樹1種類（カヤ）、広葉樹4種類（コナラ属コナラ亜属クスギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ）とイネ科に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。保存状態が悪いが、仮道管内壁の所々に2本が対となるらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野穿孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クスギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Primus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

表3 百間川原尾島遺跡の樹種同定結果

番号	種別	遺構名	地区	層位	樹種	備考
1	炭化材	竪穴住居19	7-8B	II区	クリ	炭化材1
2	炭化材	竪穴住居19	7-8B	III区	コナラ属コナラ亜属クスギ節	炭化材2
3	炭化材	竪穴住居19	7-8B	I区	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
4	炭化材	竪穴住居19	7-8B	I区	コナラ属コナラ亜属クスギ節	炭4
5	炭化材	竪穴住居19	7-8B	I区	コナラ属コナラ亜属クスギ節	炭5
6	炭化材	竪穴住居19	7-8B	I区	コナラ属コナラ亜属クスギ節	炭6
7	炭化材	竪穴住居19	7-8B	I区	コナラ属コナラ亜属クスギ節	炭7
8	炭化材	竪穴住居19	7-8B	I区	不明	炭粒8、炭化米?
9	炭化材	竪穴住居19	7-8B	I区	イネ科	
10	炭化材	竪穴住居19	7-8B	III区	コナラ属コナラ亜属クスギ節	炭10
11	炭化材	竪穴住居19	7-8B	III区	コナラ属コナラ亜属コナラ節	炭11
12	炭化材	竪穴住居19	7-8B	III区	不明	炭12
13	炭化材	竪穴住居19	7-8B	III区	コナラ属アカガシ亜属	炭13
14	炭化材	竪穴住居4	7BC	帯体溝内	コナラ属コナラ亜属クスギ節	
15	炭化材 (P183)	8B			コナラ属コナラ亜属コナラ節	
16	炭化材	竪穴住居2	6A		コナラ属コナラ亜属コナラ節	
17	炭化材	竪穴住居8	6A		コナラ属コナラ亜属クスギ節	
18	炭化材	竪穴住居8	6A		コナラ属コナラ亜属クスギ節	
19	炭化材	竪穴住居8	6A		コナラ属コナラ亜属クスギ節	
20	材	竪穴住居5B	SAB	P-6B	カギ	根がらみ

放射孔材で、管壁厚は中層～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

保存状態が悪く、年輪界で割れた晩材部だけの観察。道管は、火災状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・イネ科 (Gramineae)

保存状態が悪く、電子顕微鏡による観察はできなかった。試料は薄く脆い。横断面では維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められる。放射組織は認められない。

4. 考察

炭化材は、竪穴住居19を中心に4軒の住居跡と柱穴から出土している。これらの炭化材には、クスギ節、コナラ節を中心に4種類の木材とイネ科が認められた。

最も試料数が多い竪穴住居19についてみると、種類不明の2点を除く11点が、クスギ節6点、コナラ節2点、アカガシ亜属、クリ、イネ科が各1点であった。イネ科を除く4種類は、いずれも重硬で強度が高い材質を有することから、住居構築材にはクスギ節を中心に硬く強靱な木材を選択していたことが推定される。イネ科については、柱や垂木に利用できるような大きさ・強度を有していないことから、屋根や壁等に利用された萱材に由来する可能性がある。その他の住居跡・柱穴から出土した炭化材は、試料が少ないために遺構別の種類構成等の詳細は不明であるが、いずれもクスギ節・コナラ節であり、竪穴住居19と同様の木材が利用されていたことが推定される。

一方、堅穴住居跡のP-6Bから出土した木材は根がらみと考えられている。樹種は針葉樹のカヤであり、クスギ節・コナラ節を主とした広葉樹を利用する炭化材の結果とは異なる。カヤは、針葉樹としては重硬で緻密な材質を有し、強度および耐久性に優れている。

百間川原尾高遺跡では、これまでに弥生時代前期、古墳時代、平安時代前期、室町時代の木製品や建築・土木材について樹種同定を実施している（能城，1995；パリオ・サーヴェイ株式会社，1995b，1996）。それらの調査結果をみると、クスギ節・コナラ節は、弥生時代前期の橋脚や古墳時代の杭等に比較的多くみられる他、農具の鋏・鋤類にも利用されている。住居跡から出土した炭化材については、これまで樹種同定は実施していなかったが、今回の結果から、クスギ節・コナラ節を主とした木材利用であったことが推定される。本遺跡で実施された花粉分析結果（パリオ・サーヴェイ株式会社，2004b）を参考にすれば、クスギ節・コナラ節は遺跡周辺に生育し、木材の入りが可能であったと考えられる。

引用文献

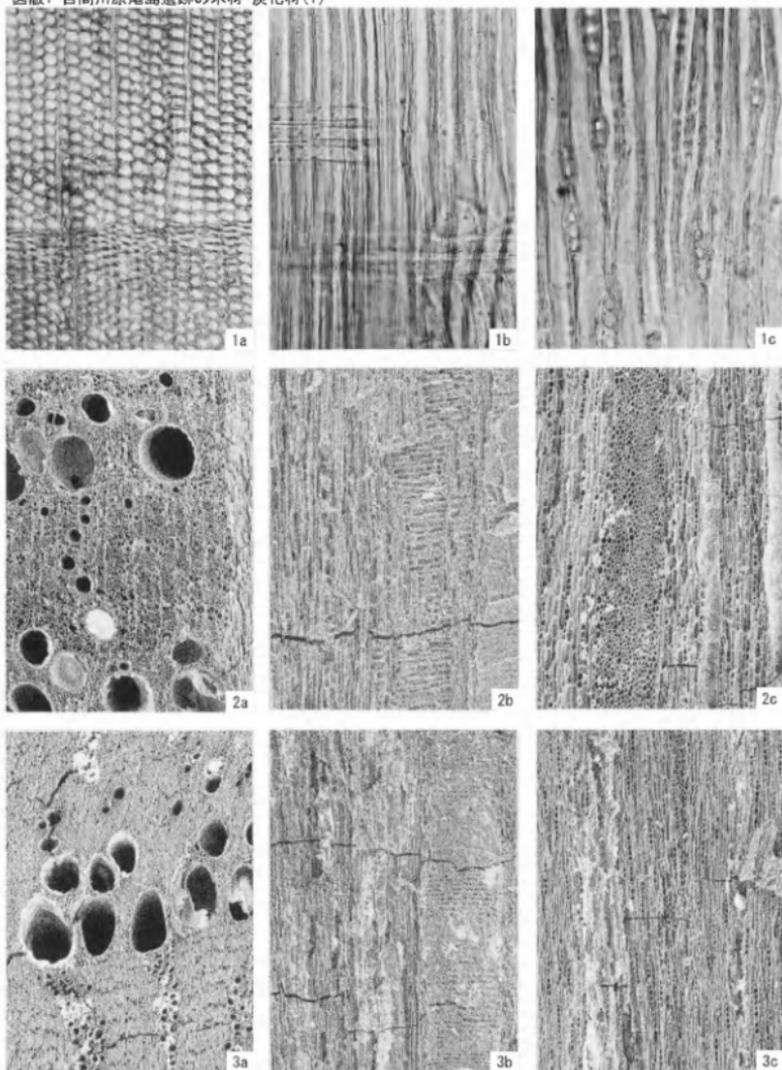
- 波田壽夫，1987，松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究 - 松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の混乱とその高陸について - 資料集，日本自然保護協会，41-49。
- 林 昭三，1991，日本産木材 顕微鏡写真集，京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ，木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181。
- 伊東隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ，木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所，66-176。
- 伊東隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ，木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201。
- 伊東隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ，木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166。
- 伊東隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ，木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216。
- 近藤謙三，2004，植物ケイ酸体研究，ペドロジスト，48，46-64。
- 三宅 尚・小島信和，1998，森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態，植生史研究，6，15-30。
- 宮脇 昭（編著），1983，日本植生誌 中国，空文堂，540p。
- 三好教夫，1988，岡山県の植生変遷史，岡植研，7，1-9。
- 中村 純，1967，花粉分析，古今書院，232p。
- 能城修一，1995，百間川原尾高遺跡から出土した弥生時代前期橋脚の柱の樹種，「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 百間川原尾高遺跡4 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅹ」，岡山県文化財保護協会，269-274。
- パリオ・サーヴェイ株式会社，1993a，植物化石分析報告，「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81 百間川沢田遺跡3 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅶ」，岡山県文化財保護協会，405-417。
- パリオ・サーヴェイ株式会社，1993b，自然科学分析，「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 百間川沢田遺跡3 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅷ」，岡山県文化財保護協会，418-426。
- パリオ・サーヴェイ株式会社，1995a，百間川原尾高遺跡出土の樫実同定，「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 百間川原尾高遺跡4 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅹ」，岡山県文化財保護協会，286-289。
- パリオ・サーヴェイ株式会社，1995b，百間川原尾高遺跡出土の木器樹種同定，種実同定，「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97 百間川原尾高遺跡4 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅹ」，岡山県文化財保護協会，290-301。
- パリオ・サーヴェイ株式会社，1996，百間川原尾高遺跡出土の木製品樹種同定，種実同定，「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106 百間川原尾高遺跡5 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅺ」，建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会，251-259。
- パリオ・サーヴェイ株式会社，2004a，津島遺跡における弥生時代前期の古墳地解明，「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181 津島遺跡5 岡山県総合グラウンド第三次・第三次確認調査」，岡山県文化財保護協会，165-184。
- パリオ・サーヴェイ株式会社，2004b，百間川原尾高遺跡の花粉分析・フランクタル分析，「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告179 百間川原尾高遺跡6 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査ⅩⅤ」，国土交通省岡山河川事務所・岡山県教育委員会，305-314。
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編)，2006，針葉樹種の識別 [LAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト，伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修），海青社，70p.，Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *JAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*]，島地 謙・伊東隆夫，

1982, 国説木材組織, 地球社, 176p.

徳永重元・山内輝子, 1971, 花得・彪子, 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海苔社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

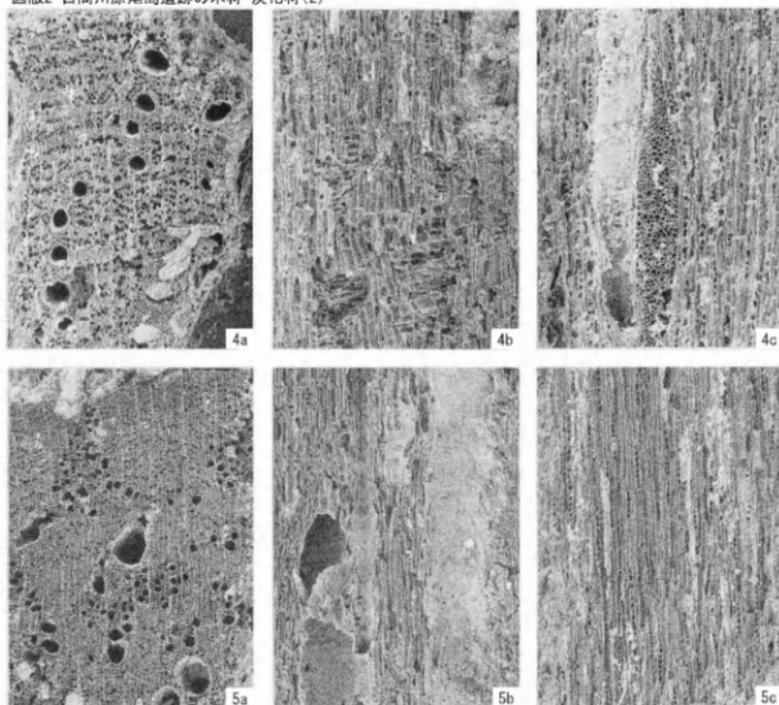
図版1 百間川原尾島遺跡の木材・炭化材(1)



1. カヤ(試料番号20)
 2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(試料番号7)
 3. コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号15)
- a: 木口, b: 柃目, c: 板目

200 μ m: 1a
 100 μ m: 1b,c
 200 μ m: 2-3a
 200 μ m: 2-3b,c

図版2 百聞川原尾島遺跡の木材・炭化材(2)



4. コナラ属アカガシ亜属(試料番号13)

5. クリ(試料番号1)

a: 木口, b: 年目, c: 板目

200 μ m a

200 μ m b,c

- 1 遺構一覽表
- 2 遺物觀察表
- 3 新旧遺構名称对照表

遺構一覧表・遺物観察表 凡例

1 遺構一覧表

- ・平面形は検出面での形状を示す。
 - ・面積は、竪穴住居が壁体溝心芯内部、あるいは床面での計測値を示し、掘立柱建物は建坪を示す。
 - ・各項目の表記については、次のように示している。
 - 「○」および「数値」：存在が確認できたもの
 - 「×」：存在が確認できないもの
 - 「-」：確認が不可能なもの
- また、規模を示す数値のうち、「()」は残存値を示す。

2 遺物観察表

土器

- ・「計測値」のうち、口径と底径の「()」は復元値、器高の「()」は残存値、「-」は計測不能を示す。
- ・残存状況は、復元も含めて全体が残るものは、「完形」、「ほぼ完形」と表した。破片については、残存部位等を示し、その残存状況を分数で表した。また、小破片は「片」等で示した。

金属器・土製品・石器・ガラス製品

- ・「計測値」のうち、「()」は残存値を示す。「重量」は、現状の最大値を示す。
- ・石器の「石材」のうち、※を付したものは、岡山大学鈴木茂之氏の同定による。
- ・土製品の「色調」は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。

3 遺物同定結果

- ・獣骨は岡山理科大学富岡直人氏の同定結果をもとに、編者が作成した。

百間川原尾島遺跡遺構

1 遺構一覽表

竪穴住居

遺構名	方位	1.溝 (cm)	2.溝 (cm)	3.内溝 (cm)	柱穴 形式	中央穴 (cm)			土台土階 (cm)	築土曲 (cm)	壁内溝	内ノ子	外ノ子位置
						長さ	幅	深さ					
竪穴住居1	内	443	428	26.33	3	1.5×1.4	122×75	62	-	-	全周	全周	-
竪穴住居2	内	600	583	116.02	6	溝ノ?	124×77	50	-	25	全周?	-	-
竪穴住居3	南北方	331	282	8.42	1	板内	48×26	20	?	?	溝ノ?	全周	?
竪穴住居4	板内	339	328	29.38	4	溝	4?	36	-	-	全周?	-	-
竪穴住居5	内	779	1672	136.2	3	半埋	113×104	-	-	-	全周?	-	-
竪穴住居6	内	772	1672	149.47	6	南北方	68×68	65	-	-	板内溝	-	-
竪穴住居7	内	643	-	171.02	3	板内	33×33	32	-	-	全周?	-	-
竪穴住居8	内	379	-	171.82	4	板内	82×56	42	-	-	全周?	-	-
竪穴住居9	内 南北方	479	-	16.27	1	溝	3?	64	-	-	?	-	-
竪穴住居10	南北方	215	1180	12.17	1-4-7	-	-	-	-	-	?	-	-
竪穴住居11	南北方	328	326	121.84	4	南北方	93×58	35	-	-	全周?	全周	-
竪穴住居12	方?	775	1630	146.37	4	-	-	-	37×61	49	-	全周?	-
竪穴住居13	方?	1310	332	125.92	1	?	?	?	?	?	?	?	溝中央?
竪穴住居14	方	323	306	7.87	?	板内	20×17	13	42×60	12	?	?	?
竪穴住居15	南北方	456	468	15.56	1	板内	55×32	31	92×72方	27	-	全周?	-
竪穴住居16	方	631	600	179.07	4	-	-	-	66×72	37	-	全周?	?
竪穴住居17	方?	1330	293	14.26	-	-	-	-	-	-	?	-	-
竪穴住居18	南北方	347	376	17.50	-	-	-	-	-	-	全周?	-	-
竪穴住居19	方?	-	-	112.29	2-1	-	-	-	-	-	?	-	-
竪穴住居20	方?	1609	1600	114.23	1-4	-	-	-	-	-	-	-	-
竪穴住居21	方	854	808	147.38	4	-	-	-	-	-	-	北側土?	?
竪穴住居22	方	529	498	116.33	3-4-7	溝	96×71	44	-	-	板内	2溝?	-
竪穴住居23	方?	456	454	115.32	3-4-7	-	-	-	-	-	-	全周?	-
竪穴住居24	方	436	467	14.31	4	-	-	-	89×59板内 112×72方	43 15	-	-	北内壁 北壁ノ方

掘立柱建物

遺構名	幅	柱間距 (cm)		奥行 (cm)	奥溝 (cm)	側溝 (cm)	掘方内	柱穴		特注
		幅	深					1.穴間	2.深	
掘立柱建物1	2×1	172-180	243-253	327-332	143-153	6.4	N-67°-W	内→内内	25-30	溝・柱
掘立柱建物2	2×1	214-240	228-245	258	228-246	10.49	E-66.5°-E	内→内内	25-45	溝・柱
掘立柱建物3	2×1	183-210	277-290	332-334	327-290	11.52	S-67°-W	内	65-95	溝・柱
掘立柱建物4	2×1	140-152	305-314	290-303	305-314	6.26	S-67°-W	内	38-71	溝・柱
掘立柱建物5	2×1	225-240	289-290	452-462	289-303	12.39	N-27°-W	内	26-44	溝・柱
掘立柱建物6	2×1.5土	222	155-178	2225.1	331	-	E-86.5°-W	南北方	31-33	溝・柱
掘立柱建物7	2×2	210-210	219	1605.1	187	-	N-67°-W	南北方-内	15-45	溝・柱
掘立柱建物8	3×2	167-177	135-139	787	253	13.72	N-67°-W	南北方-内	37-76	溝・柱
掘立柱建物9	2×2	160-205	131-170	530-533	430-501	10.50	S-67°-W	南北方	31	溝・柱
掘立柱建物10	1×1	243-295	389-394	778-798	380-394	10.41	S-13°-W	内→内内	18-37	溝
土間(掘方/埋方)	1×1	137-138	289-295	136-132	136-129	12.50	S-67°-W	内→内内	19-34	溝・柱

柱穴列

遺構名	幅	掘方内	柱間距離 (cm)	穴間中心 (cm)	柱穴		特注
					柱穴間	深さ (cm)	
柱穴列1	2×-	S-27°-W	124-131	118	内	36-51	溝・柱?
柱穴列2	1×-	N-25°-W	250	250	内	31-43	溝・柱?
柱穴列3	2×-	N-45°-E	180-205	185	内→内	50	内・柱?
柱穴列4	1×	N-75°-W	217	217	南北方	42-64	内・柱?

百問川原尾島遺跡遺構

井戸

遺構名	構造	平面形	断面形	直径(cm)	埋没(cm)	深さ(cm)	内径深径高 (cm)	時期	備考
井戸1	築造井	円・楕円形	輪・「U」字	190	52	22	265	推・後	
井戸2	築造井	円	平台	98	83	108	292	推・後	
井戸3	築造井	円	池台	199*	190	108	292	推・後	
井戸4	築造井	円	「V」字	185	122	182	199	推・後	
井戸5	築造井	円	池台	110(9)	-	135	174	推・後	
井戸6	築造井	円	「U」字	91	-	105	219	推・後	
井戸7	築造井	円	池台	164	134	152	127	推・後	
井戸8	築造井	円	「V」字	160	150	160	200	古・前	
井戸9	築造井	楕円	「U」字	121	112	160	200	古・前	
井戸10	築造井	正方形・楕円	「V」字	116	81	106	178	古・前	
井戸11	築造井	円	「U」字	128	-	190	170	古・前	
井戸12	築造井	円	池台	230	-	186	228	古・前	
井戸13	築造井	楕円	池台	191	161	174	110	古・前	
井戸14	築造井	楕円	「V」字	214	175	127	227	古・後	

土壇・焼成土壇

遺構名	平面形	断面形	直径(cm)	埋没(cm)	深さ(cm)	内径深径高 (cm)	時期
二壇1	不整形円	逆舟・段	116	160	33	277	推・後
二壇2	不整形?	皿	164	149	3	319	推・後
二壇3	円?	逆舟・段	116	172	28	342	推・後?
二壇4	円・不整形	段・逆舟	170(1)	155	21	329	推・後?
二壇5	山形円	逆舟・段	110	180	55	311	同・焼
二壇6	円?	板	100	150	16	245	推・前・後?
二壇7	不定	逆舟・段	110(1)	112	27	200	推・中・後
二壇8	不整形楕円	皿	138	149	46	283	推・前・後
二壇9	円	板	126	-	25	258	推・後
二壇10	不整形	皿	191	163	11	357	推・後
二壇11	不定?	逆舟?	215	79	26	314	推・後
二壇12	楕円	板	56	46	28	104	推・後
二壇13	円・不整形	板	126	89	17	215	推・後
二壇14	山形円	板	107	119	19	227	推・後
二壇15	円	板	65	91	26	164	推・後
二壇16	円	板	45	-	16	112	推・後
二壇17	不整形楕円	皿	175	180	15	312	推・後
二壇18	円形	逆舟・段	113	86	21	244	推・後
二壇19	円・不整形	逆舟	112	101	56	214	推・後
二壇20	円	板	82	77	18	172	推・後
二壇21	楕円?	板・段	100	45	26	146	推・後
二壇22	円形	逆舟・「U」字	194	182	37	342	推・後
二壇23	円	板	86	89	26	156	推・後
二壇24	円・不整形	板	192	87	6	289	推・後
二壇25	円・不整形	「U」字	194	94	22	356	推・後
二壇26	楕円・不整形?	皿	167*	77	13	249	推・後
二壇27	円形	逆舟?	172	119	26	317	推・後?
二壇28	楕円	「U」字	180	191	11	356	推・後?
二壇29	楕円	板	180	167	17	357	推・後
二壇30	円	逆舟	64	69	62	267	推・後
二壇31	円	逆舟	77	72	29	272	推・後
二壇32	楕円	「U」字	118	112	15	286	推・後
二壇33	楕円	池台	95	74	11	161	推・後
二壇34	不整形	「U」字	120	81	62	217	推・後
二壇35	正方形	逆舟	122	184	6	384	推・後
二壇36	楕円	逆舟	71	63	11	142	推・後
二壇37	円	池台	73	65	21	137	推・後
二壇38	不整形?	楕円	110	117	27	212	推・後?
二壇39	円	逆舟	80	76	17	249	推・後
二壇40	山形円?	皿?	111	61	16	152	推・後

百間川原尾島遺跡遺構

土塼・焼成土塼

遺構名	平面形	断面形	長径(m)	短径(m)	高さ(m)	筑山面残高(m)	時期
二-541	竪円		38	54	26	315	基・礎
二-542	不整土塼形	溝+礎	162	69	54	322	基・礎
二-543	竪楕円	礎	89	56	19	352	基・礎
二-544	不整六角形	礎	112	65	26	329	基・礎
二-545	円?	溝+礎	136	176	21	336	基・礎
二-546	隅丸方	礎台	271	215	42	326	基・礎
二-547	隅丸方	礎台	184	147	46	325	基・礎
二-548	隅丸方	溝+礎	168	123	36	322	基・礎
二-549	隅丸方	1丁字	157	139	78	302	基・礎
二-550	窪凹円	礎台	236	-	66	381	基・礎
二-551	竪楕円	礎	116	79	14	356	基・礎
二-552	隅丸門	礎	293	82	38	349	基・礎
二-553	隅丸長方	土塼	122	76	43	319	基・礎
二-554	不定	礎台	124	89	26	347	基・礎
二-555	円	溝台+礎	72	-	47	331	基・礎
二-556	隅丸門	1丁字	51	29	15	351	基・礎
二-557	不定	礎先	115	89	26	329	基・礎
二-558	長楕円	礎台	134	65	36	315	基・礎
二-559	不定	礎	164	71	28	349	基・礎
二-560	窪凹窪凹	溝+礎	58	39	23	322	基・礎
二-561	竪円	溝+礎	75	69	76	294	基・礎
二-562	円	礎台	22	66	11	348	基・礎
二-563	隅丸方?	溝台	171	173	22	329	基・礎
二-564	隅丸長方	溝先	127	91	43	281	基・礎
二-565	不定		81	73	26	319	基・礎
二-566	竪円	礎	55	65	66	297	基・礎
二-567	長楕円?	礎	163	55	28	322	基・礎
二-568	隅丸方	礎台	222	185	19	338	基・礎
二-569	隅丸方	礎台	260	153	16	365	基・礎
二-570	隅丸門	礎	119	173	56	319	基・礎
二-571	円	礎台	84	89	47	317	基・礎
二-572	不整円	礎	60	46	17	303	古・礎
二-573	隅丸門	1丁字	112	61	8	367	古・礎
二-574	隅丸方?	1丁字+礎+1丁字	193	173	56	326	基・礎
二-575	竪円	礎	27	67	16	336	古・礎
二-576	隅丸方	溝台	81	68	16	327	古・礎
二-577	不整長楕円	礎	129	74	12	349	古・礎
二-578	不整六角形	礎	206	32	9	286	古・礎
二-579	不整円	礎	164	142	12	21	古・礎
二-580	不整土塼形	溝+礎	28	24	46	314	古・礎
二-581	不整長楕円	溝+礎	118	141	45	319	古・礎
二-582	不整円	礎台	156	123	16	243	古・礎
二-583	円	礎	140	-	36	353	古・礎
二-584	隅丸土塼	礎台	131	115	27	349	古・礎
二-585	不整円	溝+礎	100	89	47	226	古・礎
二-586	隅丸方	礎台	82	62	25	319	古・礎
二-587	隅丸長方	礎	211	81	26	364	古・礎
二-588	不整円	礎	121	86	28	327	古・礎
二-589	隅円?	礎	124	156	16	363	中瀬以降
二-590	隅丸長方	礎台+	138	68	5	357	中瀬以降
二-591	竪円	礎台	27	57	26	367	中瀬以降
二-592	長楕円	礎台	21	55	41	347	古川以降
未詳土塼1	方?	礎	170	66	8	369	古・礎以降

土塼墓

遺構名	平面形	断面形	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	築成面深さ(m)	時期
土塼墓1	隅丸長方	溝	116	64	2	285	中瀬

百問川原尾島遺跡遺構

溝・水路

遺構名	断面図	土高幅(m)	底高幅(m)	溝深(m)	断面面積(㎡)	時期	備考
溝1	縦	254	300	60	229	Ⅱc・Ⅱb・Ⅰ	
溝2	横+L字	100	50	16	145	Ⅱc・Ⅱb・Ⅰ	
溝3	横+縦	300	30	70	281	Ⅱb・Ⅱc	
溝4	横+縦	183	35	60	207	Ⅱc・Ⅱb・Ⅰ	
溝5	縦	300(区1)	70	73	313	Ⅱc・Ⅱb・Ⅰ	
溝6	縦+横	91	50	15	151	Ⅱb・Ⅱc	
溝7	「L」字	48	32	46	133	Ⅱc・Ⅱb	
溝8	縦	66	38	20	151	Ⅱc・Ⅱb	
溝9	縦	165	30	73	257	Ⅱc・Ⅱb・Ⅰ	
溝10	縦	75	20	18	126	Ⅱc・Ⅱb・Ⅰ	
溝11	縦	18	5	5	38	Ⅱc・Ⅱb・Ⅰ	
溝12	縦	111	30	9	127	Ⅱc・Ⅱb・Ⅰ	
溝13	縦	138	120	14	256	Ⅱb・Ⅱc	
溝14	縦	45	20	11	98	Ⅱb・Ⅱc	
溝15	「L」字+横「H」字	64	29	76	281	Ⅱb・Ⅱc	
溝16	縦	62	20	25	115	Ⅱb・Ⅱc	
溝17	縦	20	7	1	12	Ⅱc・Ⅱb・Ⅰ	
溝18	縦	178	40	38	307	Ⅱc・Ⅱb	
溝19	横+L字	100(区1)	30	30	137	Ⅱc・Ⅱb	
溝20	縦	213(区1)	40	50	313	Ⅱc・Ⅱb	
溝21	縦	59	28	21	111	Ⅱc・Ⅱb	
溝22	縦	49	46	16	146	Ⅱc・Ⅱb	
溝23	縦	20	15	5	26	Ⅱc・Ⅱb	
溝24	縦+横	30	16	20	260	Ⅱc・Ⅱb	
溝25	縦+横	55	18	19	131	Ⅱc・Ⅱb	
溝26	縦	174	50	17	319	Ⅱc・Ⅱb	
溝27	縦	52	10	30	154	Ⅱc・Ⅱb	
溝28	縦	27	10	24	160	Ⅱc・Ⅱb	
溝29	縦	11	13	26	115	Ⅱb・Ⅱc	
溝30	縦+横	153	0	46	787	Ⅱc・Ⅱb	
溝31	縦	40	20	7	108	Ⅱb・Ⅱc	
溝32	「L」字	54	20	44	144	Ⅱc・Ⅱb	
溝33	縦+横	56	22	21	129	Ⅱc・Ⅱb	
溝34	縦+横「H」字	108	10	112	275	Ⅱc・Ⅱb	
溝35	横+縦	110(区1)	35	72	280	Ⅱb・Ⅱc	
溝36	横+縦	246	60	57	285	Ⅱb・Ⅱc	
溝37	縦	76	33	21	187	Ⅱb・Ⅱc	
溝38	縦	21	20	5	289	Ⅱb・Ⅱc	

百聞川原尾鳥遺跡出土遺物

2 遺物観察表

発掘 番号	遺物名	時期	出土 層	測定値(mm)			形状・色調	数量	分類	出所	特徴・備考
				縦径	横径	厚さ					
1	土器	縄文中期	溝		6.0	14.1	灰褐色	1	土器	原野	
2	土器	縄文中期	溝		18.4		褐色	1	土器	原野	
3	土器	縄文中期	溝		12.8		灰褐色	1	土器	原野	
4	土器	縄文中期	溝		17.1		灰褐色	1	土器	原野	
5	土器	縄文中期	溝		14.4		灰褐色	1	土器	原野	
6	土器	縄文中期	溝		13.1		灰褐色	1	土器	原野	
7	土器	縄文中期	溝		12.8		褐色	1	土器	原野	
8	土器	縄文中期	溝		16.3		灰褐色	1	土器	原野	
9	土器	縄文中期	溝		14.0		灰褐色	1	土器	原野	
10	土器	縄文中期	溝	8.1	16.0		灰褐色	1	土器	原野	
11	土器	縄文中期	溝	12.0	16.4		灰褐色	1	土器	原野	
12	土器	縄文中期	溝	11.2	16.0		灰褐色	1	土器	原野	
13	土器	縄文中期	溝	12.0	17.0		灰褐色	1	土器	原野	
14	土器	縄文中期	溝	15.0	16.1		灰褐色	1	土器	原野	
15	土器	縄文中期	溝	12.0	16.1		灰褐色	1	土器	原野	
16	土器	縄文中期	溝	8.0	14.4		灰褐色	1	土器	原野	
17	土器	縄文中期	溝	12.0	16.0		褐色	1	土器	原野	
18	土器	縄文中期	溝	14.7	16.9		褐色	1	土器	原野	
19	土器	縄文中期	溝	14.7			灰褐色	1	土器	原野	
20	土器	縄文中期	溝	11.7	16.1		褐色	1	土器	原野	
21	土器	縄文中期	溝	11.2	16.0		褐色	1	土器	原野	
22	土器	縄文中期	溝	11.2	3.1	3.8	褐色	1	土器	原野	
23	土器	縄文中期	溝	14.2	11.4	3.7	褐色	1	土器	原野	
24	土器	縄文中期	溝	12.4	16.1		褐色	1	土器	原野	
25	土器	縄文中期	溝	14.7	17.4		褐色	1	土器	原野	
26	土器	縄文中期	溝	16.4	9.1	15.4	褐色	1	土器	原野	
27	土器	縄文中期	溝	22.0	26.7		褐色	1	土器	原野	
28	土器	縄文中期	溝	15.0	17.1		褐色	1	土器	原野	
29	土器	縄文中期	溝	11.8	16.5		灰褐色	1	土器	原野	
30	土器	縄文中期	溝	18.0	17.4		褐色	1	土器	原野	
31	土器	縄文中期	溝	11.7	16.1		褐色	1	土器	原野	
32	土器	縄文中期	溝	11.2	16.1		褐色	1	土器	原野	
33	土器	縄文中期	溝	11.0	17.0		褐色	1	土器	原野	
34	土器	縄文中期	溝	6.4	5.1	17.5	灰褐色	1	土器	原野	
35	土器	縄文中期	溝	8.4	26.0		褐色	1	土器	原野	
36	土器	縄文中期	溝	14.8	6.6	3.8	褐色	1	土器	原野	
37	土器	縄文中期	溝	14.7	5.9	15.4	褐色	1	土器	原野	
38	土器	縄文中期	溝	13.9	6.5	14.5	褐色	1	土器	原野	
39	土器	縄文中期	溝	14.6	15.1		褐色	1	土器	原野	
40	土器	縄文中期	溝	5.5	13.6		灰褐色	1	土器	原野	
41	土器	縄文中期	溝	14.7	17.4		褐色	1	土器	原野	
42	土器	縄文中期	溝	17.7	16.1		灰褐色	1	土器	原野	
43	土器	縄文中期	溝	14.8	4.8	8.3	褐色	1	土器	原野	
44	土器	縄文中期	溝	118.0	15.7		褐色	1	土器	原野	
45	土器	縄文中期	溝	5.0	15.8		褐色	1	土器	原野	
46	土器	縄文中期	溝	5.7	15.1		灰褐色	1	土器	原野	
47	土器	縄文中期	溝	12.9	4.8	5.4	灰褐色	1	土器	原野	
48	土器	縄文中期	溝	5.4	15.8		灰褐色	1	土器	原野	
49	土器	縄文中期	溝	11.8	6.5	16.5	褐色	1	土器	原野	
50	土器	縄文中期	溝	25.0	17.0		褐色	1	土器	原野	
51	土器	縄文中期	溝	25.5	17.8		灰褐色	1	土器	原野	
52	土器	縄文中期	溝	16.1	4.9		灰褐色	1	土器	原野	
53	土器	縄文中期	溝	15.7	14.2		灰褐色	1	土器	原野	
54	土器	縄文中期	溝	12.7	12.9		灰褐色	1	土器	原野	
55	土器	縄文中期	溝	11.8	17.1		灰褐色	1	土器	原野	
56	土器	縄文中期	溝	12.5	9.2	16.2	褐色	1	土器	原野	
57	土器	縄文中期	溝	22.0	22.7	15.7	褐色	1	土器	原野	
58	土器	縄文中期	溝	11.7	16.1		灰褐色	1	土器	原野	
59	土器	縄文中期	溝	14.9	17.1		褐色	1	土器	原野	
60	土器	縄文中期	溝	13.6	12.0		褐色	1	土器	原野	
61	土器	縄文中期	溝	11.7	15.1		灰褐色	1	土器	原野	
62	土器	縄文中期	溝	11.0	4.0	5.3	灰褐色	1	土器	原野	
63	土器	縄文中期	溝	17.0	17.0		褐色	1	土器	原野	
64	土器	縄文中期	溝	18.0	16.0		褐色	1	土器	原野	
65	土器	縄文中期	溝	13.0	13.1		褐色	1	土器	原野	
66	土器	縄文中期	溝	8.5	1.4	4.8	灰褐色	1	土器	原野	
67	土器	縄文中期	溝	21.5	11.0		褐色	1	土器	原野	
68	土器	縄文中期	溝	11.7	11.1		灰褐色	1	土器	原野	
69	土器	縄文中期	溝	11.8	17.1		灰褐色	1	土器	原野	
70	土器	縄文中期	溝	14.5	5.9	22.7	灰褐色	1	土器	原野	
71	土器	縄文中期	溝	11.0	15.1		灰褐色	1	土器	原野	
72	土器	縄文中期	溝	11.8	16.0		褐色	1	土器	原野	
73	土器	縄文中期	溝	11.8	16.1		褐色	1	土器	原野	
74	土器	縄文中期	溝	11.2	6.3	3.2	褐色	1	土器	原野	

百聞川原尾鳥遺跡出土遺物

土器

品目番号	遺物名	形制	部材	測定値(cm)			対照品名	出土	産地	状態	解説・備考
				口径	底径	高さ					
207	土器Ⅵ7	高土器	丸	15.5	3.5	17.0	江25-褐色	東西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良後瓦)
208	土器Ⅵ8	高土器	丸	11.5	4.5	15.5	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
209	土器Ⅵ9	高土器	丸	(11.8)			灰土色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
210	土器Ⅵ9	高土器	丸	(14.0)			灰土色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
211	土器Ⅵ9	高土器	丸	15.0	5.0	17.0	灰褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
212	土器Ⅵ9	高土器	丸	6.7	6.0	10.0	灰褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
242	土器Ⅵ9	高土器	丸	18.7	6.0	19.0	褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
243	土器Ⅵ9	高土器	高形	13.8	17.0	12.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
244	土器Ⅵ9	高土器	丸	15.9	25.0	12.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
245	土器Ⅵ9	高土器	高形	25.8	31.0		褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
247	土器Ⅵ9	高土器	高形	11.7	7.0	19.0	灰褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
247	土器Ⅵ9	高土器	丸	11.8	6.0	18.7	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
248	土器Ⅵ9	高土器	丸	15.0		15.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
249	土器Ⅵ9	高土器	丸	12.0	6.0	18.5	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
250	土器Ⅵ9	高土器	丸	7.0	14.0		灰褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
251	土器Ⅵ9	高土器	丸	(19.0)	13.0		江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
252	土器Ⅵ9	高土器	丸	17.0		16.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
253	土器Ⅵ9	高土器	丸	7.0	5.4	12.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
254	土器Ⅵ9	高土器	丸	12.7	6.0	12.5	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
255	土器Ⅵ9	高土器	高形	22.0	16.0		江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
256	土器Ⅵ9	高土器	高形	9.2	15.0		江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
257	土器Ⅵ9	高土器	丸	12.0	5.0	15.4	褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
258	土器Ⅵ9	高土器	丸	19.0		18.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
259	土器Ⅵ9	高土器	高形		16.0	16.0	褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
260	土器Ⅵ9	高土器	丸	14.1	8.8	8.4	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
261	土器Ⅵ9	高土器	丸				江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
262	土器Ⅵ9	高土器	丸	17.5	11.0		江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
263	土器Ⅵ9	高土器	丸	11.4	16.0		褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
264	土器Ⅵ9	高土器	丸	12.1	12.4		江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
265	土器Ⅵ9	高土器	丸	12.2	11.7		江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
266	土器Ⅵ9	高土器	丸	14.4		8.8	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
267	土器Ⅵ9	高土器	丸		7.4	22.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
268	土器Ⅵ9	高土器	丸	6.8	16.0		江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
269	土器Ⅵ9	高土器	丸	7.5	3.4	12.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
270	土器Ⅵ9	高土器	丸	5.0	3.4		褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
271	土器Ⅵ9	高土器	丸	6.5	3.4		灰土色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
272	土器Ⅵ9	高土器	丸	6.4	2.4		江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
273	土器Ⅵ9	高土器	丸	26.4		15.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
274	土器Ⅵ9	高土器	高形	17.6	17.0		江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
275	土器Ⅵ9	高土器	丸	24.8		15.0	灰褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
276	土器Ⅵ9	高土器	丸	27.2		15.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
277	土器Ⅵ9	高土器	丸	5.8	16.0		江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
278	土器Ⅵ9	高土器	丸	23.2		14.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
279	土器Ⅵ9	高土器	丸	13.0		10.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
280	土器Ⅵ9	高土器	丸	16.0		10.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
281	土器Ⅵ9	高土器	丸	(11.4)		18.0	褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
282	土器Ⅵ9	高土器	高形	21.2		16.0	褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
283	土器Ⅵ9	高土器	高形	21.0		16.0	灰褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
284	土器Ⅵ9	高土器	丸	13.2		15.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
285	土器Ⅵ9	高土器	丸	4.5	19.0		灰土色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
286	土器Ⅵ9	高土器	丸	9.7	15.0		褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
287	土器Ⅵ9	高土器	丸	(11.8)		16.0	灰褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
288	土器Ⅵ9	高土器	丸	26.6		17.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
289	土器Ⅵ9	高土器	丸		15.0		褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
290	土器Ⅵ9	高土器	丸	6.0		16.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
291	土器Ⅵ9	高土器	丸	(15.0)		12.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
292	土器Ⅵ9	高土器	丸	(16.2)		16.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
293	土器Ⅵ9	高土器	丸	(15.8)			江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
294	土器Ⅵ9	高土器	丸	14.6		16.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
295	土器Ⅵ9	高土器	丸			11.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
296	土器Ⅵ9	高土器	丸	11.0		11.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
297	土器Ⅵ9	高土器	丸	14.2	15.0		褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
298	土器Ⅵ9	高土器	高形	35.7	17.0		江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
299	土器Ⅵ9	高土器	高形	33.8	17.0		褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
300	土器Ⅵ9	高土器	丸	(17.0)	(17.0)		江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
301	土器Ⅵ9	高土器	丸	16.8		15.0	褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
302	土器Ⅵ9	高土器	丸	3.6	15.0		褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
303	土器Ⅵ9	高土器	丸	10.2		12.0	灰褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
304	土器Ⅵ9	高土器	丸	(11.4)		11.5	灰褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
305	土器Ⅵ9	高土器	丸	14.8		14.0	褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
306	土器Ⅵ9	高土器	丸	11.6		6.7	褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
307	土器Ⅵ9	高土器	丸	5.4	5.0	17.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
308	土器Ⅵ9	高土器	丸	11.0			褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
309	土器Ⅵ9	高土器	丸	12.0		12.0	褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
310	土器Ⅵ9	高土器	高形	9.2	16.0		褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
311	土器Ⅵ9	高土器	丸	(13.2)			褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
312	土器Ⅵ9	高土器	丸	12.5	5.1	5.5	褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
313	土器Ⅵ9	高土器	丸		18.0		褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
314	土器Ⅵ9	高土器	丸	11.8		16.0	褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
315	土器Ⅵ9	高土器	丸	6.0		6.7	褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
316	土器Ⅵ9	高土器	丸		17.0		褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
317	土器Ⅵ9	高土器	丸	7.4		5.8	褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
318	土器Ⅵ9	高土器	丸		16.0		灰褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
319	土器Ⅵ9	高土器	丸		17.0		褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)
320	土器Ⅵ9	高土器	丸	13.8	4.5	26.0	江25-褐色	西・石炭	黒	口縁欠損	丹波(早良瓦)

百間川原尾鳥遺跡出土遺物

土器

品目番号	遺物名	形別	部材	測定値(mm)			外郭色	胎土	瓦葺	状態	特徴・備考
				口径	底径	高さ					
265	灰青陶	釜(土器)	片	13.8	4.7	7.1	淡い灰褐色	赤白・白灰	無紋	1/1	粘土で仕上げられている。調査あり
266	灰青陶	釜(土器)	片	14.1	4.4	7.2	淡い灰褐色	赤褐色	無紋	1/1	粘土で仕上げられている。調査あり
267	灰青陶	釜(土器)	片	12.5	4.0	6.0	赤褐色	赤褐色	無紋	1/1	粘土で仕上げられている。調査あり
268	灰青陶	釜(土器)	片	12.4	3.9	7.1	淡い灰褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	粘土で仕上げられている。調査あり
269	灰青陶	釜(土器)	片	13.8	3.8	12.1	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	粘土で仕上げられている。調査あり
270	灰青陶	十割瓦	破片(土器)	3.9	3.9	3.0	淡い灰褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
271	灰青陶	十割瓦	破片(土器)	3.8	3.7	3.3	淡い灰褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
272	灰青陶	釜(土器)	片	11.0	3.1	11.0	淡い灰褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	内蔵
273	灰青陶	湯瓶	破片	11.5	5.1	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
274	灰青陶	湯瓶	破片	12.8	6.9	無底	赤褐色	赤白	無紋	1/1	口元の破片
275	灰青陶	湯瓶	破片	13.7	7.1	無底	赤褐色	赤白	無紋	1/1	調査あり
276	灰青陶	湯瓶	破片	13.2	6.7	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
277	灰青陶	湯瓶	破片	13.2	6.7	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
278	灰青陶	湯瓶	破片	13.0	6.5	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
279	灰青陶	湯瓶	破片	11.0	5.0	無底	赤褐色	赤白	無紋	1/1	調査あり
280	灰青陶	湯瓶	破片	11.0	5.0	無底	赤褐色	赤白	無紋	1/1	調査あり
281	灰青陶	湯瓶	破片	13.0	6.3	5.9	淡い灰褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
282	灰青陶	十割瓦	小片	8.4	4.8	1.4	淡い灰褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
283	灰青陶	十割瓦	小片	8.4	4.8	1.4	淡い灰褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
284	灰青陶	湯瓶	破片	11.9	5.3	無底	赤褐色	赤白	無紋	1/1	調査あり
285	灰青陶	湯瓶	破片	11.5	5.2	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
286	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
287	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
288	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
289	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
290	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
291	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
292	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
293	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
294	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
295	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
296	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
297	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
298	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
299	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
300	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
301	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
302	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
303	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
304	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
305	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
306	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
307	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
308	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
309	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
310	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
311	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
312	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
313	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり
314	灰青陶	湯瓶	破片	12.5	6.0	無底	赤褐色	赤白・赤褐色	無紋	1/1	調査あり

百間川二の荒手遺跡出土遺物

土器

品目番号	遺物名	形別	部材	測定値(mm)			外郭色	胎土	瓦葺	状態	特徴・備考
				口径	底径	高さ					
1	赤土焼トレンプ	湯瓶	片	13.0	7.2	2.7	黄褐色	灰褐色	無紋	1/1	外側に黄褐色の灰土を、内面に灰土を敷きつけている。
2	赤土焼トレンプ	湯瓶	片	16.0	1.8	無底	灰褐色	灰褐色	無紋	1/1	内面にヨコナテ
3	赤土焼トレンプ	湯瓶	片	13.8	6.3	無底	灰褐色	灰褐色	無紋	1/1	内側に黄褐色の灰土を敷きつけている。内面にヨコナテ
4	赤土焼トレンプ	湯瓶	片	13.0	6.0	11.0	淡い灰褐色	灰褐色	無紋	1/1	調査あり
5	赤土焼トレンプ	湯瓶	片	13.0	6.0	11.0	淡い灰褐色	灰褐色	無紋	1/1	調査あり
6	赤土焼トレンプ	湯瓶	片	13.0	6.0	11.0	淡い灰褐色	灰褐色	無紋	1/1	調査あり
7	赤土焼トレンプ	湯瓶	片	13.0	6.0	11.0	淡い灰褐色	灰褐色	無紋	1/1	調査あり
8	赤土焼トレンプ	湯瓶	片	13.0	6.0	11.0	淡い灰褐色	灰褐色	無紋	1/1	調査あり

百間川原尾島遺跡出土遺物

石器

発掘番号	遺物名	形状	経路長 (mm)		重量 (g)	素材	保存状況	備考
			最大長	最大幅				
30	土器3	縄	34.0	79.5	11.0	12.71	オサカイ	縄縄
31	土器3	縄	31.3	46.6	31.0	29.67	オサカイ	縄縄
32	土器3	縄	41.0	47.5	3.0	14.18	オサカイ	縄縄
33	土器3	縄	77.3	79.6	4.3	4.76	オサカイ	縄縄
34	土器3	スクリューバー	131.0	117.6	29.0	291.03	オサカイ	山口県産
35	土器3	石鏃	21.0	27.6	5.0	4.00	オサカイ	欠損
36	土器3	石鏃	21.0	25.6	7.3	9.70	オサカイ	山口県産
37	土器3	石鏃	19.2	12.5	4.0	1.06	オサカイ	欠損
38	土器3	石鏃	45.0	47.6	19.0	18.10	オサカイ	山口県産
39	土器3	石鏃	35.0	37.5	5.2	5.10	オサカイ	欠損
40	土器3	石鏃	47.0	49.6	5.0	12.97	オサカイ	欠損
41	土器3	石鏃	37.7	39.7	5.0	3.17	オサカイ	欠損
42	土器3	石鏃	49.0	47.5	12.0	12.19	オサカイ	山口県産
43	土器3	石鏃	41.0	47.5	11.0	21.41	オサカイ	山口県産
44	土器3	石鏃	48.7	48.5	12.7	24.33	オサカイ	山口県産
45	土器3	石鏃	47.0	47.5	16.7	46.11	オサカイ	山口県産
46	土器3	石鏃	46.2	47.5	16.0	52.28	オサカイ	山口県産
47	土器3	石鏃	29.2	33.6	1.0	1.10	オサカイ	山口県産
48	土器3	石鏃	26.0	31.5	6.7	4.69	オサカイ	山口県産
49	土器3	石鏃	73.0	51.6	18.0	226.10	オサカイ	山口県産
50	土器3	石鏃	38.0	43.6	2.5	6.55	オサカイ	山口県産
51	土器3	石鏃	23.5	16.6	1.6	1.14	オサカイ	山口県産
52	土器3	石鏃	17.0	14.6	5.5	1.68	オサカイ	山口県産
53	土器3	石鏃	44.0	35.6	5.0	6.69	オサカイ	山口県産
54	土器3	石鏃	112.0	51.6	41.0	410.46	オサカイ	山口県産
55	土器3	石鏃	88.0	83.6	27.0	128.18	オサカイ	山口県産
56	土器3	石鏃	32.0	31.5	27.0	41.79	オサカイ	山口県産
57	土器3	石鏃	74.0	41.6	13.7	26.32	オサカイ	山口県産
58	土器3	石鏃	61.0	53.6	49.0	192.41	オサカイ	山口県産
59	土器3	石鏃	50.0	31.5	12.0	25.56	オサカイ	山口県産
60	土器3	石鏃	11.7	14.5	2.0	6.37	オサカイ	山口県産
61	土器3	石鏃	26.0	59.6	18.0	122.88	オサカイ	山口県産
62	土器3	石鏃	33.7	31.6	9.0	8.68	オサカイ	山口県産
63	土器3	石鏃	47.0	38.4	26.0	71.36	オサカイ	山口県産
64	土器3	石鏃	46.0	42.5	22.0	140.41	オサカイ	山口県産
65	土器3	石鏃	67.0	58.6	28.0	216.31	オサカイ	山口県産
66	土器3	石鏃	26.0	24.6	5.0	4.40	オサカイ	山口県産
67	土器3	石鏃	32.0	18.5	6.0	6.61	オサカイ	山口県産
68	土器3	石鏃	25.0	51.6	8.7	44.72	オサカイ	山口県産
69	土器3	石鏃	24.0	44.5	28.0	128.13	オサカイ	山口県産
70	土器3	石鏃	32.0	29.6	68.0	61.96	オサカイ	山口県産
71	土器3	石鏃	134.1	113.6	47.0	402.54	オサカイ	山口県産
72	土器3	石鏃	88.0	54.6	37.0	203.16	オサカイ	山口県産
73	土器3	石鏃	100.0	101.6	72.0	409.58	オサカイ	山口県産
74	土器3	石鏃	1.0	1.6	1.2	0.54	オサカイ	山口県産
75	土器3	石鏃	3.2	3.6	3.2	1.10	オサカイ	山口県産
76	土器3	石鏃	5.0	2.4	3.2	0.12	オサカイ	山口県産
77	土器3	石鏃	5.1	2.6	3.6	0.12	オサカイ	山口県産
78	土器3	石鏃	5.0	2.6	2.7	0.40	オサカイ	山口県産
79	土器3	石鏃	5.0	2.6	3.1	0.49	オサカイ	山口県産
80	土器3	石鏃	5.0	2.6	2.5	0.47	オサカイ	山口県産
81	土器3	石鏃	5.0	2.7	3.0	0.10	オサカイ	山口県産
82	土器3	石鏃	4.3	2.6	2.2	0.40	オサカイ	山口県産
83	土器3	石鏃	4.3	2.6	2.2	0.40	オサカイ	山口県産
84	土器3	石鏃	4.7	1.8	2.7	0.05	オサカイ	山口県産
85	土器3	石鏃	4.7	2.2	3.2	0.47	オサカイ	山口県産
86	土器3	石鏃	4.7	2.2	3.2	0.40	オサカイ	山口県産
87	土器3	石鏃	4.7	2.1	3.2	0.48	オサカイ	山口県産
88	土器3	石鏃	4.7	2.6	3.4	0.46	オサカイ	山口県産
89	土器3	石鏃	4.6	2.6	3.2	0.48	オサカイ	山口県産
90	土器3	石鏃	4.7	2.2	3.6	0.10	オサカイ	山口県産
91	土器3	石鏃	4.6	2.1	2.6	0.47	オサカイ	山口県産
92	土器3	石鏃	4.6	2.6	3.1	0.48	オサカイ	山口県産
93	土器3	石鏃	4.7	2.1	3.6	0.10	オサカイ	山口県産
94	土器3	石鏃	5.2	3.2	3.2	6.31	オサカイ	山口県産

百間川原尾島遺跡出土遺物

石器

発掘 番号	遺物名	材質	経度位 mm			重量 (g)	石目	保存状況	備考
			最大径	最小径	短径				
S21	柳穴包埋14	子玉	5.1	3.7	3.0	0.08	滑石	1412完品	1.0 Y / 1 (滑)
S21	柳穴包埋14	子玉	7.96	3.0	3.8	0.07	滑石	欠損	1.0 Y Y 3 3 (滑高)
S23	柳穴包埋14	子玉	3.1	3.0	2.4	0.07	滑石	欠損	1.0 Y Y 1 1 1 (滑高)
S24	柳穴包埋14	子玉	1.9	3.7	3.4	0.07	滑石	欠損	2.5 Y 5 3 3 (滑オリーブ)
S25	柳穴包埋16	新緑石	96.2	6.3	11.0	38.62	滑石	完品	
S26	柳穴包埋16	段石片	21.0	19.0	4.0	2.56	滑石	完品	組入孔径2.5mm
S27	柳穴包埋19	子玉	6.0	3.3	3.3	0.13	滑石	完品	3.5 Y 2 2 / 1 1 (標準)
S28	柳穴包埋19	子玉	5.0	3.0	3.0	0.11	滑石	1412完品	3.5 Y 2 2 / 1 1 (標準)
S29	柳穴包埋19	新緑石	27.0	6.3	11.9	21.61	滑石	1412完品	
S83	柳穴包埋	段石	192.0	62.0	25.9	193.29	新緑石	一部欠損	
S83	柳穴包埋	段石	128.0	52.0	41.9	168.23	新緑石	完品	
S85	柳穴包埋	新緑石	46.0	7.0	15.9	30.71	新緑石	1412完品	
S84	柳穴包埋	新緑石	38.8	6.0	19.9	19.37	新緑石	欠損	
S84	柳穴包埋	段石	86.0	25.0	61.9	212.72	新緑石	滑石包埋完品	
S87	柳穴包埋	新緑石	17.5	15.5	3.9	0.66	新緑石	完品	
S87	柳穴包埋	新緑石	29.5	17.0	5.9	1.69	新緑石	完品	
S87	柳穴包埋	新緑石	26.0	15.0	3.0	0.69	新緑石	1412完品	
S88	柳穴包埋	新緑石	21.0	14.0	3.0	0.67	新緑石	完品	
S22	柳穴包埋	新緑石	19.0	13.0	4.9	0.97	新緑石	欠損	
S23	柳穴包埋	新緑石	29.5	16.5	4.9	1.79	新緑石	一部欠損	
S24	柳穴包埋	新緑石	15.0	13.0	2.6	0.51	新緑石	欠損	
S25	柳穴包埋	新緑石	16.5	13.0	2.5	0.56	新緑石	一部欠損	
S26	柳穴包埋	新緑石	17.0	15.0	3.9	0.67	新緑石	欠損	
S64	柳穴包埋	新緑石	17.0	18.0	3.9	1.58	新緑石	欠損	
S65	柳穴包埋(子)	新緑石	12.5	15.0	2.5	0.67	新緑石	欠損	
S66	柳穴包埋	新緑石	19.0	9.0	3.7	0.58	新緑石	欠損	
S67	柳穴包埋	新緑石	26.0	12.0	3.4	1.00	新緑石	完品	
S68	柳穴包埋	新緑石	30.0	20.0	3.9	2.66	新緑石	一部欠損	
S69	柳穴包埋	新緑石	27.0	12.0	3.0	0.94	新緑石	柳穴欠損	
S100	柳穴包埋	新緑石	39.0	15.0	3.9	3.09	新緑石	完品	
S101	柳穴包埋	新緑石	31.5	16.0	6.9	1.97	新緑石	柳穴欠損	
S102	柳穴包埋	滑石	20.0	17.0	4.0	1.94	新緑石	1412完品	
S103	柳穴包埋	滑石	23.0	19.0	7.9	2.97	新緑石	1412完品	
S104	柳穴包埋	滑石	26.0	19.0	3.0	2.60	新緑石	欠損	
S105	柳穴包埋	滑石	30.5	20.0	8.9	4.16	新緑石	完品	
S106	柳穴包埋	滑石	31.0	16.0	8.0	5.68	新緑石	完品	
S107	柳穴包埋	滑石	25.0	20.0	6.0	3.16	新緑石	完品	
S108	柳穴包埋	滑石	21.0	20.0	3.0	1.19	新緑石	1412完品	
S109	柳穴包埋	滑石	21.0	11.0	3.9	1.13	新緑石	欠損	
S110	柳穴包埋	滑石	35.0	20.0	3.0	6.12	新緑石	柳穴欠損	
S111	柳穴包埋	滑石	23.0	20.0	8.9	4.23	新緑石	完品	
S112	柳穴包埋	滑石	30.0	44.0	7.9	13.52	新緑石	欠損	
S113	柳穴包埋	滑石	11.0	21.0	8.9	11.66	新緑石	欠損	
S114	柳穴包埋	滑石	54.0	22.0	8.9	16.56	新緑石	完品	
S115	柳穴包埋	滑石	57.0	41.0	39.9	16.24	新緑石	1412完品	
S116	柳穴包埋	滑石	56.0	40.0	15.9	17.88	新緑石	1412完品	
S117	柳穴包埋	滑石	46.0	40.0	39.9	17.77	新緑石	完品	
S118	柳穴包埋	滑石	79.5	26.0	11.9	36.57	新緑石	1412完品	
S119	柳穴包埋	滑石	95.0	40.0	7.0	40.83	新緑石	完品	
S120	柳穴包埋	滑石	69.0	54.0	13.9	43.92	新緑石	欠損	
S121	柳穴包埋	滑石	139.0	50.0	29.9	133.85	新緑石	完品	
S122	柳穴包埋	滑石	96.0	50.0	16.9	46.77	新緑石	一部欠損	
S123	柳穴包埋	滑石	53.0	50.0	27.0	166.53	新緑石	完品	
S124	柳穴包埋	滑石	70.0	50.0	46.0	221.31	新緑石	完品	
S125	柳穴包埋	滑石	75.0	27.0	27.0	125.66	新緑石	完品	
S126	柳穴包埋	滑石	83.0	26.0	39.9	456.19	新緑石	完品	
S127	柳穴包埋	滑石	40.0	29.0	39.9	29.31	新緑石	一部欠損	
S128	柳穴包埋	滑石	46.0	46.0	22.9	65.73	新緑石	完品	
S129	柳穴包埋	滑石	56.0	45.0	27.0	53.06	新緑石	完品	
S130	柳穴包埋	滑石	94.0	39.0	19.9	22.35	新緑石	欠損	
S131	柳穴包埋	滑石	108.0	33.0	82.9	1832.47	新緑石	欠損	
S132	柳穴包埋	滑石	183.0	86.0	73.9	894.44	新緑石	欠損	
S133	柳穴包埋	滑石	13.5	6.0	5.0	2.52	新緑石	欠損	
S134	柳穴包埋	滑石	88.0	28.0	39.9	65.69	新緑石	欠損	
S135	柳穴包埋	子玉	1.9	3.0	3.0	0.07	滑石	完品	1.0 Y / 1 (滑)

百間川原尾島遺跡出土遺物

金属器

資料番号	遺物名	部材	材質	経断値(mm)			寸法 (g)	発行状況	備考
				最大径	最大幅	最大厚			
№1	鍔元付短刀	?	鉄	2.4	2.5	0.5	0.76	矢野古刀	
№2	鍔元付短刀	斬物類	鉄	33.2	21.3	2.6	3.58	矢野古刀	
№3	鍔元付短刀	刀	鉄	32.4	24.3	2.4	6.22		
№4	鍔元付短刀	中刀付短刀	鉄	26.6	18.2	2.8	1.62		
№5	鍔元付短刀	短刀	鉄	4.1	4.2	0.2	1.85		
№6	鍔元付短刀	刀	鉄	34.0	11.9	2.2	2.30		
№7	鍔元付短刀	?	鉄	36.0	12.7	2.2	2.88		
№8	鍔元付短刀	刀	鉄	34.0	11.1	2.0	4.57		
№9	?	中刀付短刀	鉄	26.6	9.7	2.4	3.57	矢野古刀	2種中刀付短刀(複製)
№10	?	短刀	鉄	7.1	7.2	0.4	2.67	矢野古刀	
№11	鍔元付短刀	中刀付短刀	鉄	24.2	16.9	2.8	2.7		
№12	鍔元付短刀	刀	鉄	136.9	16.5	0.6	27.51		本館あり
№13	鍔元付短刀	刀	鉄	56.0	10.9	2.0	6.76		
№14	鍔元付短刀	刀	鉄	26.4	4.8	0.5	1.52		
№15	鍔元付短刀	刀	鉄	4.9	19.3	2.4	2.61	矢野古刀	
№16	鍔元付短刀	?	鉄	19.2	19.0	2.2	1.9		
№17	鍔元付短刀	刀	鉄	9.0	4.7	2.3	0.8		
№18	鍔元付短刀	鍔の部	鉄	18.5	3.5	2.0	0.86	矢野古刀	
№19	鍔元付短刀	鍔	鉄	30.9	7.9	0.9	1.84	矢野古刀	
№20	鍔元付短刀	刀	鉄	27.9	26.9	3.0	14.22		
№21	鍔元付短刀	刀	鉄	115.4	10.7	2.4	2.67	141号館	百万巻研鑿 品あり
№22	鍔元付短刀	刀	鉄	30.8	22.7	2.0	4.86		
№23	鍔元付短刀	鍔	鉄	36.9	5.7	3.0	5.87		
№24	鍔元付短刀	鍔の部	鉄	3.4	7.9	2.7	1.29		
№25	鍔元付短刀	刀	鉄	31.4	4.1	2.0	0.23		
№26	鍔元付短刀	刀	鉄	42.1	11.9	2.8	4.79		
№27	鍔元付短刀	刀	鉄	87.2	29.0	0.5	14.26	矢野古刀	
№28	鍔元付短刀	刀	鉄	62.0	26.2	3.0	15.74		
№29	鍔元付短刀	刀	鉄	122.0	3.9	3.3	3.72		
№30	鍔元付短刀	刀	鉄	17.0	17.3	2.4	1.78		
№31	鍔元付短刀	刀	鉄	25.1	29.7	2.0	4.82		
№32	鍔元付短刀	不明短刀	鉄	88.4	39.9	6.9	19.11		
№33	鍔元付短刀	刀	鉄	35.4	4.7	2.7	2.79		
№34	鍔元付短刀	刀	鉄	118.5	2.5	2.8	0.24	矢野古刀	
№35	鍔元付短刀	刀	鉄	44.1	6.2	3.8	2.66		
№36	鍔元付短刀	刀	鉄	11.7	11.7	11.1	6.70		
№37	鍔元付短刀	刀	鉄	44.0	19.0	3.0	4.61		

土製品

資料番号	遺物名	部材	経断値(mm)			寸法 (g)	色調	発行状況	備考	
			最大径	最大幅	最大厚					
Q1	鍔元付短刀	土師	29.8	20.2		6.0	16.95	2.5 Y 1 (1 陶土)	141号館	
Q2	鍔元付短刀	磁器類	43.5	46.0	4.7	5.1	10.98	1.0 Y 2 2 (1 陶土)	7号館	
Q3	鍔元付短刀	砂器 磁器	34.9	26.2	12.2(最大厚部)	16.33	7.5 Y 1 6 2 (1 陶土)	矢		
Q4	鍔元付短刀	土師	26.0	42.1	11.0	14.45	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	141号館	複製品	
Q5	鍔元付短刀	磁器類	45.0	4.3		6.0	6.58	1.0 Y 2 6 2 (1 陶土)	1.2号館	複製品(土師系)
Q6	鍔元付短刀	砂器 磁器	123.7	47.5	19.3	47.9	58.36	5 Y 2 6 4 (1 陶土)	141号館	
Q7	1号館重箱	磁器類	48.2			5.5	4.4	7.5 Y 1 2 (1 陶土)	1.2号館	
Q8	鍔元付短刀	不明 磁器	28.0	23.0	16.9	9.0	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	矢		
Q9	鍔元付短刀	土師	68.0	38.9		6.0	112.00	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	複製 141号館	
203	鍔元付短刀	土師	33.5	37.7	26.7	36.7	16.2	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	141号館	
211	鍔元付短刀	土師	66.2	36.3	23.9	46.7	16.2	2.5 Y 3 (1 陶土)	矢	
212	鍔元付短刀	土師	69.0	35.6	26.0	6.0	107.00	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	141号館	
213	鍔元付短刀	土師	66.0	36.2		6.0	107.00	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	7号館	
214	鍔元付短刀	土師	43.0	24.1	2.5	6.9	21.78	7.5 Y 1 2 2 (1 陶土)	141号館	141号館
215	鍔元付短刀	土師	53.4	24.2		5.1	43.66	7.5 Y 1 2 2 (1 陶土)	1.2号館	
216	鍔元付短刀	土師	53.5	13.9		6.0	9.54	7.5 Y 1 2 2 (1 陶土)	1.2号館	
217	鍔元付短刀	土師	46.0	24.6		6.0	24.72	7.5 Y 1 6 4 (1 陶土)	1.2号館	
218	鍔元付短刀	土師	114.0	131.45		4.0	4.48	1.0 Y 2 6 6 (1 陶土)	1.2号館	
219	鍔元付短刀	土師	41.0	29.1		5.0	88.77	1.0 Y 2 6 6 (1 陶土)	1.2号館	141号館
220	鍔元付短刀	土師	46.0	29.7		5.2	28.18	7.5 Y 2 2 (1 陶土)	1.2号館	141号館
221	鍔元付短刀	土師	42.5	28.4		7.0	41.24	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	1.2号館	
222	鍔元付短刀	土師	45.5	44.4		2.0	10.18	1.0 Y 2 6 6 (1 陶土)	1.2号館	
223	鍔元付短刀	土師	29.7	29.8		6.0	14.49	7.5 Y 1 6 5 (1 陶土)	141号館	
224	鍔元付短刀	土師	41.7	14.0		4.5	6.90	1.0 Y 2 6 2 (1 陶土)	141号館	141号館
225	月形短刀	土師	50.0	30.0		13.0	29.57	7.5 Y 1 2 4 (1 陶土)	141号館	
226	月形短刀	磁器 磁器	95.8	79.0		4.1	10.45	5 Y 1 6 4 (1 陶土)	141号館	
227	月形短刀	土師	73.8	59.7		6.2	15.16	7.5 Y 1 6 4 (1 陶土)	7号館	
228	鍔元付短刀	土師	85.7	78.9		5.5	17.95	7.5 Y 1 2 2 (1 陶土)	141号館	
229	鍔元付短刀	土師	45.5	28.9		6.0	29.41	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	1.2号館	
230	鍔元付短刀	土師	38.5	23.8		6.0	31.90	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	7号館	
231	鍔元付短刀	土師	66.0	25.2		2.0	38.47	1.0 Y 2 6 4 (1 陶土)	141号館	
232	鍔元付短刀	土師	71.5	25.2		6.0	44.17	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	141号館	
233	鍔元付短刀	土師	80.0	26.1		5.5	53.69	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	141号館	141号館
234	鍔元付短刀	土師	82.0	25.9		6.2	54.13	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	141号館	141号館
235	鍔元付短刀	土師	80.7	24.9		6.0	66.20	7.5 Y 1 6 4 (1 陶土)	141号館	
236	鍔元付短刀	土師	42.5	28.9		6.0	27.01	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	141号館	
237	鍔元付短刀	土師	58.5	25.9		7.0	46.54	1.0 Y 2 2 2 (1 陶土)	7号館	
238	鍔元付短刀	土師	44.4	26.1	2.5	6.0	44.71	7.5 Y 2 2 (1 陶土)	141号館	
239	鍔元付短刀	土師	79.0	23.0	26.3	7.1	17.52	2.5 Y 1 6 4 (1 陶土)	矢	
240	鍔元付短刀	土師	156.7	28.2		7.2	17.21	1.0 Y 2 6 2 (1 陶土)	4.1号館	141号館
241	鍔元付短刀	土師	23.9	26.1		6.0	6.90	7.5 Y 1 6 4 (1 陶土)	矢	

百間川原尾島遺跡出土遺物

土製品

図録番号	遺物名	図録	破片(個)			重量(g)	色調	焼成状況	備考	
			最大径	最大厚	孔径					
241	土器片	1片	47.9	24.0	6.2	25.87	1.0 Y 2.7 2 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
242	土器片	1片	148.8	24.5	6.9	19.07	1.0 Y 2.6 3 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
243	土器片	破片2個	68.0	62.5	26.8	89.77	2.0 Y 2.2 2 (1.0) (赤褐色)	焼		
244	土器片	破片4個	27.1	25.4	2.1	136.48	2.0 Y 2.4 2 (1.0) (赤褐色)	焼		
245	土器片	1片	43.9	16.8	3.3	4.60	2.0 Y 2.5 2 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
246	土器片(土器)	1片	36.0	16.5	2.0	3.47	2.0 Y 2.5 2 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
247	土器片(土器)	1片	39.5	16.0	4.5	2.94	1.0 Y 2.5 3 (赤褐色)	1/2 焼		
248	土器片(土器)	1片	49.5	16.0	2.0	4.67	1.0 Y 2.5 3 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
249	土器片(土器)	1片	41.7	15.3	4.7	5.64	2.0 Y 2.6 3 (赤褐色)	1/2 焼		
250	土器片(土器)	1片	38.9	14.1	2.8	3.50	2.0 Y 2.6 3 (赤褐色)	1/2 焼		
251	土器片(土器)	1片	36.4	13.1	2.8	9.25	1.0 Y 2.6 3 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
252	土器片(土器)	1片	35.5	13.0	3.1	6.49	2.0 Y 2.7 2 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
253	土器片(土器)	1片	38.0	13.1	2.2	4.28	1.0 Y 2.7 2 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
254	土器片(土器)	1片	25.0	10.3	4.1	1.96	2.0 Y 2.6 6 (赤褐色)	1/2 焼		
255	土器片(土器)	1片	33.2	14.2	2.7	2.71	2.0 Y 2.6 6 3 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
256	土器片(土器)	1片	22.4	10.6	4.7	2.76	2.0 Y 2.6 6 1 (赤褐色)	1/2 焼		
257	土器片	1片	61	35.2	36.7	8.4~8.5	7.90	5 Y 4 1 (赤褐色)	1/2 焼	
258	土器片	1片	61.5	36.2	34.0	10.7	7.92	1.0 Y 2.7 1 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼	
259	土器片	1片	44.4	25.0	30.5	34.25	2.0 Y 2.6 5 4 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
260	土器片	1片	57.5	34.1	6.4~11.0	34.48	1.0 Y 2.7 2 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
261	土器片	1片	55.1	30.0	5.0	21.25	1.0 Y 2.6 4 3 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
262	土器片	1片	56.6	35.9	5.7	22.14	2.0 Y 2.6 5 3 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
263	土器片	1片	34.6	36.5	5.7	20.17	2.0 Y 2.6 4 4 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
264	土器片	1片	69.0	39.9	14.0	39.85	1.0 Y 2.6 6 5 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
265	土器片	1片	33.0	33.5	5.7	22.77	1.0 Y 2.7 2 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
267	土器片	1片	58.5	25.4	11.0	22.75	2.0 Y 2.6 5 4 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
268	土器片	1片	61.1	40.7	11.4	113.66	1.0 Y 2.6 4 4 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
269	土器片	1片	39.0	11.3	2.0	3.73	0 Y 2.5 5 6 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
270	土器片	1片	33.4	16.9	2.7	5.83	1.0 Y 2.6 2 3 (赤褐色)	1/2 焼		
271	土器片	1片	26.0	16.1	2.1	3.89	5 Y 2 1 (赤褐色)	1/2 焼		
272	土器片	1片	41.9	14.7	2.8	5.97	1.0 Y 2.5 2 2 (赤褐色)	1/2 焼		
273	土器片	1片	42.0	14.8	1.1	4.10	1.0 Y 2.5 2 2 (赤褐色)	1/2 焼		
274	土器片(土器)	1片	45.5	16.7	2.8	2.20	2.0 Y 2.6 5 1 (赤褐色)	1/2 焼		
275	土器片	1片	49.3	22.6	6.5	16.28	2.0 Y 2.6 5 1 (赤褐色)	1/2 焼		
276	土器片	1片	51.5	20.8	2.0	19.28	2.0 Y 2.6 5 4 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
277	土器片	1片	64.5	27.2	6.3	33.02	1.0 Y 2.7 2 3 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
278	土器片	1片	61.0	26.2	6.2	22.65	2.0 Y 2.7 2 4 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
279	土器片	1片	77.9	23.4	4.7	13.15	2.0 Y 2.6 6 4 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
280	土器片	1片	51.0	21.2	3.0~7.0	25.21	1.0 Y 2.5 5 3 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
281	土器片	1片	51.5	21.1	5.0	22.90	1.0 Y 2.7 2 2 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
282	土器片	1片	49.3	24.4	5.0	13.15	2.0 Y 2.6 6 4 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
283	土器片	1片	28.0	20.5	11.1	17.65	1.0 Y 2.4 2 2 (赤褐色)	1/2 焼		
284	土器片	1片	150.2	133.0	100.0~150.0	12.77	1.0 Y 2.7 2 1 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
285	土器片	1片	71.0	57.2	101.87	101.87	1.0 Y 2.7 2 1 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		
286	土器片	1片	136.2	106.2	101.46	7.0	2.0 Y 2.6 4 3 (1.0) (赤褐色)	1/2 焼		

ガラス製品

図録番号	遺物名	形状	寸法(mm)		重量(g)	色調	焼成状況	備考
			最大径	最大厚				
61	土器片(土器)	片	7.5	5.7	1.5	6.71	1.0 Y 2.7 2 (赤褐色)	1/2 焼
62	土器片(土器)	片	5.2	3.0	1.0	6.62	2.0 Y 2.6 5 4 (赤褐色)	1/2 焼
63	土器片(土器)	片	3.8	3.5	1.2	6.61	2.0 Y 2.6 5 4 (赤褐色)	1/2 焼
64	土器片	片	4.5	3.7	1.0	6.69	2.0 Y 2.6 5 4 (赤褐色)	1/2 焼

獣骨同定結果

図録番号	遺物名	種別	動物	大径(mm)	小径(mm)	厚(mm)	長さ(mm)	重量(g)	色調	焼成	備考
1	百間川原尾島遺跡 (No.16)	破片	ウシ	11.0	6.0	1.0	1.0	0.62	赤褐色	不明	1/2 焼
2	百間川原尾島遺跡	破片	ウシ	11.0	6.0	1.0	1.0	0.62	赤褐色	不明	1/2 焼
3			ウシ	11.0	6.0	1.0	1.0	0.62	赤褐色	不明	1/2 焼
4			ウシ	11.0	6.0	1.0	1.0	0.62	赤褐色	不明	1/2 焼
5	百間川原尾島遺跡	破片	ウシ	11.0	6.0	1.0	1.0	0.62	赤褐色	不明	1/2 焼
6			ウシ	11.0	6.0	1.0	1.0	0.62	赤褐色	不明	1/2 焼
7			ウシ	11.0	6.0	1.0	1.0	0.62	赤褐色	不明	1/2 焼
8			ウシ	11.0	6.0	1.0	1.0	0.62	赤褐色	不明	1/2 焼
9	百間川原尾島遺跡	破片	ウシ	11.0	6.0	1.0	1.0	0.62	赤褐色	不明	1/2 焼
10	百間川原尾島遺跡	破片	ウシ	11.0	6.0	1.0	1.0	0.62	赤褐色	不明	1/2 焼
11	百間川原尾島遺跡	破片	ウシ	11.0	6.0	1.0	1.0	0.62	赤褐色	不明	1/2 焼
12	百間川原尾島遺跡	破片	ウシ	11.0	6.0	1.0	1.0	0.62	赤褐色	不明	1/2 焼

3 新旧遺構名称对照表

百間川原尾島遺跡新旧遺構名称对照表

新旧遺構名称	調査年度	測量座標	地号	新旧遺構名称	調査年度	測量座標	地号
壁石1号1	旧5	89	6A	1号9	旧7	6C	6A
壁石1号2	旧5	88	7A	1号10	旧5	80	6A
壁石1号3	旧5	79	7A	1号11	旧5	123	6A
壁石1号4	旧4	49	7B・C	1号12	旧5	20	6A
壁石1号5a	旧4	61b	8B	1号13	旧3	33	6A
壁石1号6a	旧3	63a	8B	1号14	旧5	37	6A
壁石1号6b	旧3	71	8B	1号15	旧5	30	6A
壁石1号7a	旧5	89	8B	1号16	旧5	28	6A
壁石1号7b	旧4	77	8C	1号17	旧5	113	6A
壁石1号8	旧5	72	6A	1号18	旧5	125	6B
壁石1号9	旧5	85	6A	1号19	旧5	37	6A・B
壁石1号10	旧5	67	6A	1号20	旧5	34	6A
壁石1号11	旧5	82	6・7A	1号21	旧5	28	6B
壁石1号12	旧5	18	7A	1号22	旧5	75	6B
壁石1号13	旧3	41	7A	1号23	旧5	49A	7A
壁石1号14	旧5b	13	7B	1号24	旧5	40B	7A
壁石1号15	旧5b	19	6B	1号25	旧4	89	6・7A・D
壁石1号16	旧4	82	7B	1号26	旧2	50	7A
壁石1号17	旧4	76	7・8B	1号27	旧4	5	7A
壁石1号18	旧3	13	7・8B	1号28	旧4	24	7A
壁石1号19	旧4	18	7・8B	1号29	旧4	106	7A
壁石1号20	旧4	49	8A	1号30	旧5	75	6D
壁石1号21	旧4	22	8B・C	1号31	旧5	54	6B
壁石1号22	旧3	13	8B	1号32	旧3	28	6B
濠石1号建物	旧5	116	7B	1号33	旧4	114	6B
濠石2号建物	旧4	63A・B	8A	1号34	旧4	8	6・7B
濠石3号建物	旧3	88	8A	1号35	旧5	63	7B
濠石4号建物	旧3	86	8B	1号36	旧5	38A	7B
濠石5号建物	旧4	97	8B・C	1号37	旧5	100	7B
濠石6号建物	旧4	28	8A	1号38	旧5	130	7A・B
濠石7号建物	旧4	13	7・8A	1号39	旧3	85	7B
濠石8号建物	旧3	18	8D・C	1号40	旧4	103	7A
濠石9号建物	旧4・15	14・17	7B・C	1号41	旧4	30	7A
濠石10号建物	旧5	14	6・7B	1号42	旧4	63	8A
柱穴1号	旧5	66	6A・B	1号43	旧4	39	8A
柱穴2号	旧3	79	8A	1号44	旧4	84	8A
柱穴3号	旧4	26	8A	1号45	旧4	76	8A
柱穴4号	旧4	81	8B	1号46	旧4	4	8A
溝1	旧5	24	7A	1号47	旧4	40	8A
溝2	旧5	49	8B	1号48	旧4	42	8A
溝3	旧5b	126	6B	1号49	旧4	67	8A
溝4	旧5b	80	7B	1号50	旧4	65	8A
溝5	旧4	101	7A	1号51	旧4	92	8A
溝6	旧4	76	7A	1号52	旧4	20	8A
溝7	旧3	43	8A	1号53	旧4	3	8A
溝8	旧5	68	6・7B	1号54	旧4	89	8A
溝9	旧4	74	7A・B	1号55	旧4	52	7A
溝10	旧3	48	7A	1号56	旧4	58	7A
溝11	旧3	17	7B	1号57	旧4	218	7A
溝12	旧4	35	7A	1号58	旧4	210	7・8A
溝13	旧4	27	7B	1号59	旧4	104	7A
溝14	旧4	19	8B	1号60	旧4	107	7A
二堀1	旧5	194	6A	1号61	旧4	73	7A
二堀2	旧5	178	6A	1号62	旧4	38	7B
一堀1	旧5b	113	6A	1号63	旧4	100	7B
堀4	旧5	112	6・7A	1号64	旧4	92	7B
二堀5	旧5	111	6A・B	1号65	旧4	94	7B
二堀6	旧5b	111	7A	1号66	旧4	87	8A・B
一堀7	旧4	111	8B・C	1号67	旧4	76	8A
堀8	旧4	112	8C	1号68	旧4	83	7・8D

船名/西德保号	调查年度	调查日期	调查
二船00	00	87	0B
二船01	00	87	7C
二船02	00	47	7C
二船03	00	127	6A
二船04	00	97	7A
二船05	00	41	7A
二船06	00	64	6A
二船07	00	09	6A
二船08	00	46	7D
二船09	00	44	7B
二船10	00	85	6 + 7B
二船11	00	72	7B
二船12	00	68	7D
二船13	00	85	0B
二船14	00	91	7B
二船15	00	100	0B
二船16	00	79	0B
二船17	00	46	7C
二船18	00	92	7B
二船19	00	44	0B
二船20	00	9	7D
二船21	00	19	7B
二船22	00	16	7B
二船23	00	7	7B
二船24	00	8	7D
二船25	00	7	7B + C
二船26	00	87	5 + 6B + C
二船27	00	100	6A
二船28	00 + 15	60 + 67	6 + 0A + C
二船29	00 + 15	81 + 88	6 + 0A + C
二船30	00	86 + 90	6A
二船31	00	100	6 + 7A
二船32	00	89	6A
二船33	00	100	6A
二船34	00	100	6 + 7A
二船35	00	110	6A
二船36	00	100	6A
二船37	00 + 15	114 + 101	6 + 7A
二船38	00 + 15	99 + 101 + 111	7A
二船39	00	48	7A
二船40	00	114	6A + 7A
二船41	00 + 15	55 + 100 + 117	7 + 0A + C
二船42	00	26	0B + C
二船43	00	27	5 + 6B + C
二船44	00	95	6A
二船45	00 + 15	10 + 04	6 + 7A + C
二船46	00	27	6 + 7A + C
二船47	00 + 15	04 + 105	6 + 7A + C
二船48	00	86	7B
二船49	00	58	7B
二船50	00 + 15	16 + 17	7 + 0B
二船51	00	47	7B + C
二船52	00	27	6A + 7A
二船53	00	28	0B
二船54	00	47	5 + 6B
二船55	00	47	5 + 6D + C
二船56	00	97	6A
二船57	00 + 15	4 + 10	6 + 0A + 7A

船名/西德保号	调查年度	调查日期	调查
二船58	00 + 15	24 + 11	6 + 0A + B
二船59	00 + 15	8 + 26	7 + 0A + C
二船60	00	05	3 + 6B + C
二船61	00	22	5 + 6D + C
二船62	00	21 + 26	7 + 6A + B
二船63	00	11	8B
二船64	00	102	5 + 6B + C
二船65	00	45	7 + 0B + C
二船66	00	77	7A
二船67	00	2 + 6	5 + 0A + C

- 1 弥生時代
遺構全景
(東から)



- 2 弥生時代
遺構全景
(南から)



- 3 溝 3・4
(南から)





1 竪穴住居 1
(北から)



2 竪穴住居 2
遺物出土状況
(南西から)



3 竪穴住居 2 遺物出土状況 (北から)



4 竪穴住居 2 炭化材出土状況 (南から)

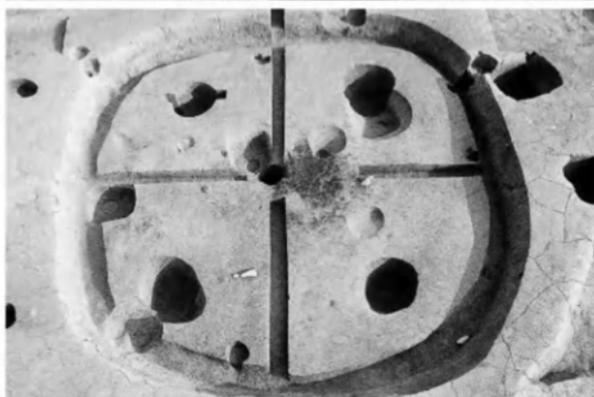
1 竪穴住居 2
(南西から)



2 竪穴住居 3
(南西から)



3 竪穴住居 4
(北西から)





1 竪穴住居 5
(東から)



2 竪穴住居 5B
遺物出土状況
(南東から)



3 竪穴住居 5A
P3 底面
(東から)

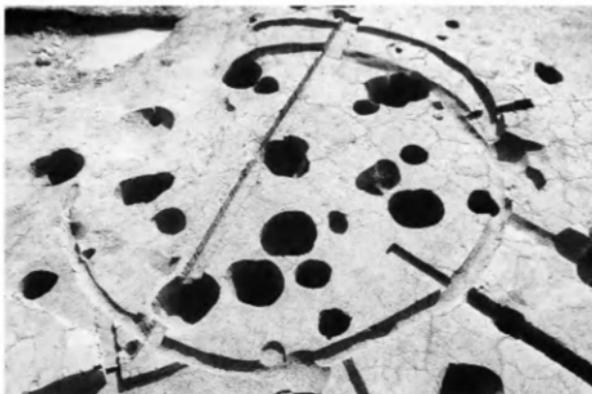
- 1 竪穴住居 5 A
P5 底面
(北東から)

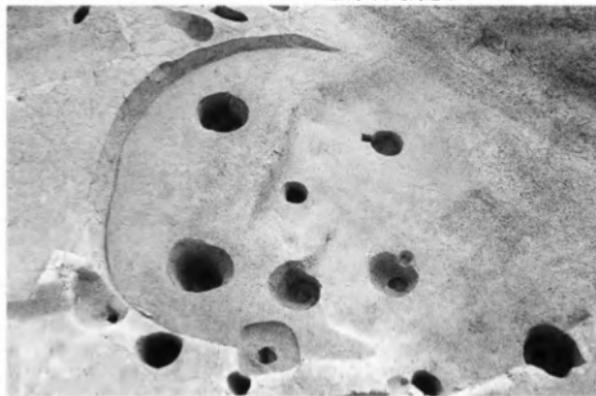


- 2 竪穴住居 6 B
炭化材出土状況
(南西から)

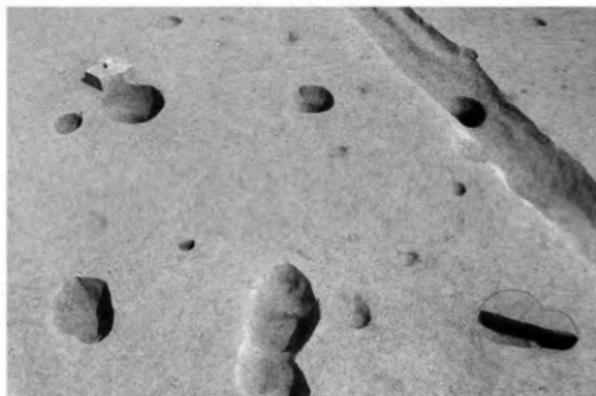


- 3 竪穴住居 6 A
(北西から)





1 竪穴住居 7
(北東から)

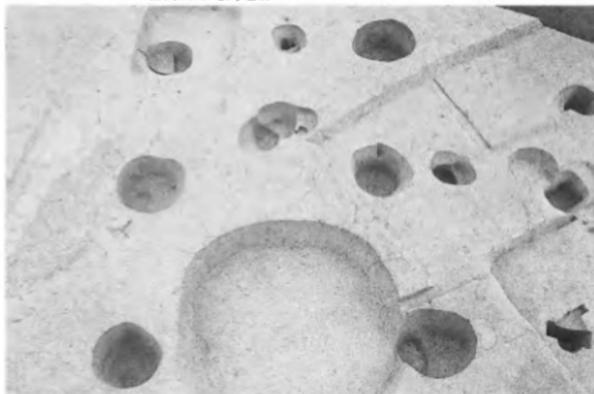


2 掘立柱建物 1
(南西から)

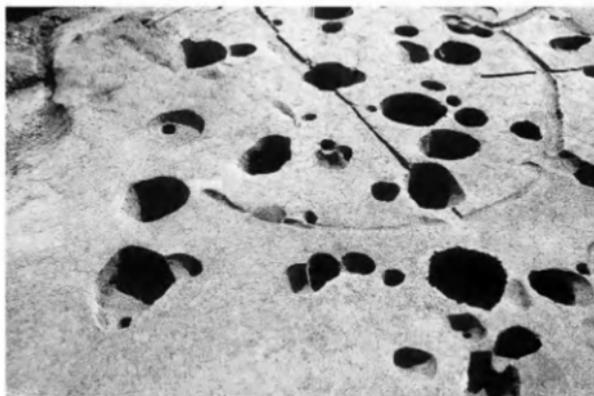


3 掘立柱建物 2
(西から)

1 掘立柱建物 3
(西から)



2 掘立柱建物 4
(北から)



3 掘立柱建物 5
(北から)





1 井戸 1
断面
(南西から)

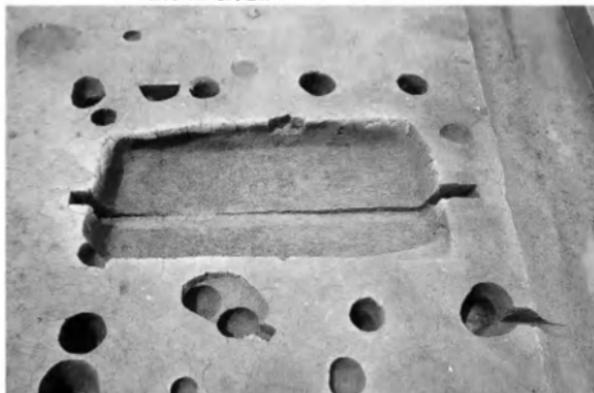


2 井戸 2
遺物出土状況
(南から)



3 井戸 7
最下層
遺物出土状況
(南から)

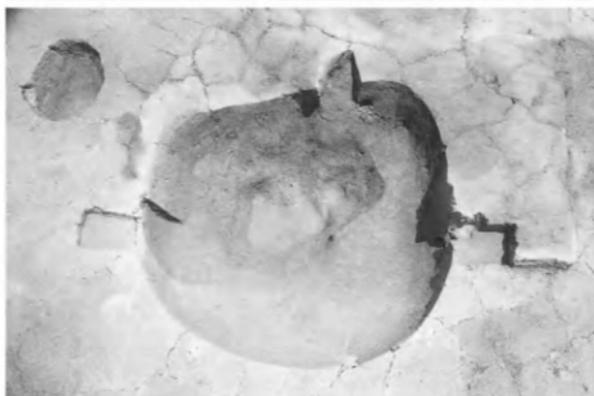
1 土壙 19
(南から)



2 土壙 34
遺物出土状況
(西から)



3 土壙 34
(西から)

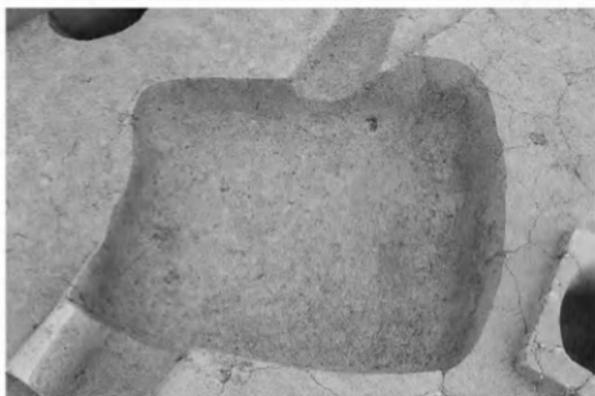




1 土壌 45
遺物出土状況
(西から)



2 土壌 46
(西から)



3 土壌 47
(西から)

- 1 土壙 56
遺物出土状況
(北から)



- 2 土壙 64
(北西から)



- 3 水田 2
(北から)





1 竪穴住居 9
(北から)



2 竪穴住居 10
(南から)



3 竪穴住居 11
(南から)

1 竪穴住居 13
(南から)



2 竪穴住居 14
(東から)



3 竪穴住居 16
(北東から)





1 竪穴住居 19
炭化材出土状況
(北東から)



2 竪穴住居 19
住居西隅
炭化材出土状況
(南西から)



3 竪穴住居 19
(北東から)

1 竪穴住居 20
(北西から)



2 竪穴住居 22
(北から)

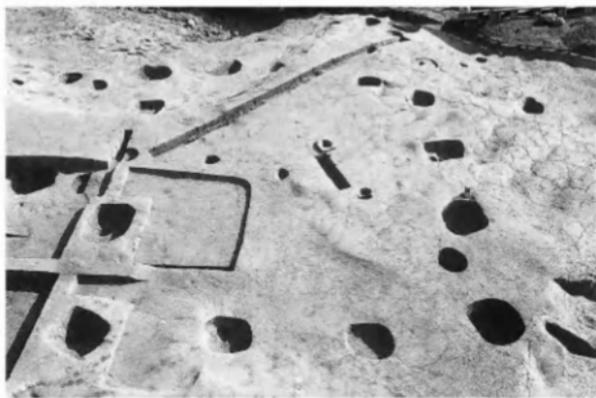


3 竪穴住居 22
カマド
(南東から)





1 掘立柱建物 6
(南から)



2 掘立柱建物 8
(西から)



3 掘立柱建物 9
(西から)

1 井戸 8
(北から)



2 井戸 11
中層遺物出土状況
(南から)



3 井戸 11
下層遺物出土状況
(南から)

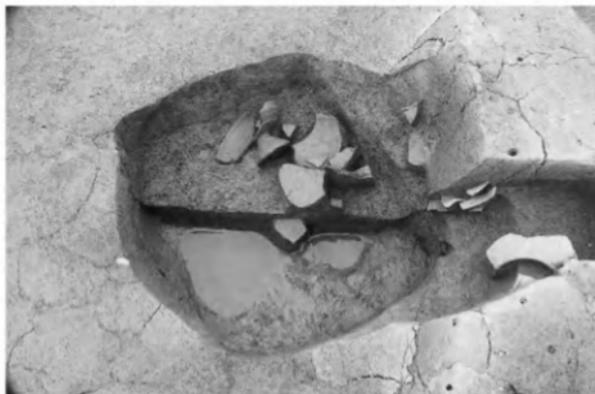




1 井戸 12
(東から)

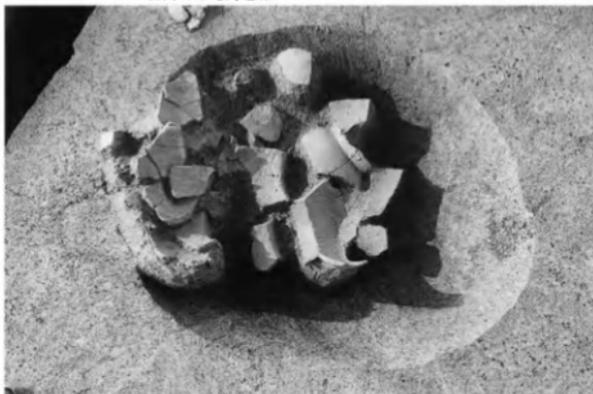


2 井戸 13
(北から)



3 土坑 74
遺物出土状況
(東から)

- 1 土壇 75
遺物出土状況
(南から)



- 2 焼成土壇 1
(東から)



- 3 溝 34
(東から)





1 掘立柱建物10
(北から)



2 土壇墓1
(北から)



3 土取り遺構
(北から)

- 1 右岸導流堤
調査前全景
(東から)



- 2 右岸導流堤
調査状況
(東から)



- 3 右岸導流堤
旧石積み
(東から)





1 右岸導流堤
旧石積み
(南から)



2 右岸導流堤
旧石積み
(北から)



3 右岸導流堤
T3断面
(北西から)

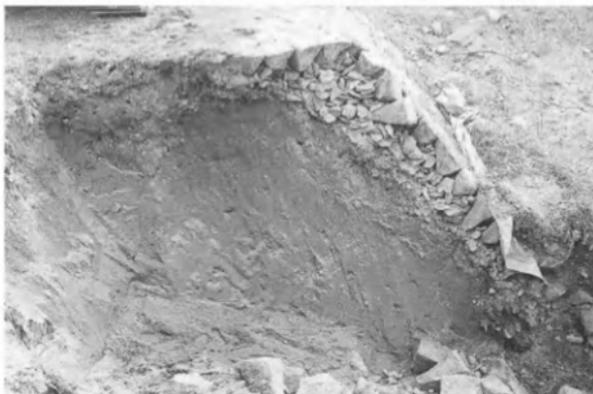
- 1 右岸導流堤
T 3 断面
(南東から)



- 2 右岸導流堤
T 2 断面
(北から)



- 3 右岸袖部
T 1 断面
(北東から)





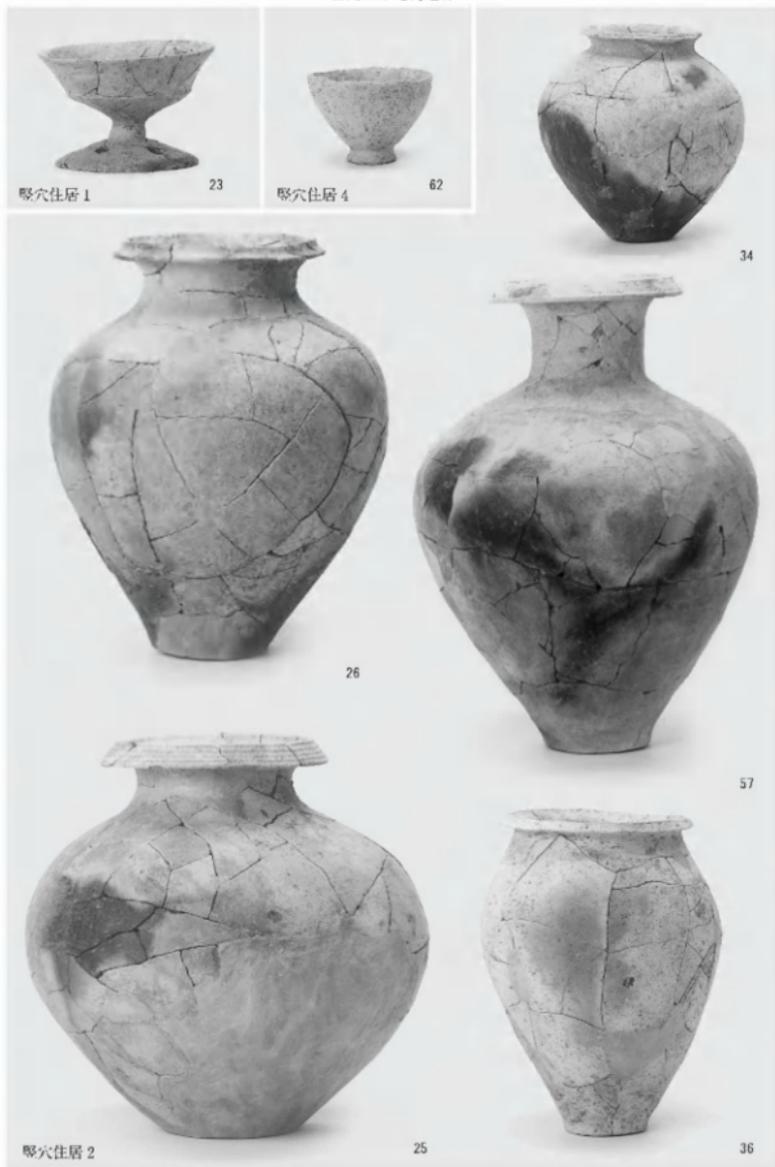
1 右岸袖部
T 6 断面
(南西から)



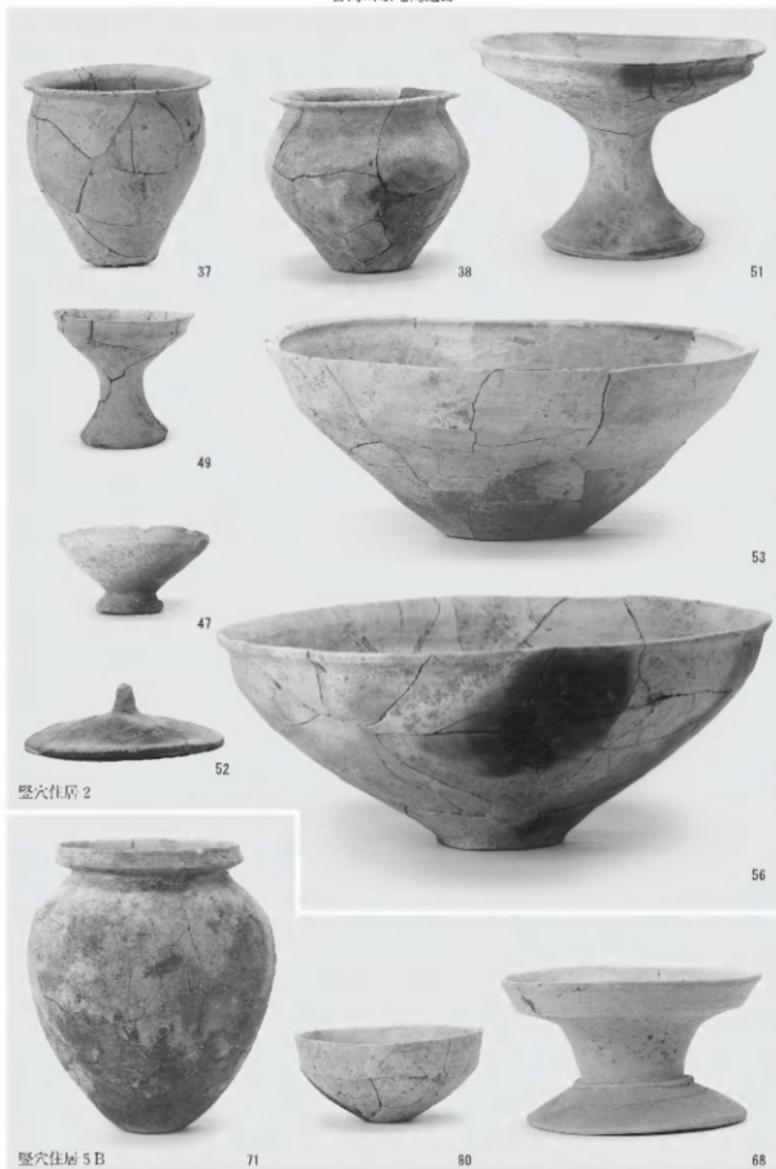
2 二の荒手
(南西から)



3 左岸導流堤
(東から)



竪穴住居 1・2・4 出土遺物



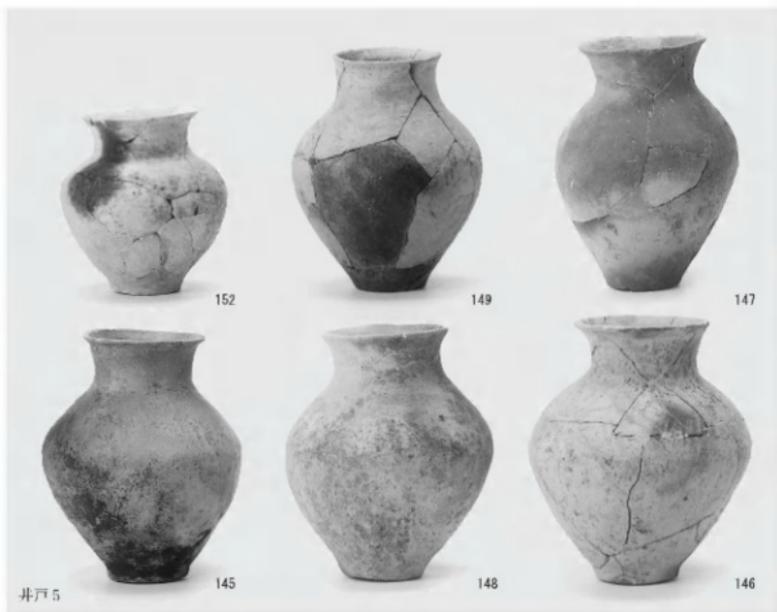
竪穴住居 2・5B出土遺物



竪穴住居 5B

85

85 各部拡大



152

149

147

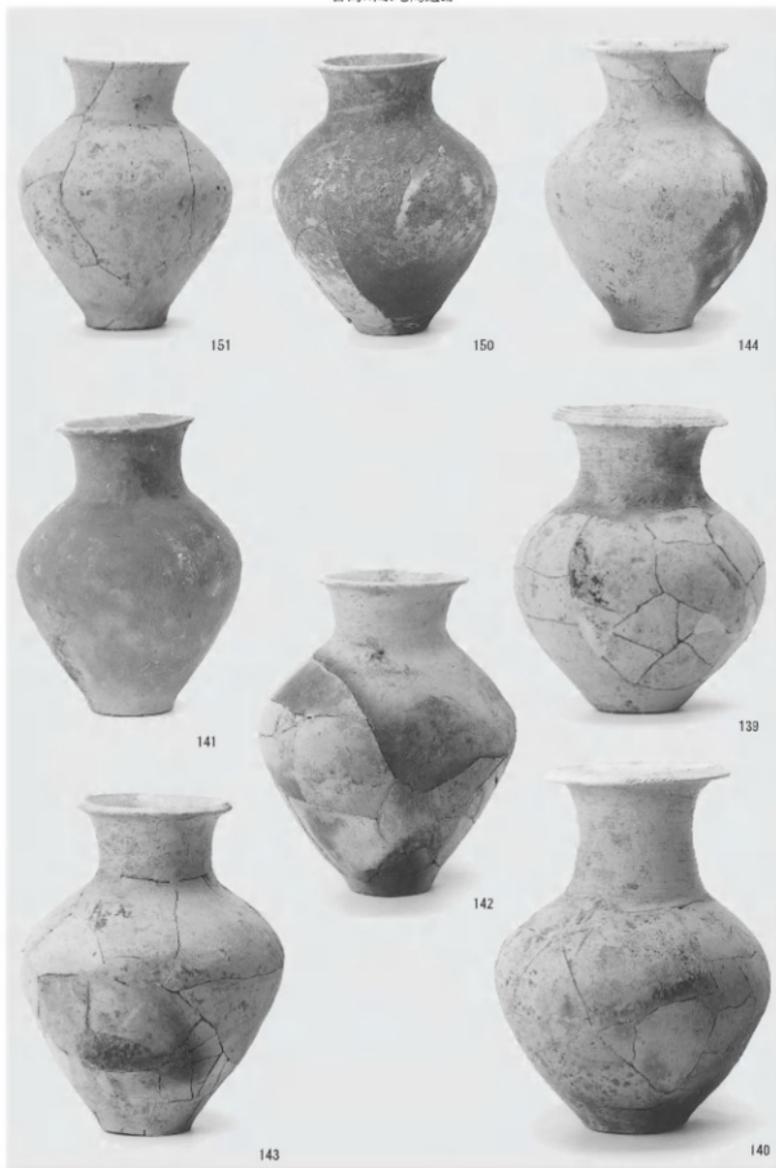
井戸 5

145

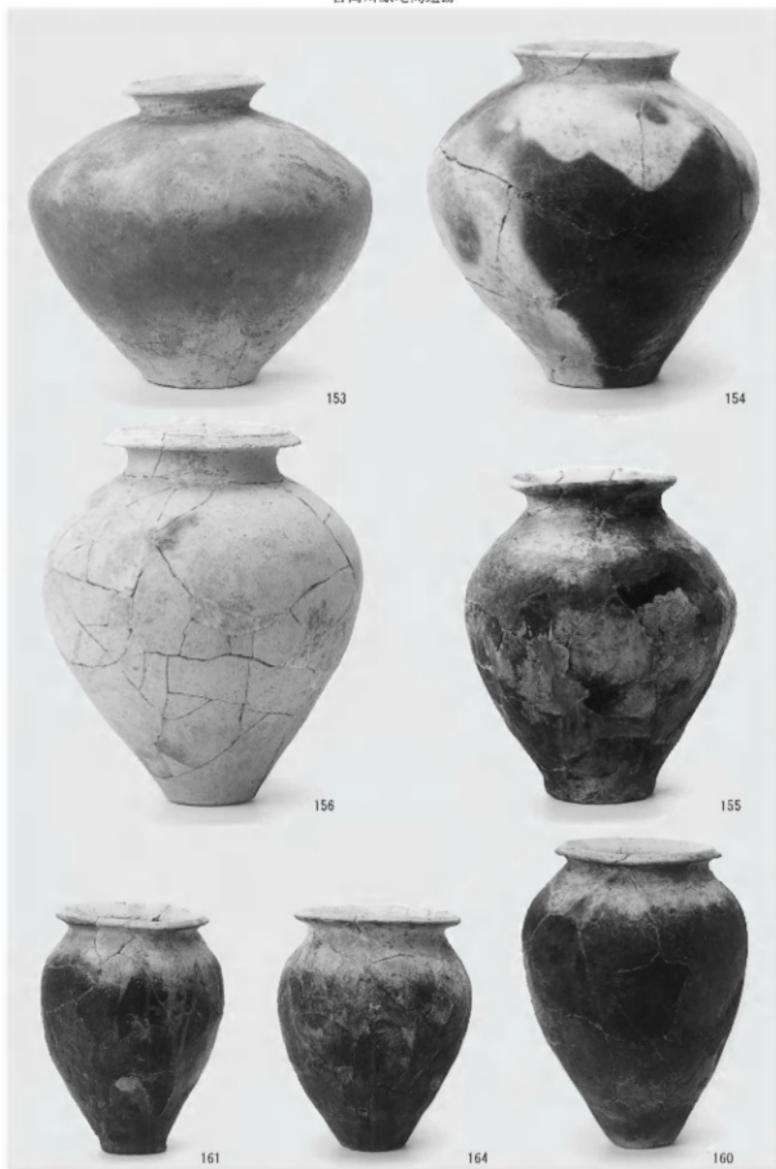
148

146

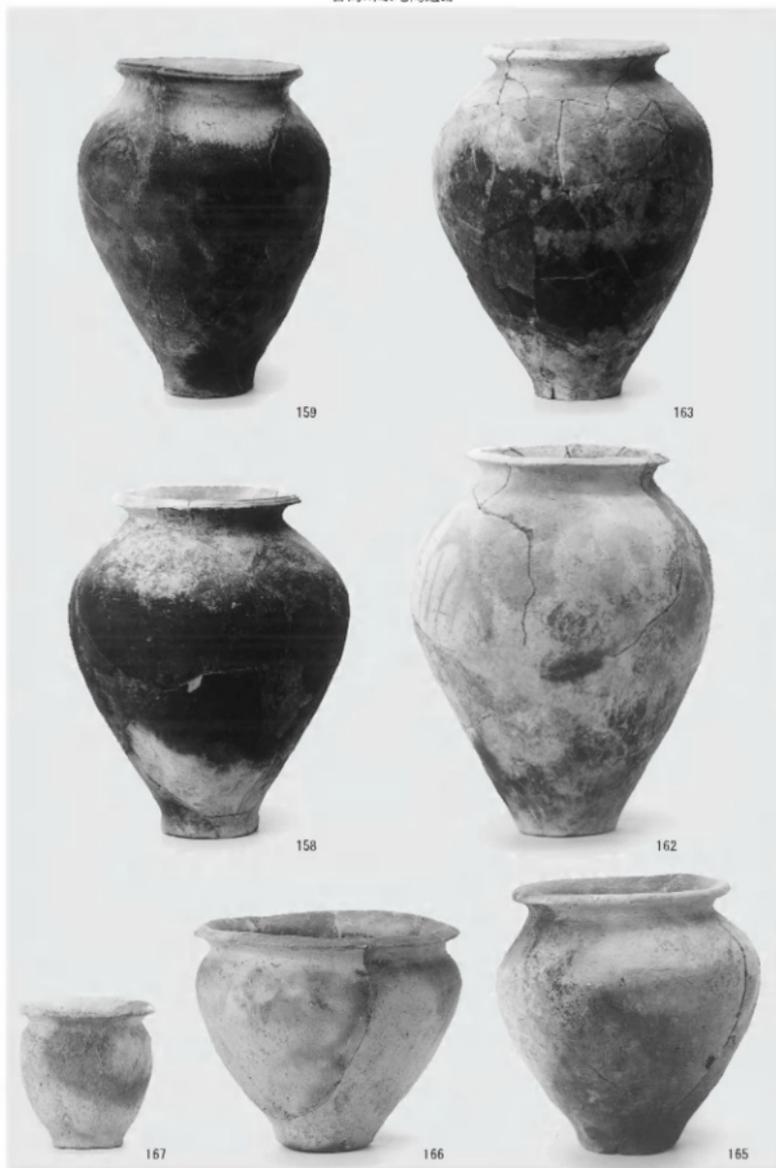
竪穴住居 5B・井戸 5 出土遺物



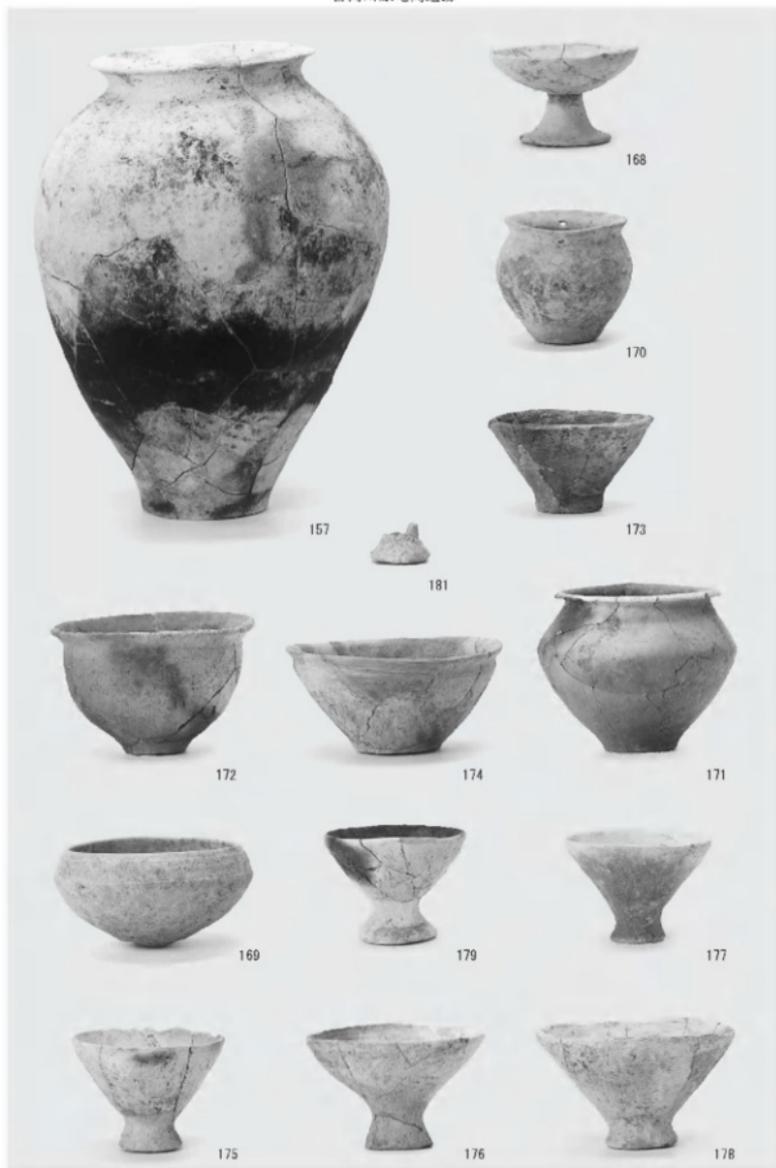
井戸 5 出土遺物



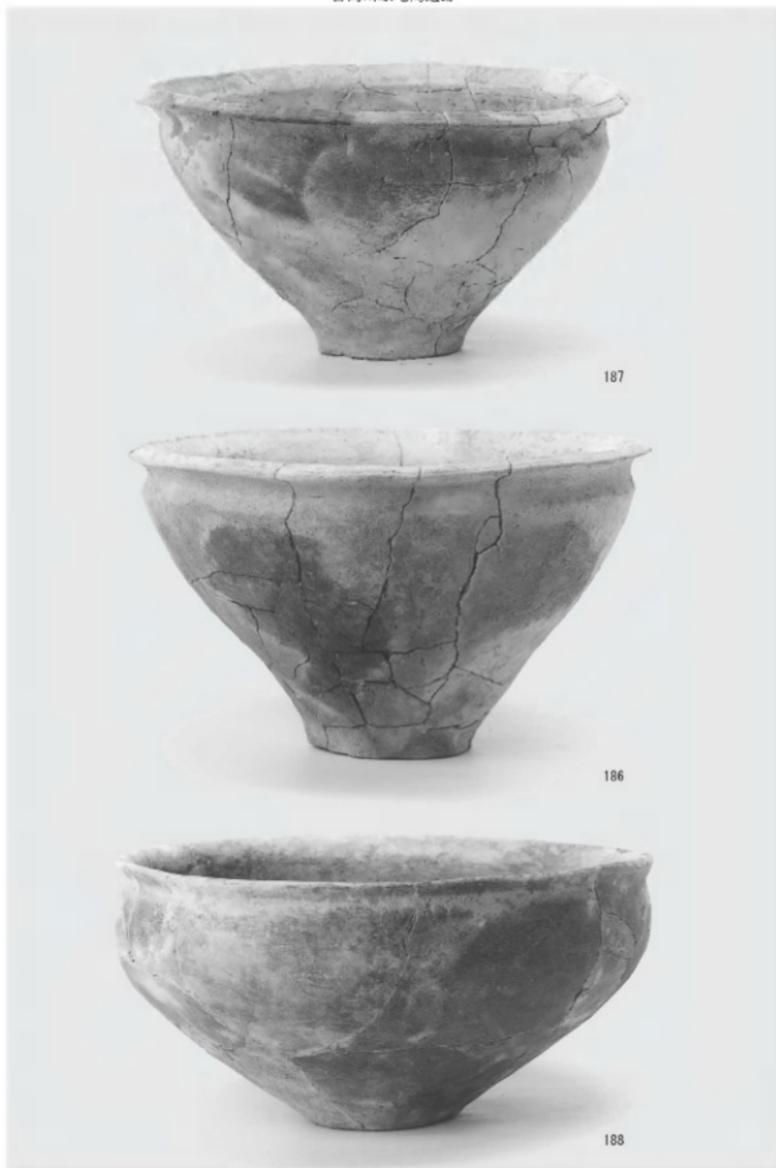
井戸 5 出土遺物



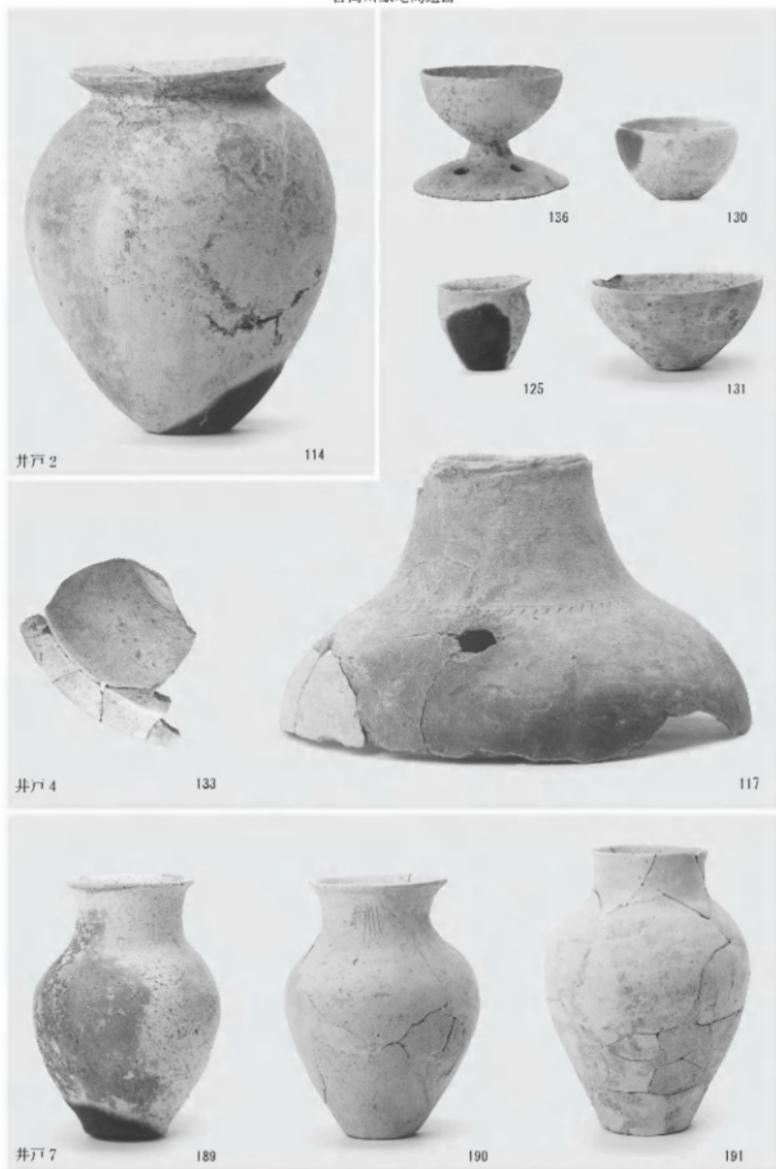
井戸 5 出土遺物



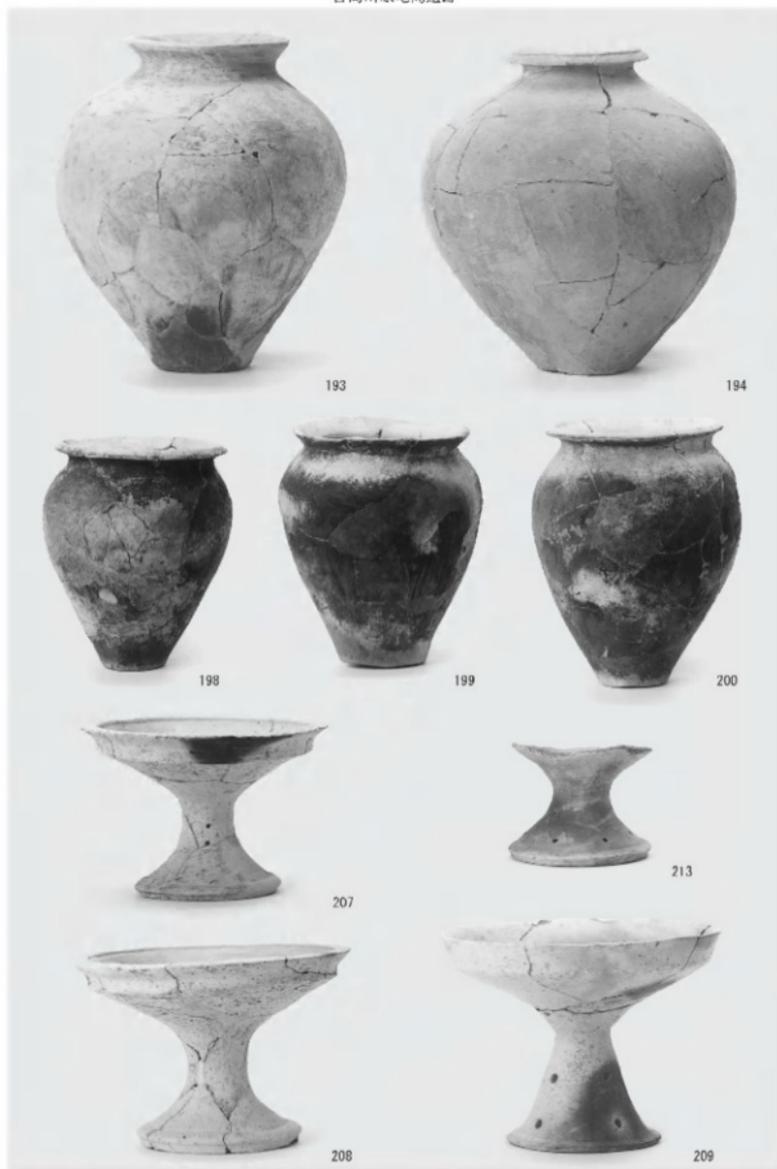
井戸5出土遺物



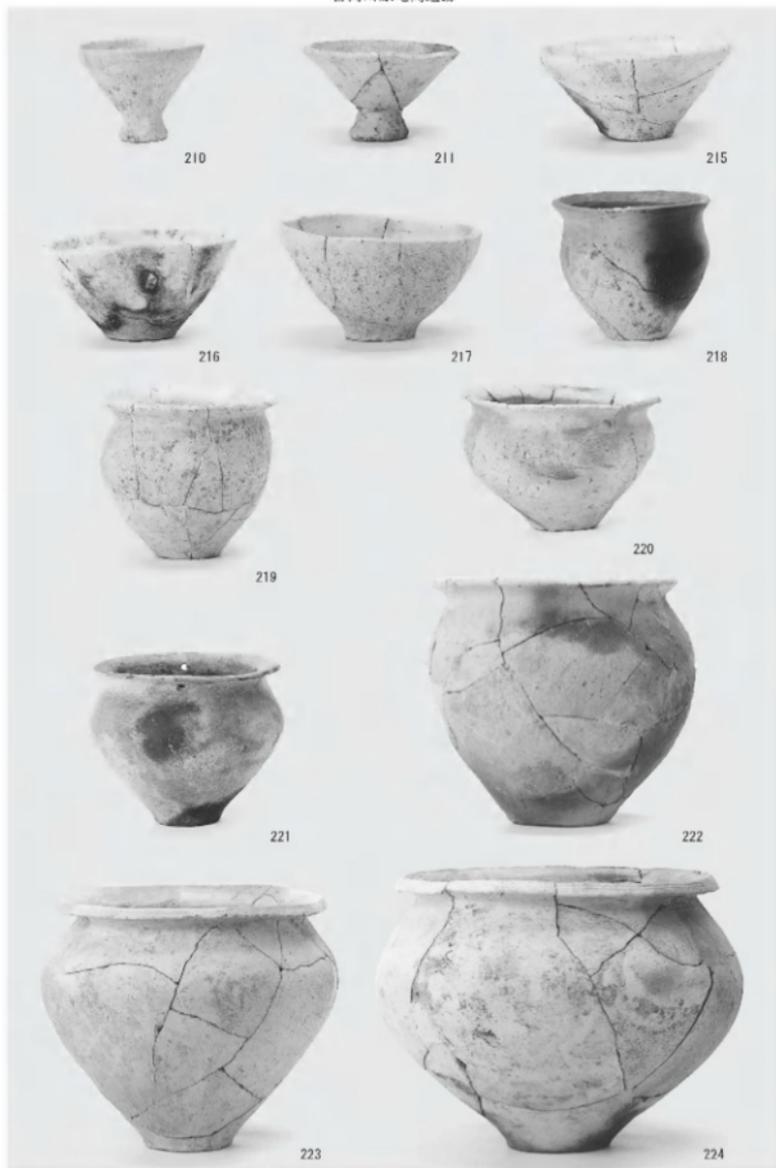
井戸 5 出土遺物



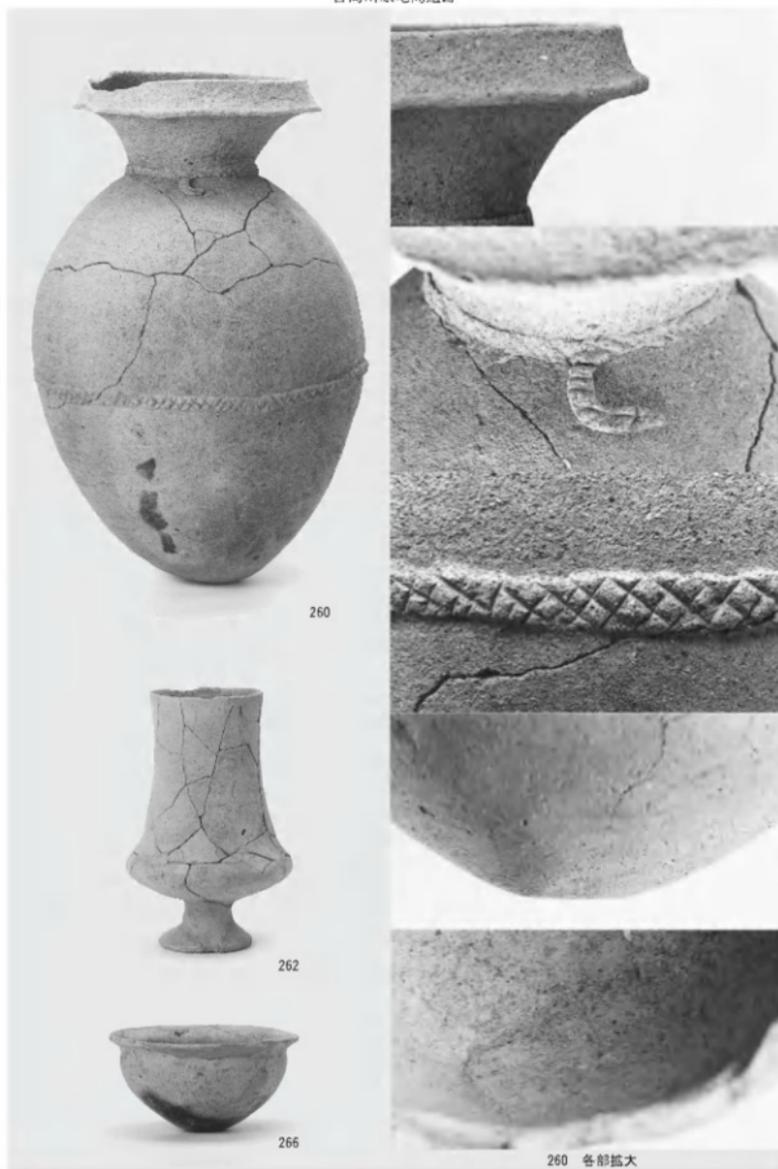
井戸 2・4・7 出土遺物



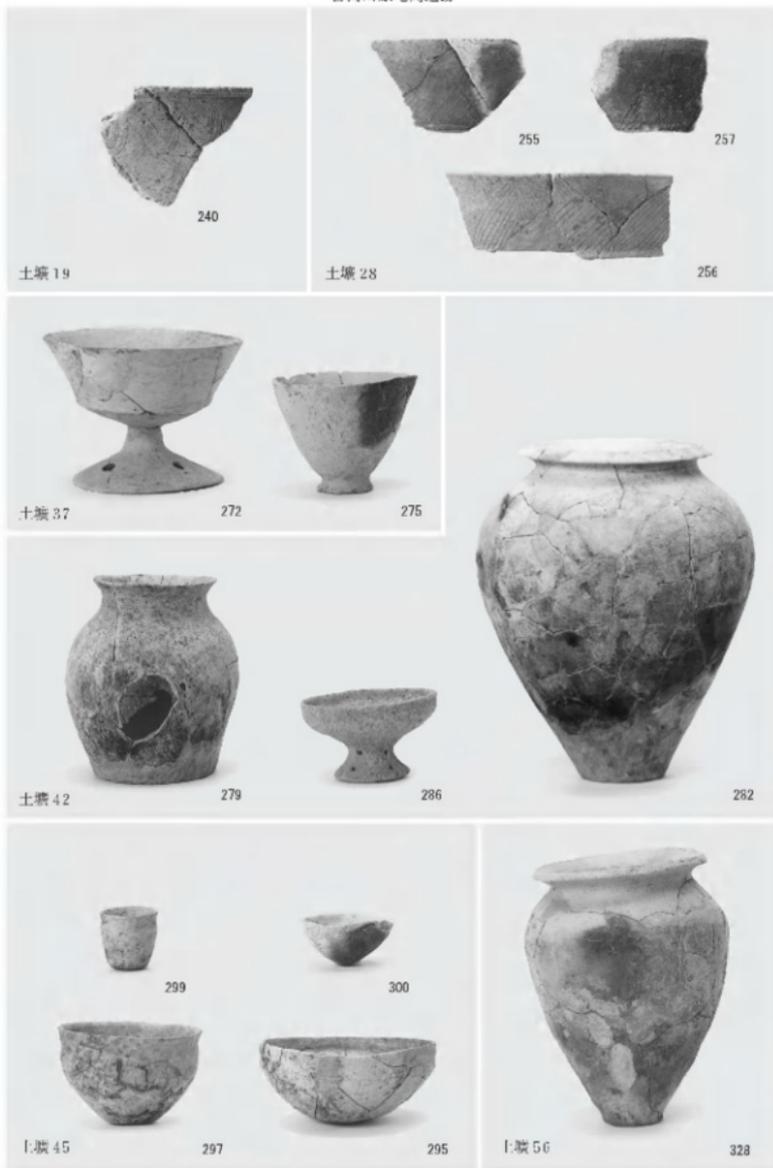
井戸 7 出土遺物



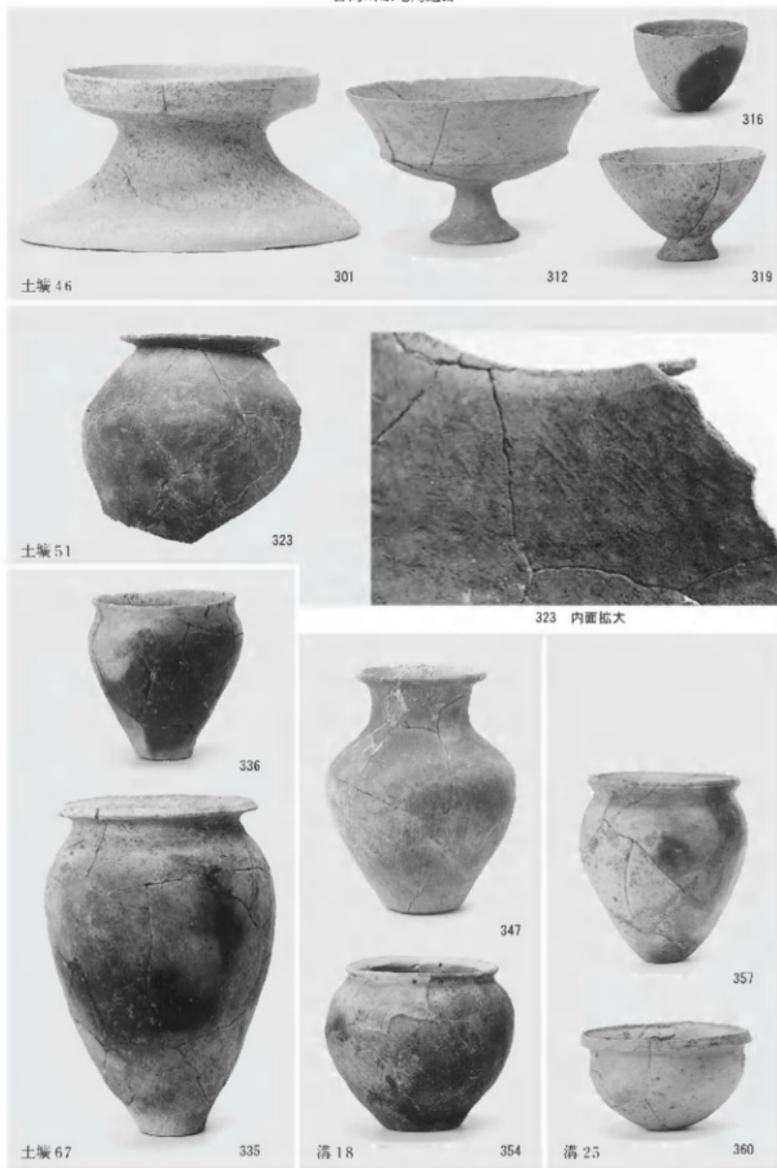
井戸7出土遺物



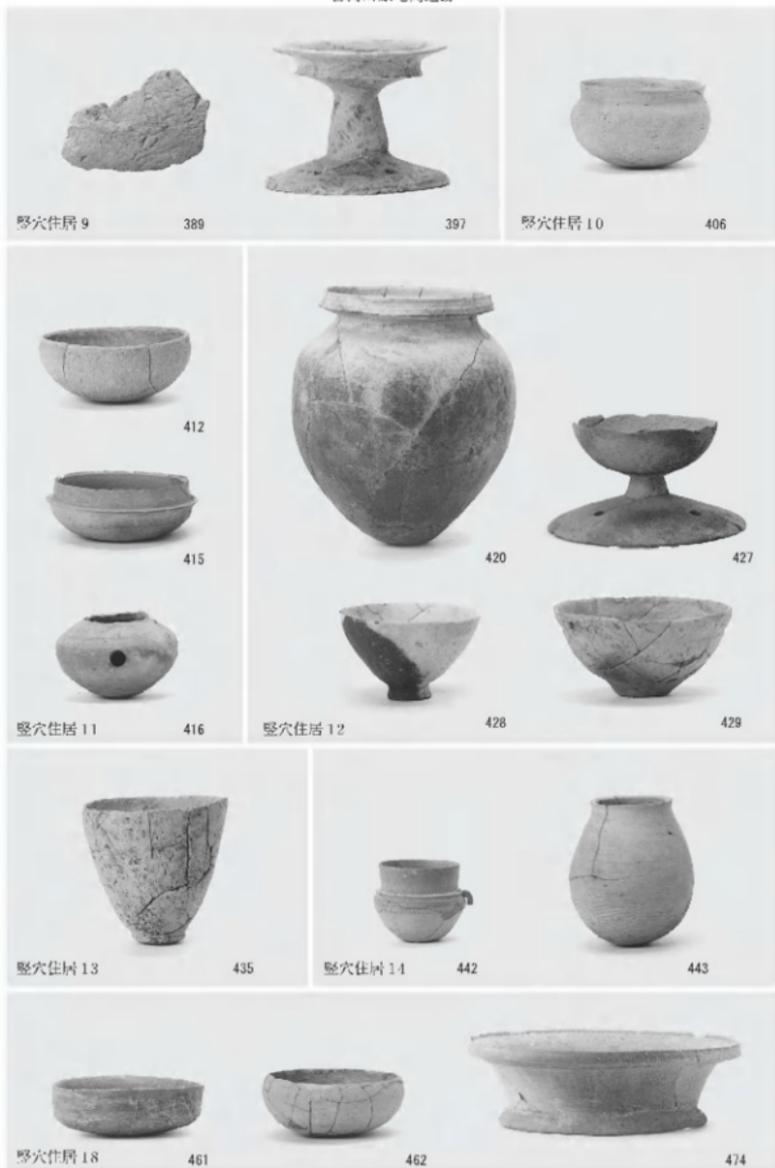
土坑 34 出土遺物



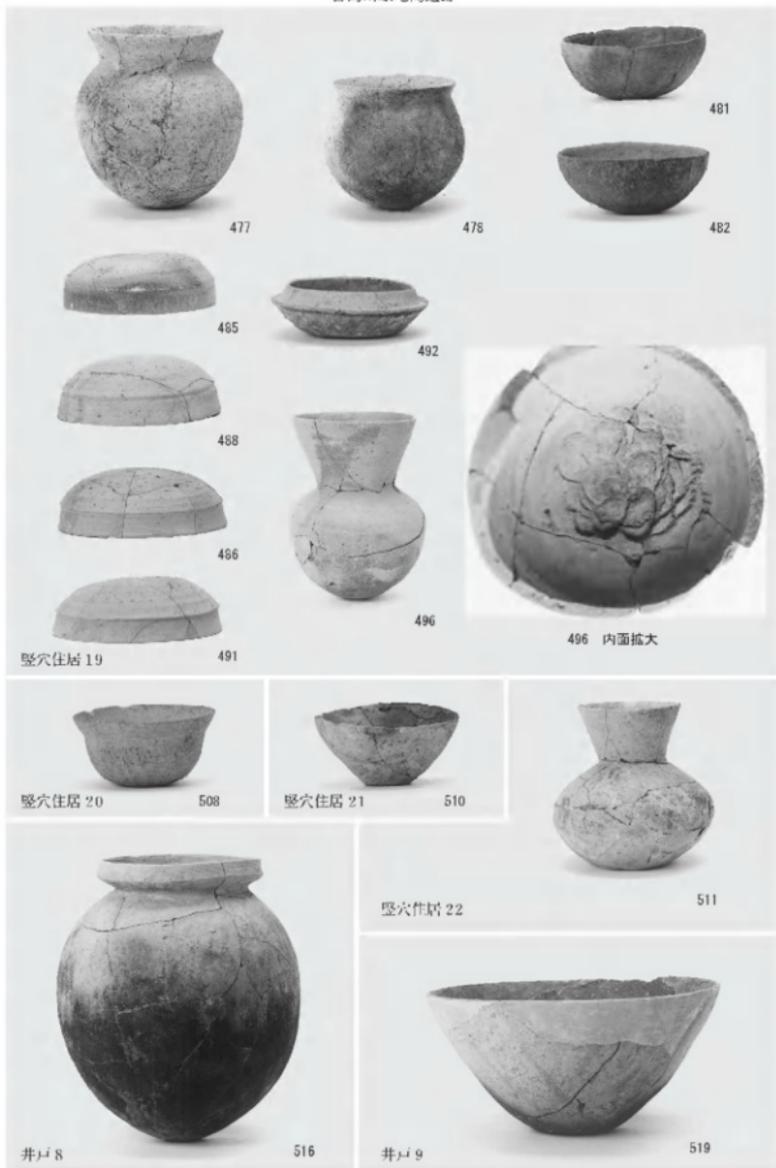
土坑 19・28・37・42・45・56 出土遺物



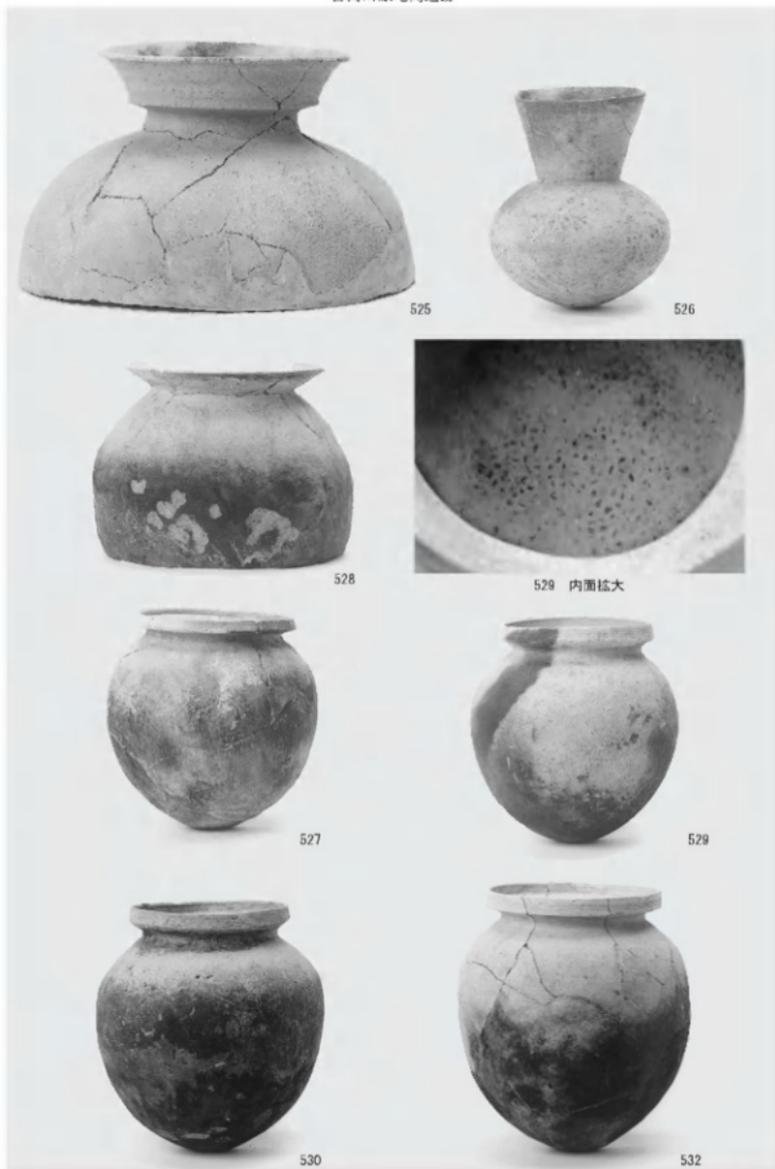
土壘 46・51・67・溝 18・25 出土遺物



豎穴住居 9 ~ 14・18 出土遺物



堅穴住居 19～22・井戸 8・9 出土遺物



525

526

528

529 内面拡大

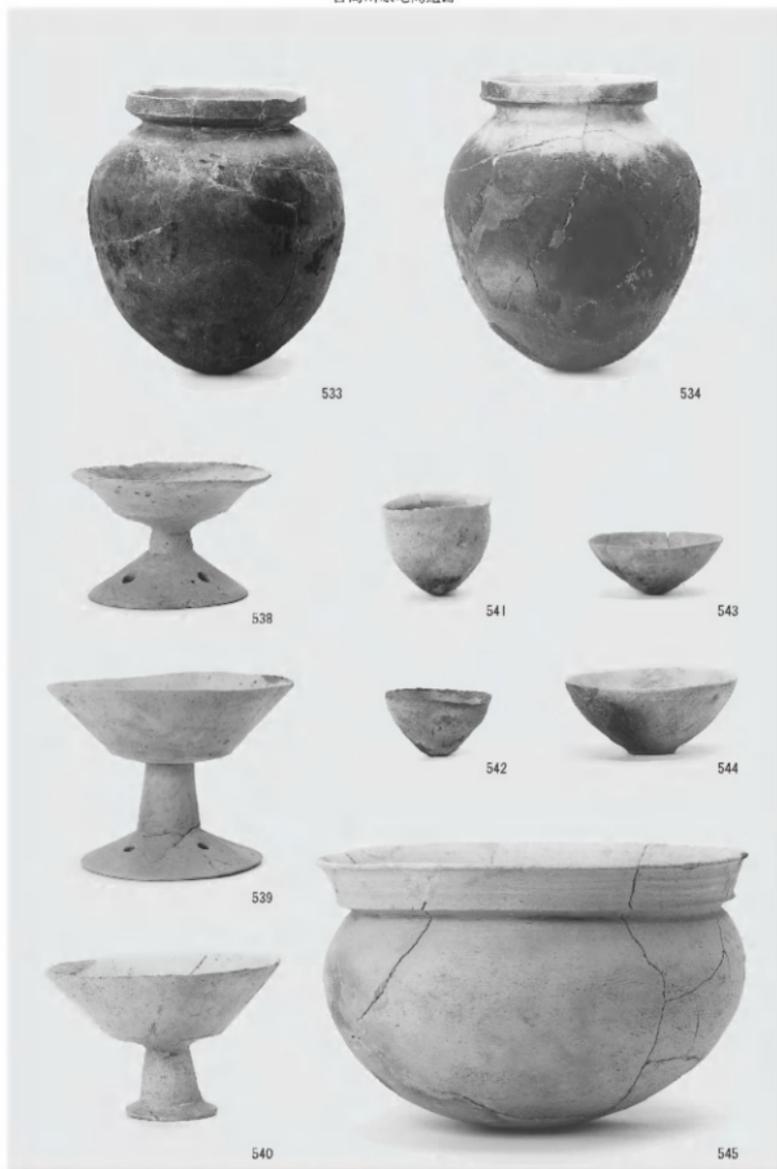
527

529

530

532

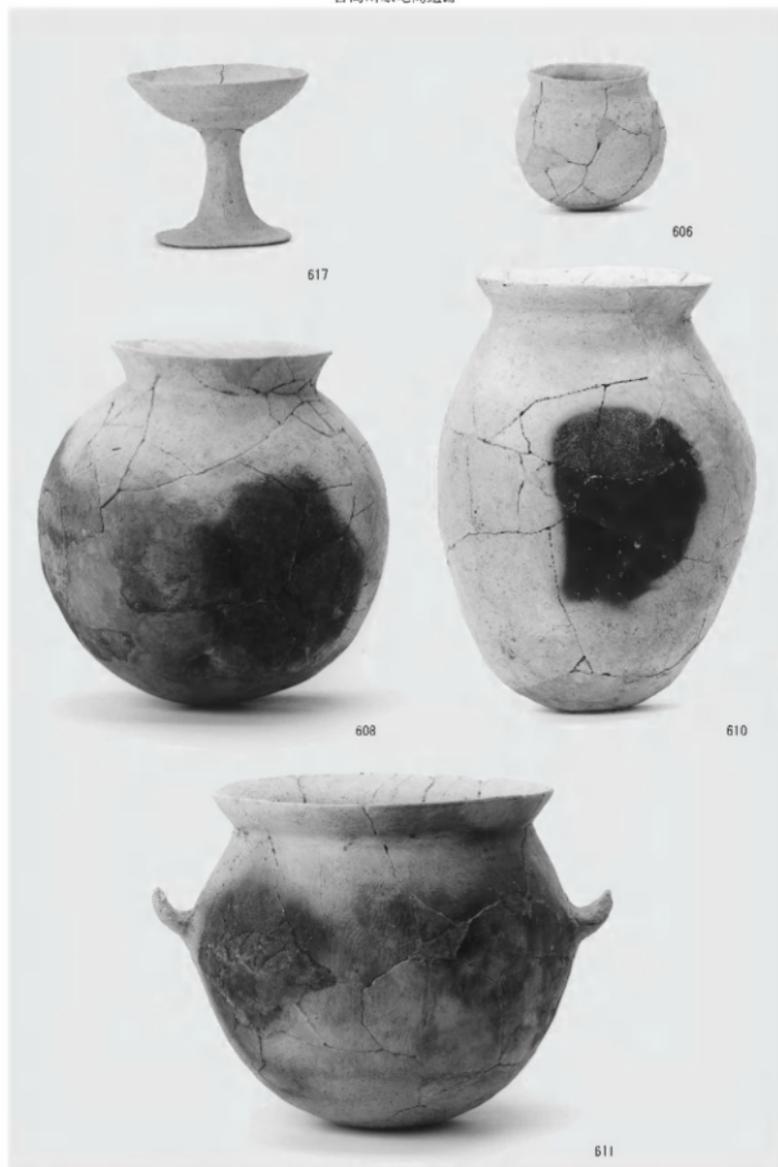
井戸 11 出土遺物



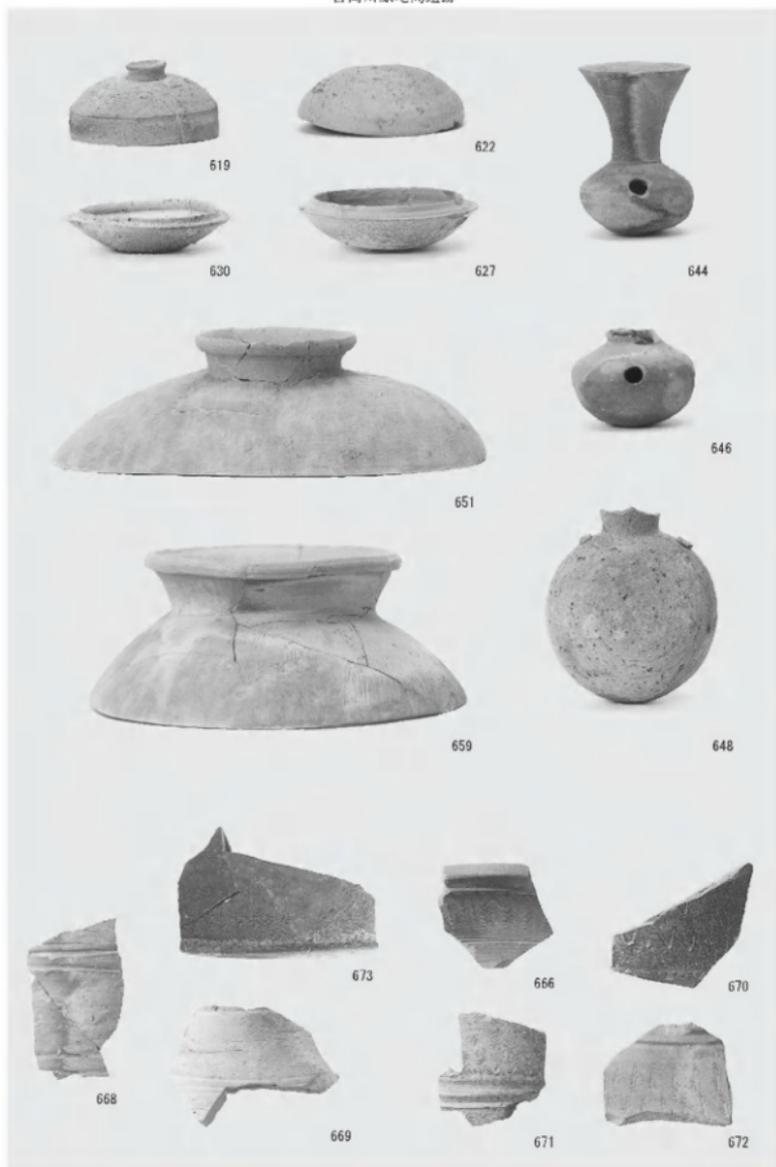
井戸 11 出土遺物



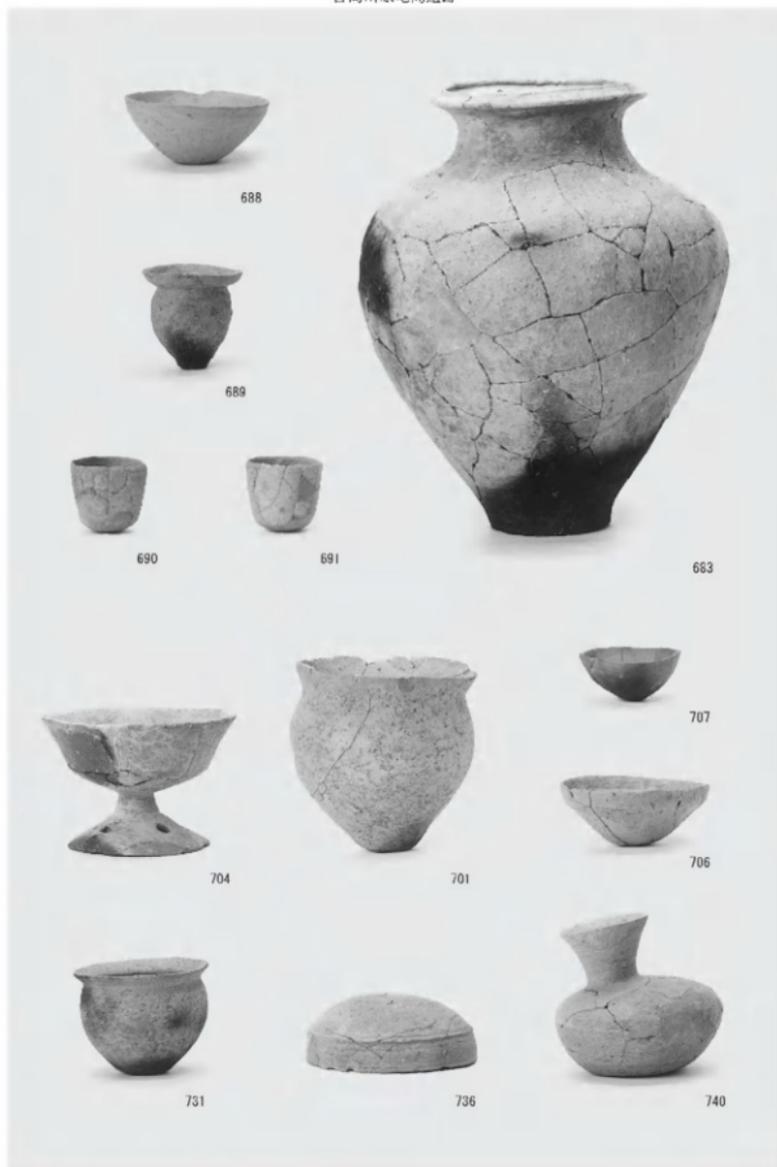
井戸 12～14・土塚 74・75・88・溝 32 出土遺物



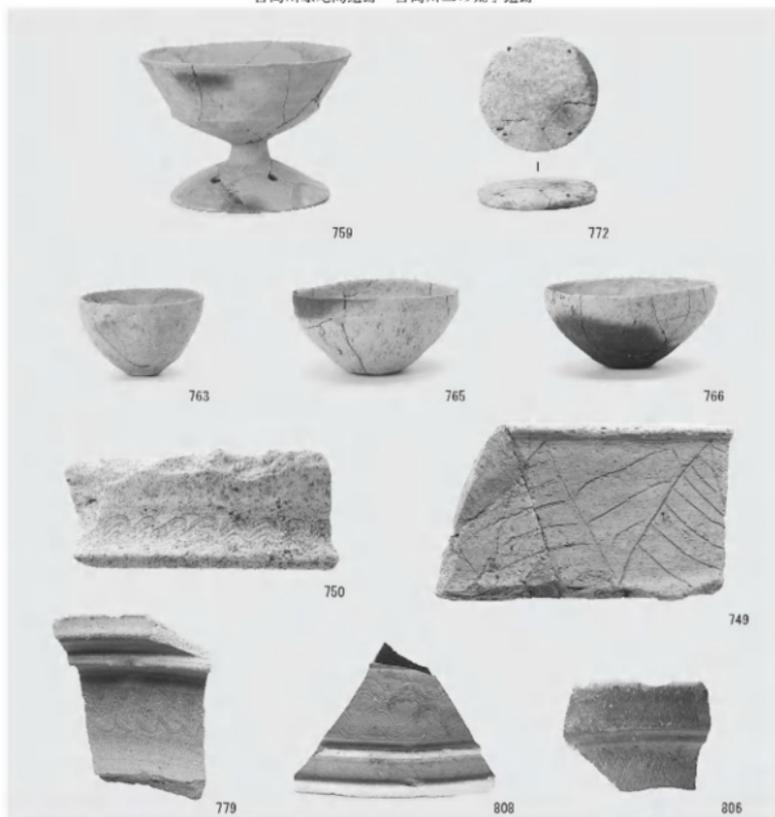
溝 34 出土遺物



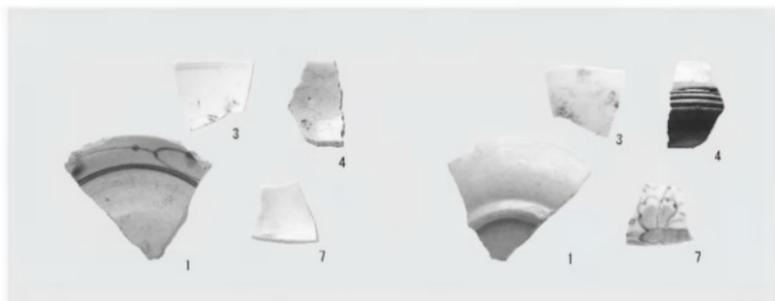
溝 34 出土遺物



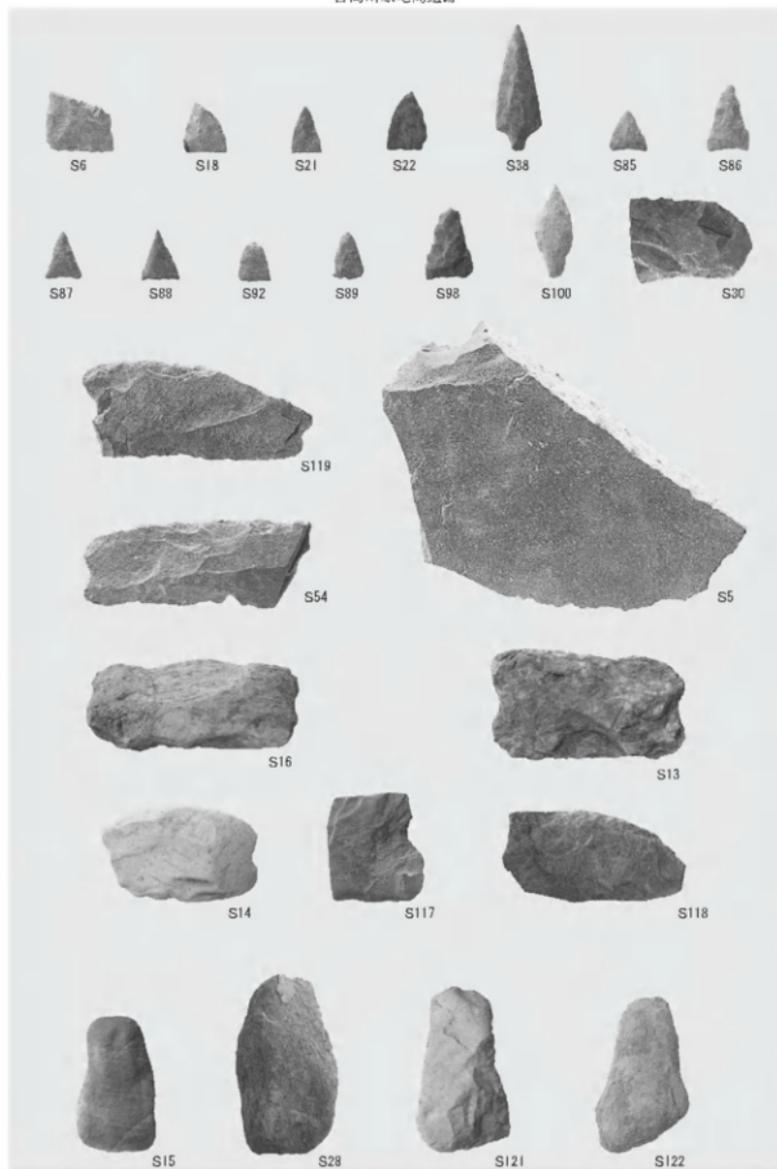
包含層等出土遺物



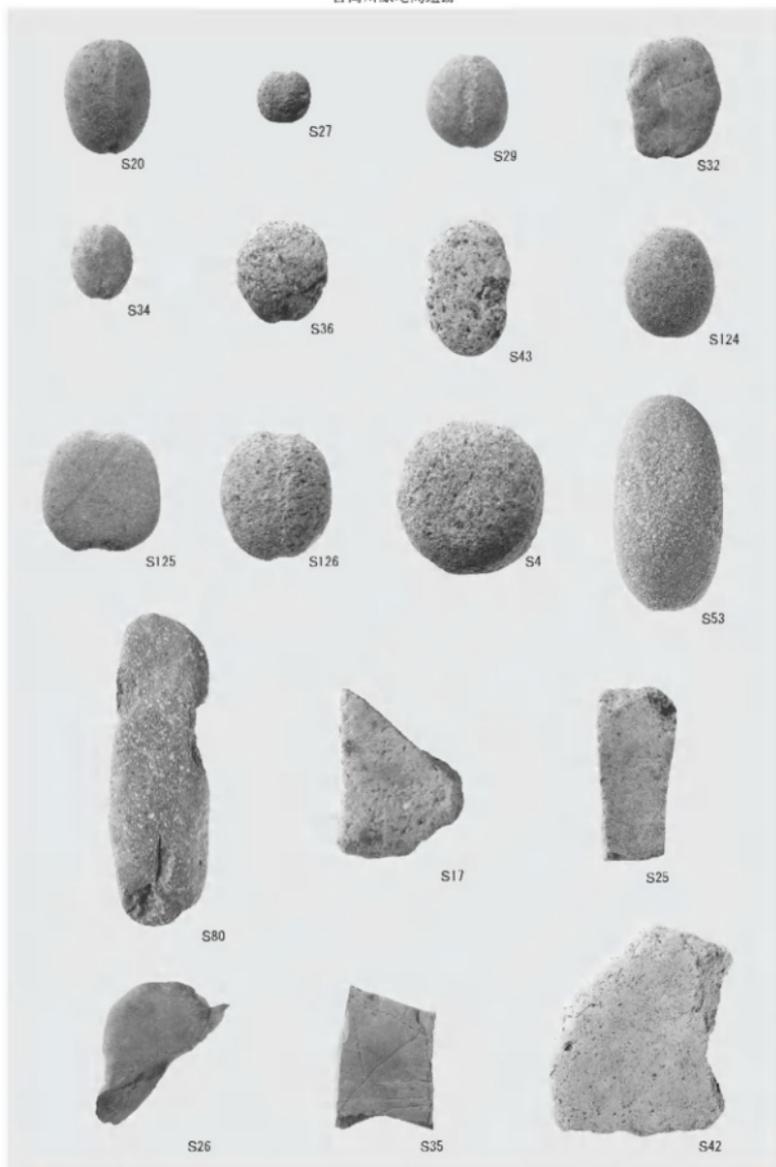
1 包含層等出土遺物



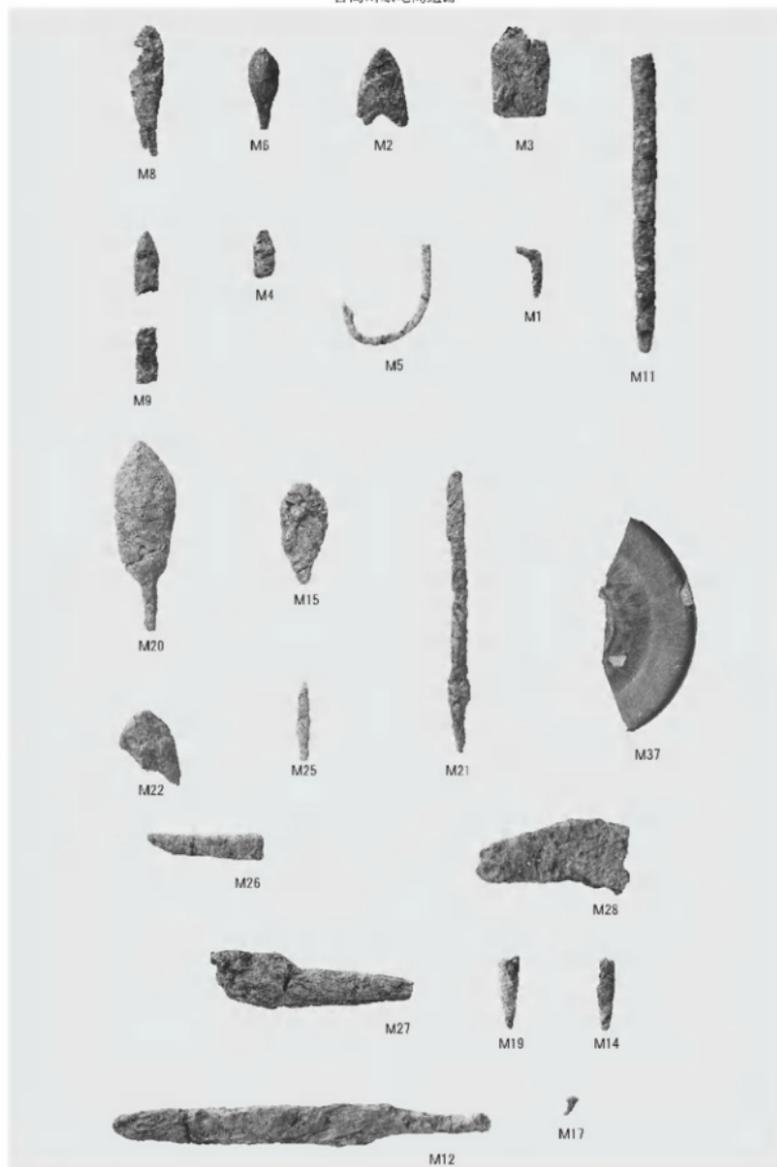
2 百間川二の荒手遺跡出土遺物



石製品①



石製品②



金属製品



土製品

報告書抄録

ふりがな	ひゃっけんがわほらおじまいせき ひゃっけんがわにのあらていせき							
書名	百間川原尾島遺跡7	百間川二の荒手遺跡						
副書名	旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	215							
編著者名	高田恭一郎・下澤公明・山磨康平・白石 純・大澤正己・鈴木瑞穂							
編集機関	岡山県古代古備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花見1325-3 TEL 086-293-3211							
発行機関	国土交通省岡山河川事務所・岡山県教育委員会							
所在地	〒700-0914 岡山県岡山市駿田町2-4-36 TEL 086-223-5101 〒700-8570 岡山県岡山市内山ト2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	西暦2008年3月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
百間川 原尾島遺跡	岡山県 岡山市 原尾島	33201	332011725	34°	133°	2002.10.15 ～2003.3.31 2003.4.1～ 10.20	2,502	旭川放水路 （百間川） 改修工事
				40°	57°			
百間川 二の荒手遺跡	岡山県 岡山市 中橋・竹川	33201		34°	133°	1995.3.22 ～3.31 1995.4.1 ～6.9	385	
				41°	56°			
6°	29°							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
百間川 原尾島遺跡	集落 生産 遺跡	弥生時代	堅穴住居7・掘立柱建物5・柱 穴列2・井戸7・土壇71・溝 28・水田2		弥生土器・石製品・金属製 品・土製品・玉		弥生時代後期～ 古墳時代の集落 飽地域からの搬 入土器が出土	
		古墳時代	堅穴住居15・掘立柱建物4・柱 穴列2・井戸7・土壇17・埴成 土壇1・溝6		土師器・須恵器・石製品・ 金属製品・土製品・玉			
		平安時代～ 鎌倉時代	掘立柱建物1・土塼4・土塼墓 1・溝4		土師器・黒色土器・金属製 品・土製品			
		江戸時代	土取り遺構		肥前陶器・備前焼・金属製 品・土製品		百間川築堤関連 遺構	
百間川 二の荒手遺跡	築堤	江戸時代	越流堤・導流堤		肥前陶器・備前焼・金属製 品		百間川築堤関連 遺構	
要 約	百間川原尾島遺跡 調査地は、百間川原尾島遺跡の最上流部の微高地に位置する。弥生時代後期の集落は高い集住性を示し、西側の低位部には水田が広がる。弥生時代後期末の遺構には、百間川遺跡群で広く確認される洪水砂で埋没するものがある。また、同期の遺物として、他地域から搬入された土器が出土し、活性化しつつある地域間の交流を示す資料として注目される。古墳時代の遺構としては、高い集住性を示す集落とともに、微高地土を貫通する人溝を確認している。溝からは大量の土器とともに鉄製関連遺物が出土しており、集落内における鉄生産の実態を反映する資料である。							
	百間川二の荒手遺跡 百間川築堤関連遺構として、越流堤・導流堤の補修状況を確認した。							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215

百間川原尾島遺跡7
百間川二の荒手遺跡

旭川放水路（百間川）改修
工事に伴う発掘調査Ⅲ

平成20年3月19日 印刷

平成20年3月29日 発行

編 集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3

発 行 国土交通省岡山河川事務所
岡山市鹿田町2-4-36
岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6

印 刷 山陽印刷株式会社
岡山市宮吉3098-1